黒い瞳のローゼンフェリア　改訂版

檜山英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い瞳のローゼンフェリア　改訂版

【Ｎコード】
Ｎ５３３５Ｕ

【作者名】
檜山英

【あらすじ】
遥か異界、ブルーヴェルトと呼ばれる大陸の覇者たらんとす、美しき女帝フェンリル率いるアルザード帝国、その猛威は大陸西端から東端の小国まで及び、山間で暮らす双子の姉妹と一人の少年の運命は巨大帝国の前に容易く揺り動かされる。だが、そこに現れたのは女帝フェンリルの娘ローゼンフェリアであった。巨大帝国と少年少女達が戦略、戦術、策略、詐術の全てを尽くして戦う本格ファンタジー戦記。

第一話「姉妹」（前書き）

本作は以前、完結した拙作「黒い瞳のローゼンフェリア」の改稿版です。
全編、手を入れていく予定です。

第一話「姉妹」

1

「メリエルとプリエル」

一日の始まりは姉のメリエルは朝食作り、妹のプリエルはとりあえず朝寝せず、起きるというのがそれぞれの仕事だ。
両親を失って数年、姉メリエルの料理の腕はプリエルの覚えている母親のそれに遜色なくなっていた。

栗色の長髪を母親のしていた様、背中あたりで地味なリボンで縛っているメリエル。
彼女はプリエルにとって自慢の姉。
温和さを思わせる優しげな碧い瞳に絶世の美女、とまでは言わないが、全体的に整った顔立ちは可愛いらしさを十分に印象づける。

「お姉ちゃん、今日の朝ごはんはなぁに？」
眼を擦りながら、プリエルは囲炉裏の前に足を崩して座る。
「昨日、森でニラがたくさん採れたからね、ニラ粥だよ」
きちんと正座したメリエルは鍋を囲炉裏の火にかけつつ笑うが、
「ニラ粥かぁ、好きなんだけど……飽きもきてるんだよなぁ」
プリエルが苦笑いを見せると、メリエルは温和な表情を変え、腰を上げてズイッと妹の眼前にふくれっ面で迫る。
「誰かさんが昨日の魚釣りを頑張ってくれたら、もう少し満足させてあげられるのだけどね！」
「アハハハ……韮粥大好き～」

これは薮蛇をつついた、と粗末な陶器の茶碗を手に取るプリエル。
「調子いいんだから！」
「まぁまぁ姉ちゃん、同じ顔なんだから迫って怒られても怖くないよ」
笑顔でニラ粥を茶碗にとる妹を、姉はふくれっ面のまま睨む。
「同じ顔は生れつきだから仕方ないでしょ！」

同じ顔の姉妹。
メリエルとプリエルは一卵性で瓜二つの顔。
そっくりな上に髪型などもプリエルがメリエルを真似はじめたせいで、見慣れた村人にも見分けは困難だ。
しかし同じ顔で、ほぼ同時に産まれたのに、どうしてこうも自分と違う楽天的な娘が育つのか？
メリエルは一緒に産まれて１６年、妹に対し何度も覚えた疑問を無駄と知りながらもまた考えた。

朝食を終えた姉妹は家を出る、土壁にわら葺きの家にはドアなどという物はなく、竹の簾を入口に垂らすだけである。
「今日は、一緒に森に山菜取りに行きましょ、魚は昨日ダメだったから」
「そうだね」
メリエルに促されたプリエルは相槌をうちながら、麻の粗末な服の汚れをしきりに気にしている。
「川で服を洗いたかったんだけどな～」

服の汚れなど、この界隈で気にする事はない、この辺りの集落の人間は皆が似たような恰好をしているし、土壁にわら葺きの家はまさに、周辺の集落の人間の標準と言える。

自分達の住む山間の集落から街に下りれば、綺麗な服が売っているだろうが姉妹はおろか、集落の人間は街で服など買った者はいないので、どういう風に綺麗な服なのかすらわからないのである。

しかし、プリエルは年頃の娘であるし、メリエルも気持ちはわかる。

「わかったわ、山菜が採れたら、滝で水浴びして洗濯しましょ」

「そうだね！」

姉の提案にプリエルが笑顔を返し、二人は揃って山への道を歩き出した。

少し歩くと、釣竿を持った老人達が歩いてくる。

「おはようございます」

「おっはよ」

姉妹それぞれが挨拶をする、老人たちは揃って笑顔を浮かべる。

「メリエルちゃん、プリエルちゃん、おはよう」

集落の人間はそれほど人数も多くない為、全員が顔なじみだ。

「釣りいくの？　止めといた方がいいよ、私でも昨日は何も釣れなかったんだからさ」

老人達の持つ釣竿に目をつけニヤつくプリエル。

「こらっ！　何を言ってるの、謝りなさい！」

メリエルはプリエルを睨み付けたが、

「いいんじゃ、いいんじゃよ、メリエルちゃん」

リーダー格の老人がメリエルをとりなす。

「それより、そちらは双子仲良く山菜採りかい？」
別の老人がプリエルに背負わせた籠を指差す。
「そうだよ！　お姉ちゃんの命令で重い籠を背負わされているのよ」
「そうかい、可哀相に」
「メリエルちゃんも案外、酷い事をする」
泣きまねをするプリエルを深刻そうに見ながら、老人達が頷くと、
「ちょっと、待ってください、ち、違いますー！」
メリエルは慌てて、両手を顔の前で振った。

勿論、プリエルも老人達も冗談なのだが、何事にも生真面目なメリエルは真に受けてしまう。
「冗談じゃよ、相変わらずカワイイのぉ、メリエルちゃんは」
「わしもあと４０若ければのぅ、うちの奴なんかに目もくれなかったのに」
口々にメリエルをからかって楽しんでいる。
「もう……知りません！」
「アハハハ、もう許してあげてよ、でもホントに釣りは止めたほうがいいよ」
メリエルがそっぽを向いたところで、プリエルが話題を釣りに戻す。

「みんな、魚で飢えをしのいでいるからの……魚もいなくなったんじゃな」
ぽつりと漏らした老人の一言。
その場の雰囲気は急変した。
「自分の田畑で耕した物が食えないとは、酷い世になってしまった」

「少しばかり豊作になろうとも、その分まで奴らは持って行きよる」

老人達は先程まで冗談を言っていた者達とはまるで別人の様に激しい口調で不満を口に出す。

「じ、じゃあね、何か釣れるといいね」

急変した空気を嫌がるように、プリエルはメリエルの手を取り、森に向かって早足で歩き出した。

「プリエル……」

メリエルは双子の妹の横顔を見つめた。

飢える、と老人達は言ったが、あながちそれは言い過ぎではなかった。

重い課税。

メリエルとプリエルも両親の遺した田畑があり、今年の収穫があったのだが、新たな領主は年貢を過酷な量まで引き上げ、収穫した食料はすでに底を見せ始めていた。

山菜採りを幼い頃から母親に仕込まれてきたメリエルが森や山で山菜を採ってきたり、プリエルが魚釣りや、時には兎などを狙った狩りまでして、空腹をしのいでいる状態。

「限界だね、みんな」

森の入り口で、プリエルが不安げに呟いた。

2

「主計管理官ウィル・ヴィスパー」

仕えるべき者が替わった宮仕えは、少なからず混乱する物で少年もその渦に巻き込まれていた。

アティナ王国という小国家の中の王城で、主計管理部に１５歳の若さで仕える事ができたのは、経理能力を評価されての抜擢だったのだが、主な原因は、軍隊の戦時緊急総動員で、少年に先んじて主計管理部に配属されるべき先輩が根こそぎ最前線の戦場へ動員されてしまったからである。

当時、１４歳だった少年は１５歳からという動員規定からそれていた。

幸運と言えば幸運だが、そんな棚ぼたの幸運は長続きしない事が保証されていたし、本人も薄々長続きしないのはわかっていた。

総動員をかける状態の国家の戦況が勝ち戦には程遠い物であるのは推測できる。

三ヶ月前の夕方、少年が仕事を終え、王宮より帰宅しようとした時に非常召集がかかり、アティナ王国が敗戦し、降伏したと伝えられた。

「この仕事も終わりか」

少年は溜息をつき、将来を心配したが、その心配は杞憂であった。

征服者はアティナ王国の王室を幽閉すると、代わりに領主を派遣し、アティナ王国の内政を担当させた。

少年の上司など何人か重要なポストの人間は領主の息のかかっているであろう者に替わっていたが、末端の人間まではこのような小国に代わりをたてる事はせずに、今までの者に任せる事が決まったのだ。

少年はアティナ王国王宮主計管理官ではなく、征服者……アルザード帝国アティナ領主計管理官と立場を替えていた。

少年の名前はウィル・ヴィスパーといった。

「それでは、こういう事だな？　ヴィスパー主計官」

三ヶ月前からの新たな上司は部長席に座ったまま、彼を見た。

「王宮内の余剰食糧を周辺集落に配給すべきだと」

「その通りです」

少し中性的にも見える金髪の少年は頷き、報告書を差し出した。

「この城内には現在、周辺集落や街から集めた過剰な食糧が集まっており、駐留する帝国軍兵士に供出してもなお余ります」

「そうか」

上司は報告書に目を通している、全く興味のない話ではない様子だ。

「国内の小さな集落は貧窮に喘いでいて、暴動もいくつか報告されてます、貧窮や暴動は結果的には次回の収穫の下落を呼びます」

「そうだろうな」

予想外の同意、ヴィスパーは内心、喜んだ。

新たな上司は帝国より派遣されてきた役人で、いわゆる非占領国

民のヴィスパーはあまり軽々しく話す事はなかったが、観察するに全く話が出来ない人間とは思えなかった。
しかし、占領国民が非占領国民に持つ優位感は少なからず持っているはずで、ヴィスパーの提案は一筋縄では通るとは考えてなかったが、案外にスタートは順調に感じた。
「当然、我々主計部には住民に余剰食糧を分け与える権限などないのはわかっての事だろうね」

上司の口調はあくまで穏やかだが、ヴィスパーに向けられた視線が僅かだが鋭さを増した。
「了解しています、あくまでも我々からの提案として領主様にお伝えすれば、問題はないかと」
この質問はヴィスパーとしても予想をしていたので即座に返答したが、上司の反応は更に早かった。
「問題ありだよ、ウィル・ヴィスパー管理官」
「は!?」
ヴィスパーは頓狂な声を上げたが、持ち直し、
「問題があるとは、それはどういう事ですか?」
なるべく冷静に聞き返すと、上司はポケットから煙草を取り出し、マッチで火を付けた。
「明日にも、暴徒になりかねない住民に食糧を供給するかね?」
「そうではなく、暴徒にしない為に供給す……」
しかし、上司はヴィスパーの発言を制した。
「ヴィスパー君、帝国はこの新たな領地の生産力には期待していない、住民は最低限に抑えた生活で生きていればよい方針だ」
煙草の煙を燻らせた上司はもう話は終わった、と言わんばかりに報告書をヴィスパーに返した。
「これは帝国の決定方針だ、すなわち皇帝陛下の決定なのだよ、余剰食糧については別の案を考えたまえ、期待しているよ」

「……わかりました」

帝国はこのアティナの国民を生かさず、殺さずのぎりぎりのラインで貧窮に追い込むつもりだ。

ヴィスパーは頭を下げ、部長席から部署の隅にある自分の席に戻ると、何事もなかったかのように別の資料のファイルに目を通し始めた。

勿論、これは動揺を隠す行為、すなわち擬態だ。

初めから全面的賛成を得て、承認されるとまで予想はしてなかったが、結果的に住民への食糧供給は帝国の絶対的存在である皇帝の判断で有り得ない事がわかったのである。

しかし、そこは１５歳の少年の経験の浅い擬態、手にしたファイルが逆さまなのは愛嬌なのかもしれなかった。

3

「逃亡する者」

女の馬術の腕前は拙い物だったが、選んだ馬は偶然にも正しかった。

とても賢く、速力も申し分ない、何より気性が従順で、女の拙い手綱捌きにも逆らわずに数日の間、走り続けて来たのである。

それも体重が軽いとはいえ、女と少女の二人を乗せているのだ、女は馬には感謝すら感じていた。

なるべく人に見咎められるような道を避けて来たが、何度か旅人に見られているし、水や食事を求めて街にも入ったので、足取りは掴まれているだろう。

自身は二十三歳、後ろに乗せている少女八歳、旅人などには母と娘に見えるだろう。

しかし、どう上手く人目を避けようとも、追っ手が諦めるとは少しも考えはしない。

女は背中にしがみつく少女を振り返り見た。

美しい黒髪、整った可愛いらしい顔立ち、何よりも印象的なのは、このブルーヴェルト大陸では大変珍しいとされる黒い瞳。

少女の名前はローゼンフェリア・アルザード。

一代でブルーヴェルト大陸を統一目前の巨大国家アルザード帝国を打ち立てた、美しき女皇帝フェンリル・アルザードの一人娘なのである。

第2話に続く

第二話「それぞれの逃亡」

1

「少年の逃亡」

ウィル・ヴィスパーは朝日の光でいつも目覚める、小さな時から几帳面で、遅刻や寝坊などはほとんどしない。

幼い頃より、母親の手を寝起きでかけない息子であったし、母親が亡くなり8歳で施設に預けられてからもそれは一緒であった。

しかし、その日は窓からベッドに飛び込んできた友人に潰されて起きるという、予想外の起こされ方をされたのだ。

「くぎゅ！」

金髪で童顔の美少年と呼んでも差し支えない少年にしては、似合わない声をヴィスパーはあげた。

「ヴィスパー！」

飛び込んできたのは、ヴィスパーの友人で、今はパン屋で働くフィンという同じ歳の少年である。

「何をするんだよ！」

ヴィスパーは腹を押さえながら咳込んだ、声でフィンだとわかったが、まだ目が開かない。

「ヴィスパー、逃げるんだよっ！」

フィンは未だ意識の覚醒しないヴィスパーの胸倉を掴んで揺らした。

その口調は普段の性格とは違う性質の物であり、ヴィスパーは何

かしらの異常を感じた。
「フィン！　どうしたんだよ？　何があったか言って」
無理に意識を覚醒させ、ヴィスパーは怒鳴り返すように叫ぶと、
「馬鹿！　もう近くに来てるかも知れないだろ！」
逆にフィンはヴィスパーの口を手で塞いできた。

「お前、憲兵に逮捕されるぞ！　逃げるんだよ！」
ヴィスパーを無理矢理、ベッドから立たせる。
「な、何でだよ！？」
「知るか！　俺は毎日、憲兵本部まで朝一番でパン配達してるんだ、いつもは入口にいる人が受け取ってくれるんだけど、今日はいなかったんだ、声をかけても誰も出てこないから、仕方なく中に入って、適当な部屋をノックして開けたら、会議室らしくて……」
適当な部屋に入ったという所が、普段はおちゃらけたフィンらしいが、話が横道に逸れるのも良くないと思い黙って頷いた。
「黒板に今日の日にちと逮捕予定者の名前が並んで書いてあって……」
「僕の名前もあったんだよね、その話だと」
「そうなんだよ！　何でわかったんだよ？　それも罪名が反乱罪だったぜ！」
興奮気味にフィンはヴィスパーの両方の肩を掴んで叫ぶ様に言った。
この話の流れなら、そういう話になるのは推察できるが、反乱罪の罪状がわからない。

多少の不満を帝国には持ってはいるが、ヴィスパーには反乱に当たる事をした覚えがない。
しかし、フィンの言う事が嘘とは思えない。

誤解だろうが、ヴィスパーは帝国がこの国を制圧してからは、何人もの人間が疑わしいだけで憲兵に連行されて生死すら不明になっている事を知っている。
何かを考えなければいけないと思った時、ヴィスパーはハッと我に返った。
「そうだ、フィン！　憲兵本部に配達するパンはどうしたんだよ？」
「え？　直ぐにここに来たから、まだ持ってるよ」
「よかった」
ヴィスパーは安堵としたように息を吐き、フィンの手を握った。
「ありがとう、フィン！　僕はよく考えてから行動するから心配しないで、君はこれから普通にパンを配達するんだ、多少遅れるけど何気なく普通に配達しなよ、さぁ、早く」
ヴィスパーはフィンの背中を押しながら急かす、
「ちょっと待てよ、何でこうなるんだ？」
押されるフィンが逆に慌てている。

「僕が逃げても、なんで情報が漏れたかを絶対に調べる筈だよ、フィンが捕まったら意味がないでしょ」
「お前は相変わらずだな、自分が大変なのに」
フィンは笑った。
「じゃあね、ありがとう」
優しい笑顔をヴィスパーも返した。
「ああ、上手くやれよ」
フィンは入って来た窓から飛び出て行った。

ヴィスパーは急いで着替えを済ますと、素早く身支度を始めた。
結論は出ていた。
反乱罪をした覚えはないが、無実を訴えながら憲兵に捕まる気はなかった。

何を訴えても罪状を突き付けられるだけの可能性が極めて高いとヴィスパーは判断した。

辺りには心配していた張り込みなどはなく、ヴィスパーは住み慣れたレンガ造りのアパートを出た。

街は明るくなり始めたばかりで、道を歩く人影は見えない。

それでも、なるべく人目を避けて、レンガ造りの城下街を歩く、後ろ盾も無く、城下に潜伏するのは自殺行為に近いと考えたヴィスパーは早めに城下を出て山間に身を隠す位しか方策がなかった。

パターンと言えばパターンだが、逃亡が発覚した後で非常線が張られて城下を追い詰められるのは是非とも避けたかった。

「誤解だろうけど、ついてないな、いっその事、フィンに担がれていたという話なら今なら笑って許してあげられるんだけど」

有り得ない話ではないが、フィンはそこまで悪趣味ではないし、朝の大切なパン配達を中断してまでやる冗談でもない。

何よりもフィンの態度が冗談ではない事を雄弁に語っていた。

城下の道なら両親を亡くして施設に入ってからも、何度となくフィンやその他の友人達と走り回った道である為に、ヴィスパーは難無く城下を抜け出す事が出来た。

やっと太陽の光が差し込む城下を少し山間を昇った場所から見下ろす。

レンガ造りの住宅街に、街の中心にある広場、住民にその威厳を見せ付ける様に建てられた城。

光に包まれてゆく建物ほとんどにヴィスパーは見覚えがあった。

ウィル・ヴィスパーにとってアティナの街は人生の大半を過ごした場所で、昨日まではこんなに急に立ち去るとは思ってもみなかったが、いつかは何らかの形でこの街を去るのも悪くないと考えていた。

「いつかは街を出る予定が早まっただけさ」

負け惜しみである事くらいはわかっているが、これくらいは言わないと正直、気が済まなかった。

2「1本の矢」

皇帝の名はフェンリル・アルザード。

出身は不明で、現在はそれを探る事すら帝国に対する敵対行為と見做される。

容姿は極めて美麗、流れるような黒髪、高い鼻に薄い唇、切れ長の瞳は希少と言われる黒い瞳。

身長は１７０センチ近くまであり、体つきはバランス良く余計な肉付きを思わせない。

肌は黄色系人種と推測出来るが、３０代半ばと言われる年齢にはとても見えないほどに若々しい。

フェンリルがブルーヴェルト大陸の歴史に姿を現した時には、大陸は群雄割拠の様相を見せていた。

当時、２０代前半の彼女は大陸の西端の小国で数人の富豪の全面的援助で４千程の兵で旗揚げした。

それからが歴史史上稀にみる短期間による拡大を見せた、わずか半年後には３０万の大勢力で周辺諸国を飲み込んだが、彼女はただ

戦うばかりでなかった。

各地の地方豪族など相手に自ら交渉をして、配下に加え、最後まで抵抗する敵勢力を、時には脅迫で抗戦を断念させる。

本人の美しい容姿も助けになっているのだろうが、彼女の特異なカリスマ性は会談した相手を圧倒的な存在感で飲み込んでいた。

勢力が大陸の2割まで達した頃、フェンリルは自ら皇帝を名乗り、アルザード帝国を建国する。

数年後には大陸の半分を制圧し、さらに現在は大陸の8割にまで勢力を拡げていた。

フェンリルには一人の娘がいた。

名はローゼンフェリア。

母親譲りの黒髪。

黒い瞳も母親譲りだが、幼少という事もあるのだろう、母親の冷静さを思わせる切れ長の瞳ではなく、丸みを帯びた愛らしい瞳であった。

父親は諸説あるが、明かされていない、現在は生きていないという説が巷では有力とされている。

フェンリルには親戚というものがいない事になっている上、ローゼンフェリアの父親も帝国が情報を明かしていない為にアルザード帝国の皇室はフェンリルとローゼンフェリアの二人だけという状態だ。

互いしか家族がいなかったが、フェンリルとローゼンフェリアは滅多に会う事はなかった。

帝国皇帝のフェンリルは権力を自らに集中させていたので、あら

ゆる物事を自分で決済する立場にあり、余暇がなかった事とあまり興味が無かったのが主な原因であった。

フェンリルは帝国の子孫代々の事業などは全く考えに無かった、アルザード帝国はフェンリルそのものであり、自分がアルザード帝国であると考えていたフェンリルは次期皇帝などどうでもよかった。

ローゼンフェリアは世話係の女官との時間を過ごす事が多くなった。

あまり表情豊かな女の子ではなく、滅多に笑ったり泣いたりしないし、我が儘も言わない娘だった。

高い身分の子供にしては手のかからない娘で、世話役に任命されたセシリアという若い女官は安心した。

しかし、稀にいう我が儘には、まるでフェンリルに命令された時の様に逆らえない事があり、セシリアは皇帝にまで上り詰める一族の一般人と違う何かを感じた気がした。

それはローゼンフェリアが8歳になったある日の事だった。

朝早く、宮廷の役人が皇女宮に現れて、午後に皇帝陛下がみえるので、失礼のないよう、とだけ伝えた。

セシリアと皇女宮の女官達は慌てふためいたが、セシリアは嬉しかった。

母親の愛情が足りないであろうローゼンフェリアには母の来訪は、冷めた様にみえる親子関係にいい刺激を与えるかもしれないと考えていたのだ。

アルザード帝国皇帝フェンリルは予定された時間より２０分程遅れて皇女宮に姿をみせた。
毎日の激務もあるというのにフェンリルの美しさは衰えるどころか、３０代半ばを迎えて、更に妖艶さを増して若い女官達にため息をつかせた。
出迎えた皇女ローゼンフェリアをフェンリルが笑顔を浮かべ抱きしめると、女官達は、やはり普段は冷酷ともとれる為政者の顔を強く見せるフェンリルも愛娘の前では母親なのだ、と安堵した。

それからフェンリルとローゼンフェリアは普通の親子の様に語り合いながら、少し遅い昼食をとり、食後は応接室のソファーで寄り添いながら親子の時間を過ごしていた。
セシリアは皇帝警護の武官とその様子を見守っていたが、ローゼンフェリアは普段は滅多に見せない笑顔を浮かべていた。

時間としては短かかったが、皇帝フェンリルは母親として、ローゼンフェリアとの時間を楽しく過ごし、皇帝の激務に戻っていった様に見えた。

だが、フェンリルの訪れた日の夜に事件は起きる。
一日の職務を終えたセシリアが就寝しようと部屋に戻ると、ローゼンフェリアが自分のベッドに座っていたのである。
「皇女殿下！？」
セシリアは思わず、上擦った声をあげた。
ローゼンフェリアがセシリアの部屋を訪れる事など世話役を務めて、数年経つが初めてである。

「どうされたのですか？」
セシリアは慌ててローゼンフェリアに駆け寄る。

ローゼンフェリアはセシリアを待っていたかの立ち上がって、
「逃げるよ」
そう抑揚のない声で告げた。
「えっ？」
意味が全くわからなかった、一体、何から逃げると言うのか？
ローゼンフェリアは立ち尽くしたセシリアにいつ準備したのか、
布製のリュックサックを渡した。

「皇女で……」
「殺されるよ」

セシリアの言葉を遮ったローゼンフェリアは恐ろしい事をサラっと言った。
「こ、殺される？　私がですか？」
「多分、二人とも……」
「皇女殿下を？一体、誰がそんな事を……えっ、まさか」
誰が帝国の皇帝の娘を殺せるというのだ、自問自答したセシリアは驚愕の表情でローゼンフェリアに答え合わせを求めた。

「あいつは私を殺す」

ローゼンフェリアはセシリアを見上げた。
「皇帝陛下が？」

昼間にあれほど親しくしていた、たった一人の肉親の母親が娘を殺すというのだろうか？
「そしたら、あなたも殺すよ、だから逃げるの」

何故だか解らないが、ローゼンフェリアの言葉をセシリアは真っ向から否定する気になれなかった。
「早く行くよ、厩舎から馬を出して」
ローゼンフェリアは返事も聞かずに歩き出す、
「まさか……」
「死んじゃうよ」
ローゼンフェリアの黒い瞳にセシリアは既に逆らう気が無くなっていた。

＊＊＊

何故、ここにいるのだろうか？
そうだ、帝国の皇女を連れて、ここまで逃げ延びて来たのだ。
セシリアはゆっくりと瞳を開けた。
木漏れ日が顔に差してきて眩しい。
黒い瞳の美しい娘が自分を覗き込んできた。
その黒い瞳には涙が溜まっている。
「ローゼン……」
そこまで言いかけたが、激しい咳が出て、口の中が血でいっぱいになった。
倒れている様なので、身体を起こそうとしたが、痺れて動かないので胸元に目線をうつすと1本の矢が胸元に突き刺さっている。
そうだった、追手に追いつかれて……

「ごめんね」

ローゼンフェリアは泣き顔を見せている、滅多に見ない表情だ。
何か言おうと考えたが、口の中が気持ち悪いのでやめておいた。

かわりに、今できる精一杯の笑顔を浮かべてみた。

第3話に続く

第三話「村の不幸」

1

「森と姉妹」

「無いよね」
プリエルの言葉にメリエルは黙って頷く。
森に入って半日になるが、プリエルの背負った籠にはほんのわずかの山菜が入っているだけ。
今日の夕食はかなり寂しい物になりそうだ、いや今日も、と言った方がよい。
「みんな山菜採りしているみたいだからね……そりゃ、山菜も無くなる訳だ」
プリエルはそう言いながら草木を掻き分けて、そこに生えている草を指差す。
「お姉ちゃん、これは？」
「食べたら、お腹壊しちゃうよ」
メリエルは一目見て、首を横に振った。
「駄目かぁ」
こんなやり取りを今日は何回もしていが、山菜採りに手慣れたメリエルがいるから、プリエルは有害な種類を食べないで済んでいるのである。
プリエルだけなら、とっくに有害な種類の草やキノコに当たっているに違いない。

「帰ろうか？　今度はもう少し奥に入ろう」
「仕方ないか……」

メリエルに促されたプリエルはため息をついて歩き出す。

夕闇が訪れる。

藁葺きに土壁の姉妹の家の中は蝋燭と囲炉裏の火の明かりが燈る。

最近は囲炉裏の薪や蝋燭もおいそれと使えないので、蝋燭は１本だけ、囲炉裏の火は押さえ気味で部屋は少し薄暗い。

夕食も質素で、２人だけで囲炉裏を囲んでいると、ともすれば気分も落ち込んでいきそうなものだが、姉妹の妹プリエルは部屋の明かりなど関係なく、様々な話題をメリエルに話しかけてくる。

プリエルはいつ仕入れて来たか、不思議な程に話題が豊富で、いつもメリエルを笑わせたり、驚かせたり、時には怒らせたりもしていた。

今日の話題は村の１０歳の男の子が好きになった女の子に告白できずに悩んでいる、という話だった。

「ロット君でしょ？」

その１０歳の男の子はメリエルも知っているし、会えば挨拶をしてくる元気なタイプの子供である。

「え？　何で、わかるの？」

「その歳の男の子って村にはロット君しかいないよ」

「そうかぁ、これはしまったなぁ」

プリエルは後ろ頭を掻きながら苦笑している。

「で？　ロット君が好きになった女の子は誰？」

「いや～」

苦笑いを浮かべ続けるプリエル。

「もう、あんまり人の噂ばっかりしてたら駄目だからね、プリエル」

メリエルは呆れ顔で囲炉裏の火を落とした、蝋燭だけの光がユラユラと家の中を照らしている。

「もう、寝るよ」
「はぁい」
もう少しプリエルは色々と話をしたいみたいだが、今日は早く寝る事にメリエルは決めた。
何よりも空腹を紛らわす為に寝てしまいたかった。
1日中、森を山菜やキノコを探し歩いたメリエルは疲れ切っていたので、何かを考える前に沈んでいく様に眠りに落ちた。

＊＊＊

「メリエルちゃん、メリエルちゃん、起きてくれ！」
必死の男の声でメリエルは起きた、ドアのない家は夜は板を立てて入口を閉じているが、声の主は強引に板をどかしてきたらしい。
男はランタンを持っていた為にすぐに村の人間だとわかった、そうでなければメリエルは夜ばいとも判断しかねなかった。

カラジという中年で妻子ある気のいい男だ。
「メリエルちゃんかい？　それとも……」
姉妹は村人でも見分けはつかない、慌てた声で確認をしてくる。
「わ、私はメリエルですっ！？　ど、どうしたんですか？　カラジさん！」
メリエルの声でやっとプリエルが薄手の布団から顔を出したが、焦りが一目で判る表情のカラジはプリエルは見えていない。

「ロットとメインが大変なんだ、早く来てくれ！」
叫び声に近い声にメリエルは異常を感じた、

「ロット君と奥さんが？」
カラジは夕食時に話題の出たロットの父親で、メインは母親、つまりはカラジの妻である。
「早く、早く来てくれ！」
「わ、わかりました」
あまりもの慌て様にメリエルも釣られてしまい、布団を出た、
「早く！」
カラジはメリエルの手を掴んで走り出す。

「お姉ちゃん、カラジおじさん！」
プリエルも布団を出て走り出した。
暗闇にランタンの頼りない光が激しく揺れながら、突き進む。
小さな村の中で、たいした距離ではないが、カラジの家に着いた時にはメリエルはすっかり息が上がっていた。

カラジの家も姉妹達の家と大差のない造りである。
「とにかくメインとロットを……みてくれっ！」
「は、はいっ」
事態の飲み込めないままだが、息をつきながらメリエルは中に入る。
「……！！」
メリエルは思わず声にならない声を上げた。
そこにはカラジの妻のメインとロットが激しく身体を痙攣させながら、倒れていた。
「お姉ちゃん！」
追いついて来ていたプリエルがメリエルを見る。
メリエルの額にここまで走ってきた汗とは違う種類の汗が吹き出した。

「カラジさん！　何を食べたんですかっ！？」
呆然としているカラジにメリエルは上がった息のまま怒鳴る様に叫んだ。
「あ、あれを……」
カラジの指差した先には山菜がザルにのっていた。
メリエルはザルをとると素早く掻き分けて、中の1本を手に取った。
「ああっ、やっぱり！」
毒草の中には食べられる草にそっくりな、素人目どころか、山菜採りのベテランでも慎重に見ないと危ない草が何種類もある。
ザルの中にはまさにそんな種類の毒草が混じり込んでいた。

「ロット君、ロット君」
メリエルは特に痙攣が激しいロットを抱き抱えた。
全身から吹き出る汗、絶え絶え息遣いが、症状の深刻さを物語る。
「メ、メリエルお姉ちゃんだ……」
ロットは痙攣しながらもニッコリとメリエルに微笑んだ。
「プリエル！　井戸から水汲んで来て、家の薬草箱をお願い、早く！」
メリエルは叫んだ。

＊＊＊

朝焼けに村人が集まり、啜り泣く声が聞こえる。
メリエルは傍らに座り込んで泣いている村人を力無く見つめてい

る。
涙は流し尽くし、クマができた瞼は腫れていた。

あれから母親から教わった毒草を食べてしまった時の処置を自分の出来る限りしたつもりだった。
母親は山菜採りの他にも森に生える薬草についても教えてくれたので、普段から山菜採りのついでに採って粉にしたり、干しておいた薬草も使った。
メリエルの薬草の知識などは、普段はお腹を壊したり、熱を出した村人にいくらか効く薬を煎じる程度であったが、山間の貧窮に喘ぐ村に医者などいる訳もなく、プリエルを助手にメリエルは必死になった。

だが、結局は二人は助からなかった。

メリエルの名前を呼んでから、わずか数十秒後にはロットは意識を失い、1時間程で息を引きとり、メインもその数十分後には息子の後を追った。

「お姉ちゃん、少し休もうか……」
ささやかな葬儀の準備を始める村人達を見つめるメリエルの様子にいたたまれなくなったプリエルは座り込む姉の肩に手を置いた。
プリエル自身も泣き腫らして、やっとの事でメリエルに言えた言葉である。
メリエルは、どうにか言えた言葉に感謝する様にわずかに微笑ん

で、姉妹で家に向かって歩き出した。

カラジの家は普段は畑の収穫が村人の中でも多い方だが、やはり領主からの大部分の食物を徴収された。
不足を補う為、森で山菜やキノコを探し出して来たのだが、普段から山菜採りの経験がない事が仇になってしまったのである。

家に帰った姉妹は、普段なら食物採りか畑作業に行く時間だが、2人とも疲れ切っていた為に休む事にした。
布団に潜り込む前、プリエルはメリエルに一言だけ告げた。

「ロット君は最期にお姉ちゃんに会えたのがよかったんじゃないかな」

メリエルは何も答えずに目をつぶったが、枯れたはずの涙がまた溢れ出してきた。

ロットとメインのささやかな葬儀と埋葬が行われて二日が経った。
依然として村の雰囲気は重々しく、もともと沈みがちだった村全体の覇気が無くなっていた。
しかし、生きている人間は食べなければならず、メリエルとプリエルは今日は畑仕事をする為に鍬や鋤を持って畑に向かって歩いていた。
途中で村人に会って挨拶を交わすが、やはり皆がどこか覇気がな

い。
普段は元気の固まりであるプリエルもいつもの元気を取り戻すには、時間という処方箋が足りない様子であった。

畑に着くとそれぞれ作業を始めた、いつもなら周りの畑にも村人が見えるのだが、人影は見えない。

「みんな、どうしたんだろうね？」
プリエルは草むしりをしながら、種を植えるメリエルをみた。
「やる気が出ないんじゃないかな、収穫しても取られていくからね」

「私達は？」
「お父さんとお母さんの遺した畑を荒れ地にしたくないでしょ？」
「そうだね！　お父さんもお母さんも大切にしていた畑だからね！」
ウン、ウンと頷き、納得して草むしりのスピードを上げるプリエルを見てメリエルは微笑む。

幼い頃より母について森を山菜やキノコを採って歩いていたメリエル、対してプリエルは父の畑仕事や魚釣りについて行く事が多かった為に父親の影響は大きかった。
いわゆる、メリエルがお母さん子で、プリエルはお父さん子なのである。
父親は優男タイプの気も優しい男で、母親は容姿は美しく、しかも肝が据わっており強い気持ちを持った女性だった。
気の強い母親が優男の父親を引っ張っていたお似合いの夫婦だった。
そんな両親が双子の姉妹は大好きだった、家は決して裕福ではな

かったが、畑の収穫や森の自然の恵みで飢えずに生きてきたのだ。
そんな両親が大切にしてきた畑を荒れ果てさせるなどできるはずなかった。

昼近くまで作業していると2人とも汗だくになっていた。
「お昼にしようか」
「賛成！」
メリエルの提案にプリエルは立ち上がった。
近くの井戸で喉を潤し、手を洗うと、畑の傍らで双子は並んで座って昼食に用意した小麦粉を練って焼いたパンを食べた。

「あれ？　何だろ？」
昼食を終え、メリエルが作業に戻ろうと腰を上げた時にプリエルが遠くの山あいを指差した。
「ん？」
メリエルは目を凝らしてみるが、山あいの道を何か行列が動いている様にしか見えなかった。
「村に向かってるね」
「そう？」
山あいの道は木々の茂っている間を通っている為に、どの方向に進んでいるのかもわかり難いが、視力の良いプリエルはその行列の動きが分かるようだ。
「何だろうね、村に戻ってみようか？　お姉ちゃん」
プリエルは興味があるようだ、確かに山間の小さな村にあのような行列がやってくる事は珍しい。
「まだ、仕事途中だし……プリエル、一走り行って見てくれれば？」
「わかった、すぐに戻って来るね！」
メリエルの提案にプリエルはすぐに走り出した。

好奇心旺盛なプリエルだから、見させないと、気になって作業に手がつかないに違いない。

できれば早く帰ってくる事を望みながら、メリエルは畑作業を再開した。

「でも一体、何なんだろう？」

メリエルは何か嫌な胸騒ぎを覚えた。

第４話に続く

第四話「領主到着」

1

「領主とプリエル」

プリエルの脚力は村の男でも敵わない、同じ双子でもメリエルは体力的には普通の１６歳の女の子と変わらないが、プリエルは運動神経が抜群であった。

村までの道を全力疾走で駆ける、早く戻らないとメリエルに怒られてしまうからだ。

「！？」

村に駆け戻ったプリエルは思わず足を止める。

見慣れない多くの人影が村にいた。

中心の広場に数十人のなめし革の鎧に、剣を腰に差した兵士達が大きな野営用テントを設営している。

村人達はそれを手伝わされている様だ。

「なに？」

プリエルは近くの土壁の家の影に身を隠す、物々しい兵士に何か嫌な物を感じた。

「メリエルちゃん、隠れておいで！」

「え……うん」

身を隠した家の中から、顔見知りの老婆が声をかけてきたので、プリエルは頷き老婆の家に素早く飛び込んだ。

「おや、プリエルちゃんの方だったかい、ごめんね、わからなかったよ」

身のこなしの軽さでプリエルとわかったのだろう、老婆はメリエルと間違えた事を謝った。
「気にしないで、ところであれは何？」
窓から広場の方向をのぞき見をしながら、老婆にプリエルは尋ねる。

「領主の軍勢じゃ」
吐き捨てる様な老婆の普段は見せない険しい表情。
「何しに来たの？　今更この村に持っていく食糧なんて無いのに」
「わからんが、関わらないのが1番じゃ、メリエルちゃんは何処におる？」
「お姉ちゃん？　お姉ちゃんなら畑だよ、何で？」
メリエルの事を聞かれたプリエルは不思議がった。
「メリエルちゃん、プリエルちゃん程の美人をあの餓鬼どもが見たら、酷い事をしかねんからの」
老婆はプリエルの頭を撫でる。
「えへへっ、褒められちゃったよ」
「嘘ではないぞ」
照れるプリエルに老婆はまったく、という様子で笑みを浮かべた。

しばらくするとテントが出来上がり、村長の家から、周りの兵士とは違う高級そうな金属の鎧に身を包んだ若い男が出てきた。
「村長の家にいたんだね、偉そうだね」
プリエルは身を隠しながら、村長の家の方向をうかがっている。
「領主がおる、あの若い男らしい」
「えっ？　そうなんだ？」
老婆の答えにプリエルは驚きの声を上げた、現在のこの国における最高権力者が小さな自分達の村に現れたのだ。

その男は長く茶色い髪に身長は１８０センチはありそうな美形。
プリエルから見ても中々のいい男だ、歳は２０代半ばに見えた。
「顔はいいけど、領主としてみんなを散々と苦しめてるんだから、性格悪いし、最悪だね」
プリエルは強い口調で言い放ち、
「村長の家に行って何をしに来たか聞いてくる！」
と、外に走り出した。

村長の家といってもレベル的には周りの家とあまり変わらない土壁の家だ。
プリエルはテントの周りの兵士達に見つからないように、村長の家の裏に回り込むと、素早く窓から室内に滑り込む。
「プリエルちゃん！」
中には村長と村の数人の有力者が集まっていたが、そこにプリエルが窓から飛び込んだので、全員が目を丸くしていた。

「流石に私だってわかるか、お姉ちゃんは窓から家には入らないよね」
プリエルは頭を掻きながら、ア然とする村長達を見渡した。

「遅いな……」
額の汗を拭いながらメリエルは呟く。

プリエルが走れば、とっくに帰って来ている時間である。
普段ならばサボっているのだろう、と気を止めずに作業を進めて、後で叱らないと、などと考えるのだが、今日は何だが嫌な予感がする。
「……もうっ！」

村までの道はいつも通る一本道だからプリエルとすれ違いになる事はない。
メリエルは鍬を置き、村に向かって歩き出した。

「人探し？」
「そうなんだよ」
プリエルの上げた声に５０代の痩せた村長が困った様に答えた。
「話によると、ここを拠点に周辺を捜索するつもりらしい」
村の有力者が話を付け足してきた。
「ふぅん、そういうのって領主が自分でするんだ」
「重大な反逆者らしいから、皇帝よりの勅である、って部下が言っていたよ、しかし、よりによってこの村に来るとは」
頭を抱え込む村長をプリエルは覗き込みながら、
「居るんなら、居させてあげればいい、無視してればいいよ」
と、励ましたが、村長は首を振った。
「それが兵士達がここにいる間、食事などはこちらが出せ、との話なんだ」
「そんな！」
プリエルは思わず声を上げた、村人は領主からの徴収で貧困に困り果てていると言うのに。

「あんな人数分の食事なんて無理だよ！　取ったのは自分達のくせに！」

怒りに震えるプリエル、村長と村の有力者達はうつむいている。

「蓄えを集めれば、1日か2日分は何とか……」

「その後は！？」

搾り出す様に言った村長にプリエルは怒鳴った、村長達は答えが出ない。

「その後はどうするの？　私達だって生きていくんだよ！　私達が何で犠牲になって、何もしてくれない領主に食べ物を出さなきゃいけないのよっ！」

「プリエルちゃん、あまり大きな声は……」

村長達はあまりものプリエルの剣幕に驚き諌めるが、そんな事ではプリエルの怒りは収まらない。

その時、広場の方から男達が争う大声が聞こえてきた。

「なに？」

プリエルは表に飛び出した、村長の家は広場に近いので、すぐに広場の様子は確認できる。

勿論、村長達もプリエルに続いている。

「カラジさん！」

プリエルは思わず叫んだ、そこには兵士達に鍬を持って対峙するカラジの姿があった。

兵士達は槍をカラジに向けている。

「何してるの！」

プリエルはカラジのそばに駆け寄った。

「こいつらが来なければ！　こいつらがっ！」

カラジの目は普通ではなかった、妻子を失ってからは姿を見てなかったが、カラジの顔は疲れ果て、頬はこけて、かって見る人のいい男の顔では無くなってしまっていた。
領主がいる事を知り、我慢出来ずに飛び出して来たのだろう。
「カラジさん、駄目だよ！　こんな事しちゃ」
プリエルは尋常ではない事態を把握し、カラジの腕をつかんで、止めようとしたが、
「止めるな！」
つかんだ腕を振りほどかれて、プリエルは地面に尻餅をついてしまう。
様子を見て槍を構えた兵士達は更に緊張を高めた様子で口々に叫ぶ。
「貴様、武器を下げろ！」
「言う通りにしろ！」
「攻撃するぞ」
年齢も若い兵士達は声が震えている、おそらく経験の浅いのだろう。
これが慣れた兵士なら、とっくにカラジを攻撃して、素早く武装解除している。

「うるさいな」
テントの布地が大きく揺れ、中から一人の男が姿を現す。
「あっ！」
プリエルは声を上げた、カラジの表情もさらに険しいものになる。

長髪の茶色い髪、鋭い青い瞳の若い男。
先程は鎧を着ていたが、今は肌着にズボンという格好だった。

老婆はこの若者を領主と言っていた。

「スティング様、失礼しました！　今すぐ……」

槍を構えた兵士の一人がカラジとの間合いを詰め寄る。

「待てよ、話を聞いてやるよ、話しなよ」

兵士を制してスティングと呼ばれた男はカラジの目の前に立った。

「お、お前が領主か？」

「そうだよ、話を聞いてやるから、何があったか話してみろって」

口から気さくな言葉が出ているが、表情、口調は明らか馬鹿にしているのがプリエルの目からでもハッキリわかった。

「何が、話をしろだ！　お前達に食糧を持っていかれたせいなんだぞ、俺は妻と子供を……」

飛びかからんばかりのカラジに対して、スティングはくだらない冗談を聞いた、とばかりにため息をついてみせて、

「ちっ、くだらねぇ！　聞き飽きたネタだぜ」

そう吐き捨てる様に言い、唾を傍らに吐く。

「な、何だとっ！」

「いいかな？　お前らが馬鹿をみるのは弱いからだろ？　弱い奴が強い奴に酷い目に遭うのは世の中の当然なんだよ」

軽口を聞くような口調は変わらない、馬鹿にしきっている。

「何だと！」

カラジの表情に怒りが充満している、プリエルも自分の感情が高ぶるのがわかった。

「納得したかい？」

スティングは笑顔をニッコリとカラジに向けた。

「き、貴様ー！」

丸腰のスティングに向かって、走り込んだカラジは鍬をスティングに振り下ろした。

2

「黒い瞳」

「何だよ、あれは」
生い茂る草に身を潜めながら、ウィル・ヴィスパーは顔をしかめた。
「僕を捕まえるのに、あんなに人数がいるの？」
ヴィスパーは小さな村をのぞいて、ため息をつく。
「反逆罪は確かに重いけど、また何か罪状が付いたのかな？」

逃亡を始めて三週間、立ち寄った街で何故、自分が反逆罪を被る事になったか判別がついた。
前に自分が主計部長に出した余剰食糧の配給提案には、配給をすべき村々を自分の調べた範囲で書いたのだが、名前を書いた４ヶ所の村の全てが一週間の内に暴動を起こしたのである。
暴動を起こした村との繋がりを疑われたのだ。
おそらく自分を憲兵本部に通報したのは主計部長であろう。
村々の暴動の続発は知っていたが、それは他でも頻発していたので、そこまで自分の身に深刻な影響が現れるとは考えてなかったのだが……

「森から出るのはかえって自殺行為かな？」
ヴィスパーは考え込んだ、兵士は森を包囲する様に配置されているらしく、街道に出れば、たちまち捕まりそうだ。
３日前に大きな街から離れて、この森に入った。
街にいたかったが、急いで逃亡を始めた自分には充分な逃亡資金がなく、街にいられなくなった。

スラムに流れるのは自分には出来ない事だと判断して、少し離れた森に入ったのだ。
それまではヴィスパーは追っ手を怖れていたが、まるで何かに追われている感じは無かった。

現在は征服後の混乱で、帝国に手配されている人間は多い為、自分までは手が回らないのかな？　と都合よくもとらえていた。
しかし、森に入って二日目にいきなり森の周辺は兵士に封鎖され、ヴィスパーは森から出る事が出来なくなってしまったのだ。

「つけられてる感じはしなかったのに」
疑問に思った。
尾行するなら、捕まえるのは簡単な筈だ。
泳がされて、いやしない仲間の場所でも探られていたのかな？
でもなければ、森に入った時に目撃されて通報されたか？
色々と考えたが、事態は変わらない、ヴィスパーは今後を考えた方がマシだという結論を出した。

「それにしても大層な人数だよなぁ」
草むらを姿勢を低くしながら後退する、本格的な捜索が始まる前に森の奥まで逃げれば、広い森のようだから隠れ通せる可能性が出てくるかも知れない。
本格的な捜索はまだでもいくらかの兵士は森に入っているだろう、油断は出来ない。
森の奥に更に入ろうと身を低くして歩こうとした時、突然の異常にヴィスパーは思わず立ち尽くしてしまう。

いつの間にか、1人の少女がヴィスパーを見つめていたのだ。

少女は10歳になるか、ならないかの娘で、黒い髪に黒い大きな瞳が印象的な少女だった。

美しい娘だ。

無表情でヴィスパーをみている。

「あ……あの」

まいったな、ヴィスパーは正直にしくじったと思った、今の自分の様子は兵士達を影からうかがい、コソコソと逃げ出す姿は怪しい人間そのものだ。

「私たち、一緒だね」

少し笑みを浮かべた少女の口からは予想外の言葉がゆっくりと発声されたのである。

第5話に続く

第五話「発端」

1

「対　峙」

「鈍いぜ！」

振り下ろした鍬は当たらなかった、いや、スティングが当てさせなかった。

柄の部分を左手で受け止められた鍬の刃は、スティングの鼻先数センチで止まる。

「なっ！」

人間業ではない。

受け止められたカラジ本人は勿論、傍らで見ていたプリエル、そして村の人間達も信じられないといった驚愕の表情を浮かべる。

「もう一回だ」

スティングは薄笑いを浮かべ、左手を鍬の柄から離した。

「次、ミスったら奥さんと子供に、ご対面させてやるからな」

スティングの目の色が変わる。

「駄目だよ！」

プリエルがカラジの腕にすがりつく、スティングの目は笑っていなかった、次はカラジは殺されると直感した。

「離してくれ！」

カラジが暴れる様に動くが、今度はプリエルも簡単には離れずに、振り回されながらもスティングを睨み付ける。

「そっちが無理な事ばかり言うから、みんな怒ってるんだよ！　わかってんの？」

冷笑をたやさないまま、プリエルに視線を移すスティング。

「元気な娘さんだな」
「何よ、馬鹿にしてっ！　なめてんじゃないわよ」
カラジを押さえている癖に、口はプリエルの方が遥かに過激である。
「面白い娘だ、たまにはこういうのもいいな」
スティングは左腕を伸ばすと、カラジにすがりつくプリエルの後ろ襟をつかんで引き寄せた。
「なっ！？」
「うおっ！」
その力は想像を超える腕力で、プリエルは簡単にカラジから引きはがされ、カラジはその勢いで前に倒れ込んだ。
「な、何すんのよ！」
スティングの胸に抱かれる形になったプリエルはさらに大声を上げた。
「さわぐなよ、このまま締め殺す事もできるぜ」
「ど……どうするつもりよ！」

「お前を抱く」
「！！！」
スティングのストレートな言葉にプリエルは思わず赤面する。
「それよっ」
スティングは軽くプリエルを両手で抱き抱えた。
「ふ、ふざけるな！」
倒れていたカラジが鍬を片手に立ち上がったが、プリエルを抱き抱えたスティングにはやたらと振り下ろせない。
「あ～、オッサン、まだいたのかよ」
プリエルを抱き抱えたままスティングはカラジを右足で蹴り飛ばす。
「うげぇ」

カラジの身体は一瞬、宙に浮いて、近くの家の壁に直撃し、壁に大きなヒビが走った。
「ぐおっ」
苦悶の声をあげ失神したのか、動かなくなるカラジ。

「カラジさん！」
プリエルは身をよじらせスティングから脱出しようとするが、全く動けない。
「気を失ってんだろ？　暴れるなよ、まぁ、たまには暴れ馬もいいか」
スティングが集まって来た兵士に目配せすると、兵士達は倒れたカラジを抱えて連れていく。
「さぁ、行くか」
「いやぁ！」
プリエルは暴れるが、スティングはお構いなしとばかりにテントに連れ込もうと運んでいく。

「待ちなさい！」

周りでみている村人の中から声が上がり、振り返ったスティングも思わず足を止めて、抱き抱えたプリエルを見る。
そこには息を切らしたメリエルが立っていた。

「ソックリさんかよ？」
「姉です、妹を離して下さい！　それが領主がする行為ですか！」
メリエルは毅然とした態度で歩いてスティングとプリエルに近づ

く。
「お姉ちゃん、ダメ！」
プリエルが叫ぶが、メリエルはスティングの目の前まで来た。

対峙する2人。

「姉妹そろって美人だな、こんな美人姉妹、ほって置くなんて、この村の男はだらし無さ過ぎるよな」
薄ら笑いでメリエルを見るスティングだか、メリエルの瞳は対象的で全くふざけはない。
「村の男の人は分別がありますから！」
普段のメリエルからは想像のつかない強い口調で言い返した。
「俺には弱い男達としか思えないがな」
スティングはため息をつきながら、周りの村人達を見渡す。
村人達はうつむき加減になってしまう。
「美人姉妹のピンチに誰も助けにこないぜ」
「それは……」
メリエルは黙ってしまう、別に助けに入らない村人達を恨むつもりは全くないが、誰かに助けて貰いたかったのも確かだ。
「それともパターンだが、姉さんが身代わりになる？　姉さんの方がいい身体してそうだな」
スティングは、メリエルを頭から脚まで舐める様に見る。
「コラッ、お姉ちゃんをそんな目でみるなっ！」
手足をばたつかせて必死にわめくプリエル。
わめいたのは他でもない、メリエルの次の答えに嫌な予感を感じたからである。

「わかりました」
メリエルはスティングを強い視線で睨みながら、答えた。
「お姉ちゃん！」
「いいねぇ、じゃじゃ馬の妹もいいが、お姉ちゃんの方が俺には好みだぜ」
予感通りの答えに声を上げるプリエル、スティングはニヤついた。

「宜しいでしょうか」
そこに初老の将校らしき男が見計らった様に現れた、参謀であろう。
「スティング様、そろそろ捜索の準備が整いましたので、続きは夜に」
「スタイナーか、楽しみを邪魔するのかよ」
スタイナーという初老の参謀はみるからに堅そうな人間に見える。
「邪魔するつもりはありませんが、陽の高いうちに捜索を始めませんと、これは勅ですので」
「まぁなぁ」
スティングはプリエルを抱き抱えながら、考え込み始める。
「しょうがねえ！」
スティングはポイとプリエルをメリエルに投げてよこした。
「うわあっ」
あわてふためき、プリエルを受け止めるメリエル。
しかし、貧弱なメリエルの腕力では受け止めきれずに、しりもちをついて姉妹そろって倒れ込む。
スティングは重ねて倒れる姉妹を見下げる。

「姉ちゃん、妹は返してやるぜ、続きは夜だからな、来なかったら俺の機嫌悪くなっちゃうぜ」

「わ、わかってます」
メリエルはプリエルを抱えながらスティングを睨んだ。

2

「森のローゼンフェリア」

「君が……僕と一緒？」　ヴィスパーは黒い瞳の少女に聞いた。
「あなたは、あの人達から逃げてるんだよね？」
少女の声はやはり抑揚のない外見から見える年齢には似つかわしいとは言えない声でヴィスパーに聞き返してくる。
「まぁ、そうだけど、君もそうだって言うの？」
「そうだよ、私はローゼンフェリア、あなたは？」
「え？　僕はウィル・ヴィスパー」

いきなりの自己紹介に焦ったか、ヴィスパーはここまでの逃亡で使ってきた偽名ではなく、思わず本名が口から出た。
「普通にいい名前だね」
ローゼンフェリアは口元に少し笑みを浮かべた。

ヴィスパーから見てもかなり年下なのはわかるのだが、顔立ちは抜群に整っている、将来はその笑み一つで男性を虜にしそうだ。
「あ、ありがとう、君の名前もいい名前だね」
戸惑いながら、ヴィスパーは言う。
もちろん、ヴィスパーは女性と話す事もあったし、同世代の男の子の中では奥手ではあっても、女性と話すだけで戸惑いを覚える程ではないが、ローゼンフェリアという少女には何か戸惑いを覚えた。

ほとんど見ない美しい黒い瞳か、その喋り方か、原因は不明だが、いわゆる呑まれている。

「一緒に行こう」

ローゼンフェリアは森の奥に向かって歩き出す。

ヴィスパーの返答を聞くつもりはないようだ。

「ち、ちょっと」

ローゼンフェリアに追い付いて、前に回り込むとローゼンフェリアはゆっくりと顔を上げた。

「嫌なの？」

「いや、そういう事じゃなくてね」

「じゃ行こう」

ローゼンフェリアは再び歩きだす。

「いや、その……違う、違う」

ヴィスパーは中腰になり、ローゼンフェリアの正面から両肩に手を置いた。

「なに？」

「あ、いや」

歳の差はあるのに、思わず赤面しそうになるのは、女性に対する免疫のなさか、小さいとはいえローゼンフェリアの美しさのせいなのかは微妙であるが、ヴィスパーは振り払う様に首を振り、

「僕は反逆罪で追われているんだ、あの兵士は僕を捕まえに来てるんだ！　君が何で追われてるかわからないけど、僕は捕まれば確実に殺される、僕といない方がいい！」

まくし立てる様に一気に喋る。

「……」

キョトンと一瞬だけしたローゼンフェリアはコク、コクと頷くが、

「だから一緒に行こう」
と、また再び歩き出す。
「え？　君、今の話を聞いてくれてた？」
ポカンとするヴィスパーにローゼンフェリアは笑みを浮かべて振り返った。

「捕まったら殺される、ますます一緒だね」

少女の意味深な笑み。
少年は今回は赤面ではなく、背筋に奔る悪寒を堪えなければならなかった。

3「着火点」

「お姉ちゃん、ゴメン」
家に帰るなり、プリエルはメリエルに頭を下げ、
「夜は私があいつの所に行ってくる」
と、告げたのだが、メリエルは首を横に振った。
「だめよ、あいつは私が来なきゃいけないと言っていたでしょ」
メリエルは平然と洗濯した粗末な服を畳んでいる。
「お姉ちゃん、何されるか、わかってんの！」
プリエルが叫ぶ。
「あのね、わからない訳ないでしょ？」
「だったら……」
「だったら、何なの？　私だって大人しくは言いなりになる気はな

いし、プリエルが行くなら、私が行く方が何倍もマシです！」

ぴしゃりと言い放つと、メリエルは石臼でトウモロコシの粒を挽き始めた。

「お姉ちゃん……」

プリエルはそれ以上は言葉が出なかった、しかし目頭からは言葉よりも雄弁な滴が溢れ出して来た。

メリエルは石臼を挽きながら、それを無視した。

夕刻になった。

メリエルは家事を色々としていたが、プリエルは部屋の隅に膝を抱え、顔を伏せていた。

プリエルが涙を見せてからは一切、会話がない。

姉妹でこれだけ近くにいて、この長時間、会話をしないという事は今までなかった。

当然、今まで姉妹ケンカはいくらでもしたが、黙ってしまう事はなかった。

「メリエルさん！」

姉妹の沈黙を打ち破ったのは、村の子供の女の子であった。

昼間は板もかけてない入口からいきなり部屋に飛び込んで来た。

「ベリー？」

メリエルは驚きの声を上げる、プリエルも伏せていた顔を上げる。

ベリーは１１歳の大人しい女の子である。

「ベリー、どうしたの？　何があったの？」

大人しいベリーが慌てている、メリエルは異常を感じた。

「カラジおじさんが！　カラジおじさんがぁ！」

ヒステリックにベリーは叫んだ。
「カラジさんが？」
「広場でぇぇっ！」
ベリーはふさぎ込む。
あまりのベリーの慌て様にメリエルもプリエルも嫌な予感を覚えつつ、広場に走り出した。

広場に着くと村長をはじめ村人が集まっている。
「メリエルちゃん、プリエルちゃん！　見ちゃダメだ」
村長が止めたが、それは嫌でも姉妹の視界に入ってきた。

カラジの骸であった。
首を落とされ、地面に這う命なきカラジであった。

正直、領主に襲いかかったカラジが何もなく、放免されるとは思ってはなかったが、いきなり斬刑とは思っていなかった。
姉妹の中で思考が真っ白になってしまう。
「何で、何でこんな事！」
近くにいた兵士をプリエルは睨む。
スティングをはじめ大多数の兵士は森に反逆者の捜索に出ている為、広場には１０人程がいるだけであった。
「この者は領主様に襲いかかったのだ！反逆は死罪が当然だ！」
睨まれた兵士が太い声で言い放ち、別の兵士は、
「お前達もおかしな事を考えるんじゃないぞ！」
槍を構えて村人達を威嚇した。
「おかしな事？」
メリエルは呆然としながら呟いた。

カラジさんはおかしな事なんて考えた？
カラジさんはおかしな事なんてした？
カラジさんはおかしな事なんて……

思考が反芻する。

「何だ、あれは！」
村人が声を上げ、何かを指差している。
「な、何で？」
プリエルも村人が指を指した方向をみて、驚愕の表情で後ずさる。
「プリエル……」
メリエルも顔を上げて、その方向を見た。
「あ……」
そこには再び、頭の中が全て真っ白になる光景が広がっていたのだ。

森が燃えていた。

紅蓮の炎に燃えていた。

第６話に続く

第六話「救出」

1

「森に駆ける」

「嘘だ……」
「そんな……」
カラジの死と炎に包まれる森に村人達はただ茫然自失になっていた。
「あああああっ」
叫び声が上がり、顔見知りの老婆が膝をつき、前のめりに倒れた。
「あっ！」
我を取り戻したプリエルが老婆を抱き起こす。
「大丈夫ですかっ？」
メリエルも駆け寄り、老婆の様子を伺う。
「お姉ちゃん？」
「亡くなってる……」
メリエルは腕を取り首を振る。
「な、何でっ!?」
森を焼かれたショックで死んでしまうなんて。
プリエルは目を見開いて驚く。
「このところ身体も弱っていたんだと思う、それに今のショックで……」
「そんな……」
絶句するプリエル。
幼い頃より、この村で暮らし森で遊んだ老婆には、この光景はつらすぎたのだろう。
老婆だけではない、森で遊び、様々な形での森の恩恵を受けなか

った村人など1人もいなかった。

「あんたら一体、何しにきたのよっ！」
怒り心頭のプリエルが兵士に怒鳴りつける。
「何を考えてるんだ！」
「森は俺達の大切な場所なんだぞ！」
「お前達は最低だ！」
黙っていた村人達も口々に留守番の兵士達を罵り始めた。
「黙れっ」
「逮捕するぞ！」
興奮する村人に槍を構える兵士達、しかし大切な仲間を死に追いやり、森を燃やされた村人の興奮は収まらない。
たちまち、留守番の兵士達の数倍の村人が周りを取り囲んだ。

その様子を見ていたメリエルは突然、何かを決意したように走り出す。
「お姉ちゃん！」
プリエルも亡くなった老婆をその家族に託すと、意味はわからないが、メリエルを追って走り出した。

「お姉ちゃん、何を走ってるの？　どうするの！」
脚力が違う為に、あっという間にプリエルはメリエルに追い付いた。
「助ける！　帝国軍があんなに必死に追いかけるんだもの、もしかしたら私達の力になってくれるかもしれない！」
走りながらのメリエルは答えに、プリエルは一瞬だけ驚いてニッコリと笑った。

「さすが、お姉ちゃん……イザとなると私より大胆だね」
姉妹は迷う事なく、森へ駆けていた。

2
「脱出路」

「ローゼンフェリア、こっちだ！」
ヴィスパーはローゼンフェリアの手を引いた。
周りは煙が巻いている。
「燻し出すつもりか？」
炎はまだ迫っていないが、煙はかなり酷い状況だ。
「焼け死んでもいいと思ってるよ」
ローゼンフェリアは口元にハンカチを当てながら煙を避けている。
「煙が来てない方向ににげるしかないか？いや、ダメだな！」
ヴィスパーは自問自答を声に出した。

炎や煙で燻していない方向には、兵士達が配置されて、ヴィスパー達を待ち伏せてるに違いないのだ。
そうでなければ燻し出す意味がないのだ。
「ここにいると死んじゃうね、ヴィスパー」
ローゼンフェリアの口調は慌てておらず、緊迫感に欠けている。
「わ、わかってるよ！今、考えるよ」
「早くね」
煙から身を低くするローゼンフェリアに名案はなさそうだ。
「ねぇ、ローゼンフェリア聞いていい？」
「なに？」

「僕は15なんだけど、ローゼンフェリアは年齢いくつかな？」

女性に年齢を聞くのは失礼だと思ったが、ローゼンフェリアくらい幼ければ、気分を害する事もないだろう。

「8歳だよ、でも今は関係無くない？」

「いや、関係ないけど、これからかなり危ない橋を渡るだろうから、ローゼンフェリアの事も少しは知っておきたくて」

「そうなんだ？いい考えは浮かんだ？」

「いや、まだ」

「ガンバレ」

バツの悪い返事をしたヴィスパーは、ローゼンフェリアの抑揚のない応援を受けた。

「応援ありがと」

ヴィスパーはローゼンフェリアの頭を軽く撫でた。

撫でられたローゼンフェリアはコクリと頷く。

「さてと……」

不利な点は相手の人数が多い事、これは単純だが最重要だ。

こちらの有利な点は逃げても、隠れてもいい点だ。

とにかく、捕まらなければよいのだ。

舞台は広大な森で、相手の人数がかなりいても見逃しが出るだろう。

「この煙が助かってる面はあるけど」

視界がきかないので相手も探しにくい筈だ。

しかし、その状態に甘えているとローゼンフェリアの言う通り、煙責めが火あぶりに変わって殺されかねない。

「煙を我慢できる？」

「もう少しなら」

ハンカチで口元を押さえるローゼンフェリア、態度は相変わらずだが、苦しそうである。

「よしっ！」

ヴィスパーはローゼンフェリアを抱き上げる。

「別に脚は平気だよ」

「そうじゃない、火と煙を抜けて逃げてやる！」

意を決したとばかりにヴィスパーは、ローゼンフェリアを抱きかかえて走り出した。

＊＊＊

ヴィスパーは大きく息を乱しながら、炎と煙に侵食される森をローゼンフェリアを抱き、走っていた。

「無理してない？」

しかし、数分経つとローゼンフェリアに心配されてしまった。

元々、小柄とは言わないが、１５歳の平均的な身長に、わりに細身なヴィスパーが８歳とはいえ、女の子をかかえて、煙が巻く火事場を走るのは体力を消耗する事であった。

「降りるよ、十分頑張ったと思う」

などと逆に励まされる始末になり、ヴィスパーはローゼンフェリアを降ろした。

「ごめん」

「気にしてない」

男の子の意地みたいな物が砕かれたヴィスパーは煙の中でなんと

か息を整えつつ、辺りを見渡した。
森の中にいる状況は変わらないが、火と煙は先程の場所より強い。兵士達を避け、火と煙の方を選択したのだから当然と言えば、当然である。
「火を越えるのは無理かも知れないね」
「うん……」
ローゼンフェリアの言葉に意気消沈し、同意するヴィスパー。
どこか火勢の弱い場所を見つけて、そこを抜ければ、火と煙に追い立てられて兵士から逃げるよりも可能性があるかと考えたのだが、甘かったようだ。
森の木々を焦がす炎の強さは予想を超えていた、とても無事に抜ける事は難しそうであった。
「ごめん、状況を悪くしちゃったみたいだ」
ヴィスパーは自分の判断ミスをローゼンフェリアに詫びた、8歳の女の子を自分勝手な判断で危険極まりない状況に追い込んでしまったのである。
「わかった、じゃ次はどうする？」
ローゼンフェリアは煙を気にしながらも、しっかりとした視線をヴィスパーに向けてくる。
「えっ？」

ヴィスパーは違う意味で戸惑った、その黒い瞳はヴィスパーの判断ミスへの抗議もなければ、落胆もないように感じたからだ。
「僕は今、失敗したばかりなんだけど……」
「今度も失敗するの？　それとも諦める？」
吸い込まれるような黒い瞳に見つめられたヴィスパーはその瞳から目を外す事が出来なかった。
「私じゃ無理、ヴィスパー、お願い」

しっかりとしている様に見えてもローゼンフェリアは8歳の女の子なのだ。
一緒にいる15歳の男が一度の失敗で諦めてたまるものか！
ヴィスパーは自分を奮起させた。
「わかった、ごめんよ、ローゼンフェリア」
意を決した！
捕まれば、殺されるのだから、最後まであがいてやる！
自分で考えるのを止めたらおしまいだ！
ヴィスパーは頭を低くしながら、周囲の状況を把握しようとする。
意を決したが、前は火と煙、戻れば兵士達が網を張っているだろう。

「ヴィスパー」
十数秒考えた頃にローゼンフェリアはヴィスパーの袖を引いてきた。
「何？　何かあった？」
「ヴィスパーは間違えてなんかいなかったかもよ」
ローゼンフェリアがニッコリ微笑んで、指を差した先には、2人の少女が手を降りながら近づいて来るのが見えた。

3
「姉妹と少年」

「あなた達は帝国の兵士に追われてる方達ですか？」
栗色の長い髪を背中あたりでリボンを使って纏めた顔立ちの可愛

いらしい女の子が、急いだ様子で近づいてきた。
服装は粗末で上等とは言い難く、いかにも山間の村娘だ。
「そうだよ」
ヴィスパーよりも早くローゼンフェリアが答えた。
これだけ追い詰められたら嘘をついても無意味だろう。
「やった！　お姉ちゃん」
その答えを聞いて、もう1人の少女が喜びの声をあげた、その少女に視線を移したヴィスパーは驚きの声をあげた。

「双子？」
ローゼンフェリアはキョロキョロして2人を見比べている。
「はい、双子です、私は姉のメリエルです、こっちは妹のプリエル」
「ローゼンフェリア」
またもやヴィスパーの先手を取って、ローゼンフェリアが勝手に自己紹介を返した。
「僕はヴィスパー、確かに僕たちは帝国に追われてるけど、この通りだね」
ローゼンフェリアの頭を撫でながら、ヴィスパーは周りを見渡し、メリエルに苦笑いを見せた。

「助けに来ました」
メリエルは見た人間を安心させるような優しい笑みをヴィスパーに向ける。
「助けに？」
「そうだよ」
プリエルという妹は意外そうなヴィスパーにメリエルとは質の違う明るい笑いを見せた。
「ありがと……じゃ早く助けて」

再び勝手に話を進めるローゼンフェリア。
「いや、待って！　なんで僕を助けるんですか？」
今更、罠とも思えないが双子の姉妹の意図がヴィスパーにはわからなかった。
「説明よりも先に逃げましょう！　安全な所に行ってから話しましょう」
「確かにそうだ、いいよね？ローゼンフェリア」
「いいよ」
火と煙から安全な場所に連れていってくれるのは歓迎だ、ただし帝国の兵士達の元かも知れないが。
だが、前に考えた通り罠の可能性はヴィスパーは低いと考えた。
ヴィスパーとローゼンフェリアの場所がわかったのなら、こんな姉妹を使って回りくどい罠など張らないで、単純に兵士を１０人も差し向ければ済む事であるからだ。

「じゃ、行きましょう！火のまわりが強くなってますから」
メリエルは近くのまだ火の回っていない草むらを掻き分ける。
そこにはローゼンフェリアの身長と同じくらいの竪穴があった。
「いろんなとこに通じてるんだ！　森の中での追いかけっこなら地元が断然、有利に決まってるよ」
プリエルは得意げに笑いかけてきた。

洞窟の入口は狭かったが、少し入るとヴィスパーの身長でも余裕のある高さになり、横幅も両手を広げられるくらいになった。
先頭を歩くメリエルが蝋燭を持ち、ヴィスパー、ローゼンフェリア、プリエルと続いていく。
「メリエルさん、プリエルさん、ありがとうございます、あなたたちが来なかったら確実に捕まるか、炎に巻かれてました」

自分が礼を言っていない事に気がついたヴィスパーは礼を言った。
声が洞窟に反響する。
「どういたしまして、もう少し歩きますから、足元気をつけて下さい」
メリエルは振り返らずに前を見ている。
「蛇が出るからね」
プリエルが付け足すと、ローゼンフェリアはせわしなくキョロキョロし始める。
「怖い？」
プリエルは少し意地悪くローゼンフェリアに聞いたが、彼女は怖がる様子もなく、
「見た事ない、見たい」
と、平然と返事をして一同を驚かせた。

予想以上に入り組んだ洞窟を進み、一行はようやく地上に出た。
そこはすでに森を出て、村の外れまで来ていた。
「ここまで来れば平気だよ、森の洞窟を見つけてもここに着くのは大変だよ」
プリエルはローゼンフェリアの頭を撫でながら、ヴィスパーに人懐っこい笑顔を見せる。

「本当に助かりました、でもどうして？」
ヴィスパーは1番の疑問を2人にぶつけた。

メリエルは答える。

「もう我慢できないです」

第7話に続く

第七話「分岐路」

1
「告　白」

炎に包まれる森を脱出したヴィスパー、ローゼンフェリア、そしてメリエル、プリエルは村はずれの林で一息いれていた。

「そうなんだ、やっぱり帝国の圧政はこんな山間の村にまで無理を強いているんだね」

メリエルとプリエルの話にヴィスパーは深刻な表情を見せた。

「はい、村のみんなは食料の蓄えまで徴収されて、これまで魚や山菜でしのいでいたのですが、限界な上に領主はあなたたちを捕まえる為に森に火を……」

メリエルは遠くで燃え続ける森を見た。

火の勢いは衰えるどころか増しているようにもヴィスパーには思えた。

「僕が森に逃げなきゃ、こんな事にはならなかったのかも知れないのに」

ヴィスパーは俯く。

「ヴィスパー君は悪くないよ、あいつらが悪いんだから！」

「そうね」

プリエルの言葉にメリエルは首を縦に振る。

「気を使わせたね」

姉妹の気遣いにわずかに笑みを返すが、原因を作ってしまった罪

悪感はとても拭えない。
「ヴィスパーが逃げたからじゃないよ」
ヴィスパーの隣に座っていたローゼンフェリアが口を開いた。
「そういえば、言いたくなければ言わなくていいけど、ローゼンフェリアの捕まれば殺されるって、どういう事情だい？　僕は濡れ衣の反逆罪なんだけど……」

ヴィスパーはローゼンフェリアの頭に乗った煤を軽く掃いながら、顔を覗き込んだ。
会ってからまだ半日も経たないのにローゼンフェリアにはヴィスパーから見て不明な点が多かったが、つい先程までは話などしている余裕がなかった。
ローゼンフェリアの事で知っている事と言えば、8歳という年齢くらいで、後は捕まれば殺されるという立場だけだ。

「フェンリルが私を殺すんだよ」
ボソッとローゼンフェリアが言った。
「フェンリルって皇帝だよね？ひどい皇帝だよ！」
プリエルは顔を上げた、村の人々にとって皇帝フェンリルは平和な暮らしを壊した領主の主君である。
「このままじゃ、みんなフェンリルに殺されちゃうよね、何とかしないと！」
自分の言葉で自らを奮い立せるプリエルに、ローゼンフェリアはわずかに横目で視線を送った。

「そういう意味じゃないんだけどな」
「え？　どういう事？」

「フェンリルは私を殺したいんだよ」
ローゼンフェリアに皆の視線が集中する。
「まさかローゼンフェリアはフェンリルと面識があるのかい？」
ヴィスパーは驚いた、もちろんヴィスパーは見た事もない、姉妹も当然ない。
大多数の一般層の人間がそうであろう。
勿論、フェンリルは皇帝という立場の為に、一般市民達を鼓舞する演説や様々な行事に出席している筈だが、ローゼンフェリアの発言はそういう場所で見た、とかいう類のものではなかった。

「皇帝、フェンリルは私の母親だよ」
「えっ？」
ローゼンフェリアの口から出た言葉にその場の時間が止まる。
「どういう意味だい？」
「意味なんてないよ、フェンリルは私の母親なんだけど、それだけ」
驚きを含んだヴィスパーの質問に、ローゼンフェリアは横目で視線を送りながら相変わらずの抑揚のない声で応じた。
「それだけ！？」
プリエルも口を開けて、ポカンとしている。
メリエルも当然、びっくりしていたが、もしかしたら子供の冗談ではないかと思って、
「冗談じゃないよね？」
と、聞くが、。
「これって、こんな時に言う冗談かな？」
ローゼンフェリアに少し横目で見られてしまい、
「ごめんなさい」
思わず謝る始末だ。

どうやらローゼンフェリアは自分の言葉に意の解さない理解をした相手に、黒い瞳で横目を送る癖があるらしい。
「確かに皇帝には娘がいると聞いたけど」
ヴィスパーもあまりの事に声が震える、皇帝の娘といえば皇女殿下だ、ヴィスパーやメリエル、プリエル達が会うなんて事は普通ありえない。
「疑う訳じゃないけど、身の上を示す物とか持ってるのかな？」
プリエルはそうは言ったが、まだ信じられないといった表情だ。
「持ってないよ、慌てて逃げてきたし、そんな物持って旅したくない」
「そうだよね」
少し残念そうなプリエルは豪華な宝石でも期待していたのだろうか？
「でも、考えてみれば、領主まで出てきての捜索は身の上を証明してるんじゃないかな」
メリエルが顎に手を当てながら言うと、
「そうだね、領主が自分で出てきてるんだもんね」
プリエルも思い出した様に手を叩く。

「えっ、領主なんて出てきてるんだ？」
初耳のヴィスパーは驚いた、帝国ではそれぞれの広大とも言える領地を治める領主は、皇帝直属の武将がなるものであり、当然であるが、その地位は高い。
いくらヴィスパーが極刑である反逆罪の逃亡者だとはいえ、領主に直接に追われるのは不自然過ぎる。
しかし、帝国のたった1人の皇女の逃亡ともなれば、領主の直接指揮も納得が出来るのである。

「名前、わかる？」
ローゼンフェリアの目つきが鋭くなり、メリエルに領主の名を尋ねる。
「スティングっていう男だったわ」
「スティングか……」
ローゼンフェリアは鋭い視線の方向を燃える森に移した。
「知ってるの？」
ヴィスパーが聞くと、
「ちょっとだけ」
と、ローゼンフェリアは答えて、燃える森を見続けていた。

「2人はこれからどうしますか？」
メリエルは服に着いた土を手で掃いながら、立ち上がった。
休憩は終わりのようだ、返答次第ではメリエル、プリエルとはここで別れになるのだろう。
「私は帝国の私達に対する扱いには我慢できないです、だから、それなりに行動するつもりです」
メリエルの口調は穏やかだが、強い決意のある言葉であった。
「メリエルさん」
「お姉ちゃん」
ヴィスパーとプリエルはメリエルを見つめる。

「私は戦う」
ローゼンフェリアはポツリと告げた。
ある程度は予想もついたかも知れないローゼンフェリアの反応だか、ヴィスパーにはまだ聞きたい事があった。
「ローゼンフェリア……何故、母親のフェンリルが君を殺そうとするの？　話し合うとかできないの？」

ローゼンフェリアは森を見ていた視線を質問者であるヴィスパーに向けた。

「なぜか、という事は簡単だよ、私は殺されたくないから戦うだけ、生きていたいから、私が生きる事を止めようとする人とは戦う、それ以外にはある？」

「だから、話し……」

「出来ない！」

少女は強い語気を発した、ここまでの彼女には見えなかった露にした感情。

「それはあいつが私の存在を許さないから……それにあんな事が出来る相手を私も許せない」

ローゼンフェリアが森を指差すとヴィスパーは反論出来なかった。

ヴィスパーの中では幼い思い出でしか記憶はないが、母親というものはもっとあたたかな存在であった。　夫に先立たれ、経済的にも苦しかったが、いつだってヴィスパーを守ろうと必死だったし、病気で亡くなる寸前には自分の身よりも残されるヴィスパーの心配ばかりしてくれていたのである。

しかし、経済的にも、その他の様々な環境においてもヴィスパーとは比較にならない程に恵まれているローゼンフェリアなのに、母親の愛がないが為に８歳の身で母親からの逃亡を余儀なくされているのだ。

「ローゼンフェリア」

ヴィスパーはローゼンフェリアに正面から向き合った。

「なに？」
ローゼンフェリアの美しく黒い瞳にヴィスパーは自分の姿を見つけた。

「僕も戦うよ」

ローゼンフェリアに同情したのか、反逆罪の濡れ衣に腹を括ったのか、貧しい人々から搾取を続ける帝国への反感か、どの感情が引き金になったのかは、この時点のヴィスパーには、わからなかった。

わかる事は一つ、ローゼンフェリアという美しい黒い瞳を持つ少女に告げた言葉は、確実に人生の分岐路を分かつ決断であるという事だけであった。

「私も一緒に戦っていいですか？」
メリエルがヴィスパーとローゼンフェリアに歩みよると、
「お姉ちゃん、酷いよ！　私達は生まれた時から一緒なんだから、もうしばらくは離れないよ！」
そう言って、プリエルも駆け寄ってくる。
「しばらくって何よ？　プリエル」
メリエルが微笑むと、プリエルはニッコリ笑いを浮かべた。
「そりゃ、あたしが先にお嫁さんに行っちゃうからだよ、お姉ちゃんを待っていたら、私がいき遅れるよ！」
「バカ！　逆でしょ？　お嫁さんとか言う前に料理を覚えたらどうなの！？」

メリエルが少しむきになって怒ると、
「おもしろいね」
ローゼンフェリアは姉妹にやさしい笑みをみせた。

第8話に続く

第八話「見下げるメリエル」

1

「決意の短剣」

メリエルは滝から流れる冷水を裸身に浴びる。
普段からプリエルとも水浴びをする2メートルほどの小さな滝。
長い栗色の髪をすきながら、髪についた石鹸の泡を落としていく。
石鹸はかなり前に近所の子供達と作った物だ。
最近は暇が無くなっていたし、余裕もなく石鹸作りはしていないので、量が少なくなっていたが、メリエルはそれを惜し気もなく使った。
妹のプリエルが何と言うかわからないが、今日は勘弁してもらいたいと思う。

滝からあがり、身体を拭き服を着て、髪を結ぶリボンを右手に取る。
ここまではいつもの水浴びと同じだ。
しかし、左手には鋭く光る短剣が握られている。
いつもの水浴びには決して持っていない物だった。

水浴びをすませたメリエルは村のはずれの竹林やってきた。
すでに時間は夕刻を過ぎ、辺りは暗く、風が竹の枝を揺らす音が聞こえる。
この竹林は火をかけられた森とは村を挟んで反対側にあり、かなり広いが、森から比べれば何十分の一と言ってもいい程の広さであ

ろう。

「お姉ちゃん、こっちだよ、こっち！」

プリエルが竹林の中から手を振ってくる、月明かりのあるせいでプリエルの姿もよく見える。

「大きな声はダメッ、あの兵士達がいたらどうするのよ！」

メリエルは慌てて駆け寄り、竹林に入る。

「平気、平気、あいつらは夜は少しだけ森に兵士を残して、後は村に作ったテントの中にいるよ」

「見てきたの？」

「偵察と言ってもらいたいな、お姉ちゃん」

ウインクを見せるプリエルにメリエルは、

「まったく、無理して」

と、ため息をつく。

「それより、ちゃんと見つからない様に呼んできたでしょうね？プリエル」

「抜かりありませんよ、メリエルお姉様」

ふざけてメリエルに舌を出しながら、プリエルは竹林の奥を指差す。

そこには十数人の村人達がいた。

「こんばんは」

メリエルは村人達にまずは挨拶をした。

2

「密　談」

「こんな所に呼び出してどうしたんだよ？　メリエルちゃん」

３０歳半ばの男の村人が口を開いた。
「ごめんなさい、実は明日に領主に直談判しようと思って」
メリエルはみんなの顔を見て話を始めた。
「直談判？」
誰かが聞いてくる。
「昼間、捕まった人達を返してもらうのよ！」
プリエルがメリエルに代わって答えると村人達の顔色が変わった。

そうなのである、メリエル達がヴィスパーとローゼンフェリアを助けに走った後で事件が起きていた。
留守番の兵士と村人達は一触即発の睨み合いになったのだ。
その場にいた村長が危険な状態を察して、村人達を説得して事態を暴発させずに家に帰したのである。
ここで話が終われば、何とか恰好がついたのだが、そうではなかった。

村人に威圧され、プライドを傷つけられた留守番の兵士達は森にいた本隊から援軍を得て、睨み合いに参加していた村人の内の中心人物を数人をピックアップして家に押し入り、反逆罪で無理矢理に連行してしまったのである。

「ひどい話だ」
「ただのウサ晴らしだ！」
村人達がうなづく。
「だから、明日の朝に領主のテントに押しかけて、返してもらう為に直談判しようと思います」
メリエルが強い語気で言うと、

「兵士に文句を言うだけで捕まるのに、領主に直談判なんて殺されに行くようなものだよ！」
村の青年が心配そうにメリエルに反論する。
メリエルは青年に視線を移し頷く。
「そうかも知れない、それでも領主に自分の村の仲間を不当に逮捕された事が許せますか？　反逆罪で捕まったカラジさんはどうなりました？　納得できますか？」

納得など出来ない、出来る訳がない、村人達は怒りとやるせなさに震えているのがはっきりとわかった。
メリエルはみんなを見渡しながら続けた、
「覚悟の直談判です、覚悟のない人は帰ってもらって構いません、一緒に行ってくれる人だけ残ってくれませんか？」
村人達が沈黙する、誰も喋らなくなり、竹林は風に揺れる竹の枝の音だけになった。
数十秒が経った時にその沈黙は意外な人間に中断させられた。

「このまま領主の奴隷のままいるの？」

いつの間にか、そこに立つ1人の少女は月明かりの竹林が恐ろしいまでに似合っていた。
黒い髪に黒い瞳を持つ、美しい少女。
ローゼンフェリアがそこにはいた。

「ローゼンフェリアちゃん、なんで？」
プリエルが声をあげると、村人達もいきなりの闖入者に驚きを隠

せない。
「誰？」
「名前読んだから知り合いだよね？」
「ローゼンフェリア？」
矢継ぎ早にメリエルとプリエルに質問が浴びせられて、騒然となり、収拾がつかないかと思われたが、
「静かにして」
ローゼンフェリアの発した一言で、再び竹林に静寂が戻った。

存在感が強すぎた、そこにいる者達はローゼンフェリアから目が離せない。
「私の事は後でいいの、今はあなたたちが魂を捨てるか、命を捨てる覚悟をするかを決めるの」
ローゼンフェリアの口調は相変わらずだが、誰も言葉を挟めない、いや挟ませない。

数秒の沈黙。

「メリエルちゃん、俺やるよ！　このままだといいようにされて死ぬだけだ！」
先程、不安を口にした青年が顔を上げた。
「そうだ！　直談判して、みんなを取り返せ」
「やられっぱなしで黙ってられるか！」
炎が引火していく様に村人達は全員がメリエルに賛成し、メリエル、プリエルに駆け寄ってきた。
「お姉ちゃん！」
賛成してくれそうな村人達を集めたのは事実だが、全員が賛成し

てくれるとは考えもしなかったプリエルは笑顔をメリエルに見せたが、姉はまったく笑ってはいなかった。
メリエルが笑わない理由を思い出したプリエルは無理矢理に顔を引き締めた。

「みなさん、覚悟は決まったんですね、反逆罪も厭わないですね？」
メリエルが村人達に確認すると、全員が静かに強く頷く。
「わかりました、では直談判の事は忘れてください」
唐突なメリエルの言葉に村人達は唖然とする。
「私の真意は覚悟のある人達に明かします」
メリエルは短剣を振り上げた、
「私の真意は領主を討ち、私達の命の尊厳を死守する事にあります」

3
「テントの中の2人」

村の中心にあるテントの周りには２０人程の兵士達が警護についている。
メリエルがテントに近づいて行くと、
「何か用か？」
威圧的な声をあげながら兵士が駆け寄ってくる。
「あの、領主様に夜に来るように言われたのですけれども……」
少し怯えた様に答えるメリエル。
「ああ、そうか、スティング様もまったく……たっぷり可愛がってもらえよ」

警護隊長らしき兵士がメリエルにいやらしい笑いをみせた。
「は、はい……」
「声が震えてるぞ、緊張しているな？　スティング様のアレは激しいからな、あまり大きな声を上げるなよ」
警護隊長はメリエルの身体を軽く触れ始めた。
これはいやらしい行為でなく、警護の職務のボディーチェックである。
メリエルは背中部分もよく見える様に後ろ髪を両手でかき上げる。
「スティング様好みのいい身体だな、もういいぞ！」
「あ、あ、ありがとうございました」

メリエルの声は震えていたが、警護隊長は震えの原因を誤解していた。
これから自分がされる事に震えているのだと思ったのだが、真逆であった。
彼女はこれから自分のする事に震えていたのであった。

兵士に付き添われ、テントに入ると、そこは外見からもわかる通り、１０人程でも充分に寝られそうな大きな空間だった。
地面にはきちんとカーペットが敷かれ、ベッドなど家具があり、部屋の隅に鎧が立てられている。
「来たか……」
スティングはベッドに腰掛けていた、肌着にズボンのくつろいだ恰好である。
「それでは……」
付き添いの兵士が下がって行くのをメリエルは見送ってからスティングの方に向き直った。

中に入ってしまうと、外の警護の兵士などの雑談等が全くと言っていい程に聞こえなくなった、テントを覆う幕が防寒の役目を果たす意味で厚手なのと防諜の意味もある。
ランプの明かりが煌々とテント内を照らすが、これだけ厚手の幕ならば内部の人間の影が外から確認はされないだろう。
これはスティングとメリエルのお互いにとって好条件であった、もっとも2人の行おうとしている行為は全く異なるのだが。

「酒でも飲まないか？」
「いえ、いいです」
スティングはベッドの脇にある小さなテーブルにあるボトルを持ったが、メリエルは首を振った。
「昼間の村の人達の事なんですが……」
メリエルが口を開いた。
「ああ、留守の兵士と睨み合いになった事か？」
「そうです、後で何人かの人を連行しましたね」
「ああ、反逆罪だ」
スティングはグラスの酒を飲み干した。
「そうですか、森での捜し物は見つかりましたか？」
「まだだ、すでに焼け死んでる可能性もあるがな」
スティングは肩をすくめて見せるが、メリエルは俯いてスティングを見てはいない。

「捕まった連中の命乞いをするか？」
「命乞いしないと、どうなりますか？」
メリエルは顔を上げた。
「反逆罪だからな、俺に飛びかかってきた男と同じ刑罰だな」

「命乞いをしろ、と言わんばかりですね」
「無理にとは言わない」
「卑怯ですね」
メリエルはベッドに向かって歩き始めた、部屋に入るまでの震えはここにきて無くなっている。

「君みたいな女を手に入れるには、男は色々とやるのさ」
不意にメリエルの腕を引くスティング、メリエルの身体は仰向けにベッドに投げ出された。
スティングはメリエルにのしかかる。
「くっ！」
顔を背け、思わず目をつぶるメリエル。
「その表情は男は初めてだな、光栄だね」
メリエルの首筋に顔を埋める。
「は、初めてです……」
漏れるような声でメリエルは続けた。
「人を刺すのは……」
スティングは脇腹に鋭い痛みを感じた。
「ぐおっ」
続けざまに痛みが走り、スティングは思わずカーペットの上に倒れ込む。
身体を起こして、立ち上がるメリエルの右手にはリボンで後ろ髪に結び付けて隠していた短剣が握られている。
カーペットの柄に新たな赤い色が塗られていくのをメリエルは息を荒げながら見下げた。

「あなたみたいな男を懲らしめるには、女は……色々とするんです

よ」

第９話に続く

第九話「覚悟」

1

「叛　旗」

「よし、行きましょう」
ヴィスパーが声をかけると十数名の村人達がうなづいて後に続く。
みんながそれぞれに鍬や棒、竹槍などの持ち寄った武器を持っている。
ヴィスパーは竹林から切り出して作った竹槍だ、逃亡の途中で手に入れた護身用の短剣を持っていたが、メリエルに託した為、急遽用意した物である。

竹林でメリエルが領主と戦う事を告げると、反逆罪を承知で直談判に賛成した村人達はみんなが更に過激な蜂起という最終手段にも賛成した。
そこで初めてヴィスパーとローゼンフェリアが村人に紹介された。
しかし、ヴィスパーの素性は隠さなかったが、ローゼンフェリアについてはヴィスパーが旅の途中、貧民街で知り合い、ついてくる様になったとメリエルは村人に説明した。

この件は前もって相談していた。
皇帝の娘と明かすのは危険も伴う、とヴィスパーとメリエルの意見が一致を見たからである。
プリエルはローゼンフェリアがよければ正体を明かした方がいい、と意見を出したが、ローゼンフェリアを取引に使う意見が村人から出れば、意見の相違から蜂起の足並みが乱れる危険性をヴィスパー

が指摘すると納得、ローゼンフェリアは自分の身分を隠す事には静かに首を縦に振った。
最終的には蜂起を決意した村人が特に親しい仲間、家族、親戚に声をかけて人数は６０人を越える。
全村人の半分以上の人数である。
もっとも老若男女まじっての人数だが、贅沢など言ってられない。

そして、蜂起の時がやってきたのである。

村の中心の広場には領主のテントがあるが、他の兵士達のテントはスペースの都合上、村の各所に小分けに配置されている。
ヴィスパーの狙い目はそこだ、村人な中でも体力に自信のありそうな者を十数名集めて、各個に撃破していく手段。
まずはひとつ目のテントに近くの家に身を隠しながら夜の闇に紛れて近づく。
「歩哨がいますね」
覗きながらヴィスパーが小声で呟く。
「一気にいくか？」
村人の中年男がヴィスパーをつついてくる。
「１人でも逃げられると面倒です、半分の人は反対側に回り込んでください、もう半分は僕と正面からかかります、挟み撃ちします」
「わかった」
８人の村人達は身を低くしながら、闇に消えていく、自分達の村だから地の利ははるかにこちらにある。

しばらくすると、反対側に村人達が回り込んだのをヴィスパーは確認する。

「よし！いきます」
竹槍を握りしめたヴィスパーは歩哨に向かって、音をたてない様にゆっくりと歩き出した。
月明かりで顔も判別できる距離まで近づかれて、始めて歩哨は異変に気がついてヴィスパーの方に振り返った。
少年兵だった、ヴィスパーと年端は変わらない。
経験が浅いであろう少年兵の歩哨は、至近距離で竹槍を構えたヴィスパーと目があったが、絶句して硬直した。
「っ……」
何ともつかない叫び声を上げようとした少年兵に向かって、ヴィスパーは覚悟を決め竹槍を突き出した。

同時刻、村の中心では３０人程の村人が領主のテントを目標に四方から走りだした。
警護の兵士は不意をつかれて４人がたちまち棒や鍬で叩きのめされる。
「お姉ちゃん！」
プリエルは鎌を片手にテントになだれ込む。
「プリエル……」
メリエルはカーペットに倒れ込むスティングの傍らに立っていた。
スティングからは大量の血が流れて、カーペットを染めている。
「お姉ちゃん……」

プリエルの足が思わず止まってしまう。
メリエルの行動は事前にヴィスパーがたてた作戦通りであるのだが、プリエルはメリエルがどんな人間にせよ人を傷つけるという行為を行う事に違和感を感じた。
「生きてる？」

プリエルは鎌を構えたままでスティングに近づく。
うまくいけば生け捕りが今後の為に望ましい、とヴィスパーは言っていたが、プリエルが今、スティングに生きていて欲しい感情になっているのは別の望みからだった。
「わからない、手加減できなかったから」
メリエルはテントの外の村人と警護の兵士達が戦う叫び声や怒号を気にしながら答えた。
「お姉ちゃん……」
なんとも言えない感情にプリエルはとらわれた。
「プリエル……みんなにさせておいて、私だけしたくないって通用しないと思うんだ、私も戦うと覚悟を決めたから」

メリエルの表情は何か悲しげに笑っていた。
辛い時にメリエルが見せる顔だ。
プリエルはメリエルにその顔をさせるのが堪らなく嫌だった。
両親亡き後、しっかり者の姉に頼りきって苦労をかけてばかりで、何とかしたいのに自分はメリエルのようなしっかり者でもないし、お転婆で気も効かない。
結局、何かとメリエルが面倒をかける。
ある日、疲れ切ったメリエルを心配して声をかけると、悲しげに笑って、
「大丈夫だよ、プリエルがいるからね」
と、答えてくれた。
同じ顔をして、ほぼ同時に生まれてきたのに、メリエルが苦しい時に、いるだけしか出来ない。
それが虚しくて、さみしすぎて、そして悔しくなってしまう。
そんな思いが沸き上がるプリエルの嫌いなメリエルの悲しい笑みだった。

「スティング様！村人の反乱ですっ！」
テントの幕が激しく揺れて、１人の兵士が中に飛び込んできた。
急襲を受けて不利になった警護隊長がスティングを逃がす為、外での戦いを棄てて来たのだ。
「……！」
経験の豊かな警護隊長だったが身体が一瞬、硬直して思考が止まった。
自分が失敗なく警護してきた対象が大量に血を流して倒れていた。

経験のない事であった、そして隊長には不運が更に重なる。
彼は昼間の一時、スティングの警護には部下を残して、夜の警護の為に休みをとっていた。
それは全く責められる事などはなかった、警護隊長とはいえ身体を休める為に対象から離れる事は必要だからである。
しかし、その離れていた時間帯にカラジがスティングに襲いかかり、結局はメリエルが夜の来訪をスティングに約束させられる事態が起きていたのである。
そして、その不運とは、
「な、２人いる？」
彼は戸惑う。
隊長はメリエルの存在は来訪時にボディーチェックまでして知っていたが、双子のプリエルの存在を知らなかったのだ。
カラジが起こした騒ぎの時に双子はスティングの前に姿を見せたが、その場に居合わせなかった警護隊長はメリエルとプリエルが双子なのも当然、知らない。
スティングを護れず、乱れた思考の水面に更に石つぶてが投入され、激しく波立った。
思考の空白は身体の動きを封じ、警護隊長は普段ならかわせるで

あろうプリエルの鎌での一撃をまともに肩に受けた。
「ぐあっ」
警護隊長が右手に持った槍の間合いよりも内側に一瞬にして入り込んでの鎌での一撃、警護隊長は苦悶と不覚の入り混じった表情を浮かべて声を上げた。
そして、プリエルは警護隊長の左肩に食い込む鎌を離し、その手で警護隊長の左側の腰に差した剣をつかみ、剣を抜きながら、身体を右回転、そのまま警護隊長の右肩から一気に袈裟斬りにした。
「ば……」
警護隊長は信じられないといった表情のままでカーペットに崩れ落ちる。

ほんの数秒だった。
「プリエル……」
メリエルは両手を顔に当て目を見開いた。
鮮やか過ぎる手並みで、はるかに戦闘経験で勝るであろう相手をプリエルは数秒で斬り倒したのである。　むしろ、それよりもメリエルはプリエルの動きに躊躇が無かった事に驚いていた。
仕方ないのは十分に理解するが、目の前で妹が人を殺したのだ。
「いや、ロットとかとやってたチャンバラ遊びの技なんだけど、こんなに上手くいくとは……」
プリエルは右手に奪い取った剣を持ちながら、左手で頭を掻いてから、メリエルに向き直った。
「もう、お姉ちゃんだけに覚悟はさせない」

2
「自己満足」

３つ目の兵士用テントに駆け寄るヴィスパー達の前に武装した兵士達が立ちはだかる。
「奇襲の時間帯は過ぎたみたいですね」

ヴィスパーは帝国兵から奪い取った槍を構える、周りの村人も奪った武器を持っている。
「ここまで来たら引き返せる訳ないな、行くも地獄、退くもなんとやらだ」
村人の１人が笑う。
「いけっ！」
一斉に突撃する。
人数は兵士が６人で村人は１６人、訓練された兵士といえども、３倍近くの必死の村人が襲いかかると、たちまちに２人が村人達の槍の餌食になり、残る４人は散り散りに逃げ出して行った。
「深追いは止めて、次のテントに行きましょう」
ヴィスパーが指示を促すと村人達も剣や槍を振り上げた。
「おう！」

今まで、搾取され、しいたげられた逆襲が達成されつつある事に皆が満足している。
ヴィスパーを先頭に次のテントに向かって走る、もう奇襲などは望むべくもなく、正面から打ち破るしかないだろう。
しかし、この勢いで勝てるかも知れない、いや勝たなくてはいけないと心に言い聞かせた。

＊＊＊

「集まれたのは、これだけか？」
スタイナーは周りに集まった兵士達を見回す。
参謀格として彼は安否がわからないスティングをそのままにはできなかった。
反撃してスティングが捕われているのなら取り返さなければいけない。
だが、村に着いた時にいた兵士６０人は今や１１人になっていた。
後は討たれたか、捕まったか、逃げ去ったか。
元が領主が直接指揮とはいえ捜索任務なので、大規模な部隊は展開できないとは言っても迂闊ではあったと思う。
征服して間もない土地であるならせめて3桁以上の兵を連れていくべき、とスタイナーはスティングに意見はしていたが、若き猛将は自分の武力を信じきっていた。
ビクビク怯えて自分の領地をまわる領主があるかと一蹴された上に、警護の一部の兵士を除いて新兵を訓練の一貫として連れていくとまで言い出した。
その結果がこれである、皇帝からの勅であった逃亡した皇女ローゼンフェリアの捜索は果たせず、駐屯した村で反乱にあう。

「散々ではないか」

呟きながら老将は槍を手に馬に跨がった。
スティングは生きてはいないかも知れないが、彼は撤退のつもりは無かった。
守るべき主将を棄てて撤退するなど、彼の武将としての美学には存在しなかった、そのような事をするなら斬り死にを選ぶ。

スタイナーはそんな老将でだった。
「スタイナー様！　来ました、人数が増えてます！」
彼からすれば孫の歳のような少年兵が怯えた声で報告をしてくる。
見れば、確かに村人達は報告より数を増している様だ、結局は途中から村人のほとんどが蜂起に参加したのだろう。
「よし、おまえ達は撤退せよ！　森に残っている者にも撤退を知らせて共にいけ」
村人たちの怒号が次第に大きくなる。
スタイナーは残った兵士全員に命令した。
「しかし……」
少年兵が躊躇する。
「命令であるぞ！」
強い口調でスタイナーが言うと、
「わ、わかりました」
敬礼して若い兵士達は、未練がましくスタイナーを何度か振り返りながら森に向かって走り去っていく。

いよいよ声を上げながら村人達が武器を構え、スタイナーめがけて走って来ていた。
「さて、せいぜい最期は華々しけ飾るか！」
老将はこれは自己満足に過ぎない事は十分に理解していたが、それはそれでよかった。

人生の最期くらいは自己満足でちょうどいい。
スタイナーは馬に力いっぱい鞭をくれた。

第１０話に続く

第十話「ネシア参上」

1

「華麗なる来訪者」

蜂起は成功した、村人達は武力で村から帝国の兵士を一掃したのだ。

夜が明けた。

だが、ヴィスパー達は安穏とはしていられなかった、帝国の反撃は必至で対策はしないといけないのは当然として、村人達はまずとりかかる事があった。

「ヴィスパーさん、こっちです！　水をください」

ベリーが燃え盛る火に濡れた布を被せながら、必死に叫ぶ。

「わかった！」

川の水を目一杯に入れた革袋を背負いながら、ヴィスパーは苦労しつつも森の中を走って、ベリーの元に駆け寄る。

「ありがとうございます」

ベリーはペコリと頭を下げてから木製のバケツで革袋から水を汲んで火にかけた。

ベリーは亜麻色の髪を後ろで三つ編みにした、１１才の村の娘である。

カラジの処刑をメリエルとプリエルに伝えに来た少女。

ぱっちりした緑色の瞳に少し低めの鼻はローゼンフェリアの様な特別といった感じの美少女ではなく、地味な印象だが、十分に愛らしい。

割と目立つのは眉毛で、ちょっと太めだ。

本人は大人しく、礼儀正しい性格だが眉毛の事を言われるのは嫌らしく、出かける前もプリエルに、

「ベリーは普段は大人しいいい娘だけど、眉毛の事は禁句だよ、性格変わるからね」

と、ニヤつきながら警告されているので、ヴィスパーもその事は触れていない。

「ここは消えました！」

煤まみれになりながらベリーはヴィスパーに笑いかけてきた。

「よくやったね、別の人たちも上手く消せてるといいけどね、ベリーちゃん、ご苦労様」

軽く頭を撫でると、ベリーは太めの眉毛をわずかに吊り上げる。

「ベリーでいいです、あとそこまで子供じゃないんで撫でなくても大丈夫です」

きっぱりとした口調と目線。

「あっ、ご、ごめんね」

慌ててヴィスパーが謝ると、ベリーは、

「えっ、いや、こっちこそごめんなさい」

とんでもない事を言ってしまった、とばかりにベリーはペコペコと頭を下げる。

「僕が悪かったんだから、気にしないでいいよ、じゃあ、次の場所を消しにいこう、足元気をつけてね、ベリー」

焦りを隠しながら、笑いかけるヴィスパー。

「はいっ！」

素直に答えて、ベリーはヴィスパーの後をバケツを持ってついてくる。

「やっぱり、女の子は難しいな」

小声で呟き、ヴィスパーは頭を掻いて歩き出す。

近くに川があり、村人達の消火活動がしやすかった事もあり、火は森のかなりの部分を焼き払ったが、鎮火に向かっていた。

一方、村でも昨夜の戦闘の片付けが行われている。

遺体の片付けが主な仕事で遺体を台車に乗せて、森の焼け跡に埋める事になった。

台車には主に兵士達が乗せられている、村人にも戦死者が出ていたが、少ない人数だったので、その家族や親しい者が遺体は処理することになった。

兵士を乗せた台車にはスティングの遺体も混じっている。

帝国では豪傑で知られた彼も村の娘の短剣によって、あっさりと死んだ。

「……」

プリエルは台車に横たわるスティングを見つめる、昨日の今頃は自分が村娘に殺されるなど夢にも思わなかっただろう。

プリエル自身も昨日の今頃は自分が人を殺すとも、虫も殺さないような双子の姉がまさか帝国の領主を殺すとは夢にも考えなかったのだ。

「どうしたの」

プリエルの傍らにいつの間にかローゼンフェリアが立っていた。

「ローゼンフェリア……」

「後悔してる？」

ローゼンフェリアはプリエルに顔を上げた。

「後悔じゃないよ、このままじゃ私達は飢え死にだって有り得たし、何かをしないと生きていけなかったもの」

そして、プリエルはローゼンフェリアに向かって中腰になって笑いかけた。

「それにローゼンフェリアちゃんを助けるにはこうしないといけなかったしね」

「ありがと」
ローゼンフェリアは微笑みを見せた。

「大変だ！」
突然、広場の木の上を見張り台代わりに周りを見張っていた村人が大声を上げた。
「何っ？　どうしたの？」
プリエルとローゼンフェリアは木の上を見上げた。
「敵だ！　帝国の奴らが来てる」
木から落ちんばかりに見張り番の村人は慌てふためいている。
「早過ぎない？」
プリエルは近くに備え付けていた鐘を力いっぱい鳴らす、金属的な音が村全体に響き渡る。
「もう、来たのか？」
「備えなんて出来てないじゃないか」
「早く武器をとれ！」
村人達が口々に言いながら広場に集まってきた、鐘の音は森にも聞こえているとは思ったが、プリエルは近くの子供を呼び止め、森まで行って、ヴィスパー達に戻ってくるように、と伝令役を頼んだ。
「プリエル！」
メリエルが村長の家から出てきた、今後の事を協議していたのだろう。
「お姉ちゃん！」
「どれくらいの人数かはわかる？」
メリエルの問いに、プリエルは木の上の見張り番を見た。
「５０人位だと思う！」
目を凝らしながら見張りはメリエルに答えた。
「お姉ちゃん、私がみんなと行ってくるよ」

プリエルは剣を持って、メリエルに言った。
「プリエル……」
メリエルの困った表情はプリエルには予想済みであった。
「大丈夫、ヴィスパー君達が来るまでは無理しないからね、任せてよ」
「絶対よ、皆さん、お願いします」
プリエルが自分の胸元を叩きながら、無理をしない事を約束すると、メリエルはしぶしぶながら同意して、剣や槍を持った村の男達に頭を下げる。
「安心しな、メリエルちゃん、奴らにプリエルちゃんには指一本触れさせないからな」
村の男達はメリエルに豪快に笑った。

＊＊＊

「そろそろ来るね！」
村の西側の入口で、プリエル達３０人は待ち構えていた。
人数は相手より少ないがヴィスパー達が来れば、何とか五分五分になる。
それまで村への侵入を防げばいいのだ。
「それにしても帝国っていうのは対応が早いな」
「逃げられた兵士もまだ領主の城には帰ってないよなぁ？」
あまりの帝国の反撃の早さに、言っても仕方がない文句を言う村人達。

やがて馬の蹄の足音がゆっくりと聞こえ始め、見張り番の報告通り、約５０位の兵士が村の西側の入口に姿をあらわした。

馬に乗っているのは先頭に立つ一騎だけで後は歩兵の編成だ。
「止まりなさい」
先頭の騎兵が手を挙げて後続を制する。
金髪の少女だ。
年端はプリエルよりも1つ2つは年上なのかも知れない。
青い軍服に白いズボンに長めの黒いブーツがまるで乗馬にいく貴族の娘を思わせた。
腰には細身の剣。
肌は白く、身長はその歳の女性にしては高い、プリエルに頭半分くらいは上回りそうだ。
身体は全体的に細く引き締めた印象をうける。
顔を見れば、わずかに切れ長の瞳に鼻も高め、唇は薄い。
非常に顔立ちの整った美人だが、最も彼女を印象づける特徴があった。
「す、凄い髪」
思わずプリエルが驚いてしまった髪型である。
腰までの金髪なのだが、その後ろ髪を全てロールに巻いているのだ。
「金色の長いクロワッサンを後ろ頭に沢山下げてるみたいだ」
とは、プリエルの表現なのだが、あながち間違ってはいないだろう。
その金髪ロールの女性は馬を降り、武器を構えるプリエル達に腰に差した細身の剣を抜く気配もなく、歩み寄ってくる。
「私はネシア・ウェスティンといいますけど、総大将はどなたかしら?」
「総大将?」
先頭に立っていたプリエルが声を上げる。
どうやら帝国軍ではなさそうだ、戦いをする雰囲気ではない。
「そうですわよ、総大将に会いたいですわ」
ネシアと名乗った少女はプリエルの背後にいる武器を構えたまま

の村人をまるで、気にしていない。
「総大将ねぇ？」
腕を組むプリエルは村人達に振り返るが、村人達も互いに顔を見合わせ色々と話し始めた。
村長だろ？とか、メリエルじゃないか？とかヴィスパーが妥当だとか勝手に話を始める。
「ま、まさか！　あなたたちは総大将も決めずに帝国に叛旗を翻したと？」
ネシアはショックを受けた様でオーバーに声を張り上げた。
「えっ、もう知ってるの？　昨日の夜なのに？」
「当然ですわ、近隣の村などには詳しい事はともかく、知れ渡ってますわ」
「へぇ～」
口を開けて驚くプリエルの目の前にネシアは顔をよせてきた。
「総大将も決めてないなんて、あなた達は計画だとか予定とかは決めて行動しないのですか？」
ネシアの落胆したような口調と表情、プリエルはそれが癪にさわった。
「仕方ないでしょ！　昨日の夜にいきなり決まったんだから！」
頬を膨らませて、今度は自分から顔を近づけてネシアを睨むプリエル。
「そういうのを計画性がないというんですのよっ！」
ネシアも睨み返し、超至近距離の睨み合いが始まってしまった。
彼女に従って来ている兵士も、村人達もこうなると止めるか、見ているしかないが、賢明と言うか、自分可愛さというのかは判断に迷うが、皆が後者を選択しているようだ。

ついに至近距離の口喧嘩が始まった、いや、始まってしまった。
「大体、人の村に何をしに来たのよ？　その金色クロワッサンでも

見世物にしに来たのなら、かなり驚いてあげるよ」
いきなり反則の個人攻撃にはしるプリエルが、ネシアの闘志に火を点けた。
「なっ、何て事を！金色クロワッサン……このエレガントさが理解できないから山間の山猿ちゃんには見せたくありませんわ」
「や、山猿？」
「あら、違って？　女ならば髪の毛には気合いを入れてナンボですわ、そんな貧相なリボンひとつ位は今時、猿でもしてますわよ！」
ネシアはプリエルの後ろ髪を纏めた赤いリボンを指差した。
「きいいっ！　金色クロワッサンめ！　今、言ってはならない事を言ったぁー！」
「それはこちらの台詞ですわよ、山猿娘！」
両雄、遂に真正面からの殴り合い……になる前にそれぞれの仲間に両雄は羽交い締めにされて、注目のカードは中止された。

「お離し！」
「離してよ、もうしないからさ！」
口喧嘩が行き過ぎた事が理解できたのか、プリエルとネシアはそれぞれに仲間の制止を離して、再び至近距離に顔を寄せ合う。
なぜか、息がピッタリ合っている。
「まずはあなた達の無計画性は認めますわね？」
新たな口火はネシアが切り出した。
「だいたい計画なんてしないよ、こんな事、みんなが夢中で命を賭けただけだもん！」
「普通はしますわよ！　無計画で命を投げ出す事を始めるなんて、自分の命にも、仲間の命にも無責任ですわよ！」
ネシアの言葉にプリエルは再び感情が高まった。
無責任という言葉が事を決断した自分は勿論、メリエルやヴィスパー、ローゼンフェリアにまで突き付けられた気がしたからだ。

「みんなが限界まで我慢したんだよ！　昨日の朝まではこんな事するつもりなかったんだよ！」
　感情にまかせて叫ぶプリエル、皆がシンとなり、場所の雰囲気が変わる。
　プリエルは続ける。
「せっかく畑で作った物のほとんどを持っていかれても我慢してたんだよ！　何とか生きていれば、どうにかなるって、みんなで我慢してきたんだよ！」
「……」
　ネシアも言葉が出ない。
　プリエルの頬を涙が伝い始めた、ネシアが憎い訳ではない、自分達は限界まで我慢した事をネシアにわかってもらいたい、それだけが伝えたかった。
「あなた……」
　ネシアの表情には、すでに先ほどまでの厳しさはなく、何か哀れみすら感じられた。
「でも、でも森も燃やされて、人も殺されたら……もう何を頼って我慢すればいいのかわかんなかったんだよ、みんなは本当にこんな事はしたくなかった、ただ……ただ」
　感情が急に高ぶったプリエルは後が続かない。
「もう、いいですわ」
　今にも泣きじゃくりそうなプリエルをネシアは抱きしめた。
「あ……」
　ネシアの意外な行動にプリエルは思わず声を上げた、ネシアはプリエルの両肩に手を置いた。
「無責任なんて、ごめんなさい、謝りますわ」
「ネシアさん……」
　ネシアの表情はまるで泣いた娘をいたわる母親の様でにとても優

しい顔になっていた。
「わたくしも帝国に反発して、抵抗活動をしてますのよ、それで今回の事を聞き、駆け付けましたの」
ネシアはハンカチを出してプリエルの涙を拭く。
「あ、ありがとう」
「もう泣いてはいけませんわよ、わたくしは味方ですわよ！」
ネシアの言葉に村人達が沸き立った。
「ネシアさん！」
プリエルが太陽のような笑顔が浮かべると、ネシアは勝ち気な自信家お嬢様を絵に描いたような表情を見せた。
「さぁ、わたくしネシア・ウェスティンが駆け付けたからには安心なさい！　ええっと……」
「プリエル、私はプリエルだよ！ネシアさん」
「じゃあ、プリエル、わたくしを取りあえずは村長の所に案内なさい！」
「うん、わかった！」
プリエルは笑顔で歩き始める。

口喧嘩、罵り、涙に和解、そして笑顔と、2人の少女にまるで舞台のように観せられたネシアの兵と村人達は、村の中心に歩いて行く2人を呆然と見送った。

数分後に事情を知らずに援軍の村人を連れて、村の西側の入口に急行したヴィスパーだが、その場にネシアの兵と一緒に残った村人達に開口一番、
「ヴィスパー君、怒ったり、泣いたり、笑ったりで女の子は難しいねぇ」
と、切り出され、覚えのある彼は、

「はぁ、まったくです」
と、訳もわからずに同意するのだった。

第１１話に続く

第十一話「リーダー決定」

1

「会　見」

ネシアの来訪に村は沸き立った、皆が不安を覚える中での援軍である。

村長の家に招かれたネシアは村長、メリエル、プリエル、村の西側の入口から帰って来たヴィスパー、そしてローゼンフェリアに会う事になった。

「あら、双子でしたの？」

「そうだよ！」

メリエルを見て、驚きの顔を見せるネシアにプリエルが自慢げに答えた。

「はじめまして、メリエルといいます、宜しくお願いします」

「ネシア・ウェスティンですわ、以後お見知りおきをお願いしますわ」

メリエルが丁寧に頭をさげると、ネシアも深く頭を下げて、互いに挨拶を交わした。

そして、みんなと挨拶を済まし、ネシアは村長に上座を勧められて座る。

歓迎の意味でささやかながら料理も出た。

「ところでネシアさん、私達はこれからどうしたらいいのかな？」

ネシアとすっかり親しくなった感のあるプリエルが切り出すと、ネシアは顎に手を当てる。

「そうですわね、取りあえずは代表者をキッチリ決めるのが必要ですわ」

「みんなで会議する形じゃダメかな？」
プリエルの質問にネシアは首を横に振った。
「今はあらゆる事に迅速に対応する為にリーダーは必要ですわ、会議で決めるにしても最終判断をして、責任を負う人間はいなければいけませんわ」
「僕もそう思う」

即座にネシアに同意したヴィスパーにその場の視線が集中する。
緊張しつつも、ヴィスパーは続けた。
「領主の行方不明もあってこの国領内の帝国軍は混乱してるのは想像にたやすい、ここで足踏みはしたくない」
「そうですわね、言わば今がチャンスですわ」
ヴィスパーの同意を得たネシアは今度はヴィスパーの言葉に相づちをうつ。
「引き返しのつかない事は領主の死亡で確定したのだから、ここは迅速に行動したいと思います」
同意を促す為にみんなを見渡すヴィスパー。

「早く動く事とリーダーを決める事は関係あるの？」
プリエルが首をかしげてヴィスパーに疑問を投げかける。
「だって、例えばプリエルさんがベリー達と遊ぶ時だって、何をして遊ぶか、みんなで相談したら、色々やりたい遊びが出て迷うけれども、プリエルさんが決めていいなら、すぐに決めて遊べるだろ？」
適切かどうかは疑問だが例え話を挙げてヴィスパーは答える。
「なるほど、私が決めていいなら早く決まるね」
プリエルが納得するが、
「でも、遊んでもつまんなかったらプリエルのせいだし、プリエルが迷ったら結局は時間がかかるんだよ」

ローゼンフェリアがボソッと言った。
「それも、そうだね」
プリエルはうーんと唸りながら腕を組み、ネシアはほーう、といたげな感心した視線をローゼンフェリアに向けた。
「じゃあ、ローゼンフェリアちゃんはリーダーにはどんな方が向いてると思うのですか？　一つだけ必要な事を教えて下さる？」
ネシアがローゼンフェリアに質問する。

試そうとしてるのか？
わずか8歳の女の子を、ヴィスパーはネシアに視線を向けた。
ローゼンフェリアに何かを見出だしたのか、会議に口をはさんできた子供をやり込めてやろうかと考えているのかを判断するには、ネシアの人となりをまだヴィスパーは知らない。

「意志だよ」

ローゼンフェリアはほんの一瞬だけ美しい黒い瞳でネシアを見た後、即答してみせた。
「意志が1番だと思いますのね？」
「帝国と戦う強い意志がないとダメ」
「決断力とかよりも重要と思います？」
ネシアが突っ込んだ話を持ちかける、実のところネシアの初めの質問のヴィスパーの答えはこれであったのだ。
「思う」
ローゼンフェリアはまた即答したが、
「何でですのよ？　決断力が足りなければ、戦には勝てませんわよ」
ネシアは逃がさない、流石に8歳相手の議論ではないと感じたの

か、
「ちょっとネシアさん」
プリエルが止めようとしたが、ネシアはローゼンフェリアに視線を固定したまま、右手でプリエルを邪魔するなと言わんばかりに制した。

ローゼンフェリアはネシアとプリエルのやり取りを一瞥してから、
「だっていくら決断力があっても、帝国には負けると思うから」
いつもの抑揚のない声で答える。
「なっ」
ローゼンフェリアの答えにネシアは思わず口を開けてしまった。
驚いたのは、みんなが同じで、それぞれに様々なリアクションをしているが、ローゼンフェリアだけが囲炉裏にかけられた鍋の中のスープを見つめている。

「あなたはどういうつもりで言ってますのよ！　負けるつもりですの？」
「だから帝国は強いよ、いくら決断力があっても負けるよ」
ローゼンフェリアは繰り返すのが面倒臭いように言いながら、鍋のスープをまだ見つめている。
「でも、負けたら私達は困ってしまうから」
メリエルはローゼンフェリアの前に置いてある椀を取って、鍋からお玉でスープを注いで、ローゼンフェリアに差し出した。
椀を受け取り、口をつけるローゼンフェリア、まだ何かを言うだろうと、みんなが8歳の女の子の発言を待っている。
スープを数口飲んだローゼンフェリアは椀を置いて顔を上げた。
「帝国は強いよ、途中で絶対負ける……でも、そこで止めたら終わり、諦めないで最後まで戦って、勝てば勝ち」

誰に言う訳でもなく、ローゼンフェリアは言った。
「なるほど」
ヴィスパーは納得した様に、
「帝国には連戦連勝なんてとても出来ない、粘り強く戦って、最終的な勝利を目指すしかない、そういう事だよね」
とローゼンフェリアに自分の解釈が合っているか答え合わせを求めた。
「そうだよ」
ローゼンフェリアはヴィスパーに視線を向けた。
「つまり、それには決断力よりも粘り強い意志が必要という事ですわね」
ローゼンフェリアの言葉の意味を理解したネシアも頷く。
「私はそう思うよ」
そう答えると、再びスープを飲み始めるローゼンフェリア。
「なら、誰がリーダーをやればいいの？」
プリエルが周りを見渡したが、誰も答えない。
「ん～、ネシアさん」
しばしの沈黙の後、目があったネシアを指差すプリエル。
「ちょ、何を考えてますのよ！　わたくしは帝国とは正面据えて思いっきり戦いたいの、大将なんて後ろにいるものでしょ？　嫌ですわ！　断固お断りですわ」
慌ててネシアは手をブンブンと振った。
「じゃ、村長」
今度は目も合わせていないのにプリエルは村長を指差すが、村長は目をつぶって首を横に振った。

「無理だよ、私はどちらかと言えば、帝国との争いはここまで来ても、収まらないかと考えてる臆病者だよ、ローゼンフェリアちゃんの言う意志の足りない人間の典型的な例だよ」

当たり前だが、村長は帝国との争いは避けてきた立場である、ローゼンフェリア捜索の帝国軍を受け入れる時も村の食料が少ないのを承知で、帝国軍に配給しようとしていたし、広場で初めに起きた帝国軍兵士と村人との争いを仲裁したりしている。

「それに事が大きすぎて私にはとてもね」

首を降り続ける村長には流石にプリエルもこれ以上は言えずに、困った末に姉に視線を送るが、メリエルは何かを考え込むように下を向いている。

何か重苦しい雰囲気を察したプリエルはそのまま口をつぐんだ。

再び、部屋に沈黙の時間が訪れる。

「やれば？」

ローゼンフェリアの声が沈黙を破る。

その視線の先にはメリエルがいた。

「ローゼンフェリア」

メリエルは俯いていた顔を上げ、ローゼンフェリアの黒い瞳と視線を交わす。

「会って時間が経ってないけれども、メリエルがいいと思うよ」

「私は向いていないよ」

メリエルはローゼンフェリアと交わした視線を下を向いて切った。

「みんなはメリエルの言葉についてきたんだよ」

「あれは……」

「確かに私とヴィスパーが戦う意志を見せたから、メリエルの決心がついたのかも知れないけど……」

思わず目を見開くメリエル、反論しようとした言葉をローゼンフェリアにそのまま言われてしまった。
驚くメリエルを尻目にローゼンフェリアは続ける、
「メリエルの気持ちは本物でしょ？　仲間を殺されて、森を燃やされた、あなたが竹林で村人達に言った真の意志は嘘じゃないよね」
「……」
「村の人達は私やヴィスパーについてきたんじゃないよ、メリエルの言葉がきっかけだよ」
ローゼンフェリアは黙るメリエルを見る。
「お姉ちゃん」
メリエルが心配そうな眼差をするプリエル。
「メリエルさん」
何を言いたい訳ではないが、ヴィスパーもメリエルを見つめてしまう、ネシアや村長も同様である。

何度目かの沈黙。
一度、目を閉じたメリエルは十数秒して、目を開けて周りを見渡した。
反対する者はいないのを目線で確認するように、１人ずつ見た後で、メリエルは大きく息をはいて、
「わかりました、足りない所はみんな助けてくださいね」
そう言って微笑んだ。

メリエルがリーダーとなった事に村人の大半は賛成し、ネシアの一団が加わった事とあわせて、ささやかな祝いの席が村で行われる

事になった。
勿論、状況は逼迫しているので時間も短く切り上げる予定の宴である。

＊＊＊

「ローゼンフェリア」
広場で輪になって村人達とネシアの一団が繰り広げる宴を少し離れた木に寄り掛かり、見つめる少女にヴィスパーは声をかけた。
夕刻を過ぎて薄暗く、広場の中央に焚かれた火が辺りを照らしている。
「あ、ヴィスパー」
「ローゼンフェリアの推薦通りメリエルさんがリーダーになってくれたね」
ヴィスパーはローゼンフェリアの隣に座った。
「ヴィスパーがやりたかったの？」
広場の宴を見つめたままでローゼンフェリアに言われたヴィスパーは、
「違う、違う！　僕なんかよそ者だし、みんなが納得しないよ」
と、首を振った。
「ヴィスパーでもいいとは思うけど」
「あはは、ありがとう」
軽くローゼンフェリアの頭を撫でる、黒い瞳に美しい顔立ちの少女は微笑む。
「お世辞じゃないけどね」
８歳の少女相手に思わず赤くなりかけた顔面を2、３回横に振るヴィスパー。
「ローゼンフェリアこそ、相応しかったんじゃないのかな？」

ごまかす様にヴィスパーはローゼンフェリアに何となく言った。
「駄目だよ」
ローゼンフェリアは立ち上がり答える。
「ローゼンフェリア」
別に強い口調ではなかったが、ヴィスパーにはなぜか、それが強い拒絶に聞こえた。

「私のは私闘だから」

黒い瞳を持つ美しい少女の横顔は、広場で焚かれた炎の揺らめく明かりに照らされた。

第１２話に続く

第十二話「ネシアの戦場」

1

「メセアの攻防戦」

「怯む人は許さなくてよ！わたくしに続きなさい！」
細身の剣を振り上げたネシア・ウェスティンが激を飛ばして、小高い丘を駆け上がると、５０人の手勢も声を上げ、彼女に続く。

目標はメセア補給庫と呼ばれる帝国軍の食糧と弾薬の集積庫。
メリエル達の村に近く、小規模な補給庫の為に普段から警護兵も少ない事から手始めに食糧と武器を確保する狙いで襲撃してはどうかと、ヴィスパーがメリエルに提案し、賛同を得て決まった作戦である。
勿論、ヴィスパーのメセア補給庫の情報は、自分が主計部にいた時に得た情報で、それほど日数が経った訳でもないので、信頼出来る情報とネシアも作戦に賛同して、先鋒をかって出たのである。

見晴らしのいい草原の小高い丘の頂上にメセア補給庫はある、補給庫とは言っても高さは低いが防御壁もある砦と言っても間違えではない。
ヴィスパーの情報だと警護兵は３０人から５０人になるとの事で、総兵士数では勝るが、相手は軍事施設に閉じこもる、いわゆる攻城戦にあたり、その点を考えれば帝国軍が有利と言える。

ネシア率いる５０名は丘の中腹に達すると、補給庫からの矢での攻撃を受け足を止めていた。
木製の大盾や竹を束ねた防柵の陰に隠れて矢から身を守っている。
「ええい、欝陶しいですわね！　一気に駆け上がって取り付きますわよ、続きなさい！」
補給庫からしつこい程の矢が放たれるが、熟練していないらしく狙いが正確でない事を見極めたネシアは丘の中腹から一気に接近する強行手段を選択した。
途中で数人が矢に倒れるが、ネシアの一団は壁に近づいた。
壁が低い為に取り付かれては堪らないと、２０人以上の兵士が出撃してくる。

「こんな城で始めっから出撃してこないような輩には負けませんわよ！」
ネシアは愛用の細身の剣を抜き放ち、自ら相手に飛び込んでいく。
「いきますわよ！」
ネシアが敵中を駆けた瞬間に２人の帝国兵が血飛沫を上げて倒れた。
「何だ！？　この女？」
「剣捌きが見えない！」
ざわつく帝国兵、ネシアはニヤリと笑った。
「旋風剣のネシアの異名は伊達ではありませんことよ、帝国軍のみなさん！」
そう叫びつつ、ざわつく帝国兵達に俊敏な野生動物のように襲いかかる。
「きたぞっ！」
４人の帝国兵は剣を持って、待ち構えたのだが、剣を合わせる事も出来ずに切り伏せられ、丘の斜面を転げ落ちた。
「全然、見えない！」

「早過ぎるっ」
更に混乱に陥る帝国兵士達に、
「さぁ、パーティーの開幕ですわよ、わたくしと血飛沫のダンスを踊ってくれる方はどなたですの？」
返り血を浴びたネシアが不敵に笑いながら残る兵士達に近寄る。
「ば、化け物だっ！」
１人の帝国兵が補給庫へ逃げ出す、
「待てっ！」
「逃げるな」
「あんな奴と戦えるか！」
恐慌が伝染した様に帝国兵達は算を乱し逃げていく。
「おバカさんが！　篭城するならする、出撃するならするでハッキリすればよいものを、半端な事をするからですわ、追撃！」
手勢に命じると、主将の活躍に意気軒昂の部下達は逃亡する帝国兵達について補給庫に突入を始めた。

「つ、強すぎない？」
丘から離れた場所で１０人程の護衛で戦況を見守っていたメリエルの傍らにいたプリエルは思わず声を上げていた。
「そうだね、頼りになる人でよかった、あれなら味方の被害も少なくて済みそうだよね」
メリエルは興奮気味のプリエルに安堵の息を漏らした、初めての出撃で大損害や苦戦すれば、村人達の帝国と戦う気力、ローゼンフェリアの言う意志がくじけるかも知れなかったので、圧勝は高い望みかも知れないが、勝利はしたいと望んでいた。
それがネシアの強さが戦況を自分達に圧倒的な優勢にしている、少なくとも負けはなさそうだ。
「あっ、そうだ」
メリエルが何かを気付いた様に声を上げたので、

「どうしたんですか？」
ベリーがメリエルの側に駆け寄って来た。
「ベリー、ヴィスパー君に合図出してくれる？」
「え、もう終わりなんじゃないですか？」
意外そうな顔をしてみせた亜麻色の両三つ編みの少女にメリエルは優しく笑いかけた。
「いいのよ、ベリー、早くお願いね」
「わ、わかりました」
ベリーはパタパタと走っていき、旗を手に取って大きく振り出した。

「合図だ！」
中年の村人が振られた旗を指差して、ヴィスパーに知らせる。
「行きましょう！」
剣を振り上げ声を上げるヴィスパー。
ヴィスパーはネシア達が攻め込んだ反対側の丘の斜面に３０人の村人と待機していた。

ネシア達が苦戦した時の援軍として、戦闘正面の裏側にいたのである。
補給庫を挟んで反対の位置にいる訳だから、当然だが今の戦況はわからない。
「もう苦戦かよ？　クロワッサンのお嬢様は？」
「まぁ、貴族みたいな感じで戦いは無理だろ？」

口々に話しながら丘の斜面を駆け上がるヴィスパー以下３０人は覚悟していた矢の洗礼も全く受けずに、補給庫に取り付いた。

「慎重に壁に梯子をかけてください」
おかしさは感じつつも、ヴィスパーは防御壁に梯子をかけて補給庫内に侵入を村人に命じた。

数ヵ所で梯子がかけられてヴィスパーと村人は抵抗もなく補給庫内に突入を果たすと、そこには慌てた様子の数名の帝国兵がいた。
「かかれっ！」
ヴィスパーが叫ぶが、帝国兵は全員が武器を捨てて手を上げ始めた。
「な、何だよ？」
今にも飛びかかろうとしていた村人達は拍子抜けしてしまった。
「とにかく、今は捕虜を捕る余裕はないから、縛って置いて下さい」

ヴィスパーを先頭に恐る恐る帝国兵に近寄るが、帝国兵は全く抵抗する様子が見えず、恐怖に震えている兵士すらいる。
手早く帝国兵を縛り上げて、脇に固まって座らせておく。
「ヴィスパー、どうするんだよ？」
村人がヴィスパーに次の指示を仰ぐ、村人達もヴィスパーと同じく何か戸惑いを覚えている様だ。
ヴィスパー達が出撃するのはネシア達が苦戦した時の背後からの援軍としてだと思ったが、それにしては様子がおかしい。
「とにかく進みましょう」
判断はつかないが、ネシア達の事もある。
ヴィスパーと村人達は捕虜達を置いて先に進む、それほど広い建物でもないので時間はかからずに、ネシア達がどのような状態かはわかるだろう。
そして、補給庫の中庭に出たヴィスパー達は足を止め、ほぼ全員が自分の目を疑った。

「あら、随分と遅いおつきだこと……」

中庭の中央にネシアが立っていた。

しかし、そこにいるネシアはヴィスパーの知っている彼女の姿ではなかった。

一体、何人分の返り血を浴びたのか、わからないくらいに全身血まみれになっている。

多少は自分も傷を負っての出血もあるかも知れないが、ほとんど全てが帝国兵の返り血にヴィスパーは見えた。

ロールの金髪にまで返り血は飛んでいるが、彼女は気にしていない。

そして、ネシアの周りには３０以上の帝国兵が倒れていた。

「ネ、ネシアさん」

ヴィスパーがネシアに近づくと、

「ヴィスパー君、初めての本格戦闘が楽でよかったですわね」

血まみれのネシアは踵を返し部下の兵達に向かって歩き出そうとしたが、そこで身体のバランスを崩す様によろめいた。

「あっ」

ネシアの兵よりも近くにいたヴィスパーが、ネシアの身体を抱き留める。

身長はヴィスパーより高いネシアだが、抱き留めるとその身体は細くて、軽かった。
「ありがとうございますわ、でも大丈夫ですわよ」
気丈に答えて、
「最近の実戦不足が祟りましたわね」
苦笑いしながら、ゆっくりとヴィスパーから離れるネシア、だが強い疲労からか身体はまだふらつき気味である。

「本当に平気ですか」
本格的な実戦で先頭に立つ戦いがどれだけ身体に負担がかかるかを垣間見た感じのあるヴィスパーは再び彼女を支えようと駆け寄ったが、
「平気ですわよ！」
と、無理矢理に背筋を伸ばしてシャンと立つネシア。
「わかりました、ネシアさんは頑張り屋ですね」
健気なまでのネシアの強がりに、思わず苦笑するヴィスパー、ネシアは悔しそうに顔をしかめて、
「あなた達を楽させる為に無理したんですのよ！それを笑うなんて失礼な事ですわよ」
そう怒鳴りながら、部下達の元に早足で歩き出した。

プリエルの話によるとヴィスパーより、3歳年上だが、ネシアの子供な部分にヴィスパーは、ほほえましさを感じた。
「笑ってごめんなさい、ネシアさん、次も期待してますよ」
ネシアの後ろ姿に声をかけると、ネシアは笑顔で振り返った。
「勿論ですわ！　ヴィスパーさん、服の事はごめんなさい、でも笑った罰としてここの掃除は任せましたわ」
振り返ったネシアの顔は穏やかで可愛いらしかったのは間違いな

いが、もちろん血まみれだった。
「あ……」
よく見れば、そんなネシアを抱き留めた自分の服も血だらけになっていたし、中庭もネシア達に打ち倒された帝国兵が多数、倒れている様相だった。

こうして、メリエルがリーダーとなった帝国への反乱軍の初戦はネシア・ウェスティンのまさに獅子奮迅の大活躍により、死傷者わずか数名で、メセア補給庫を落とし、軍需物資を奪取した上に捕虜を２０人近く得る大勝利に終わったのであった。

第１３話に続く

第十三話「商人、村娘」

1

「黙殺される１５歳」

メセア補給庫攻防戦の勝利は小規模な戦いではあったが、近隣の村や街に勝利の報が知れ渡り、ある者は味方として陣営に加わる為に、またある者は帝国からの庇護を求める者がメリエル達のもとを訪れて、メセア補給庫での戦いの時に１００名の反乱軍はわずか３日で２０００を数えるまでに増大した。

メリエル達は今や増えた人数を自分達のいた村では収容不可能となり、メセア補給庫を本拠地として活動する事に決めた。

その一室でメリエル、ヴィスパー、ネシアの３人はアティナの地図を前に考え込んでいる。

現在はアルザード帝国領アティナであるが、地図はアティナ王国が存在していた頃の物だ。

しかし、まだ帝国領となって日が浅く、各地の地名も帝国領となっても改名はされていない為に、この地図でも十分に使える。

「次はステンシア城を攻撃すべきですわ！」

ネシアが現在地のメセアより西に行った所にあるステンシア城を地図で指を指した。

ステンシア城はアティナ王城の東の支城である。

メリエル達の村や現在地メセアはアティナ国内では東側の端に位置するので、やはり国のほぼ中央に位置するアティナ王城を目指すのならば、ステンシア城攻略は必須とも言える。

「どの位の兵隊がいると思う？　ヴィスパー君」
メリエルが心配そうな声でヴィスパーに話をふってきた。
「僕がアティナ王城にいた頃は……」
ヴィスパーは主計時代に補給していたステンシア城への毎月の軍需食料品輸送量から、大体の兵士数は当たりがついていた。
「そうですね、確か３０００はいたと思います」
「３０００……」
メリエルはその数字を聞くと顎に手を当てて、考え込み始めた。
「ヴィスパー君、アティナ王城には支城が他にもあるんだよね？」
「はい、北には北アティナ支城、南にはザクロイ支城がありますが、西にはありません」
「西にはないんだ？」
メリエルが顔を上げると、ヴィスパーは頷く。
「ええ……かってはありましたけど帝国が侵攻してきた時にとても激しい戦いがあって、城が廃墟になるまで戦い抜いたんです」
「そうなんだ」

帝国軍侵攻時の戦いだ。
メリエルは山間の村娘であった為に、帝国が侵攻してきた時の詳しい戦況などは情報を得てはいなかったのだろう。
一方のネシアを見ると、ヴィスパーはネシアがうつむいているのに気付く、
「ネシアさん」
「な、なんですのよ！」

ハッと我にかえった様にネシアは顔を上げた。
「疲れてないですか？」
もしかしたらメセア補給庫での激しい戦いの疲れが残っているかも知れない。
ヴィスパーは心配したが、
「そんな訳ありませんわ、そんな事よりもステンシア城の３０００は確実なんですの？」
ネシアはごまかすように少し強い口調でヴィスパーに質問をした。
「ステンシア城の兵士数については平時の時の人数ですから、メセア補給庫の戦いを見て動員されたり、王城から援軍が来たら、どうなるかまでは……」
「最低でも３０００という事ですわね」
「そうですね」

答えながらもヴィスパーはネシアの横顔を見て、体調を心配していた。
実際、人数は増えたが反乱軍はまさに烏合の衆の状態で、帝国の正規部隊と戦えば、装備と練度ともに劣る反乱軍に勝ち目はない。
その中でも唯一の希望がネシア・ウェスティンの武勇なのである。

王城の城下街でおこなわれる舞台劇の花形女優のような彼女が剣を持ち、血まみれになるまで帝国兵を斬りまくったのだから、反乱軍の人間たちのネシアに対する人気は今や凄い物があった。
もし、ネシアに何かあれば士気に関わるし、仲間としても無理をかけたくはなかった。
「こちらは２０００いても女性や子供、いわゆる老若男女合わせてですから、選抜して、戦えるのは１０００もいればいいかしら」
ネシアは難しい顔をして腕を組んでいたが、

「考えても仕方ないですわ、これから戦えそうな者を選んでから、部隊編成して訓練しますわ！次の作戦が決まったら知らせてくださいませ」

そう告げると部屋から早足で歩き去る。

「あんまり体調の事を言って、機嫌悪くしたかな？」

部屋の出口を見ながら、ヴィスパーは罰の悪そうに頭を掻いた。

「それは平気だと思うけど……ネシアさんがさっき何か元気が無くなったのは体調の事じゃない気がするんだよね」

メリエルはヴィスパーを安心させるように笑いかけながら、

「ふぅー」

と大きく息を吐いて、椅子に深く身体を沈めた。

その様子を見たヴィスパーは、

「メリエルさんも疲れてませんか？この3日はどんどん人が来てメリエルさんに会ってるから、寝れてませんよね？」

メリエルを気遣う。

「確かにそうだけど、仲間になりに来てる人に会わない訳にはいかないよ」

「律儀ですね、メリエルさんは」

「ありがとう、私はこんな事しか出来ないしね」

少し肩をすくめるメリエルの仕草がヴィスパーには可愛いらしく思える。

「ところでヴィスパー君はメセア補給庫の戦いはどうだった？」

「え、メセア補給庫の戦いですか？」

「そうだよ」

メリエルは頷く、ヴィスパーとしてはメリエルはリーダーであるが、あまり戦いに口を出してくるイメージがなかった為に意外に思った。

「あ、いやぁ、たいした事は出来ませんでした、ネシアさんがほと

んど片付けちゃいまして」

当然、リーダーのメリエルはネシアとネシアの一団が帝国兵のほとんどを撃破している事は知っているだろう、今更、ヴィスパーに聞く物事があるのかと正直に感じた。

「実戦は初めてだから、楽なのは助かったんですけどね」

そう言ったところでヴィスパーは何かに気付いたようにハッとなる。

「まさか、ネシアさんが苦戦してないのに僕たちに出撃させたのは？」

「何事も初めは楽な事から経験していった方がいいと思って、雰囲気みたいな物を感じるのも大切だと思うしね」

メリエルはヴィスパーに笑いかける。

「メリエルさん……」

「あんまり経験にはならなかったかな？」

メリエルは首をかしげて見せた。

「そんな事ないですよ、さっき言った様に、敵は撃破出来ませんでしたけど、補給庫内で捕虜もうまく得たし、メリエルさんのお陰で初陣を上手く飾れました、ちゃんとリーダーの仕事をしてくれてますね」

メリエルは戦などとは無縁だった筈なのに、経験のほとんどないヴィスパーや村人がどうすれば、初陣の戦場を心を折らず、無事に切り抜けられるかを気にしてくれていたのである。

ヴィスパーが素直に感謝の言葉を伝えると、メリエルは、

「いえ、いえ、こちらこそヴィスパー君には色々としてもらってい

るから」
優しい笑顔をヴィスパーに見せてくれる。
「大丈夫ですよ、メリエルさん、僕に出来る事は何でも言ってくださいね」
もちろん、ヴィスパーも笑顔で答えた。
「わかったわ、頼りにしてるね、ヴィスパー君」
微笑み合う2人。

「雰囲気いいね」
不意に部屋の入口から聞こえる抑揚のない声にやましい所もないのに、メリエルとヴィスパーはビクリと背筋を伸ばした。
「ロ、ローゼンフェリア！？」
そこには黒い瞳の少女が立っていた。

今日は長い黒髪を、それぞれ両肩辺りから紐で縛って前に垂らしている。
「こんにちは、ローゼンフェリアちゃん」
遠慮気味にメリエルが挨拶をすると、ローゼンフェリアは、
「こんにちは」
と、抑揚の無い口調で挨拶を返す。
しかし、ヴィスパーが軽く手を挙げて、
「や、やぁ、こんにちは、ローゼンフェリア、髪型変えたの？」
と、しどろもどろに切り出した言葉は全く黙殺。
「あ、あの……」
8歳の少女に思わぬ黙殺を受けた15歳の少年は、懲りずに何かを続けて喋ろうとしたが、
「メリエル、会いたいって人が来ているよ、ベリーが広間に連れて

来てる、旅の商人だって」
それを遮る様にローゼンフェリアはこの部屋に来た用事を一気に喋ると、くるりと回れ右をして、廊下を歩いて行ってしまった。

「あ、あああ……」
二の句が告げずに立ち尽くすヴィスパー。
メリエルは苦笑するしかなかった。

2
「商売人のルール」

メリエルがヴィスパーと一緒に広間に出ていくと、そこにはローゼンフェリア、プリエル、ベリーと見知らぬ男が立っていた。
ローゼンフェリアの言う旅の商人であろう。

男は年齢が３０代半ばは越えていそうで、恰幅よく太っているが、服装は少しは上物であるにしてもメリエル達とあまり変わらない布の服にズボンの様相であった。

「あなたがメリエル様ですか！　私はポチョムキンといいます」
メリエルに駆け寄ると、手を取って足元にひざまづく。
「おお、美しいと聞いてはおりましたが、なんと美しい方だ！　近年に見た女性の中でもあなたは最高に美しい！」
オーバーな大声でメリエルを褒めたたえるポチョムキンに、
「あ、ありがとうございます、ポチョムキンさん、でも、もう少し

周りを見た方がいいと思います」
メリエルは思わず笑みを浮かべ応じる。
「いや、いや、まずメリエル様、まずはこれをお納めくださいませ」
ポチョムキンは取ったメリエルの右手に何やらを置いた。
それは大きく、そして艶やかに光る宝石であった。
「ポチョムキンさん？」
「お納めください」
ポチョムキンは更に深々と頭を下げた。
「は……はぁ、でも私はこんな高価そうな物を貰ういわれはありません」
ポチョムキンの勢いに押されながらも、メリエルは宝石を返そうとした。
しかし、ポチョムキンも両手でメリエルの手を握って、宝石を離させない。
「まぁまぁ、お待ちを、帝国皇帝は旗揚げ時に数人の商人から支援を受けて旗揚げし、親密な関係は今だ続いています」
フェンリルの旗揚げ時の話をしだしたポチョムキンにヴィスパーが、
「それは知ってますけど、宝石とそれは何が関係あるんですか？」
と口を挟む、ポチョムキンはメリエルに宝石を握らせた両手を離す。
「順番に話しましょう、帝国皇帝は帝国の数人の大商人と関係が深く、帝国の占領地域での商売権益はほとんど彼らに占められてしまって、元来、その地で商売をしていた我々は大損害を受けておるの

です、帝国商人を過剰なまでに優遇され、我々には罰則と言ってもよい措置がとられます」

「なるほどね、フェンリルは帝国商人にすごい贔屓するんだね」

プリエルが腕を組んでウンウンと頷くと、ポチョムキンは、

「そうでございます、そこで我々は自分の生活の為にあなた方を支援したいと考えるのです」

と、立ち上がり、頭を深々と下げた。

「で、でも宝石は？」

今まで持った事もないような宝石を持て余すメリエル。

「今は戦乱の世に現金は信用出来ません、その宝石はサラセナ産の最高品質の物ですよ、軍資金の足しにしてください」

ポチョムキンは笑顔を見せた、サラセナというのはブルーヴェルト大陸の最北にある半島国家で極寒の土地だが、地下資源が豊かで宝石などが特産品になっている。

「でも、見返りが返せる当てはありませんよ」

メリエルは宝石をポチョムキンに返すが、

「メリエル様、私は見返りが欲しいなんて言ってないですよ」

ポチョムキンは首を振って拒否をした。

それを聞いたヴィスパーが、

「どういう事ですか？　それは仮に私達が帝国をアティナから追い返しても、あなた達に商売上の優遇措置などをしなくていいと言う意味でいいのですか？」

そう質問する、支援を盾に勝利後の商売上の優遇措置を要求してくると思っていた。

「それでは帝国商人と同じではないですか」

だが、ポチョムキンは声を上げて笑う。

「私達は帝国商人達が我々と同じルールで商いをしてくるのなら、あなたがたにお願いする事は何も無いのですよ、しかし、彼らは帝国皇帝に繋がり、到底我々が勝負にならないルールでの商いをしてきます、それでは黙っていられない」

「そういう事ですか」

メリエルは理解して微笑む。

「私達が勝利する事によって、平等にすれば良いのでしょう」

「それが望みです」

我が意を得たりと、頭を下げるポチョムキン。

「わかりました、ポチョムキンさん、あなたがたの支援をありがたく受けます、これからも頼りにしてもいいですか？」

返そうとしていた宝石を手元に持ち、メリエルがポチョムキン問うと、。

「はい、採算が合う間は頑張らして頂きます」

ポチョムキンは強く頷いたのであった。

＊＊＊

夕刻、メリエルは支援を約束してくれたポチョムキンをもてなす夕食会を開く。

そこでポチョムキンは自分と同様に商売を帝国商人に横取りされ、困っている商人仲間が支援に乗り出すつもりがある事。

そして、もう一つ興味を引く話をした。

「メリエル様はサグレフ将軍を知っていますか？」

上座でメリエルの酒の酌を受けて、上機嫌な声でポチョムキンは言った。

「サグレフ……？」
聞き覚えのない名前にメリエルが首を傾げると、
「アティナ王国の元総参謀長ですわね」
近くの席にいたネシアが代わりに答える。
「そうです、帝国が侵攻してきた時は高齢と病気で引退しておられたのですが、知識深い名参謀長として名高かったのです」
ネシアとメリエルにそう言ってポチョムキンは注がれた酒を飲んだ。

「そのサグレフ将軍がどうかなさいまして？」
ネシアの問いにポチョムキンは、
「最近は病気も快復に向かい、サディア山に隠遁生活をしているらしいのです」
と、メリエルとネシアに酒に酔った上機嫌な顔で笑って再び酒をあおる。
その言葉にメリエルはネシアと互いに僅かにだが、鋭く視線を合わせた。

その2人の視界には夕食の席の隅で必死にローゼンフェリアの機嫌直しに必死なヴィスパーは当然、入ってこなかった。

第14話に続く

第十四話「メリエル、頬杖をつく」

1

「プリエルへの指令」

「16個ある、でも3個はかじられてる」
数個のランプで照らされた倉庫にローゼンフェリアの声が響く。
「やっぱり鼠がいるんだ、捕まえないとな」
ヴィスパーはインク壷にペンを軽く付けてから、サラサラとローゼンフェリアに数えてもらった在庫数を食料品の在庫リストに書き込んで、舌打ちを漏らした。
「鼠か……」
隅をかじられた軍需用食料の袋をローゼンフェリアは見つめた。
「まぁ、仕方ないよ、主計の僕にとっては昔から敵だったんだから慣れっこさ、さぁ次を数えてくれない？」
ヴィスパーが促すと、
「わかった」
と、ローゼンフェリアは次の木箱に入った乾燥食料を数え始めた。

メセア補給庫は小規模ではあるが、現在の反乱軍を満たすだけの物資は十分にあった。
問題はそれを上手く管理できるかにかかり、当然の如く王城主計部の役人であったヴィスパーに管理はほぼ一任されている。
今日はその在庫をチェックしているのだが、昨晩のポチョムキンをまねいての夕食で何とか機嫌を直してくれたローゼンフェリアが手伝いを志願してくれているという状況だ。

ローゼンフェリアは何段かに積まれて、ヴィスパーの背丈を遥かに越えた木箱にも器用に登る。
「気をつけてね」
少しハラハラしつつもヴィスパーはローゼンフェリアを見上げて、落ちてきたら対処できる様にすぐ下に移動するが、
「大丈夫」
と、まるで気にしないで木箱から木箱を飛んで渡ったりもしている。
「お姫様なのに」
聞こえる声で言ったつもりではなかったが、
「木登りはよくやったよ、飽きたら皇女宮の屋根とかにも登った」
ローゼンフェリアは聞こえていたらしく、返事を返してきた。
「そうなの？　よく女官が許してくれたね、そんな事しなくても他に遊び道具は沢山あったんじゃないの？」
「まぁね」
ヴィスパーが見上げたまま聞くと、ローゼンフェリアは高い位置からその身を空中に踊らせる。
「ローゼンフェリア！」
驚いたヴィスパーは声を上げたが、当の本人は何とも無く着地して、
「でも自分の遊びくらいは自分で見つけてたよ」
そう言って笑った。

＊＊＊

1人の少女が山道を登っていく。
栗色のお尻くらいまである長い髪を背中辺りでリボンで束ねた可

愛いらしい顔をした少女は、背中に上等そうな剣を差している。
「よし、随分と早く来ているよね」
プリエルは地図をポシェットから取り出して辺りと確認する。
「あの峠が見えるから……合ってるね、サディア山はあれだね」
誰に言うまでもないなく、声に出しながら、うなづいて足どり軽く歩き出す。

サディア山はメセア補給庫から南に歩いて、半日程の場所にある標高１０００メートル位の山で一面木々が茂る特に特長のない山である。
プリエルは昨晩の夕食後にメリエルに呼び出され、サディア山にいるアティナ王国元総参謀長のサグレフ将軍に反乱軍に協力してもらえる様に伝えてくれないかと、頼まれた。
実はメリエルは相手が自分の年齢の遥かに年上な事や現役時の階級を考えれば、自分から行きたかったが、いつ帝国の逆襲があるか定かでない状況では、おいそれと自分が本拠地を空ける事が出来ないとプリエルに説明した。
「私がいけないなら、プリエルが１番いいかなと思ったのだけど」
面倒そうな用事だとメリエル本人も思っているらしく、申し訳なさそうに告げてきたので、プリエルは腕まくりをして、
「そうだねっ！お姉ちゃんがいけないなら、私が行くしかないよね」
それを気にさせない為に少しオーバーに答え引き受けた。
そして、メリエルがサグレフに宛てた手紙を携えて、今日の早朝にメセア補給庫を出たのであった。
「もう、着いちゃったよ」
プリエルは昼に着く予定だったが、途中で走ったりした為に、かなり早く目的地のサディア山に着いてしまった。
しかし、サディア山に入る前にやらなければいけない事がプリエルにはあり、時間的な余裕などはあまりなかった。

サディア山の麓にはプリエル達の村と同程度の規模の村があり、そこでサグレフの住んでいる場所の情報を得れなければ、プリエルは山中をサグレフの住む場所を探して走り回る事になってしまうからである。

村に入ると、その様子はプリエル達の村と何も変わりがない、土壁に藁葺きの家、遊び回る子供の恰好もやっている遊びも似たような物だ。

プリエルもよく村の子供達とは遊んでいるので、知らない子供達でも楽しそうにしているのをみるとつい笑みがこぼれる。

「お姉ちゃん、誰？」

「どこからきたー？」

好奇心旺盛な子供達はプリエルを見逃さずに、周りに何人も集まってきた。

背中に差した剣にも興味を持っている様子だ。

「大人の人いるかな？　お父さんかお母さんでいいんだけど……」

プリエルが男の子に尋ねると、

「あっち！　連れて行ってやるよ」

元気よく男の子はプリエルの手を引いて走り出し、周りの子供達も一緒に続いて歩き出した。

＊＊＊

「村の人の話だと、こっちの方らしいんだけどな？」

プリエルは山の中をキョロキョロと見回す。

村の人間の話ではサグレフは滅多に麓の村に降りてくる事はなく、ほぼ自給自足をしているらしく、山の中の家についても山菜採りに入った人間が見たという話でだいたいの場所がわかった位のものである。

「何で、こんな山で隠居とかするかな?」

プリエルは近くの木を見上げると、

「よっ!」

掛け声をかけて木に足を挟んで登り始めた。

かなりの高さまで登ると周囲を見渡して、

「あったぁ!」

と、声を上げた。

山の斜面に造られた家は土壁、藁葺きのプリエル達の家とは違い、木造であったが質素であった。

「すいませーん」

プリエルは引き戸を軽く叩いて、呼びかけたが、全く反応はない。

「サグレフさーん」

家の周りを歩いてみるが、やはり家の中には人の気配がなさそうだ。

「出かけたか、それとも引っ越したかな?」

プリエルはその場に座って息をついた、出かけたのなら待てばいいが、引っ越したのなら、ここまでの旅は徒労に終わると考えると、流石のプリエルも今日の強行軍には疲れを覚えてしまった。

「もう、サグレフさんはどこに行ったのよ!」

プリエルが山に響くような声で叫ぶと、

「死んだよ」

と、どこからか返事が聞こえた。

2

「足をくずす2人」

昼過ぎにネシアがメリエルの部屋を訪ねると、入口の戸は開いていた。
中の様子を見ると、メリエルは足を崩して座りながら、執務用の低い机に頬杖をつき、何やら書類を読んでいた。

「メリエルさん、ちょっと宜しくて？」
ネシアが声をかけると、
「うわああっ！」
メリエルは声を上げて跳び上がり、ちょこんと正座して、
「へ、平気ですよ、ネ、ネシアさん！　な、何か用事ですか？」
ビックリした様子でネシアに向き直った。
「まぁ、楽にしてくださいませ、正座は疲れるでしょうに」
薄笑いを浮かべながら、ネシアは部屋に入ってメリエルの横に座る。
「あ、いや……」
うつむくメリエル、
「私も正座は苦手ですのよ、足を崩しますわよ、さぁメリエルさんも」
ネシアは足を崩した。
「すいません、正座は平気ですが、今日は午前中にポチョムキンさんが早速、知り合いの方を数人、連れて来られて、ずっと正座して会っていたもので」
メリエルも苦笑しながら、足を崩した。

「リーダーも大変ですわね、きちんと支援は約束して頂けましたの？」
「いえ、いえ、今回はとりあえずは挨拶ですね、やはり皆さん苦しいですから、ポチョムキンさんみたいにいきなり支援は無理なんだと思います」
「様子見ですわね」
ネシアが腕を組むと、
「そうですね、ステンシア城の攻防の行方が見極め所でしょうね」
「なるほど、そういうしたたかな所が商人は好きになれませんわ」
ため息をつくネシア、メリエルは読んでいた書類をトントンと揃えて、
「私達の戦いとはまた別の商人の戦いですからね、帝国にはつけないけど、味方する相手は選びたいのでしょうね」
笑って見せるメリエルにネシアは、
「お人よしですわね」
と、少しだけ呆れ顔をしてみせた。

「仕方ないですよ、今は何かを選べる立場ではないですからね」
そう言って書類をしまいながら、
「ところでネシアさんは私に用事があったんじゃ？」
メリエルが首を傾げたので、ネシアは何かを思い出した様に、
「そうですわ、兵力の事ですけど、やっぱり１０００位ですわ」
とメリエルに告げる。
「わかりました、１５００位いても、武器は足りるとヴィスパー君が言っていたから、ネシアさんは訓練をお願いします」
メリエルは頭をさげた。
「それは私の手勢を教官代わりにして、わたくしが統括しますわ」

ネシアは頷いて、
「ところでプリエルさんは今頃、サディア山に着いてますわね？」
と、話題を変えた。

「そうですね、大丈夫ですよ、プリエルには気をつける様に指令を出してありますから」
「メリエルさん、指令なんて、慣れない言葉を使いますのね」
「……」
ネシアの指摘にメリエルは思わず黙り込む。
「無理しなくても、いいじゃありませんのよ？妹は妹ですわよ」
「ネシアさん……」
メリエルは思わず、ネシアを見つめた。

「大変ですっ！」
メリエルがネシアに何かを言いかけた時、ベリーが慌てて、メリエルの部屋に走り込んで来た。
「慌てるんじゃありませんわよ！何ですの？」
ネシアに叱られたベリーは息を切らしながら、
「ご、ごめんなさい、でも帝国軍が来ましたっ！２０００位いるそうです！」
と、声を上げたのだった。

第１５話に続く

第十五話「帝国軍来襲」

1

「眼鏡の少女」

「近くまで来てるの？」
メリエルが立ち上がると、
「は、はい！ステンシア城から出てきたらしくて、街道から進んで、ここまですでに2時間程の距離まで迫っています」
ベリーは緊張した声で素早く報告する。
ネシアも立ち上がる。
「迎え撃つ準備をしますわよ！　戦える者は集合させてくださいませ！」
先程までとは打って変わった鋭い声で、ベリーに頼むというより、命令に近い口調で言った。
「わかりました」
ベリーは部屋を駆け足で走り去った。

「ネシアさん、どう戦えばいいでしょう？」
ネシアはメリエルに聞かれると、
「とにかく、訓練もろくにやっていない軍が野戦を挑むのは無謀ですわね」
腕を組みながら答える。
「じゃあ、篭城ですか？」
「篭城も面白くないですわね、いくら閉じこもっても状況が良くなる見込みがないですからね」
「……」

表情からネシアにも名案がない事を悟ったメリエルが黙り込んだ時、
「メリエルさん、ネシアさん！」
ヴィスパーが部屋にやってきた、ローゼンフェリアも一緒だ。
「ヴィスパー君」
メリエルはヴィスパーに駆け寄る。
「メリエルさん、相手の数はどれくらいですか？」
「２０００くらい、今どうしようかネシアさんと考えてるの」
「２０００ですか」
ヴィスパーがネシアに視線を移すが、ネシアは腕を組んで目をつぶっている。
「ネシアさん、相手は今日中に仕掛けてくると思いますか？」
ヴィスパーに聞かれたネシアは片目を開け、
「到着が夕刻に近そうだから、陣地を構築して兵を休ませて明日の早朝の攻撃開始が妥当な線ですわ」
腕を組んだまま答えた。
「そうですか」
「おそらく……でも、」
ヴィスパーにネシアは舌打ちして、親指の爪を噛みながら、
「わかってはいましたが、もう少し時間が欲しかったですわね、領主不在の癖に動きが早いです、正直にあと少しは時間があると思っていた自分に腹が立ちますわよ」
と、いらつき気味に答える。

「ネシアさん、それは私がいけない事だから」
メリエルがネシアの肩に手を置く。
「自分を責めないで、ヴィスパー君も来たし、みんなで考えようよ」
「メリエルさん……」
見つめるネシアにメリエルが、

「きっと打開策があると思うから」
ゆっくりと強く答えると、
「それにね、メリエルさん、ネシアさん」
ヴィスパーは傍らのローゼンフェリアの頭を撫でながら、
「凄く他力本願で怒られるかも知れないけど、明日なら何とかなるかも知れないですよ」
そう言って笑うのだった。

＊＊＊

「誰っ！？」
プリエルは素早く立ち上がって、背中に差した剣に手をかけた。
夕暮れまでには、まだ時間のある山の中に緊張の時間が流れる。
プリエルは家の壁を背にして、周囲を見渡すが人影は見えない。
「死んだって何よ？私はサグレフ将軍に会いに来ただけよ」
プリエルは剣を抜いて、叫んだ。

「だから死んだよ」

奥の木の影から、竹籠を脇に抱えた少女が現れた。　黒髪のボブカット、勝ち気そうな緑の瞳には眼鏡がかけられている。
「な、何者よ」
プリエルは思わず、叫んだが黒髪ボブカットの眼鏡少女は呆れ声で、
「それはこっちの台詞だわ、人の家の前でそんな物騒な物持って、何者よ？ってそっちが一体、何者よ？」

そう言って、肩をすくめる。
言われてしまえば、竹籠を持っているだけの少女に、剣を構えている自分がひどく滑稽な気がしてきたプリエルは、
「いや、これは……ごめんね」
素直に謝って、背中に剣をしまった。
「サグレフ将軍に用事があるのはわかったけど残念ね、将軍は死んだわ」
少女はそう言うと、プリエルの横を通り過ぎて、家の戸を開けた。
「でも、何で？」
プリエルがおそるおそる聞くと、少女は振り返り、
「2週間前に、帝国軍に殺されたわよ、奴らは将軍がアティナ王国の復興を狙って隠遁していると冤罪を突き付けてね」
眼鏡の向こうから鋭い視線をプリエルの瞳にぶつけてきた。

「そうなんだ……こんな山まで来てまで、そんな事をしていたんだ」
プリエルは力が抜けた様にうなだれた。
「ところで何しに将軍に会いに来たのよ」
うなだれたプリエルを覗き込む少女、近くに寄って見れば、プリエルよりも少し年下に見える。
「うん、私達、実はメセアの近くの村で反乱を起こして、帝国軍と戦っているんだけど、どうしてもサグレフ将軍の力が借りたかったんだ」

うつむいて答えるプリエル、ショックを受けているのはサグレフ将軍が帝国軍に殺された事があるのだが、メリエル達がこの知らせを聞いたら、落胆するだろうと考えた部分も大きい。
「なるほどね、素人集団が将軍の豊富な経験を頼った訳だ」
「そりゃ、まぁ、そうだけど……」

確かに文句は言えないが、面と向かって素人集団と言われるのはプリエルには、面白くなかった。

「入りなよ」
少女はそう言いながら、家に入る。
「え？！あ……うん」
特に断る理由もないし、正直、少し休みたかったプリエルは少女について中に入る。
「って！　何これ？」
家に入るなり、プリエルは声を上げてしまった。
外見は山の斜面に建った地味な家だったが、家の中はある意味、派手だった。

本の山、崩れた本の山、意味のわからない地図や何やら書き留めたメモが散乱している。
それが部屋の約８割を占めて、残りの２割も強引にそれらを退かした空間に囲炉裏や生活に必要な物がある。
「キレイ好きなお姉ちゃんが見たら発狂しそうだ」
プリエルは周りを見渡しながら呟いた。
「将軍は本が好きでね、様々な書物を求めて止まなかったよ」
「そうなんだ、あっ、そういえば！　私はプリエル、１６歳だよ、あなたは？」
プリエルが忘れていた自己紹介をすると、
「私はカナミ、１４歳」
カナミと自己紹介をした少女は眼鏡をクイッと右手の中指で上げた。
黒髪のボブカットに勝ち気な緑色の瞳の少女は口元が少し笑っていた。

「じゃ、カナミは将軍のお孫さんかな？」
「違うわ」
カナミは首を振って、
「私は弟子みたいなものかしらね、詳しい事はあまり言いたくないわ」
と言いながら、カナミは地図を出して来た。
アティナ国内の地図だ。
「領主が殺されて、メセア補給庫が落ちたのは知ってるわよ」
地図上のメセア補給庫を指でトントン叩く。
「山の中でよく知ってるね、カナミ」
顔を上げたプリエルに、
「情報は常に最新を集める、麓の村に来る隊商からやちょっと遠いけど、ステンシア城まで馬で行ったりもするわよ」
「そうなんだ？」
「当たり前よ、特にあなた達の反乱が起こってからは頻繁に情報を取っているわよ、興味があったから」
「へぇー、凄いね」
「凄いね、じゃないわよ！　あなたの仲間はこのままじゃ皆さん仲良く打ち首決定よ！」
「えっ、何で？　仲間もたくさん増えたし、メセア補給庫には食料もあって防御壁があるし、そしてネシアさんも凄く強いんだよ！」

プリエルが反論したが、カナミは全く話にならないと言わんばかりに、
「いかにも素人丸出しね、たくさん増えても所詮は訓練もほとんど受けてない素人の集まり、帝国軍はきちんと訓練を受けた兵士が何倍もいるわよ、食料だって永久にある訳でもなく、メセア補給庫の

防御力の低さは自分達で証明して見せたばかりでしょ？　最後のネシアさんがどれだけ強いか知らないけど、あなた達の仲間にだけ都合よく強い人がいるなんて考えない事ね」

「……」

カナミに早口で再反論を受けて、プリエルは黙ってしまう。

「おそらく、帝国軍は1番距離の近いステンシア城から出撃すれば、明日にでもメセアに着くわよ、領主を討った後の相手の混乱した時間の使い方がなってないから」

カナミはそう言い放つと、何やら荷物をまとめ始めている。

「何してんの？」

プリエルが尋ねるとカナミは呆れ声で、

「あ？　何を言ってるのよ、師匠の仇は弟子が討つに決まってるでしょ？　将軍に代わり、あなた達に協力する事にするわ、いいわね！」

決定事項の様に自分で決めたカナミは、まるで逆らったら許さないと言わんばかりの目でプリエルを睨んで見せた。

「えっ、本当？協力してくれるのはいいけど、戦った事なんて無いよね？」

驚きの表情を浮かべるプリエル。

「賊やら何やらの討伐には、何回かはついていってるわよ」

老境ながら経験豊富な元軍人を連れて来いと言われた自分が、14歳の眼鏡娘を連れて来たらメリエルはどんな顔をするだろう。

不安に襲われたプリエルだが、起こってしまった事は変えられない、プリエルは気を取り直した。

「サグレフ将軍の事は残念だけど、誰も仲間を連れて帰れないよりはみんな喜んでくれるよね！」

ニッコリ笑ったプリエルにカナミも少しだけ口元を緩めて見せた。

「馬でいくわよ！」

背負い袋を背負い、早足で歩き出したカナミ。
プリエルは本だらけの周りを見て、
「ここはどうするの？」
と、カナミに聞く。
「ここからは卒業よ、いよいよ勉強期間は終わって、実践の開始だわ！」
カナミはぴしゃりと自分の両頬を手の平で叩いた。

メセア補給庫の見張り台にメリエル達は登って、東に目を凝らしていた。
「メリエルさん、来ました！帝国軍です」
ベリーが地平線を指差して、メリエルの袖を震える左手で引いた。
「ええ、来たわね」
メリエルは息を呑む。
「随分ゆっくりと余裕で来ましたわね」
ネシアは不敵に笑う、予想した時刻通り、帝国軍の到着は夕刻であった。
「来たね、ローゼンフェリア」
ヴィスパーがローゼンフェリアを見ると、彼女の黒い瞳は地平線に浮かび上がる２０００の帝国軍を見つめていた。

第１６話に続く

第十六話「プリエル帰還」

1

「2人の援軍」

「舌かまないでよ！」
「わ、わはった」
カナミにすがりついたプリエルは馬上の思わぬ振動に舌を巻いて答えた。
鹿毛の馬は激しく首を上下させながら走っていて、カナミは手綱を引きながら必死になだめて走らせている。
「機嫌、悪そうだね」
プリエルがカナミの背中越しに馬の様子を伺うと、
「そりゃあ、馬だって生き物だから、いつもは1人乗ってる所に2人乗ったら機嫌損ねるわよ」
そう答えて、しばらくカナミは手綱を引いたり緩めたりと忙しそうにしていたが、思うようにいかないのか、文句を言い始める。
「ちょっと、プリエル！　あんた体重が重いんじゃないの？　コイツすごい嫌がってるみたいだけど」
「なっ！」

何時の時代でも、体重の事は女性の関心事であり、それはプリエルにも例外ではなかった。
ましてプリエルは身体のラインは姉よりもスマートで引き締まっている事を常日頃から、姉相手に自慢していたので、体重が重いと言われるのは心外だ。
「違うよ！　カナミが重いんだよ、私より年下の癖にこんなに余計

なお肉つけてるんだから！」
　プリエルはカナミの胸に両手をまわした。
「うわぁぁぁっ、ちょっとバカ過ぎ！　あんた何すんのよ！」
　予想外のプリエルの行動にカナミは手綱の操作を忘れて、思わず大声を上げたが、
「む、お姉ちゃんより大きいかも、ホントに１４歳なの？　信じらんない、デカ過ぎ……」
　加害者のプリエルは妙な事に感心している。
「こらっ、馬鹿プリエル！　あんた、落馬させるわよ、迷惑かけないでよっ！　胸から手を離しなさいよ！」
「むー、双子に生まれて、同じご飯食べてきたのに悔しい……その上、年下の眼鏡にまで」
　カナミの叫びを無視して、プリエルはぶつぶつと何かにひがみ始めた。
「あんた、人が迷惑してんの無視してるでしょ！」
　カナミは更に必死に訴えるが、１番に迷惑を受けているのは２人に乗られた上に、ワイワイ騒がれている鹿毛の馬だった。

「２０００人って言うのは凄い人なんですね」
　メセア補給庫の見張り台から、周囲を包囲した帝国軍を見て、びっくりしてベリーは呟いた。
　帝国軍は小高い丘に建つ補給庫を完全に包囲しながら、東西南北の各方向に陣地を築き始めている。
「２０００で驚いちゃ駄目だよ、ベリー」
　ヴィスパーも緊張はしているが、なるべくはそれを隠しながらベリーと話す。
「そうなんですか？　帝国軍は全体でどれくらいいるんですか？」
　亜麻色の両三つ編みの少女は少し怯えた表情で、ヴィスパーを見

上げた。
「えっとね、確か公称で１２０万人の軍隊が帝国軍として……」
「１２０万!?　そんなに?そんなの絶対にかないっこないじゃないですか!」
よっぽど、ビックリしたのかベリーはヴィスパーにすがりつく様にして、声を上げた。
「あ、いや……公称って言うのは、帝国軍が相手国を脅す為にわざわざ多めに言ってる物で大体は８０万くらい……」

フォローをしてみせるつもりで続けて言ったが、フォローにならずにベリーは強く首を振った。
「１２０人が８０人に減ったのなら、結果も変わりますけど、１２０万が８０万じゃ結果は同じです!」
「……」
何だか薮蛇を突いただけになったヴィスパーは頭を掻きながら、対処に苦慮してしまう。
「ふぅー」
息を吐いて、故意でないにしろ自分の言葉で、ベリーを怯えさせてしまった責任を取る事にした。

「あのね、ベリー、僕はそういう事じゃないと思う」
ヴィスパーはすがりついたベリーの両肩に手を置いて、笑いかけた。
「え?」
ベリーは１２０万がよっぽど効いたのか、やや瞳に涙を溜めている。
「いいかい?　ベリー、僕らは帝国の言い分を聞いていたら生きて

いけない、辛うじて生きられたとしても、それは心の底から笑って楽しめる人生じゃない、それはわかる？」

「はい……でも」

「そうだね、帝国軍は思うより、ずっと強くて、すごい軍隊だよ」

遮ったヴィスパーの言葉にベリーはゆっくり静かに頷く。

ヴィスパーは補給庫を包囲する帝国軍に目を向けた、野営テント等が着々と出来上がっている。

「でもね、相手が多くても少なくても、自分の生きる事を邪魔する相手とは戦うべきだと、僕は思う」

「ヴィスパーさん」

「確かに生きる為に、屈服するのも一つの手段だし、生き方だから文句はないけれどね」

ヴィスパーは再び帝国軍からベリーに目を移し、

「でも相手が多いから逆らわない、相手が少ないなら逆らうっていう生き方は僕はしたくないな」

そう言ってベリーの頭を撫でると、ベリーは何かをわかってくれた様で、

「そうですね、今さら帝国軍の数に怯えるなんて、おかしいですよね、私達はあのままでは次の収穫まで生きられなかったから……いきなり取り乱して、本当にごめんなさい」

ペコリと頭を下げながら、可愛いらしい笑顔を向けてきたので、ヴィスパーも安心したが、

「でも、撫でなくてもいいって、前にも言いましたよね」

声のトーンを変えて、付け加えられたベリーの言葉には、一瞬の冷や汗を禁じ得なかった。

＊＊＊

「プリエルちゃんが帰ってきた」
村の子供に呼ばれたメリエルは、パタパタと慌ててプリエルを出迎えた。
「お姉ちゃん！」
駆け寄るメリエルにプリエルはニッコリと笑う。
プリエルの傍らには黒髪のボブカットの眼鏡の少女が立っている。
「あれ？　プリエル、こちらは？」
メリエルはカナミに軽く会釈をしてから、プリエルに尋ねるが、
「私はカナミ、サグレフ将軍の弟子よ、将軍は帝国に殺されたわ、私はその仇を討つ意味もあっての代わりにきたわ、よろしく」
カナミが自分で答えて、メリエルに右手を差し出して来た。

メリエルはカナミの自己紹介を聞いて、少しだけ間があったが、
「私こそよろしくお願いします、この反乱軍のリーダーをさせてもらっています、メリエルです、わかると思いますが、プリエルの双子の姉です」
そう言って、カナミと握手を交わした。
「でもサグレフ将軍が、残念ですね」
メリエルとしては、名前しか知らない人物だが、帝国に殺されたと聞いて、自然とうつむき顔を見せる。
カナミの自己紹介の後に間が空いてしまったのも、ショックあっての沈黙であった。
それはカナミも十分に察した様で首を横に振りながら、
「別にあなた達のせいじゃないわ、帝国が勝手に将軍を怖れて、冤罪をでっちあげたのよ」
と、気を使った。
「だから私にもあなた達に協力させてほしいの、それに私は将軍とずっと一緒にいて教えを受けた弟子だからね、絶対に役に立ってみ

せるわ」
　カナミは自分の願いをメリエル告げた。
「ありがとう、味方になってくれるのなら、大歓迎です、将軍からの教えを活かしてくれる事を期待しますね」
　その願いには、メリエルは間を置かずに微笑みを見せた。

　それから数分ほど経った頃に、
「プリエルが帰って来た？　あの包囲の中でどうやって来たんですの」
　慌ただしく、ネシアが姿を現した。
「ネシアさん！」
　プリエルは嬉しそうにネシアに駆け寄るが、カナミはネシアを見るなり、眼鏡を右手の中指で直しながら言った。

「すげぇ、髪型」

「な、ななっ！　なんですの？　あなたは？　私のエレガントな髪型を！」
　ネシアはズカズカとカナミの目の前に迫る。
　ネシアは平均的な少女の身長であるプリエルより頭半分くらい背が高く、逆にカナミはプリエルより背が少し低い為に、２人にはかなりの身長差があり、カナミが見上げる恰好になる。
「失礼な！　大体、プリエルはサグレフ将軍に協力を頼みに行ったのでしょう？　何でこんなオカッパ小娘と一緒なんですのよ」
「小娘で悪かったわね、これでも将軍の唯一の弟子よ、代わりに来たの！　文句あるかしら？　金髪クロワッサン」

お互い様の悪口を言い合うと、火花が見えそうな睨み合いを始める2人。
「はい、はい！　お互い初対面で喧嘩しない」
そこでプリエルが2人の間に割って入り、
「将軍は帝国軍に殺されてしまったの、カナミは将軍の仇を討つ為に、私達の仲間になってくれたんだよ」
そう言って、プリエルは自身の右手で、ネシアの右手を取った。
続いて、
「ネシアさんは剣の達人だよ、ここから帝国軍を追い出す時の戦いなんて、すごかったんだよ」
ニコニコしながら、もう一方のカナミの右手を左手で取る。
「はい、今日から仲間なんだから握手、握手」
2人の手を取ったプリエルは、半ば強引だが握手させてしまう。
「そうです、今は帝国軍と戦う為に力を合わせてがんばりましょう」

そこにタイミングよくメリエルもそこに手を合わせると、双子姉妹の息の合った強引さに、しばしカナミとネシアは呆然としたが、やがてカナミは苦笑して、ネシアを見た。
「しょうがないわね、今は帝国軍をどうにかしないとね、ごめんなさい、とにかくよろしく、ネシアさん」
姉妹に割り込まれ、カナミに素直に言われると、ネシアもこのまま喧嘩を続ける訳にもいかずに、
「わかればよろしいのですわよ！わたくしもあなたが名高い将軍の弟子というならば、多少は期待してあげてもよろしくてよ」
いきなりの仲直りが恥ずかしいのか、少し顔を赤らめながら言った。
「なんか、かわいいわね」

カナミがボソッと呟くと、ネシアはさらに顔を真っ赤にして、何かを抗議しようとしたが、そこにタイミングの悪いというか、運の悪い少年が幼い少女を連れて現れた。

「プリエルさん、帰ってきたんですね！何をしてるんですか？　あれっ、ネシアさん、顔が耳まで真っ赤ですよ？　何だか、可愛いらしいですね」

少年は何気ない言葉のつもりだったが、

「んーっ！」

瞬間、声にならない声を上げたネシアの左手が運の悪い少年の頬に向かって放たれた。

「僕なんかしました？」

濡れた布を頬にあてながらヴィスパーが嘆く。

「デリカシーがないのが悪いんですのよ！」

腕を組んでそっぽを向くネシア。

そんなネシアにローゼンフェリアは横目を向けている。

「な、なんですのよ！」

視線に気がつき、大人げなくローゼンフェリアに食ってかかるかかるが、フイと横を向かれてしまう。

「な、な……」

「まぁ、まぁ」

メリエルはローゼンフェリアに無視をされて、ア然とするネシアをたしなめてから、戦況を示した図面をみんなで囲んだ机の上に置いて見せた。

少し大きめの机をメリエル、プリエル、ヴィスパー、ネシア、カナミ、ローゼンフェリアの6人で立ちながら囲んでいる。
「何か、いい作戦をみんなで考えましょう！　明日の朝には帝国軍の攻撃があるからね」
少し和み過ぎた部屋の雰囲気を引き締める様にメリエルは周りを見渡す。
「力まなくても平気だってば、馬鹿には負けないわ、安心して」
カナミはメリエルに自信満々の表情で不敵に笑いかける。
「いい作戦があるの？」
図面を不安げに眺めていたプリエルの表情がパッと明るくなり、カナミを期待を込めて見つめた。
「もちろん」
カナミは不敵な笑みを浮かべ、ヴィスパーに視線を向けた。
「ちょっとヴィスパー君」
「何かな？」
実はヴィスパーはカナミより年上なのだから、君づけはおかしいが、あまり気にせずに返事をした。
「相手は野営陣地を作り終えたか見た？」
「それはさっき見たよ、もうそろそろ終わると思うけど……」

ヴィスパーの答えにカナミは眼鏡のズレを右手の中指で直す。
「じゃあ帝国軍なら、あれが来る頃ね、では始めますか！」
カナミは両手で自分の頬をぴしゃりと叩いた。

第17話に続く

第十七話「欺瞞作戦」

1
「降伏勧告」

「何かくるぞ！」

見張り台に立つ男が声を上げると、一気に補給庫内の空気に緊張が走る。

「何かって、なんですのよ？　報告は正確にお願いしますわよ！」

ネシアが見張り台を見上げながら怒鳴ると、

「馬車だ、飾り立てた馬車に兵士が１０人程！」

見張りは慌てて、目を凝らしながら声を上げた。

「来たって事かな？」

近くにいたプリエルがネシアに駆け寄って来る。

「ええ、とりあえずはカナミの言う通りに来ましたわ、帝国軍恒例の降伏勧告の使者が」

ネシアは答えて踵を返して歩き出す。

「作戦開始ですわね」

「皇帝フェンリルはここまでの大陸制覇の過程において、何度も交渉で相手を屈服させる手段を使っているのは有名な話」

中庭に出たカナミはそう言いながら、メリエルの後ろに立った。

「ええ……」

メリエルは中庭の隅に咲いている花を中腰になって見ている。

「そこで帝国での戦争功績の基準は、１万の敵を撃破するより、戦わずして無血降伏させる方が功績を認められると言われているわ」

「カナミちゃん、それはさっきも聞いたよ」

メリエルはカナミに振り返った。
「ええ、でもメリエルさんにはもう一度、説明しておこうと思って、乗り気でないような気がしてね」
「乗り気とか乗り気じゃないとかより、上手くいくか不安があっただけ」
メリエルはそう言って、しゃがみ込み足元の花を見始めた。
「相手を欺くには相手の欲しい物を目の前まで持ってきてあげて、相手の手の平にのせて上げる寸前で自分の目的の行動を実行してしまう」
「……」
カナミの言葉にメリエルは何も答えず、花を眺め続けている。
しかし、カナミは意に介さず、話を続ける。
「それを実行したのはメリエルさんだと思うけど？前回はあなたを、今回は降伏を、相手が何を欲しがっているかをわかれば、後は作戦次第だね」
「成功すれば、これからも人を欺き続けるのかな」
メリエルは足元の花を指先で触っている。
「多分ね、メリエルさんが選んだ道はそういう道で、後戻りは出来ない事はわかってると思うけど」
「そうだね、じゃあ、そろそろ行こうか」
メリエルは立ち上がって歩き出そうとしたが、カナミは逆にその場にしゃがみ込んだ。
「カナミちゃん？」
カナミは足元の花を先程のメリエルの様に指で触って、
「あー、このタンポポは血で花びらが真っ赤になってる、ネシアさんがここを制圧した時の名残って奴なのかな？」
メリエルの事といい、ネシアの事といい、カナミは反乱軍のここまでの経緯を誰かに詳しく聞いた様だ。
メリエルはしゃがみ込むカナミが触っているタンポポを見て、
「血だらけになっちゃって……ただ咲いていたかっただけなのにね」

と、呟く。
「そうだろうね……よっと！」
かけ声をかけて、カナミは立ち上がり、
「でもね、メリエルさん、このタンポポは赤く色がついても、決してタンポポである事をやめる訳ではないわ」
そう言いながら、カナミはメリエルに少し勝ち気の勝る笑顔を向けた。

＊＊＊

「私は帝国軍の軍使、ホルダー」
そう名乗った男には明らかに反乱軍に対する威圧が含まれている。
３０代半ばの男は細身で頼りなさげな印象はあるが、それを忘れさせる程に態度は大きかった。
そして、その態度を更に助長させたのは他でもない、反乱軍のリーダーであるメリエルであった。

「ご使者様、ご苦労様でございます」
メリエルは普段着ている麻の服を着替え、着物姿でホルダーを土下座して出迎えたのだ。
もちろん、メリエルだけでなく、出迎えた応接間にいた数十人の者が全員土下座している。
「今日は私が何をしにきたかはわかっているな」
「は、はい！　重々に承知しております、ご使者様！」
メリエルは土下座したままで、怯えた声で答える。
「よろしい、これ以上の反抗なくば、慈悲深い皇帝陛下も反乱軍の全てを死刑とはいうまいよ！」

ホルダーは満足そうに答えた。
「ありがとうございます、使者様に、それについてお話したい事もございます」
メリエルは頭を下げたまま、哀願するような声を上げた。
「ほう？」
「お待ち下さい」
そこにカナミが土下座した状態から顔を上げ、
「ご使者様に話を聞いていただくのに、このままでは失礼に当たります」
と、メリエルに向かって注意を促す。
「ご使者様はお時間がございましょうか？」
メリエルが顔を上げると機嫌の良さそうな顔でホルダーは、
「よし、お前達の態度に免じて、話を聞こう」
うん、うん、と自分の寛大さに満足した様に言った。

酒の席が用意され、満足げなホルダーはメリエルの酌を受けて、更にその機嫌を良くしていた。
「それでは、領主の殺害はその者が暴走しての事なのだな」
そう言いながら、メリエルに注がれた酒を飲み干して見せた。
「はい、私達は領主様に話を聞いて頂きかっただけなのです、しかし、その者が領主様を殺害してしまったのです」
メリエルはそう嘆く様に言うと、袖で目頭を押さえる。
「そうか、このメセア補給庫を襲撃したのは？」
「村で領主様を殺害したその者がリーダーシップをとって、ここを襲撃しましたが、2日前にようやく私達がその者の隙をみて殺害し、ここにいるのです」
「なるほどな、その領主を殺害し、補給庫襲撃を指揮した者の名は？」

ホルダーに聞かれたメリエルは傍らに控えていたベリーに目配せすると、それを受けてベリーはホルダーに頭を下げて、廊下に出ていく。

「ウィル・ヴィスパーという反逆罪で手配を受けている罪人です、この席でホルダー様が宜しければ、討った首をお見せします」

ホルダーに向き直ったメリエルがそう言うと、ベリーがちょうど人の頭よりも少し大きめ位の壺を持って帰って来た。

「一応、塩漬にしてますので、顔の判断はつくと思いますし、顔がわかれば、罪状が確かかの確認も容易ではないでしょうか？」

ベリーが壺の上を塞いでいる蓋をとろうとするが、

「わかった、その壺はこちらで預かって十分に検証しよう」

と、手を振ってベリーを止め、メリエルに、

「そこまでの話はわかったが、なぜお前達は私達が来るまで補給庫を制圧しままでいたのか？　すぐに明け渡すのなら補給庫にいる必要がないだろう？」

少し訝しげな表情を見せて聞いてくる。

しかし、メリエルは気を止める様子もなく、

「それは失礼ながら言わせていただけるなら、私達も帝国軍が軍使をこちらに派遣して頂けるか、不安だったのです。まだ、仲間の中には問答無用で討たれる事に恐怖を覚える者がいましたから、とりあえずはこの補給庫にいようと決めたのです」

そう答えてから、ホルダーに笑いかける。

「でもホルダー様のような方が来てくれて心配が杞憂でした、私や村長が罪を免れるとは思いませんが、全員死罪だけは帝国のお慈悲におすがりしたいです」

「うむ、降伏するならば反逆罪の上に領主を殺害した罪人を討った事で罪は軽減されるだろう」

ホルダーはそう言いながら、メリエルの耳に顔を近づけた。

「私の今回の件の使者としての功績が認められれば、そなたも無罪にできる、その時は私の元で面倒をみてやろう」

「ええ……可愛がって下さい」
ホルダーの潜めた声にメリエルは意味ありげに微笑む。
「ホルダー様のお約束があれば、これから皆を説得して明日の朝には……また、お会いできると」
「うむ、うむ、では私は司令官に報告に陣に帰るとしようか」
ホルダーは笑いながら、腰を上げた。

その様子を末席から、眼鏡ごしに鋭い視線を送るカナミにはホルダーは全く気付いていなかった。
カナミは笑いながらメリエルと別れるホルダーを逐一、観察してから自らも不敵な笑いを浮かべた。
「かかった」

「ではホルダー様、宜しくお願いします」
「わかっているよ」
頭を下げるメリエルに上機嫌なホルダーが護衛の兵士と共に席を立ち去ろうした時、
「待って下さい」
抑揚のない少女の声がそれを止めた。
そこには黒い髪に黒い瞳の幼くも、絶世の美しさの花の蕾を持つ少女が立っていた。
もちろん、ローゼンフェリアであった。
「何だい？　お嬢さん」
上機嫌のホルダーはローゼンフェリアに中腰になり頭を撫でようとしたが、
「……忘れ物です」
ローゼンフェリアはホルダーの目の前に反逆罪の上に、領主殺し

のウィル・ヴィスパーの首の入った壷を差し出したのだった。

「駄目ではありませんのよ！　勝手に出ては」

ネシアは奥の部屋に戻って来たローゼンフェリアを腕を組んで叱り付けた。

「そうだよ、出ちゃ駄目って言われたのに！」

プリエルも一緒にローゼンフェリアに向かって、膨れて見せた。

ネシアがホルダーの前に出なかったのは、もし軍使の護衛の中にメセア補給庫の戦闘で逃げ延びた者が混じっていたら、ネシアは目立ちすぎたので、降伏が不自然に見えると言うカナミの意見である。

プリエルの方はメリエルの双子と事で目立ってしまうし、不自然な振る舞いをしそうだと、自分から辞退した。

ローゼンフェリアはメリエルが皆にはその容姿に目を付けられたら、と説明したが、実は違う理由があった。

彼女は帝国の正式な行事に参列する、いわゆるお披露目は、まだな為に沢山の人間には皇帝に娘がいる事はわかっていても、姿を知っているのはほんの一部の高い位の人間である。

しかし、万が一にも使者が、帝国皇帝の娘であるローゼンフェリアの容姿を知っていたら、という不安でメリエルがローゼンフェリアに表に出ない様に言った事をプリエルは知っている。

仲間の内でもローゼンフェリアの真の出自を知っているのはメリエル、プリエル、そして……

「僕の顔を知っている人なんていませんよ、出して下さいよ」

なぜか独房に入れられて隠された上に、反逆罪に領主殺しの濡れ衣まで着せられてしまった少年ウィル・ヴィスパーであった。
「ねぇ、ローゼンフェリア、隠れてればいいだけの僕が何で独房に入れられてるんだろう？」
遊ばれている事を観念したが、ヴィスパーは格子ごしにローゼンフェリアに苦笑いを浮かべた。
ローゼンフェリアはチラッと振り返った。
「人が見てないと思って、ベリーの頭を撫でたの刑」
ローゼンフェリアの言葉にヴィスパーは一瞬、体温が大幅に下がった。

第１８話に続く

第十八話「夜襲決戦」

1

「夜　襲」

「使者の手柄か、俺達も暴れたかったぜ」
「いいじゃねぇか、戦わないで済んだんだ」
「戦っても農民反乱軍に負ける訳ねぇだろ！」
使者ホルダーの一団が降伏交渉に成功し、反乱軍が明日の朝には降伏、朝には占領しているメセア補給庫を出て来ると聞いて、帝国軍の兵士達は口々に語り合いながら、野営用のテントに入っていく。

討伐軍司令官のステンシア城主のルーツ少将は使者に出したホルダーの報告を聞いて、完全に浮かれていた。
「全く、あの女たらしの顔を見なくて良くなった上に、それを殺した奴は既に討たれ、さらに反乱軍も無血降伏とは……」
ルーツ少将の言う女たらしとはスティングの事である、言動からもわかる通り、ルーツ少将はアティナ領主スティングがはっきり言えば、大嫌いであった。
まず、見た目からスティングとルーツでは対極的である。
スティングは若く、体格も大柄で、まさに武将といった風貌であったが、ルーツは体格も貧弱、５０代の年齢を迎え、頭髪は禿げ上がり、まるで学者のような容姿だ。
性格にしても、何事にも豪放なスティングに対して、ルーツは神経質で細かい所があった。
このような場合は相性が良いか、悪いかは極端な場合が多いだろうが、２人の場合は後者であった。

しかし、いがみ合うにはルーツはスティングに対しては圧倒的な不利だった。

スティングは大将という帝国軍においては皇帝、国家元帥、上級大将についでの高い地位にいる為に、少将のルーツは頭が上がらない。

そこでスティングは何かと気が合わないルーツを馬鹿にする。

ルーツはやれ力が足りない、学者肌で戦場に出れば、役にも立たない、と言われ続けたのである。

言い返したくとも、軍隊での階級差は聖域とも言っていい侵される可からずの部分で、自分より遥かに若いスティングに罵倒を何度も受けたのだ。

それなら実績で相手を黙らせたいのだが、ルーツは軍人としての実績をある国の後方任務の正確さであげてきた。

その国が帝国に支配されると帝国の軍人になり、そこで前線にまわされる事となった為、軍人としての年数に対して前線指揮官としての経験が圧倒的に少なかったのだ。

そして、ルーツはキャリアを傷つける様な敗北を喫してしまう。

アティナ侵攻作戦の終盤、アティナ王城の東の支城の攻撃作戦で、アティナ王国の一武将の前に散々な敗北をしてしまったのだ。

結局、東の支城は帝国軍アティナ方面軍のほぼ全力を注ぎ込み、他方面部隊の支援を受けて、やっと陥落させる事が出来たが、スティングは初戦で散々な敗北をしたルーツを激しく叱責したのだ。

その影響でアティナ王国平定後には、やや閑職と言ってもよい、アティナ王城の支城であるステンシア城の城主の任務を悶々として務めてきていたのだ。

そんなルーツなだけに、前線での武勲に飢えていた、そこに降っ

て沸いたスティングを殺した相手の戦わずしての降伏。
「俺も運が向いてきた」
ルーツはホルダーと酒を交わしながら、思わず笑いを浮かべた。

「相手はたいした事ないわ、たった2倍の兵を連れてきた位で調子に乗って、篭城する私達を包囲して、勝手にその気になって、あんなおバカな使者をよこす様な司令官、素人よりタチが悪いわ」
カナミは、メリエルを始め主だったメンバーに向かって、不敵に笑った。
「そう言えば、ネシアは私達が何で包囲の中にやって来れたか不思議がっていたわね？」
「ええ……」
話を振られたネシアが頷くと、
「ただ単に、後方から薄そうな陣と陣の間を全力で駆け抜けただけよ」
アッサリとした様子で答えるカナミ。
「奴らの包囲なんて、ザルだわ、大体にして２０００なんて半端な兵を出す時点でお里が知れるし、その上で密度の薄い包囲は敷くとか、あー、もう馬鹿は大嫌い！」
「そこまで言うなら、もちろん勝てる作戦がありますのよね？　軍師様」
ネシアがカナミに視線を送る。
「もちろん、素敵なおまけも付けてあげるわよ」
カナミは笑い、眼鏡を右手の中指でクイッと上げて見せた。

やがて、夜が訪れ、日付も変わろうとしていた。

「んっ……深酒が過ぎた様だな」
ホルダーは何かの物音に気付いて、身体をベッドから起こしたが、周りはまだ真っ暗闇である。
頭が痛む……もちろん、深酒のせいだ。
上官のルーツも相当飲んでいたから、同じ様な状態だろう。
「誰かいないか？」
今は聞こえないが、先程の物音が気になるので、見張りの兵士を呼ぶ。

「はーい」

テントが開いて、現れたのは、ルーツの見知らぬ細身の剣を持った金髪ロールの女だった。

「暴れまくりますわよ」
返り血を浴び、ホルダーのテントから出てきたネシアが声を上げると、ネシアの手勢と村人達は声を上げて兵士達のテントに突撃を開始した。

「プリエルさん達も反対側の敵陣に突撃を開始しているみたいです」
メセア補給庫の見張り台からベリーが闇夜に目を凝らしながら、カナミに報告してくる。
「全く警戒なしか……助かるけど、戦場を知らな過ぎるわね」
カナミはつぶやく、もちろん帝国軍も全員が寝ていた訳でもなく、見張りは立てていたが、使者の降伏交渉の成功の報告や相手が敵国

の正規軍ではない、村人達の反乱軍という事で、その見張りも人数も少なく、何よりも油断しすぎていた。

「何なんだ?」

ルーツ少将はホルダーとは違い、異変に気付くとすぐに剣を持って、自分の司令官用テントを飛び出したが……結果はこちらもあまり芳しくはなかった。

ルーツが見たのは、松明の炎に照らし出されたのは、本来は司令官を護る為の衛兵達の倒れる姿。

そこには、返り血だらけの金髪ロールの少女だけが立っていた。

「司令官ですわね、私はネシア・ウェスティン、その首を頂きますわ」

妙な程に落ち着いたネシアの声はまるで舞踏会のダンスの誘いの様だったが、ルーツの上げた声は悲鳴であった。

「ウェスティン!? な、何でなんだぁ、う、う、嘘に決まってる!」

睨まれたルーツは全身から冷や汗を吹き出し、ネシアには意味のわからない言葉を言いながら、その場を逃れようと踵を返す。

もちろん、それを逃がすネシアではない。

ネシアは異常に恐怖して逃げるルーツの肩口に剣を突き刺し、情けない声を上げ転んだルーツの鼻先に剣を突き付けた。

「大人しくしないと本当に殺しますわよ」

ネシアは呆れ顔でルーツを見下ろした。

司令官を失い、帝国軍は四方で奇襲を受けて混乱の極みに達した。

散々に討たれた帝国軍は何とか立て直した部隊が反撃を開始するが、その時にはすでに反乱軍はカナミの引き揚げの合図により、補

給庫に引き揚げており、逆に同士討ちを始めてしまう始末。
そこを見計らいカナミは再びネシアに出撃を命じて、更に帝国軍の被害を増大させた。
ルーツ少将の率いる反乱軍討伐部隊は一晩の間に司令官は捕縛され、半数近くの兵を失い、散り散りに逃亡する者、降伏する者を合わせ、ほぼ壊滅したのだった。

まだ暗い中で見張り台にカナミとヴィスパーは立っていた。
「さてと、ヴィスパー君」
カナミはヴィスパーに不敵な笑いを浮かべた。
どうだ、と言わんばかりの表情だ。
「計画通りよ、作戦の仕上げは任せたわよ」
「うん、わかったよ」
ヴィスパーは見張り台の階段から降りていくが、なぜか、すぐに戻って来る。
「何かあった？　早く行きなさいよ」
カナミが振り返ると、ヴィスパーはニッコリと笑う。
「言い忘れていたけど、来てくれて本当にありがとう、正直にカナミちゃんが一日遅かったらと思うとゾッとするよ」
「バカ、勝った気でいるんじゃないわよ、まだ上手く運ぶかはわからないんだからね！」
カナミは頬を少し赤らめながら、ヴィスパーに怒鳴り付けた。

＊＊＊

ステンシア城は城の規模としては大きい訳でもなく中規模であるが、アティナ王城を守る西の支城として考えれば、十分な大きさを

持っている。
メセア補給庫などとは比べ物にならず、四方を囲う城壁は高く、小規模ながら城下街もある。
城主のルーツ少将の出撃を受けて１０００の兵で留守を守っていたリオス大佐は、予想外と言えば、予想外だが、心配をしてはいた報告にため息をついた。

「攻城戦に突入するも、帰趨は定まらず、膠着の恐れあり、至急、全軍での援軍を乞う」

命令書は苦戦に少しうろたえた様子で、急いで書かれて字が乱れている。
「仕方ないな、膠着というなら決着をつけに行かなければな」
命令書をもってきた傷ついた兵士に治療を施す様に看護兵に命令すると、リオスは至急、残った全軍に出撃を命じるが、
「お言葉を失礼します、リオス大佐」
少し控えめ様な口調でリオスに頭を下げたのは、リキュエール・ダンセル少尉である。
緑色の髪を長く右側にサイドテールにしているのが目立つ、配属をされたばかりのまだ少女のあどけなさの残る将校。
「どうした、ダンセル少尉？」
「いえ、兵士を全軍出撃というのは危険があるのではないでしょうか？」
リキュエールはまるで言いたくなかった事を言わされている子供みたいに小さな声で意見を言った。
「それはだな」
大佐は紳士的な笑顔をリキュエールに向け、
「味方の状況が膠着の時に中途半端な数の兵を送り込んでも、埋没

して意味をなさないからだよ、一気に全力を挙げて戦線を変えなければ、泥沼はなかなかに抜けられないよ」

まるで優しい軍事教官の様に言った。

「しかし、城の守りはどうなさいますか」

リキュエールが更に質問をすると、

「敵の勢力を見て判断したまえ、２０００のルーツ少将の部隊相手にメセア補給庫のような場所で支えるには、相手は全軍で戦っていると見るのが当然だろう？　敵にはステンシア城にやってくる余裕はないよ」

リオスはリキュエールの不安を消すように、笑いかける。

「わ、わかりました、話を聞いていただいてありがとうございました」

これ以上の意見具申はリオスに対して、失礼であるし、リオスの説明に、ある程度は納得したリキュエールは頭を下げた。

至急に準備を整えたリオスが１０００の兵を率いて、ステンシア城を出撃したのは夜明けとほぼ同時であった。

確かに、リオス大佐の判断は的確で説得力があったが、残念ながら、判断の元にした情報が大幅に間違っていたのだ。

怪我を負った使者はネシアの部下の変装であり、もちろん命令書はネシアが捕まえたルーツに無理矢理書かせた偽物である。

「何となく、嫌な感じがするんだよな」
ステンシア城が少しずつ遠くなる馬上で、緑のサイドテールの髪を揺らしながら、リキュエール少尉は眉をしかめていた。

第19話に続く

第十九話「ネシアとリキュエール」

1

「メセアへの進軍」

リキュエールの不安をよそにリオス率いる帝国軍１０００の部隊はステンシア城を離れ、メセア補給庫を目指していた。
ステンシア城からメセア補給庫までは軍隊の通常行軍ならば半日はかかるが、リオスは全軍に速度を上げさせていたので、早朝にステンシア城を出撃した部隊は昼頃にはメセア補給庫の近くまで行軍をしていた。

「リキュエール少尉、あれを見てください」
部下がリキュエールに呼びかけた、指差した草原の片隅に一人の兵士が倒れている。
「あれは味方の兵士じゃないかな？」
リキュエールは馬を降りると、部下に手綱を持たせて隊列を離れて、走って倒れている兵士に駆け寄った。

倒れていたのは少年兵だった。
「大丈夫？」
自分と年端の変わらない少年をリキュエールは抱き上げる。
「う……」
声を上げた少年は重傷だ、リキュエールは隊列に向かって、
「看護兵、看護兵、早く来て！」
そう叫んでから、少年兵に更に呼びかける。

「起きて、大丈夫!?　何があったの?」
「……夜襲を受けて……味方がたくさん……死にました」
息も絶え絶えに、少年兵はリキュエールに血だらけの手を伸ばしてくる。
「夜襲……」
リキュエールは背筋が寒くなる思いに駆られたが、今はその感情を捨て、少年の手を取った。
「大丈夫、君は生きてるから……」
その言葉に少年は弱々しい笑顔を浮かべて、
「あ、ありがとう……ご、ございます」
そう言って息絶えた。
「少尉、どんな状態でしょうか?」
呼ばれた看護兵が駆け寄って来たが、
「ありがとう、でも、もういいよ」
リキュエールは立ち上がり首を振って、隊列に駆け戻ると、リオスの元に走り出した。

「大佐、危険です、味方は壊滅した恐れがあります」
リキュエールは隊列の中にリオスを見つけるなり、そう言いながら駆け寄る。
「なに!?」
リオスは怪訝な表情でリキュエールを見返してきた、周りのリオスの部下達も突然の新任少尉の言葉に似たような表情を浮かべている。
「どういう事だ?」
「はい、先程、負傷した我が軍の兵士が倒れておりました、残念ながら息絶えたのですが、その兵は夜襲を受けて味方が壊滅したと言ったのです」

リオスの問いに緊張気味に答えるリキュエール。
「馬鹿な、ルーツ少将は２０００からの兵がいたんだぞ！」
リオスの部下が怒鳴り声を上げると、リキュエールは怯んでしまうが、
「しかし、現に負傷者がいたのです」
と、リオスの部下に説明する。
「それを鵜呑みにはできまい、反乱軍の謀略かも知れないからな」
蔑みの視線をリオスの部下達は向けてくる。
リキュエールもさすがにリオスの部下達の自分に対する嫌悪感みたいな物が取れた。
「ダンセル少尉、隊に戻りたまえ、部隊の行動は我々が決定する」
また別の少佐も明らかにリキュエールへの侮蔑の表情を見せた。

早い話が出撃時におこなったリキュエールの意見具申が気に入らなく、新任の少尉が、もう差し出がましい事をするなと言っているのだ。

「待て、その情報が確かだとしても、この距離まで来たらメセア補給庫に行ってみるべきではないか？」
リオスは部下とリキュエールを交互に見ながら言った。
「いや、しかし……」
リキュエールが更に何かを言おうとした時、
「リオス大佐、背後から何者かの一団がっ！」
と、兵士の驚愕の声が聞こえてきた。
「遅かった！」
リキュエールは思わず舌打ちをしたのだった。

「そら、後背ががら空きですわよ」
リオス率いる部隊の後背に襲いかかったのは、ネシア率いる３００の反乱軍である。
草原の近くの森に身を隠して、帝国軍が来るとやり過ごし、後背から攻撃を開始したのだ。

ネシアは不意を突かれた帝国軍を相手に容赦ない攻撃を始め、帝国軍の後背はたちまち危機に陥る。

「ええい、全軍はあの部隊に対応しろ！」
リオスは焦って命令を下すが、リキュエールは慌てて止めた。
「駄目ですっ、きっとメセア補給庫からも……」
リキュエールがそこまで言いかけた時に……
「前方からも敵がっ！　メセア補給庫から出撃してきた模様ですっ！」
兵士の叫び声が上がり、リキュエールは頭を思わず抱えたくなった。

メセア補給庫から出撃したのはカナミが直接に指揮をする３００の部隊であった、この中にはプリエルも混じって戦闘に参加している。
「やったね、カナミちゃん、帝国軍も慌ててるよ」
プリエルは背中に差した剣を抜いて、カナミに笑いかけた。
「挟み撃ちくらいで調子に乗らないの、相手が上手く対応してきたらマズイわよ、慌てる間に大勢を決めるのよ！」
カナミはプリエルに怒鳴り返すと、腰の剣を抜き放って帝国軍の

前方に向かって走り出した。

挟撃が見事に当たり、帝国軍は不利な状況に追い込まれた、リオスの指揮は乱れ、彼の非常事態に対する指揮の甘さが露呈されたが、まだ帝国軍は壊滅までには至らなかった。

＊＊＊

「しぶといわね、ネシアの奴は何やってるのよ！」

戦闘開始からしばらく経つと、カナミは焦れた様に声を上げた。

「知らないよ！」

カナミから少し離れた場所で、プリエルは帝国兵と刃を交えながら叫んだ。

体格に勝る帝国兵に、持ち前の俊敏さで対応したいプリエルだが、戦闘でそれを活かすには経験が足りなさ過ぎる。

「うわっ！」

力に押され、何度目か刃を交えた時におもいっきり尻餅をついてしまうプリエル。

「プリエル！」

カナミは自分の目の前の兵士を素早い動きで切り伏せたが、プリエルを助けるまでは間に合わない。

帝国兵は剣を突き出そうと構え、思わずプリエルは目を閉じてしまうが、

「ぐわっ！」

声を上げて帝国兵があべこべに顔を押さえながら、その場に倒れ込んだ。

「プリエルさん、逃げて、早く！」
「……！？」
離れた所にベリーがと石つぶてとスリングを持って立っている。

「駄目だっ！　逃げるな、刺せっ」
カナミがプリエルに向かって大声で叫ぶ。
「……うん！」
プリエルは顔を押さえた帝国兵の腹部を力いっぱいに剣で突き刺した。
帝国兵の胸元まで飛び込んだプリエルは震えながらも、右手の剣をプリエルに突き立てようとする帝国兵の最期の反撃を察し、左手で帝国兵の右手首を押さえる。
「ぐはっ！」
反撃を押さえられた帝国兵は口から血を吐き出し絶命した。
プリエルは右手には突き刺した剣、左手は相手の右手首を押さえていたので、右足で蹴って帝国兵を突き放した。
ゆっくりと仰向けに倒れた帝国兵はピクリとも動かなくなる。

「プ……プリエルさん」
ベリーは信じられないという表情で立ち尽くす。
「ありがとう、ベリー」
駆け寄るプリエルは帝国兵の吐血を頭から浴びている。
「でもベリーはまだ出てきちゃ駄目だよ」
プリエルは辺りを警戒して、ベリーを守る様に抱き抱える。
「プリエルさん……どうして、どうして逃げなかったんですか……」
ベリーは震えながらプリエルにしがみつくが、プリエルはベリーの頭を優しく撫でて、
「ここは自分で望んで来た戦場なんだ、戦場は戦う場所、逃げる場

所じゃないからね」
そう言って、血だらけの顔で笑って見せた。
「……あ、頭を……頭を撫でなくても……いいです」
ベリーはなぜか溢れ出す涙が耐えられずに、プリエルの胸に顔を埋めた。

「鍛えれば、相当な物になるかもね……」
カナミはベリーを守りながら、剣を構えるプリエルを見た。
相手の最期の反撃を素早く察知して、そこを押さえる、そして相手が力を失った後でも警戒を緩めずに、自分の剣は離さず、相手の右手は押さえたままで、相手を蹴り離す。
プリエルはその流れの動きを全く渋滞なく、やって見せた。
もちろん、その動きだけなら、決して出来ない動きではない。
しかし、その一連の行動は料理や裁縫ではなく、相手を殺す戦闘行動なのだ。
「ネシアに預けてみるか……って、そのネシアは何やってんのよ！」
戦況はかなり有利に進んでいるが、不意を撃って挟撃しながらもそれを圧倒的な物に出来ないのは帝国軍の兵士の数が多いせいもあるのだが、後方にまわしたネシアの部隊がカナミの期待通りの動きをしていない事にあった。
「サボっている訳じゃないだろうけど……討ち取られたとは思えないし」
カナミはネシア達の戦っている方向を見た。

2
「豪傑相打つ」

カナミの心配は杞憂であった、ネシアは討ち取られてなどはいなかったし、ましてやサボっている訳でもなかった。
むしろ今、必死の形相で戦うネシアにサボっている等と言おうものなら、首を瞬時に落とされても文句は言えないかも知れない。

「はぁー、はぁー」
これで同じ相手に何度目の目にも止まらぬ連撃を繰り出しただろうか、ネシアは激しい息遣いをしながら息を整え、相手を鋭い眼光で見据えた。

緑色の髪を右側にサイドテールにした自分と年端の変わらぬ少女が目の前に立っている。
帝国軍女性士官のよく着ている軽装の鎧に身を包んでいるが、少女の右手には鎧には似つかわしくない武器が握られていた。
大型の斧、大斧を少女は両手で構えている。
反乱軍の戦乙女ネシアはこの少女独りに足止めを受けていたのだ。

「やりますわね、名乗りますわよ、私はネシア・ウェスティン」
荒い息遣いながらもネシアは名乗りながら、剣を相手に向けると、
「私はアルザード帝国軍少尉リキュエール・ダンセルです」
と、リキュエールも荒い息を整えながら答えた。
「いいお名前ですわね！」
ネシアは再びリキュエールに向かって走り出す。
攻撃の手数はネシアが勝る、リキュエールは雨あられに繰り出されるネシアの連撃を大斧で受け、その僅かな間隙をぬって、大斧を竜巻でも巻きおこす勢いで振ってくる。
当たれば、一撃で致命傷か、それに近いダメージを受けるに違い

ない打撃をネシアはかわす。
かわさねばネシアの剣は細身の為、ひとたまりも無く折られてしまうに違いなかった。
そして、再びネシアの雨あられの攻撃が始まる。

例えれば、ネシアの攻撃は嵐の夜に降る苞だ。
リキュエールの攻撃はその苞に時折、混じる雷。
ネシアの攻撃は全く当たらない訳ではなく、リキュエールの手足の数ヶ所に傷をあたえ、その部分からの血が滲んでいた。
だが、その傷も全てが浅く、リキュエールは身体の正中線や急所の部分への攻撃はきちんと防いでいる。

一撃必殺対連撃

パワー対スピード

ネシアとリキュエールの一騎打ちは激しさを増し、周りの兵士達もいつしか注目を始めた。
『マズイですわね』
ネシアはリキュエールに時間を取られすぎた事に焦りを覚えていた。
時間がかかれば、奇襲も挟撃も効果が薄まり、素人集団と軍隊の差が出てくるに違いない。
自分が中心となって、帝国軍に打撃を与えないといけないのに足止めを受けてしまっている。

「決着をつけますわよ！」
自分でも焦りは承知だが、ネシアが大きくリキュエールに踏み出

そうとした時である。
大歓声のような声が聞こえて来て、思わずネシアもリキュエールも足が止まってしまった。

「撤退しろ、ステンシア城が落ちた！」
「ステンシア城落城！」
リキュエールは思わず耳を疑ったが、確かにそう聞こえた。

第２０話に続く

第二十話「決断」

1

「総崩れ」

ステンシア城落城の報は戦闘中の兵士の士気を大きく下げた。
予想外の挟撃にリオス大佐の対応が遅れ、何とか取り戻そうとしていた所に入ってきたステンシア城陥落の報告にリオス以下部隊の幹部達は混乱を極め、結局出した命令はアティナ王城への総撤退であった。

この混乱した中での撤退命令が結局は部隊の命運を絶った。
小規模部隊単位では、何とか劣勢を押し返しつつあった小隊や中隊もあったのだが、撤退命令で混乱と孤立を始めて、急速に全体への壊滅を始めた。

「さぁ、一気に追撃をしますわよ！」
ネシアの部隊は、混乱して逃げていく帝国兵士達の背後に一斉に追撃の開始を命令すると、部下達もやや有利な状況から勝ち戦へと戦場が変わった事を感じ取った様で、声を上げて帝国兵達を追撃し始めた。
ネシアを食い止めていたリキュエールも混乱の中に巻き込まれたので、ネシアを止める者はなく、彼女の血の舞踏が再び始まる。

「帝国軍が逃げていくね」
ローゼンフェリアの言葉はいつも通りに淡々としていて、反乱軍の勝利への喜びが声には出ていない。
「そうだね、ヴィスパー君が上手くやってくれたんだよ」
メリエルは頷く。
2人は戦闘の様子を補給庫の見張り台から、ずっと見ていた。

「お姉ちゃん！」
そこに駆け上がってくるプリエル。
「プリエル？」
血を頭から浴びたプリエルにメリエルは思わず声を上げてしまう。
「ああ、ゴメン……」
プリエルはメリエルからぴょんとバックステップして離れた。
「バカ、違うったら」
メリエルは微笑みながらプリエルを抱きしめた。
「あなたばかり戦わせて、私はこんな所で見てるんだもんね」
「お姉ちゃん……」
「ゴメンね」
血だらけで戦う妹を抱きしめながら姉は泣いた。
「違うよ、お姉ちゃんも戦っていたよ、私とお姉ちゃんは一緒」
妹は今度は自分から姉を抱きしめて、
「私が戦っている時はお姉ちゃんも戦っている、そしてお姉ちゃんが戦っている時は私もちゃんと戦っているよ」
「プリエル……」
メリエルとプリエルの双子の姉妹は強く抱きしめあった。

「よかったね」

傍らのローゼンフェリアはそう言いながら、微笑みを見せた。

＊＊＊

帝国軍にとどめを刺したステンシア城陥落はヴィスパーと３００の別動部隊によるものであった。

カナミの策によって、最低限の警備兵のみになったステンシア城をヴィスパー達は急襲した。

新米の２０名ばかりの警備兵は全く対応出来ずにいとも簡単にヴィスパー達に降伏して、死者は無謀にも立ち向かってきた２人の帝国兵だけであった。

「何とか上手く行ったみたいだね」

ステンシア城の城壁から周囲を見渡しながら、ヴィスパーは安堵の息をついて見せた。

「後の問題は……カナミちゃんやネシアさんが勝ってくれるかなんだけど」

もし本隊が負けたらヴィスパーと３００人は見事に孤立してしまう。

「それだけは嫌だなぁ」

自分が下手に上手く行っただけに、周りの事が気になりだした。

一方、メリエル達はリオス率いる帝国軍を完全に撃破し、ヴィスパーからの伝令を受け、ステンシア城への道を行くのが当然の選択肢なのだが、問題が起こっていた。

「行きたい人には来てもらえばいいんだよ！」
プリエルがむきになって怒鳴る、
「無理よ、２０００人からいるんだから、移動するのも一苦労よ、戦えない人達はそれぞれの生活に戻ってもらってから、支援して貰うのが一番よ」
カナミは話にならないと言った風に首を振る。
「でも一緒に来たい人も断るの？　可哀相だよ！」
「一緒に来られて、楽しいハイキング中に帝国軍が現れたら、もっと可哀相だけどね」
プリエルは悔しそうな表情で傍らのネシアに視線を移すが、
「戦いの出来ない人には戦場にいてもらいたくないですわよ」
ネシアはプリエルと視線を合わせる事もしない。
「みんな冷たくない？」
プリエルはおもいっきり膨れっ面を見せた。

そうである、メリエル達はメセア補給庫に自分達を頼ってやってきた者達の中で戦闘力として考える事が出来ない者達をこれからどうするかを話し合っていたのである。

プリエルは自分達を信じて来てくれたのだから、ついて来たい人には、これからもついて来てもらえばいい、と意見を言ったのだが、カナミ、ネシアは猛反対をしてみせたのだ。

食事係、軍隊で言えば輜重部隊に当たる者と救護や雑多をこなす者をある程度の人数、確保出来れば、後の大多数は元の生活に戻っ

て、反乱軍を支援してもらいたい、というのがカナミの意見である。
ネシアの意見はもっとストレートだった。
移動、布陣、戦闘の全てに邪魔になる、と冷たく言い放ったのだ。

「自分の身も危うくなりかけたプリエルに、戦場で同行する無力な方々を守れるの？」
「くっ……」
カナミにそう切り込まれるとプリエルはベリーに助けられた所を見られているだけに答えに詰まる。
「お姉ちゃん……」
思わずプリエルは助けを乞うような瞳をメリエルに向けた。

メリエルは3人のやり取りを黙って聞いていたが、プリエルの視線に対して優しい笑みを浮かべた。
「お姉ちゃん……」
安堵の表情を浮かべるプリエル、メリエルはゆっくりと席を立った。
「カナミちゃんの言う通りにしましょう、みんなの説得にいきます」
「お姉ちゃん！」
予想外のメリエルの答えにプリエルは声を上げた。
「もう、決めたの」
メリエルはそれだけを告げると、早足で歩き始めてしまう。
「いいの？　私達を頼って集まってくれた人達なんだよ、本当にいいの？」
プリエルは部屋から廊下に出ていくメリエルを走って追いかける。

会議をしていた部屋にはカナミとネシアが残されてしまった。

「どうなる事やら」
ネシアが自分の髪に指を絡ませて遊びながらため息をついた。
「平気でしょ、あのお姉ちゃんの方は相当な頑固者だからね」
カナミは地図を見つめながら答える。
「あら、プリエルもあれで中々の頑固ですけど？」
「そうかも知んないけど、今回の件は承諾不可能だわ、どうしても仲良くみんなでピクニックがしたいのなら、私は降りるわ」
カナミの発言に、ネシアは別に驚くそぶりも見せずに指に髪を巻いている。
「あらまぁ、薄情な事ですわね」
「薄情って、私はまだ一日しかいないの」
「その一日軍師様に全てを任せてくれたのはどなたでしたっけ？」
「……」
思わず黙り込むカナミは数秒の後に口を開いた。

「まぁ、それはいいとしてネシアに聞きたい事があるんだけど……」
「なんですのよ？」
カナミを少しやり込めたネシアは平然とまだ髪を弄っている。
「余計な人間を連れて行かないなら、毎朝、あなたの髪をめちゃくちゃ時間かけて手入れしてるらしい美容師みたいな女の子はいらないわね？」
「なっ……」
ネシアが驚きの表情をみせると、カナミは眼鏡をクイッと中指で上げて、小悪魔のような笑いを浮かべ、ネシアを見ていた。
「輜重部隊ですわよっ！」
ネシアはおもいっきり怒鳴りつけた。

「ちょっとお姉ちゃん！」
プリエルはメリエルの前に回り込む。
「プリエル」
「みんなで頑張って来たのに！」
プリエルは大きく手を広げる。
「プリエル……」
「きっと覚悟を決めてみんな来たのに、帰らされるなんて」
「プリエル！！」
「んっ！」
メリエルの強い語気にプリエルはたじろいた。
「わかってプリエル、私だってみんなでいけるのなら、一緒に行きたいの！」
「お姉ちゃん……」
メリエルはプリエルの肩を掴んで、廊下の壁に押し付ける。
「でも、無理でしょ？　ネシアさんやカナミちゃんの言う通りで、私達は戦場であの人達は守れない、けって危険にしてしまう」

メリエルとプリエル。

二つの同じ顔がごく近くで見つめ合う。
「そして、戦えない人達だって、私達の仲間なの！　戦場についてくるだけが仲間な訳じゃない！」
メリエルの顔には強い意志がある事にプリエルは気がつく。
それは村にいた頃、時々、我が儘を言ったプリエルを困り果てて諭す姉の顔ではなかった。
「お姉ちゃん……」

呟いたプリエルが姉に見たのは、美しくも覚悟の決まっていた強い母の姿であった。
「カナミちゃんも言っていたよね？普段の生活に戻ってもらって、戦う私達を支えてもらうの、みんなで戦うの」
そう強く言うと、
「ごめんね」
メリエルは壁に押し付けていたプリエルを離した。
「プリエルにはわかってもらいたかったから……」

メリエルは再び廊下を歩き出した。
「待って、お姉ちゃん！」
プリエルはメリエルを追いかけた。
「プリエル？」
「みんなに帰れと説得するの時間かかるでしょ？　私も行くよ」
「プリエル……」
「早く行こう、きっとステンシア城ではヴィスパー君も待ってるよ」
メリエルは走り出したプリエルを見て、少し複雑な笑顔を浮かべた。

そして、姉は思う。

妹は理解しているだろうか？
この別れは、つい最近、帝国がくるまで村で過ごしてきた豊かではないが、どこか平和で、幸せだった生活との永遠の別れであるかも知れない事を……

第２１話に続く

第二十一話「双子姉妹、ステンシア入城す」

1

「撤退戦」

兵士達は皆が程度の差はあれ傷ついていた。
満足な応急処置も受けられず、さまよう幽鬼のような足取りで血を流しながら歩く兵士達。
リキュエール・ダンセル少尉は、これがまさか反乱軍の鎮圧に向かった帝国正規軍と言っても誰か信じてくれるのだろうか、と自問して首を振る。

圧倒的な有利に立った反乱軍の追撃は執拗で、苛烈だった。
ネシア・ウェスティンと名乗った反乱軍の将は何かに取り付かれた様に逃げる帝国軍の後背からの猛烈な突撃を繰り返し、損害と恐怖を帝国軍に刻み付け続けた。

混乱の中でネシアとの一騎打ちは途中で中断した為、自分とネシアがどちらが武勇に優れていたかは何とも言えない。
もしかすれば、自分の今、背負っている大斧が一撃命中し、ネシアの命運を断ったかも知れないし、ネシアの嵐の様な剣捌きに自分が飲み呑まれたのかも知れなかった。

ハッキリ言えば、自分とネシアの間には勝っているにせよ、負けているにせよ大きな差は無かった。

しかし、リキュエールは自分がネシアと同格の将の器（とは、言っても自分は新任少尉だが）が、あるかと言われたら、統率力や決断力など互いに未知数なので比べるのは難しいが、明らかに差のある部分が一回の戦いでわかった。
それは殺戮に対する執着心に他ならなかった。

「大丈夫だよ、怪我人はゆっくり歩いて！　あの金髪ロールが来たら、私が止めるから！」
リキュエールは恐怖に怯えて歩く兵士達を見ているうちに自然にそう大声で声をかけていた。

2

「ステンシア入城」

メリエルがステンシア城に入ったのはヴィスパーがステンシア城を陥落させてから、ほぼ一日が経ってからであった。
率いて来たのは７００からの集団で、メセア補給庫を１００人程の留守に任せて、残った者には戻れない特殊な事情がない限りには自分の村に戻り、普段の生活の中から支援をしてくれる様に頼んで、帰らせたのである。

まずメリエルはアティナ王国の東部はステンシアの陥落で、帝国の影響力が大きく下落し、年貢や徴収の取り締まりがほぼ無くなる事を説明した。
集まった人間の多くは年貢や徴収の苛烈さや帝国軍の横暴などに動機を発していた為、この説明はある程度の納得を得た。

更にメリエルはプリエル、カナミとで兵士として従軍する人間の家族には供出してもらう食糧等を減らす事を説明して、大筋の承諾をしてもらい、メセア補給庫を出発してきた。

「ヴィスパーく～ん」

先頭を軽い足取りで歩いて来たプリエルは、ステンシア城の城壁の上から手を振るヴィスパーに大声で手を振り返す。

戦いの後の行軍でも軽い足取りなのは、元から体力には自信のあるせいもあるが、典型的な村娘のプリエルにとっては城という建物はとても珍しく、好奇心をくすぐられたせいが大きかった。

城以外にもプリエルが驚いた物は城下街の住民達の熱烈な歓迎。

ステンシア城下の住民達はメリエル、プリエルを先頭にステンシア城に入城しようと進む反乱軍にすすんで食糧を差し出したり、男は街の女からの歓迎のキスを受けている者もいるくらいだ。

「みんな協力的ですね」

ベリーは城への道を歩きながら、歓迎ムードの住民に驚きの声を上げた。

「みんな帝国軍に苦しめられていたんだよ」

メリエルも口ではそう説明をしているが、驚きながら歩いていた。

始めはカナミがリーダーとして暗殺を防いで、行軍の疲労等を考慮して、馬車に乗って移動をするように申し出たが、メリエルはそれをやんわりだがハッキリと断って徒歩で移動している。

その上、メリエルの服装はプリエルと変わらない麻の粗末な服な為、先頭を並んで歩いていても双子な為に目立つがリーダーとは思

われてはいないようだ。

「ヴィスパー君、ありがとう、本当にご苦労様」

城壁から降りて、ステンシア城の広間で出迎えたヴィスパーにメリエルは微笑みを浮かべながら、手を握った。

「あ、いやぁ……僕らは待っていただけだし」

思わず赤面してしまうヴィスパー。

「ううん、こっちこそ遅くなってゴメンね、本当にヴィスパー君には世話になりっぱなしだよね」

メリエルはヴィスパーの瞳を見つめる、手はまだ握ったままでいる。

「メリエルさん……」

さらに真っ赤になり俯くヴィスパーだが、俯いた視界に入ってきたローゼンフェリアの横目の視線にヴィスパーは冷や汗をかいた。

ステンシア入城を果たしたのは昼過ぎだったが、その夕方にはステンシア城下街の代表者数人が城に訪れ、支援を申し出てきてメリエルと会い、メリエルはこれを快諾する。

同時に、反乱軍への参加志望者が殺到して、カナミやネシア、ヴィスパーらがその者達の整理を行っていた。

基本的には戦いの出来そうな者は採用していたが、カナミはステンシア城下の顔の広い人間数十名に協力を要請し、軽い面通しをさせて、全員が全く知らない様な者は採用しなかった。

外部からの帝国軍のスパイを警戒したのである。

「でも、こんなのは3日程経てば意味のない事になるわよ」
実施者本人のカナミがヴィスパーに漏らす。
「そうなの？」
不思議そうにカナミをみるヴィスパー、傍らのローゼンフェリアもカナミに視線を向ける。
「ローゼンフェリアには何でか、わかるかしら？」
視線を向けてきたローゼンフェリアにカナミは興味をひかれた様で、少し意地悪な表情を見せた。
「わかるよ」
ローゼンフェリアはカナミに向けた黒い瞳をきつくする。
馬鹿にされた様に感じたのだろう。
8歳に14歳、歳の差はあれども、この辺りはローゼンフェリアは全くひかない。

「へぇ～、答えてくれるとうれしいな」
カナミはローゼンフェリアのきつくした視線に対して薄ら笑いを浮かべた。
「笑い方が気に入らないけど答えてあげる、3日も経てば、噂を聞き付けた人達が沢山、いろんな所からやってくるからね、そうなったら調べようがない」
目線はきついが、ローゼンフェリアはいつもの抑揚のない声で答えた。
「アハハ、8歳だと思って馬鹿にしてゴメンなさい、お見事ね、正解よ、ステンシアの城下だけでなく、これからはいろんな所から来るわよ」
カナミは謝りながら、軽く拍手してみせたので、ローゼンフェリアは、

「別に気にしてない」
と、フイとカナミから視線を外した、喧嘩にならないか心配しながらも口を挟めなかったヴィスパーは一安心し、
「そうだね、そんなに来られたら、いちいち身元をハッキリさせてもらうのは不可能だね」
と、頷いたが、
「ちょっと待って、本当にこっちが思っている様にいろんな所から、そんなに僕らに加わりたいって人達がくるかな？」
と、素直に浮かんだ疑問を口にして、ローゼンフェリアを見る。

「賭ける？」
まだ機嫌の直りきってないローゼンフェリアに矛先を自分に変えられそうになったヴィスパーは、思わず首を振った。
「いい、止めとくよ、何だかローゼンフェリアには勝てそうにない」
「そう、それがいいわよ」
ヴィスパーとローゼンフェリアのやり取りをカナミは笑いながら、
「まぁ、こっちは少しだけ落ち着いて待ちましょ、こちらが行かなくても帝国軍は困った事になるから」
左手の中指でクイッと眼鏡を上げた。

3

「ベルクタイ少佐」

アティナ王城に何とか帰還したリオス大佐率いる部隊は約２００名まで数を減らしていた。

ステンシア城を出撃した時は部隊は１０００名いたので、損耗率８０％のすさまじいまでの損害であり、すでに部隊としての能力は喪失している。

この知らせに副領主のバーネット中将は激怒して、リオス以下の幹部を王城に呼び出していた。

「農民兵などに敗北するなど帝国軍の恥だ！」

頭を下げるリオスと幹部にバーネットは開口一番から激しく叱咤し始めた。

『やれ、やれ、このデブの説教は長いんだよな』

居並ぶ将校の中にいたベルクタイ少佐は肥太った副領主の怒りを冷たい視線で眺めていた。

ベルクタイ少佐は３４歳になる青年将校で、元はアティナ王国陸軍の中佐であったが、降伏後に帝国軍に一階級を降格して登用されている男であった。

不精髭を生やし、１９０センチ近い身長にガッチリとした体格をしている。

『反乱軍……しかし帝国軍を退け……その上、ステンシアを落とすとはな』

ベルクタイは右手で顎の不精髭をさすった。

「おまえらには相応の処分があるからな、覚悟しておくんだぞ」

長い叱咤の締めの予想通りバーネットの叫びに、リオス部隊の幹

部の一人が声を上げた。
「お待ちください！　実は我々の情報を反乱軍に漏らしていた者がいるのです」
その言葉には今までのただのバーネットのウサ晴らしの叱咤に興味の無かったベルクタイも顔を上げた。
「なんだと？」
驚きの顔を上げるバーネット。

しかし、バーネットよりも驚きの顔を見せた人間をベルクタイは見逃さなかった。
それはリオスと他の幹部達であった。

「誰なのだ？　それは」
バーネットの問いにその幹部は、
「はい、我が部隊に新任で配属を受けたリキュエール・ダンセル少尉です」
「本当か？　リオス！」
バーネットは申し出た幹部の上官であるリオスに確認をする。
「はい、その通りです！」
リオスの答えには少しの間があった。
「我々はこの度の敗戦の後に彼女の部下より報告を受けています」
「まだ何食わぬ顔で隊にいます、素早い処断をせねば王城も危機に陥ります！」
リオスがそれを認めると他の幹部も口々にバーネットに申し出た。

「やはり王国陸軍からの者は信用ならぬ」
バーネットが唇を震わせながら、

「では、兵をやって裏切り者をここに引きずり出してくるのだ！」
と、叫んだ。

「それは私が行きましょう、私も元王国陸軍より皇帝陛下のお慈悲により、帝国軍に編入していただいた大恩ある身でございます、そのような裏切り者は許しておけません！」
そうバーネットの叫びにも負けない声を上げたのは、他でもないベルクタイであった。
「おお……ベルクタイ、行ってくれるか？」
バーネットはベルクタイの申し出に意気を感じた様で機嫌よく声を上げた。
「すぐにでも手勢を率いてリキュエール・ダンセル少尉を捕らえて、閣下の目の前に引きずり出して、差し上げる、ではっ！」
ベルクタイは深々と礼をすると、大広間から廊下に飛び出した。

その様子にバーネットは肥え太った身体を振るわせて笑った。
「いや、いや、なかなかにベルクタイは忠義の士よの」

第２２話に続く

第二十二話「謀反」

1

「眠れる少女」

ベルクタイはリオス隊の生き残りが治療と休養をしている兵舎に向かって、全速力で馬を飛ばしていた。
バーネットには手勢を連れていくと告げたが、実際は単騎で走っている。
アティナ王城内の訓練場の脇に並ぶ兵舎の前に馬を繋ぎ、早足で中に入ったベルクタイは思わず、眉をしかめた。

そこはまるで野戦病院であった、何人もの横たわる兵達の中を看護兵達が忙しそうに走り回る。
痛みを堪え切れずに、うめき声を上げる包帯に包まれた兵士もいた。

普通、少佐の階級章を付けた人間がくれば、皆が直立し敬礼するのだが、ここにいる者達にそんな余裕など無く、ようやく一人の包帯で右手を吊った兵士がベルクタイに気付いて敬礼をしてきた。

「すまないが、リキュエール・ダンセル少尉を探しているが……」
「はい、あちらです」
ベルクタイが尋ねると兵士は左手で兵舎の奥を指差した。
そこには大斧を抱え込んで、壁に寄りかかりながら眠るサイドテ

ールの少女の姿があった。
腕や足には切り傷を負った様で所々に包帯を巻いている。
「だいぶ怪我をしてるな」
「しかし、少尉が反乱軍の恐ろしく強い女を止めてくれなきゃ、我々は死んでいたかもしれません」
腕を吊った兵士は感慨深げに言った。
「凄い一騎打ちでした」
「いつか、ご指南を受けたいです」

周りの兵士達はリキュエールに次々に賛辞を送る。
「なるほどな……」
そう言いながらベルクタイはぐっすりと眠りこけるリキュエールを中腰になって眺めた。
「士官学校を出たばかりなら、１８歳か？　うん、かわいいな」
不精髭の中年に眺められているのも知らずに、眠れる少女リキュエール。

「ん……」
十数秒してリキュエールが目を開けると、そこには不精髭の男が彼女を覗き込んでいる。
「うわぁぁぁぁっ！」
リキュエールは叫び声と同時に左手でベルクタイの右の頬を叩いていた。

＊＊＊

「大変申し訳ありません、少佐……」
「いや、いいんだ、３０過ぎると叩かれた事でも若い女の子との接触はいいものなんだよ」
うなだれるリキュエールにベルクタイは気にするなとばかりに手を振る。
「はぁ……そういうものですか？」
「まぁ、他の種類の接触がベターなんだが……」
腕を組むベルクタイをリキュエールは申し訳なさそうに見ついたが、
「あの～、ところで少佐、私に何か用ですか」
と、用件を尋ねてくる。
「おお、そうだった、なぁ少尉、これは極秘命令でな、ちょっと人気のないところで話そう」
周りの兵達を気にするベルクタイ、
「わかりました」
リキュエールは立ち上がった。

やって来たのは、兵舎の隣にある倉庫であった。
中には何が入っているのかわからないが、木箱がたくさん積まれている。
「極秘命令って何ですか」
少し薄暗い倉庫だ、自分が連れて来ておいて、リキュエールは周りをキョロキョロと気にして見せた。
「リキュエール少尉」
「はい！」

ベルクタイが向き直り、名前を呼ぶとリキュエールは直立して敬礼をする。
ベルクタイはリキュエールの両方の肩に手を置いて、見つめた。
「俺と逃げてくれ」

2
「裏切り宣言」

「ええっ、私が内通？」
「ああ……」
驚くリキュエールに左の頬を押さえながら、ベルクタイは相槌を打つ。
「だったら、あんな言い方しなくても……私、こういう冗談嫌いです」
眉をしかめるリキュエール。
「スマン……俺は好きなんだ」
両方の頬を赤く腫らしたベルクタイはコホンと軽く咳ばらいして、
「だが……内通の疑いがかかっているのは本当だ、副領主にリオス大佐と部隊幹部達が報告して、俺が君を捕まえにきた」
真剣な表情をリキュエールに見せる。
「私……」
強い口調で声を上げるリキュエールだが、
「弁明は無駄だ、リオスや幹部達は元からの帝国軍人、しかしながら俺や君は……違うだろ？」
ベルクタイはゆっくり首を振った

「私は精一杯、やってみせたのに……」
リキュエールは持っていた大斧を落として、その場に座り込む。
「奴らは自分達が実力で反乱軍に敗北したとは、口が裂けても言えないんだ」
「……」
「だから君を犠牲にして、自分達の処罰を軽くする為に口裏を合わせたんだよ、調べりゃ解るがそんな事はバーネットのデブには期待できないな」
ベルクタイは倉庫の壁に寄り掛かり腕を組む。
腕を組んで壁に寄り掛かるベルクタイ、リキュエールは床に手をついて座り込んでいる。

「どうする？　少尉、あまり時間はないぜ」
「……少佐」
リキュエールは顔を伏せたままだ。
「何だよ？」
「少佐が私に逃げようと言ったのは、どういうつもりですか」
「ああ、あれ？　あれは一種の表現の一つ、逃避行するつもりはないぜ」
「裏切りですか？」
「……かもな、まぁカッコイイ表現を使えば、俺の今の状態は雌伏だよ、そして、これからが逆襲」

「そうですか……」
リキュエールは立ち上がって歩き出した。
「私は裏切ってなんていません、この事をきちんと言わないといけません！」

「言わないと、って言っても無駄だぜ！」
「無駄とかは関係ありません、私は……リキュエール・ダンセルは翻意などありませんと伝えるのが、大事なんです」
早足になるリキュエールに、
「やれやれ、こんな娘は一人ではやれないな」
ベルクタイはため息をついて首を振った。

＊＊＊

「裏切り者はまだか？まだ捕まらんのか！」
バーネットは上座から周りに怒鳴り散らした。
リオス達は緊張の面持ちで居並ぶ幕僚達に混じって立っている。

「一体、どうする？」
リオスが小声でリキュエールの名前を出した部下に聞くと、
「大丈夫です、バーネット中将は元王国軍の者を嫌っています、多少、無理があっても我々の意見が優先されます」
部下はリオスと同僚を自信の表情でみた。
「そうだな、あの女の余計な讒言が実際、我々の判断を誤らせる部分がなかった訳でもないしな」
別の部下が、リオスには身勝手にしか聞こえない様な事を言う。
「証拠はどうする？」
リオスの問いに、部下は3人揃って少し笑った様に見えた。
1人が答える。
「そんな物は我々の証言と何人か仕立てあげれば、問題ありません」
「そうか、しかしながらリキュエール少尉が必死に敵を食い止めた働きを見ていた兵士がいるぞ」

リオスはリキュエールに罪を被せるのに躊躇を覚え始めていた。
さっきは突然、あのような話が降って湧いて、自身も訳のわからない内に同意したが、後悔の念が出てきはじめていたのだ。

しかし、３人の部下は違った。
すでに良いか悪いかは別として決心を固め、更に自分の都合の良い嘘の楼閣の建築に取り掛かっていた。
「降伏した国の出身兵士が何を功績を立てようとも関係ありません」
「その手柄は私がたてた事にしましょう」
「それはいいな、私の指揮下の兵に含めておこう」
そんな話まで始める３人にリオスは戸惑いの表情をあらわにしたが、
「今更、嘘でしたとは言えないでしょう、我々が首を討たれます」
部下に注意を促されると同意するしか出来なかったのである。

「リキュエール・ダンセル少尉です！」
大広間に声が響くと、待ちくたびれたバーネットは、怒りの表情をリキュエールという副領主の自分にとっては名前しか知らない士官を向けようと顔を上げたが、思わず、
「あ……れ？」
と、思わず間抜けな言葉が、口から出てしまっていた。

そこには緑色の髪を右にリボンで長いサイドテール、まだあどけなさの後が残る整った顔立ち、おそらく１６０センチ半ばはありそうな身長に均整が取れた身体つきの女性士官が立っていた。

もちろん、それだけでは驚くバーネットではない。
しかし、リキュエールは軽装ではあるが、鎧を身につけ、更にその細腕で何回振れるか心配になるような大斧を手に持っていたのだ。
逮捕ならば、拘束されていなければいけないし、その命令を下したベルクタイの姿もない。

「お前、逮捕され……」
震えた声を上げるリオスの部下の一人に、リキュエールは普段は温厚な瞳をきつくして一瞥する。
「逮捕？　私は逮捕されるような事は一切、覚えがありません、ベルクタイ少佐が逮捕とか言っておりましたが、命令のミスかと思っておりましたが……」
リオスと3人の部下はリキュエールの殺気すら感じる目線に震えた。
始めての印象はただの士官学校を出たばかりの新任士官だったのに、今は歴戦の猛将の雰囲気すら感じられた。

「そ、そんな訳ないだろう！　こ、この裏切り者！」
リオスの部下は新任士官に覚えた恐怖を振り払う様に叫んだ。
「私が？　私が裏切り者と言うのですか？」
リキュエールは僅かに低い声で、そう言いながら周囲を一瞥する。
まるで威嚇をする虎の様である、睨まれた周囲の者にはよそよそしく目を逸らす者すらいる。

「黙れっ、黙らんか！」

立場上、リキュエールの一瞥に怯む訳にはいかないバーネットが甲高い声を大広間に響かせた。
「貴様は逮捕なのだ！　私がそう命令を下したのだ、反逆者が！」
バーネットが恫喝するが、リキュエールは全く動じていない。
「副領主は私が裏切り者の反逆者と言いますか？」
ゆっくりと顔をバーネットに向けるリキュエール、殺気を帯びた瞳はバーネットの背筋を寒くした。

「……」
思わず声に詰まるバーネット。
緊張と静寂が大広間を数秒だけ支配したが、
「この裏切り者がっ！」
リオスの部下が腰の剣を抜き放ち、背後よりリキュエールに切りかかった。

風を裂く低い音。

リオスの部下の首が大広間の宙を舞った。

「……！」
全員が絶句した、リキュエールは、背後から切りかかって来たリオスの部下を振り向きもせずに左手で大斧を後ろに軽く振っただけであった。
頭はリキュエールの足元に転がり、胴体はその場に倒れた。
「軍人の誇りです、忠誠心を疑う発言は控えて頂きたい！」

リキュエールはバーネットから目を離さない。
肥満したバーネットの身体が小刻みに震え出す。
「副領主！　私は裏切り者か、否か、ハッキリお答え下さい！」
リキュエールの恫喝、バーネットは悲鳴を上げて椅子から逃げながら、
「斬れっ！裏切り者だっ、斬るのだぁ！」
と叫んでいた。

「わかりました……」
周りの幕僚や警護兵は剣や槍を構えている。
リキュエールは大斧を右手に持ち替えると息を大きく吸って叫んだ。

「リキュエール・ダンセル、これより帝国軍を裏切ります！　いいですか、これからですっ！　これからですからね！」

「たいした女の子だよ」
大広間を覗き込みながらベルクタイは呟いた。
「あの娘は殺せないね、予定より早まったけど、始めるかい！」
「はっ！」
ベルクタイの言葉に数人の若い将校達は素早く敬礼をした。

第２３話に続く

第二十三話「ステンシア発進」

1

「ステンシア発進」

「それでは皆さん、私達は明日、ステンシアを立ちアティナ王城を目指します、第一陣は私とネシアさん、ヴィスパー君でいきます、カナミさんとプリエルは第ニ陣として私達に続いて下さい」

ステンシア城の広間。

メリエルの言葉に居並んだ者達は頷く。

ステンシア城攻略から5日が経っていた。

一刻も早くアティナ王城に侵攻したいのは山々であったが、あまりにも兵力が貧弱すぎたのである。

ステンシアにメリエルが入った時点で１０００にも満たない数では、約1万は配置されているアティナ王城の兵にはとても敵うものでは無い。

しかし、その心配は凄まじい早さで解決された。

ステンシア陥落を聞き付けた帝国の圧政に虐げられてきた近隣の村の農民や街に住む人々が、メリエルの率いる反乱軍に参加を申し込んできたのだ。

三日経つと、その数は８０００にまでになった。

ヴィスパーはローゼンフェリアとの賭けをしなかった事に安堵したが、カナミと苦慮しつつの部隊編成が待ち受けていた。
だが、幸いにも反乱参加者には元アティナ王国軍の兵士で職を追われて、いわゆる浪人となっていた者も多くいた為に、全てが素人という状態は回避でき、編成も手助けを受け、考えていたよりもスムーズに進んだ。

そして、メリエルはカナミやネシアと相談の上、結局は5日目までに集まった参加者1万6000のうち選抜した約1万を率いて、アティナ王城攻略を始める事に決めたのである。

夜の城壁に立つと、冷たい風がメリエルの頬を撫でる。
「いい風だな……」
城下の街はもう少しで日にちを変えるというにも関わらず明かりの見える店などもあった。
「あの辺りが歓楽街なんだね、街には色々な人達がいるね」
ステンシアに到着してからは、メリエルは目のまわる忙しさであった。
メセア補給庫を占領した時も近隣の村から駆け付けてきた村人達がメリエルに会う為に沢山やってきて、忙しくなったが、今度はそんな規模ではなかった。

とにかく、昼夜問わずにやってくる反乱参加希望者を百人単位だったり、十数人の集団だったりと会っていたので、三日目には流石のメリエルもグロッキー状態になり、カナミやネシア、ヴィスパー等が代理で代わる代わる会い、メリエルを休ませてくれたので、何

とか持ち直したのである。

「メリエルさん」

後ろから誰かが、メリエルに声をかけてきた。

「ヴィスパー君」

声だけで判断がついた、メリエルは笑顔で振り返ると、思った通りヴィスパーも笑顔で立っていた。

「元気になったみたいでよかった」

月明かりに照らされるヴィスパーの笑顔は、メリエルの体調の快復に本当に安心した様子だ。

「みんなのおかげで何とかね、いつまでも倒れてられないから」

「プリエルさんが村では知らない人に何人も会うなんて無かったから、余計に疲れたんじゃないかって」

そう言いながら、ヴィスパーはメリエルの隣に立って、城下を見た。

「そうかも、村ではいつも知ってる人同士ばっかりだったからね、知らない人に会うのはやっぱり疲れるかな」

苦笑して、ヴィスパーに首を傾げるメリエル。

「でも、みんながメリエルさんを頼って会っているから……」

「そうだね、頑張らなくちゃ……それに」

「それに？」

「人に頼られるのは嬉しい事だからね」

メリエルの言葉には正直な強さがあった。

「よかった」

ヴィスパーはメリエルを見つめた。

「え？」

「罪人にしたてあげられて、逃げた先にメリエルさんがいてくれて、本当によかった」

「あ……」
ヴィスパーの言葉に、思わず赤面するメリエル。
「メリエルさん？」
不思議がるヴィスパーに首を振って、
「私もだよ、ヴィスパー君が来てくれてよかったよ」
メリエルは自分ではとびっきりだと思う笑顔をヴィスパーに送ってみせた。

翌日の早朝、反乱軍は約一万の兵力でもって、アルザード帝国領アティナの主城であるアティナ城を目指しステンシア城を発進した。

2

「アティナ王城攻略」

「奴らを捜せ！　何故、３日も経って見つけられないのだ！」
バーネットは肥満した身体で激しく地団駄を踏んでリオスを叱咤した。
「ハッ、全力を挙げ捜索中ですが、ベルクタイ少佐とリキュエール少尉はどうやら地下に潜った模様で、難航しております」
「言い訳は聞きたくない、地下に潜ったのなら、軍で大捜索しろ！」
「お言葉ですが、バーネット様、反乱軍が約１万の兵でステンシア城から、この城を目指して進発しているという情報があり、軍は警戒体制に入っております故に……」
「だまれっ！」
伏しながら話すリオスの言葉が終わらないうちに、バーネットは

怒鳴った。
「わしは右腕を失ったのだぞ！　あの小娘を八つ裂きにしてやらんと気が済まんのだ！」

あの小娘とはリキュエールの事だ。
謀反を宣言して、暴れ出したリキュエールはまさに豪傑と呼ぶに相応しく、警備兵達も全く歯が立たないで蹴散らされ、バーネットの手前、逃げる訳にはいかずに、リキュエールにかかっていった幕僚達も数合として、刃を合わせられる者もおらず、４人が瞬時に討ち取られてしまった。

それでも数を頼みにリキュエールを討ち取るのは時間の問題とバーネットは高を括っていたが、予想外の事が起きた。
何とリキュエール逮捕を命じたベルクタイが数名の部下を引き連れて、リキュエールに加勢したのだ。
ただでさえ混乱していた大広間が大混乱の修羅場と化してしまった。
これは予想外と1人で逃亡しようとしたバーネットをリキュエールは背後から大斧で斬りつけ、バーネットは致命傷は逃れたものの右腕の肩から先を見事に切断された。
そこで警備兵の増援が来なければ、バーネットはリキュエールに間違いなく討たれていたであろう。
駆け付けた警備兵の増援をみるとベルクタイ達はリキュエールを連れて、一気に逃亡を開始した。
増援の警備兵達は、大怪我を負ったバーネットや幕僚達を見過ごす訳にはいかずにベルクタイ達の追跡は一部の者に任せて、看護兵の来るまで応急処置に当たる。
結局、ベルクタイ達は街に逃げ込み、追跡を巻いてしまったが、

適切な応急処置により、バーネットや何人かの幕僚は命を取り留めていた。
ちなみに皮肉な事にリキュエールに敗戦の罪をなすりつけようとして、この自体を招いたリオスの部下は1人はリキュエールに首を落とされたが、残り2人も混乱のさなかで致命傷を負って死んでいた。

「とにかく、構わん！　守備兵から2000程引き抜いて、城下街を徹底的に捜索して、疑わしい奴はどんどん処罰せよ！」
バーネットの正気の沙汰とは思えない命令がリオスに下る。
「バーネット様、今は反乱軍の攻略作戦に対応するのが第一だと考えます、どうかご再考下さい」
リオスは土下座して頼み込む、だがバーネットは全く取り合わず、
「この城はアティナ王国の王城として建てられた城だぞ！　反乱軍の1万や2万位防いでみせろっ！」
と、逆に叱咤されてしまう始末である。
「了解しました、では」
仕方が無く退出するリオスだが、廊下に出ると思わずため息をついた。
「今は皆で力を合わせて、城を守らねばいけないのに、味方を疑い、敵をなめきっている……頼みはこの王城を攻める手段が反乱軍にない事だけか」
リオスの足は鉛の様に重たかった。

リオスの必死の捜索虚しく、ベルクタイ達の行方は全く知れなかった。
アティナの街の住民達は帝国兵には元々好意的ではなかったが、

今までは力の前に嫌々ながらも様々な過酷な命令や徴収に従っていた、だが今回は様子が違った。
住民達はあからさまに帝国兵への嫌悪感をあらわにしたのである。
聞き込みをしても、知らないの一点張りで、全く要領を得ないし、反抗的な態度を取る者もいた。
リオスは部下達に住民とのいざこざは絶対に避ける様に厳命していた為に、帝国兵達はプライドを傷つけられながらも涙を呑んで引いていた。
しかし、そうした２０００の兵達の涙ぐましい忍耐も実は結ばなかった。
何故なら、住民達は今までその帝国兵達の数倍もの忍耐を強いられてきたからである。
そして、バーネットやリオスは様々な対応策がとれた筈の時間を潰し、裏切り者の捜索に無為に過ごしてしまったのである。

「あれが……アティナ王城、綺麗な城」
メリエルはステンシア城とはまた違う荘厳とも言える美しい城を見て、思わず呟いた。
見た事のない大きさの街を見下ろす様に小高い山肌にそびえ立つ白亜の城。
城自体の規模もステンシア城より遥かに大きい。
「援軍がある可能性が高いですわ、一気に決めましょう！」
ネシアが強い語気でメリエルを促すとメリエルも力強く頷き同意する。
「ええ、予定通り先鋒をお願いします、けど城下街では気をつけて下さい」
メリエルは僅かにだが、鋭い視線をネシアに送る。
「わかってますわ、一般市民には危害を決して加えない事ですわね」

「その通りです、破れば、誰であろうと処罰して追放する決まりは変えません」
「まぁ、怖い顔ね、肝に命じますわ」
そう言ってネシアは馬に乗り込むと部隊の先頭に走り出した。

「じゃあ、僕も準備を始めるから……」
ネシアを見送ったヴィスパーはメリエルに頭を下げた。
「うん、ヴィスパー君も一般の人に気をつけてね」
「大丈夫、この街は僕の育った街だから」
ヴィスパーが笑う、メリエルは、
「そうだったね」
と微笑み返した。
「じゃあ、メリエルさんは総大将なんだから、狙われない様に気をつけて」
ヴィスパーも自分の部隊の方に走り去る。

「いよいよだね」
黒い瞳の美しい少女はヴィスパーにはついていかずに本陣に残っていた。
「ローゼンフェリアちゃん……ヴィスパー君についていかないの？」
メリエルが中腰になってローゼンフェリアに笑いかける。
「今はいいの」
黒い瞳はメリエルを捉えている。
「じゃあ、ここにいましょうね、ベリー！」
メリエルに呼ばれたベリーは、
「はいっ！」
と、戦いの前で緊張した声を上げてメリエルに駆け寄って来た。

「ローゼンフェリアちゃんを見ててあげて」
「わ、わかりました」
ベリーはローゼンフェリアの右手を握った。
しかし、ローゼンフェリアの黒い瞳はメリエルから視線を切らない。

「メリエル、あなたはこの戦いに勝って、この国の王になるんだよ」

ローゼンフェリアの言葉にベリーは目を見開いて驚くが、メリエルは表情を変えずにローゼンフェリアと見合っている。
「ローゼンフェリア……私達はあなたに、ここまで連れて来られたみたいね」
そう言ってローゼンフェリアに穏やかに笑いかけたメリエルは、味方部隊全体を見渡してから数秒の間、目を閉じてスウッと息を吸って、大きく透った声で叫んだ。

「全軍攻撃開始！　動ーッッッ！！」

第２４話に続く

第二十四話「攻防戦」

1

「アティナ城攻防」

メリエルの号令にネシアを先頭に立てた先鋒隊約３０００がアティナ王城目指して突入を開始する。
「篭城を決め込んでますわね、つまらない事ですわ」
城下に先鋒隊が達しても迎撃する兵が出て来る様子がないので、ネシアは舌打ちし、
「危険ですわよ！　巻き込まれたくなければ、家の戸を閉めて大人しくしていなさいな！」
城下の一般市民に注意を促して、部隊をアティナ城目指して進める。
アティナ城から降り注ぐ雨の様な矢を大盾や板などで防ぎながら、アティナ城の城門に迫る。
「突き破りますわよ！」
ネシアの号令で大鎚や破城槌が用意され、城門に対する攻撃が開始された。

「農民兵が！　その様な幼稚な物でこのアティナ城を攻略するつもりか、阿呆どもが！」
バーネットは矢の雨を防ぎながら、城門への攻撃を敢行する反乱軍を城壁の櫓から指を差して罵った。
今、反乱軍のおこなっている攻撃なら、城門は打ち破れないとバ

ーネットは確信した。
暫く、持ちこたえて反乱軍が慣れない城攻めに疲れた頃を見計らって、出撃し、一気に突き崩すつもりである。
「攻めろ、疲れ果てるまで攻めてこい、疲れ果てた時がお前達の最期だ」
バーネットはニヤリと不気味な笑いを浮かべた。

城からネシアの部隊に降り注ぐのは、無数の矢だけではない、石や煉瓦、そして椅子まで落ちてくる。
中には熱湯を浴びせかける帝国兵もいて、抵抗は一層の激しさを増して城門への攻撃は中々、思うようにはいっていない。
「簡単にはいきませんわね、やっぱり頼るようかしらね……商人は好きではないのですけど」
ネシアは舌打ちすると、ヴィスパー達の部隊が控えている後方を振り返り、
「少し下がりますわ！　ヴィスパー隊に合図を送ってくださいまし」
と、大声で叫んだ。

「ネシアさんからの合図がきたね」
ヴィスパーはネシアの部隊がヴィスパーの部隊に旗を振って、城門から少し下がっていくのを確認した。
「よし、今度はこっちが行きます、幌を外して下さいね、お願いします！」
ヴィスパーの指示に従って、何台もの台車が馬や数人の人間に曳いてこられると、被っていた幌を外されていく。
「さぁ、いきます！　急がなくてもいいです、慎重に行きましょう」
ヴィスパーは慣れ親しんだ城下街の通りを城に向かって歩き出した。

「退いていきよるわ！」
バーネットは興奮して声を上げ、肥満した身体を歓喜に震わせた。
「見たかリオス、戦はこうやるんだ」
傍らにいるリオスに、自慢げに胸を張る。
「は、見事です」
そう答えながらも、リオスはネシアの部隊が完全に退いておらず、とりあえず城からの弓などの攻撃を避ける距離に留まっているのに気付いた。
「バーネット様！　あれは……！」
幕僚の1人がネシアの部隊の後方に現れた部隊を指差すと、リオスの表情が真っ青に変わった。
「いかんっ！」
リオスが声を上げた途端に、城壁の上でネシア隊の撃退に沸いていた帝国兵達の頭上に大量の矢が飛来していた。

「バリスタ！？　なぜ反乱軍があんなに大量に持っているのだ？」
リオスは大量の矢にさらされて、逃げ惑う兵士達を見て唸った。
「奴らあんな攻城兵器まで用意していたのか？」
降り注ぐ矢を避ける為にバーネットは城壁の櫓から城の中に退避しながら、歯ぎしりをした。
アティナ城にも防御用にバリスタはあるが、数が段違いだった。
「あれだけ間断なく城壁の兵を撃たれては、城門に相手が迫っても迎撃しようがありません」
リオスは予想外の反乱軍の攻撃に焦りを隠せなかった。

「ちゃんと、教えられた通りに、焦らなくってもいいですよ」
ヴィスパーはバリスタを操る兵達に声をかける。
ここで用意したのは、据え置き式で、反乱軍はそれを３００以上用意した。
弓を引く弦もハンドルで引かないと不可能な位であり、射程距離は城を守る兵士の持っている弓とは段違いで射程外から城壁の兵士達を一方的に撃ち始める。
連射はきかないが、数を集めた間断ない射撃で、城壁の帝国兵の弓隊や石や物を投げていた兵士達を沈黙させている。

「さぁ！　今回こそ、いきますわよ！」
ネシア隊が再び城門近くに迫り、丸太を何人かで抱えたの破城槌で激しく城門に追突するが、アティナ城の門はまだ微動だにしない、バリスタの隙をついて弓がネシア隊に降り注ぎ、何人かの兵士が倒れた。
「弓隊は城壁の敵を牽制しなさい！」
ヴィスパー隊のバリスタとネシア隊の弓隊に狙われた帝国兵は再び城の中に退避したり、物影に隠れたりして攻撃をやり過ごし、また隙を見てネシア隊に弓を浴びせてくる。

「くっ、相手の方が上手に戦ってますわね！」
ネシア隊はヴィスパー隊のバリスタによる攻撃で、城門に取り付き、破城槌をしつこく激突させるが、流石にアティナ王城だけに城門が堅固な上に、相手の妨害は執拗であった。
「城攻めは嫌いですわ！　さっさと出てくればいいものを！」

ネシアも城攻めの経験はほとんど無く、この間のメセア補給庫攻撃が初めてだったと言ってよい。
しかし、メセア補給庫はあくまでも補給庫に過ぎず、王国の王城を攻略する参考には全くならなかったのである。

「メセア補給庫をいとも簡単に落としたネシア・ウェスティンも苦戦ですかな？」
城下街の広場まで進出して、戦況を見守るメリエルの背後に1人の男が立つ。
「ポチョムキンさん、お世話になります」
メリエルは振り返って、頭を下げたが、隣にいたローゼンフェリアは一瞥して、再び城下街を見下ろす様にそびえる山の麓に建つ白亜の城に目を移した。

「この度はご協力頂き、ありがとうございます」
メリエルが改めて頭を下げると、
「いえいえ、しかしメリエル様も中々に大胆ですな」
首を振りながら、ポチョムキンは苦笑いをした。
「え？　何がですか」
意外そうな顔を見せるメリエル。
「何がですか、じゃありませんよ、商人仲間があなたを可愛い顔をして、キツイ娘だって言ってましたよ」
「ああ……あれですか」
メリエルは素っ気なく答え、ローゼンフェリアに習って白亜の城の攻防戦に目を移した。
「あれですませますか、本当にキツイですな、随分と我々も身を削って、支援させていただいたのですが……」

「あの人達は命を差し出しています」
ポチョムキンの抗議に即答するメリエル。
王城の攻防戦は一進一退を繰り返している。
「我々があなたの要請に従って、苦労して調達した兵器は役にたっている様ですね」
ポチョムキンは言った。

ステンシア城陥落直後である。
それまで様子見をしていた商人達は、メリエルに支援を申し出てきた。
メリエルはそれらの商人を丁重に迎え、カナミと相談の後に大量の武器や兵器などの調達を要請したのである。
各商人にとっては苦しい出費をしなければ調達不可能だったが、アティナが帝国領である限り、帝国商人が何時までも特別な保護を受け続けて、商売で勝負にならずに廃業を待つだけだ。

様子見をしたが為に、足元を見られた商人達はそれでも東奔西走し、大量の武器や兵器を用意したのだ、少しでも勝ちの目が見えてきたなら、彼等はそこに乗る以外には道が無くなっていたのである。
ちなみに初めからメリエル達を支援していたポチョムキンには商人達の代表と指名する事によって、商人達の中での発言力を高めさせ、恩に報いる事をメリエルはしていたが、どにしろ乗らざる得ない賭けにしても出費は高くついたのだった。

「はて、我々の支援した兵器は全て戦場に投入されていない様ですが」
ポチョムキンは望遠鏡で攻防戦を見て声を上げた。
「え？　はい、でも、ちゃんと使ってくれますよ」
メリエルはニッコリとポチョムキンに笑った。

「組み立て開始！　ちゃんとお願いよ」
カナミはそう命じると背中のリュックから大きな石を降ろした。
「重かったわ」
石は頭の大きさ程の物で鐫でなるべく角を削っていた。
「組み立て、組み立て」
傍らのプリエルは一緒に来てもらった武器職人の広げた地図を覗いている。「カナミちゃんも手伝ってね！」
疲れて腰を下ろすカナミの手を引くが、職人達はテキパキと一度、バラバラにされた木材などを助けは要らないとばかりに組み立てていく。

「わ、もうできた」
１０分もすると、プリエルが驚きの声を上げた、結局、無理矢理にカナミを立たせたが、あまりにも職人達の素早い作業に何も手伝えなかった。
僅かの時間の間にバラバラになって、持ち運ばれていた１１機の投石機が元の姿に戻っている。
大きさは２メートル程の物である。
「さぁて、アティナ王城がまる見えポイントをもらったわよ、馬鹿な司令官が相手で助かったわよ」

カナミは麓の攻防戦を山頂から見下げてニヤリと笑った。

第２５話に続く

第二十五話「戦術考察」

1

「シスター・テスタ」

「よし、撃って！」

カナミの号令に答え、兵が投石機の紐を引くと、木製のスプーン状のアームが風を鋭く切り、人の頭位の石を山頂から麓の城に向けて放り投げた。

石は放物線を描きながら城の中に飛び込んで、内壁の一部を崩し土煙をあげる。

「当たりました！」

兵士が声を上げると、山頂に陣取った部隊全体が一気に活気づく。

「よし、仰角をとれた物から各自発射していいわ！」

カナミが命令を下すと、各自で城に向かって、石を発射していく。

「どうかな？　これで降伏してくれるかな？」

プリエルがカナミに駆け寄っていく。

「まぁ、領主は降伏しないわね」

カナミは腕を組みながら、城に向かって飛んでいく石を見ている。

「しないの？」

「いくら飛ばしても、領主達は奥に引っ込むだろうからね？」

「そうだね……中までは石も届かないよね」

多少ガッカリした様子のプリエル。

「大丈夫よ、結局は帝国軍は降伏する」

「えっ？」

プリエルが顔を上げるとカナミは城を見て、薄笑いを浮かべた。
「私は別に領主が降伏するつもりにならなくても、降伏せざる得ない状況をつくる」
放物線を描いた石が４つ、城に向かって飛んでいった。

「向こうも始めた様ね、こちらは退くわよ！」
ネシアは山頂からの投石攻撃の巻き添えを受けるのを避ける為に再び部隊を下げて、ヴィスパーの部隊の位置まで移動する。
「嫌がらせはあなたとカナミに任せますわ！」
ヴィスパーにネシアは声をかけると、部隊をヴィスパー達を護る様に展開させた。

「じゃあ、こちらも投石機をお願いします！」
ヴィスパーが後方に叫ぶと、カナミ達の使っているのと同じ投石機が１０基、台車に乗せられてきた。
山頂まで昇るカナミ達と違い、ヴィスパー達は分解などしていないので、設置も早く済んだ。
「じゃあ、投石攻撃を開始してください！」
ヴィスパーの合図で投石機のアームは石を城に向かって投げ始める。
城壁を崩せる様な石ではない為に、城壁を飛び越し、内部を攻撃するのが、目的であり、直接アティナ城攻略には繋がらない。
しかし、反乱軍は投石攻撃から次の段階には移ろうとはしなかった。
もちろん、アティナ城攻防は城下街の人々にも、最大の関心事項

になっていた、攻撃側も防御側も城下街を攻撃したり、攻撃側に補給利用されない様に焼き打ちして焦土戦術に出たりすれば大損害を被るのが、目に見えていたが、両軍ともにそのような事をしなかったのは市民達には幸運といえた。

しかし、不安はやはり拭えずにその不安を少しでも鎮めるよりどころに教会に集まる人達も多く、アティナの街の教会の中庭は避難してきた人達でごった返していた。

「テスタ、今なんと言ったのだ？」

教会の神父であるサタデーは見習いのシスターであるテスタ・サトーに鋭い視線を浴びせた。

老境に差しかかり、すっかり頭髪も髭も白くなったサタデーだが、身体つきは大きく青い瞳は鋭い。

厳格なサタデーに若いシスターなどは粗相があると、叱られて泣き出す者もいるが、叱られるのはテスタが１番多かった。

引っ込み思案な性格のテスタは掃除に炊事洗濯が苦手で何かと失敗が多く、怒られては、ペコペコと謝っていた。

「え、いや、あのぉ」

サタデーの鋭い瞳の前にテスタは狼狽している。

テスタは戦争孤児として引き取られた１４歳の少女で赤茶色のセミロングの髪の毛、ドングリ眼の見た目は少し幼さが見える。

何かが目立つ美少女ではないが、どこかに可愛いらしさが見える普通の少女と言ってよかった。

「テスタ、今、お前はそこの男の子に何を話していたのだ、と聞いたのだが？」

「いえ、はい、あ～」

「早く言わんかっ！」

何とかごまかそうとするテスタをサタデーが一喝すると、
「ひゃああっ！」
テスタは悲鳴を上げて話していた少年を胸元に抱きしめた。
１０歳くらいの少年はテスタの胸元で赤くなり、
「違います神父様、シスターに私がした質問にシスターが優しく答えてくれただけなんです」
そうテスタを必死に擁護する。
サタデーは少年の言葉に頷きはしたが、目はテスタに向けられたままだ。

「す、すいません、今、私は帝国軍と反乱軍の戦いについて聞かれたので話していました」
自分が答えなければ、何も始まらない事を悟ったテスタは渋々と俯き加減で答えた。
「で？　お前は、何と聞かれたのだ？」
「どっちが今の攻防戦に勝利できるか？　という質問でした」
テスタを見るサタデーの表情は寸分も緩くなっておらず、テスタはサタデーを見ないで俯いたままだ。
「何と答えた？」
テスタはその質問には答えたくなさそうに、片目をつぶってチラリとサタデーを見たが、どうにもごまかせそうにない。

「反乱軍が勝ちます、と答えました」
テスタは叱られる瞬間がきた、と観念したように両目をつぶった。
シスターの自分が戦の勝敗を論じるとは、サタデーの怒りは必至だろう。
「なぜ、そう言った？」

「は?!」
即座に叱られると思っていたテスタは、サタデーの意外な言葉に、思わず頓狂な声を上げた。
「は?　ではない、お前はもしや無垢な子供の質問に自分の希望や勘で返答をしたのではないだろうな?」
サタデーの視線に厳しさが増すと、
「ちちち、違います、滅相もないです!」
テスタは必至に首を振って見せた。
「では、理由があるのだろうな?」
「あ、あります」
テスタは僅かに顔を上げて、サタデーを見上げた。
「話してみなさい」
「は、はいっ!」
サタデーの言葉にテスタは直立する。
周りにはいつの間にか、テスタとサタデーのそれに注目する者達。
「あの、ここでは……」
と、言いかけたテスタだったがサタデーと目が合い、その言葉を飲み込んで話を始めた。

「ここの教会は丘に建っていて、周りの家より高いので城を巡る攻防は手に取る様にわかります」
「そうだな」
説明を始めたテスタに、神父は頷く。
「帝国軍は篭城戦を選択して、城に閉じこもりましたけど、城の背後の山は無防備に空けていました、対して反乱軍は始めから山の頂上を目指す別動部隊がいた事はすぐに山頂に陣を張った事でわかります」
「うむ」

「ここだけで、帝国軍は大きな失点をしています、そして先程から絶え間無く撃たれる投石攻撃は帝国軍を苦しめるでしょう、それも山頂と目の前と前後より撃たれています」
「しかし、あの大きさの石では城を破壊するのは時間がかかるだろう、領主も城の奥なら安全だろうしな」
「はい、そうです」
サタデーの反論をテスタはアッサリ受け入れたが、
「領主が奥に下がっても兵士達は下がれません、山頂と正面からの投石攻撃に死角は少なく、約1万の兵士の大半はいつ頭上から石が振ってくるか分からない状況でずっといないといけないのです、また山頂からは城の様子がまる見えですから、精神的にも更に帝国軍の兵士は逼迫します」
そう言って、一休みするように、フゥと息をつく。

「それはそうだが、それだけでは状況の説明にしか過ぎないぞ」
「ええ、難しい話はここからなんです」
サタデーの多少、意地の悪い言葉にもテスタは笑顔すら見せる。
明らかにいつもの掃除、洗濯、料理と何をやってもダメで引っ込み思案なテスタとは様子が変わった。
「でも、状況を整理するだけでも、戦場における地域の確保と兵器の運用等を見ればどちらの指揮官……いや、反乱軍は優れたブレーンの可能性がありますけれど、指揮が優れているかは明白ですよ」
話詰めで少し興奮したのか、テスタは顔が上気している様にサタデーには見えた。

「おそらく反乱軍は帝国軍の意図を完全に読み切っています」

強調するように声を強くするテスタ。
「どういう事だ？」
「帝国軍はこの篭城戦を短い期間で終わらせて、反乱軍を撃滅したいのです」
「何故わかる？」
断言にサタデーは直ぐさま質問したが、
「長期の篭城を見込むのなら、食糧の補充や反乱軍の兵の休息場所に使えるこの街は帝国軍が焼き払い、焦土戦術に出るはずです、そうしないのは短い期間なら反乱軍に城下街を利用されても、大勢に影響がないと考えるからでしょう」
「なるほど、勝った後に街を復興させるにも大きな手間がかかるからな、たいした影響がないなら反乱軍に一時的に占拠されるのも構わないのか」
「はい」
サタデーの言葉にテスタは頷く。
「おそらく反乱軍が遮二無二、アティナ城を攻めて、疲弊のピークに達したら、出撃して撃破するつもりでしたのでしょうが、今を見る限り、徐々に首を締め付けられてるのは帝国軍になっています」

「反乱軍は長期戦が望みとテスタは見ているのか？」
サタデーの問いにテスタは首を振った。
「違います、反乱軍は本当の事を言えば、帝国軍以上に短期決戦がしたいのですが、出来ないのです」
「反乱軍は長期戦を望まないと？」
「はい、考えれば当然で、このアティナ城にはまだ陥落したステンシアの他にも支城は二つ残っています、アティナ城への援軍は少なからず来るでしょう」
「ならば、反乱軍はどうする？」
「私なら、全ての手段を繰り出して一気加勢の攻勢もありかな？

と思いますけど」
「それはなんだ？」
状況判断ではなく、テスタならと言う意見にサタデーは興味を持った。
「両面投石攻撃もバリスタによる攻撃も全て繰り出しながら、全軍で攻城戦をします」
「馬鹿な、そんな事をすれば、味方の投石や矢に倒れる者が出るだろう！」
「は、はい、でも今なら城は落ちるかも知れませんし、まともに正面から攻城戦をするより損害はないですよ」
怒鳴り付けたサタデーにテスタは怯えながらも言った。

「反乱軍がそんな味方を撃つような手段を使うと言うのか？」
多少、予想外のテスタの過激な作戦にサタデーは思わず語気を強めたが、テスタは慌てて、
「ないです、反乱軍はやらないです、やるなら先程、やる事も出来たのに、攻撃部隊を下げてた位ですからね、こんな作戦はやらないですよ」
調子に乗りすぎた自分を振り払う様に首を振る。
「そうだな、ならばどうするか？」
「そうですね」
テスタは考えをまとめる様に空を見上げて、
「多分、あと丸一日は投石攻撃を続けた後に、篭城する帝国軍が欲しい物を利用して、罠にはめます」
「帝国軍の欲しい物？」
「そうです」
テスタはサタデーに向き直って、
「支城からの援軍を罠に使います」
控え目に不器用そうな笑顔をサタデーに見せた。

第２６話に続く

第二十六話「罠」

1

「カナミの罠」

「兵士達の不安は大きいのか？」
「はい、昨日からの投石攻撃は止まずに怪我人がかなり出ております、兵を完全に城内に収容してしまっては、敵の襲撃に対応が遅れますし、中庭などでテントを張っている兵などの動きは山頂の敵からまる見えで、皆が不安を隠せていないのが現状です」
いらつきを隠さないバーネットにリオスは頭を下げて答えた。
「山頂の奴らはどうにかならないのか？」
バーネットが忌ま忌ましそうな顔をして見せる。
リオスには特に名案はなかったが、
「しかし、もうしばらく篭城していれば、北アティナやザクロイなどからの援軍が期待できます、早い部隊なら明日には着く場合もあります」
そう言ってバーネットを励ます。
脚の早い騎兵ならば、もっと早い可能性もある。
「そうだな、そうすれば一気に大勢が決するな」
バーネットは機嫌を直した。
「我々は待ちましょう、今は忍耐が大切です」
リオスは頭を下げると領主の間を出て、中庭への階段を上がっていく。
バーネットが中庭や投石攻撃のおそれのある場所に出ていかないので、不満を持つ兵士がいるだろう、と考えたリオスは自分が代わりにそういった場所に行っておこうと考えたのであった。

「完全にだんまりを決め込んでるよね、石が先に無くなるかもね」
山頂に築かれた陣で、プリエルは投石機に石をのせながら言った。
「無くなりゃ、周りから採ればいいわよ」
カナミは石の弾着を見る為に備え付けられた望遠鏡を覗いている。
「そりゃそうだけどね」
山は岩肌が剥き出しなので、石不足に陥る事態は少なくともなさそうである。
実は山頂の投石機はすでに3基が連続しての使用がたたり、故障していて修理中だが、1基はバネも壊れてアームも折れたので修理を諦められて、備え付けられたまま放置されていた。
「折れちゃってる、昨日は一日中、無理言って使ったからね、ご苦労様」
プリエルは壊れた投石機を怪我をした戦友を見舞うように手でさする。
「あんた、それ直して、城まで飛ばしてもらったら？　いい奇襲攻撃になるかも知れないわ」
カナミは望遠鏡を覗き込んだまま、プリエルに冗談を言ったが、
「そうだね、私は軽いから上手く飛べるかも、でもカナミちゃんは胸に余計な重り付けて重いから、城には届かないからやめておいた方がいいと思うよ」
と、切り返されると、しかめっ面で望遠鏡から顔を上げて、眼鏡のズレを直すのだった。

その頃、城下街の中央広場に進出していたメリエルの本隊は、住民から食糧や水といった差し入れを受けていた。

住民達は大半が協力的で、反乱軍に好意を持って接していたのである。

ローゼンフェリアは広場の片隅でメリエルと一緒に差し入れのパンを昼食に食べていた。

その様子を2人を知らない人間が見れば、山里から街に何かの用事で来た姉妹がパンを食べている様にしか見えない。

間違っても、帝国軍を敵にまわして反乱軍を率いるリーダーとその帝国を出奔した皇帝の娘だとは思われないだろう。

「石投げ、続けるの？」

パンを食べながら、ローゼンフェリアは視線を山の麓の白亜の城に向けた。

時折、城に向かって飛んでいく石が見える。

「もう少しね」

メリエルは城の方ではなく、広場に届けられた差し入れ等を分けているベリーや何人かの女性達を見つめていた。

彼女達は炊飯や洗濯などを担当する為に村に帰らずに従軍している。

言わば反乱軍の縁の下の力持ちで、カナミの提案でかなりの人数を連れていたが、約1万人の世話をするのは大変な労力であり、警戒中の兵達よりも忙しそうであった。

「メリエルさん！」

そこに数人の男達が馬に跨がって現れた。

「あ、帰って来てくれましたか、ご苦労様」

メリエルが笑顔を浮かべながら立ち上がって、男達に頭を下げる。

「あ、いえ……」
男達とそのリーダーは恐縮してから馬を降り、
「メリエルさん、北アティナ城は城下街で大規模な反帝国デモが起きて、帝国兵は城に閉じこもって出てきません、援軍はない模様です」
と、片膝を地面につき、少し嬉しそうに報告してきた。
男達はカナミの命令で北アティナとザクロイを偵察に出ていた斥候であった、両方の城から援軍がくるのか、来ないのか、来るならいつ頃現れるのかを監視する為、あらかじめ放たれていたのだ。
「そうですか、わかりました、ではザクロイはどうですか？」
神妙な顔つきで頷くメリエル。
「ご安心下さい、ザクロイでは似たようなデモを強引に軍が鎮圧しようとして大混乱です、援軍なんてとても無理な状況です」
「大混乱ですか、あまり嬉しい事では無いですね、住民にも被害が出るでしょうから」
「これは……不謹慎でした」
男達はメリエルの様子に笑顔を引き締めた。

両方の城での出来事は確実にメリエル率いる反乱軍に触発された事である事は間違いない。
敵の援軍がしばらくないのは好ましいのだが、ザクロイが混乱しているのをメリエルは心配している。
男達は自分達の配慮の無さを反省する様に俯いていたが、そんな男達に逆にメリエルが微笑んだ。
「本当にご苦労様、両方の城の見張りは交替の人を入れますから、ゆっくり休んでください」
長距離を急いで馬に乗って来たのだ、疲労がない訳がない、メリエルは男達に休養をとる様に言った。　しかし、男達は首を横に振

って、
「まだ、それぞれの城を見張っている仲間がいますので戻らせて下さい」
そう任務の続行を希望してきた。
「わかりました」
メリエルが微笑んだまま快諾すると、男達は馬に跨がり、それぞれの任務に戻って行った。

「帝国軍の援軍は来ないんだ？」
見送るメリエルに座ったままローゼンフェリアはボソッと言った。
「まだ、油断は出来ないけど、しばらくは平気って事かな」
メリエルはローゼンフェリアの隣に座り、食べかけのパンを再び食べ始めた。
「この街でも評判のパン屋さんなんだって、自分でもパンは作っていたけど、やっぱり違うよね」
「まぁね」
そう答えながらローゼンフェリアは、投石攻撃を受け続けるアティナ城を見ている。
「綺麗な城だね」
「まぁね」
ローゼンフェリアにとってはパンも白亜の城も同じ感想である。
「あれも、あなたの物になるかもね」
パンを食べ終わって、立ち上がるローゼンフェリアの言葉にメリエルは何も答えずにパンに噛み付いた。

＊＊＊

「そろそろ、始めましょうか！」
その日の深夜、山頂をプリエルに任せて、本隊にやってきたカナミはメリエル、ヴィスパー、ネシアに景気のいい声を上げてきた。
「まだ、早くありません？　もう少し焦らした方が効果があるんじゃありませんの？」
ネシアがカナミに抗議するが、カナミは首を横に振った。
「ダメよ、私たちはアティナ城周辺を押さえて、敵の連絡を遮断しているけど、援軍が来ない事が敵に知れたら、私たちの作戦は無駄になる」
「僕たちには今日連絡が入ったから、下手をすれば相手は知ってるかも知れないよね」
ヴィスパーの言葉にカナミは頷く。
「そうね、でも私が北アティナなりザクロイの城主なら援軍可能ならともかく、援軍困難ならなるべく出来る様に努力なり検討して、いよいよ不可能となってから連絡しようと考えるけどね、援軍不可能なんて篭城するアティナ城の兵士の士気を下げるだけだからね」
「何とか援軍しようとするだけ連絡が遅れる訳か」
ヴィスパーが顎に手を当てると、
「誰だって、上官である領主に自分の任務が遂行不可能とは言いにくいわよ」
カナミは周りを見渡し、
「篭城の怖さは退路の遮断、食糧の遮断、そして一番、私が怖いのは情報の遮断だと思うの、今回はそこをつかせてもらうわ」
自信満々に笑うカナミ。
「わかりました、予定通りやりましょう、敵の援軍が無い分、楽になるでしょうからね」
メリエルはニッコリ笑い返した。

「リオス様、起きてください！　敵陣の様子がおかしいです」
深夜に部下に起こされたリオスは疲れてはいたが、素早く身体を起こし、
「何があった？」
と、城壁まで飛び出していく。
いつ襲撃があっても、いいように鎧は着たままで寝ていた。
周囲は真っ暗だ、城内は投石攻撃の目標になるので、領主の間など、完全に外部に光が漏れない場所以外は篝火やランプは消えている。
対して反乱軍の陣は夜でも篝火やランプ等を多く使い、かなり明るいので、城から様子が伺い知れた。
「敵の陣の一部に乱れがみられるぞ、それに投石攻撃が止んでいる」
リオスが呟くと、周りの兵士は、
「味方だ！　北アティナかザクロイから援軍が来たに違いない！」
「やったぞ！」
と、口々に騒ぎだした。
「どうやら、そのようだな……助かったな、突破してきた部隊を門を開放して出迎えよう、この早さはおそらく先行してきた騎兵だろう、無理はさせられないからな」
リオスもそう言って、安堵のため息をついた。

迂闊と言えば、迂闊だが、この時のリオスの判断の誤りは仕方ない部分もあった。
まず、アティナ城の帝国軍は北アティナ、ザクロイで起こった大規模なデモを情報として、得ていなかった事。
そして、カナミの言う通りで両方の城は何とか現状を打開しようとして、不利な経過をバーネットに報告するのを避けた事。

最後はリオスを始め、アティナ城の帝国軍兵士全体が篭城の目論みが外れ、しつこい投石攻撃に辟易していた。
更に付け加えるなら、リオスには上官のバーネットの怒りからも、早く開放されたいとの思いもあった。

こういう状況で現れた一筋の希望である。
大多数の人間ならば、喜んで手を伸ばしてしまうだろう。

しかし、当然それは罠であった。
カナミのメリエルに語った典型的な罠。
相手の望む物を手の平の上まで持って行き、渡す寸前で自分のやりたい行動を達成してしまう。
意地の悪い罠であった。

第２７話に続く

第二十七話「王都陥落」

1

「アティナ城陥落」

「明かりを付けてやれ！　何処が城の入口かわからんじゃないか！」
「門の閂を外すんだ！」
「敵が追いかけて来ていないか、よく見ておけよ」
アティナ城の兵士達は慌ただしく、夜中に駆け付けて来た味方を収容する為の準備を始めている。
一方のリオスはバーネットに援軍の到着を告げる為にバーネットの寝室にやって来ていたが、衛兵に止められていた。
「夜を徹して、援軍が来たのだ！　領主が自ら出迎えないでどうする？」
リオスが衛兵を詰問するが、
「領主様、直々の命令にございます、今夜は何が起きても邪魔するな、と言われております」
と、繰り返し、聞く耳も持たないのである。
「……くっ、こんな時に何なんだ！」
リオスは声をわざと大きく上げて歩き去って行った。

「行ったか？」
寝室のドアが開き、バーネットが衛兵に顔を覗かせた。
「はっ！」
衛兵は敬礼するが、自然と目線は開けたドアから見える部屋の中のベッドに寝ている裸の女性にいってしまう。
「ああ、あれか？　戦といえども私も男だからな！　とにかく味方

が来たなら、ひと安心だな」
バーネットはごまかす様に笑ったが、廊下に再び足音が響き渡り始めた。

「な、なんだ？」
バーネットと衛兵はリオスが戻って来たと思ったのだが、様子が違う。
「呑気な事をしていますね、領主閣下、右腕が無いのに……」
大斧を持ったサイドテールに髪を結んだ少女が廊下を歩いてくる。
「お……お前は？」
「はい、私は帝国に謀反を起こしたリキュエール・ダンセルです」
バーネットの問いに少女は素直に答えた。
リキュエール・ダンセル、バーネットには忘れたくとも忘れられない名前であった。
「よう、領主代行様、皆を石ころの飛び交う場所に寝せておいて自分は女と寝てるのかよ？　いいご身分だねぇ」
不精髭の中年男もリキュエールの後ろに歩いて来ている。

「リキュエール？」
衛兵はリキュエールに槍を向けようとしたが、構えてもいないリキュエールを見た途端に、背筋が寒くなった。

槍をこのまま、突き出したらヤバイ。

衛兵の直観のような物が自分に告げていた。
衛兵はリキュエールを直接は知らなかったが、話は聞いていた。

敵の恐ろしい大将と周りが思わず魅入ってしまうほどの一騎打ちをして、味方を助けた直後に裏切り、この城の広間を血の海にして、領主の腕を切り落とし逃亡した恐ろしい新任士官。
まだあどけなさを残す風貌も持っている大斧も聞いた通りだ。
領主に腕の話もしていた、決まりだ！
衛兵は槍を投げ出し、一目散に廊下の逆側に走り出して行った。

「な……」
ドアから顔を出しながらバーネットはア然と不忠の部下を見送った。
「いなくなりましたね」
リキュエールは平然とした表情のまま、バーネットに近寄ってくる。
「私に背中を見せる勇気があるなら、彼に倣っても構いませんよ」
サイドテールの少女は一歩ずつ着実に近づいてくる、距離は5メートル程だ、バーネットの肥満した身体では衛兵に倣って逃げるのは無謀だ。
「うわあああああっ、誰か誰か来てくれっ！」
バーネットはその行動も逃げる事と同じ程度の無駄と知りつつも、ドアを勢いよく閉めた。
それとほぼ同時に城内から歓声だか、怒号だか判断のつきかねる兵士達の大声が聞こえてきた。
「援軍がきたみたいだな、急ごうぜ」
「ええ……」
急かしたベルクタイにリキュエールは頷き、大斧をドアに向かって大きく振り上げた。

ベルクタイが聞いた兵士達の大声は始めは援軍の騎兵達への歓声であった。

出迎えたのはリオスで、彼はマントを羽織った騎兵の隊長に近づいて、感謝を述べようとしたが、

「それにはおよびません事よ、私の出来る手伝いなんて、あなたがたを地獄送りにするくらいの事ですわ」

少し高い少女の声を騎兵隊長から聞いた次の瞬間、彼の意識は突然に暗幕を架けた様に暗転した。

首が宙を舞う。

胴体が膝から崩れ落ちた瞬間まで兵士は歓声を上げていたが、首が僅かな時間差で地面に落ちると辺りは2秒間、静寂に包まれた。

「いきますわよ！」

ネシアの声が全ての合図になり、状況が激流の様に動き出した。

援軍になりすまし、城内に侵入を果たしたのは５０人、不意を受けた帝国軍は慌てふためく。

ネシアが城門近くの帝国兵をあっという間に打ち倒すと、城門の閂を外して城門を開放する。

防衛戦の先頭に立っていたリオスを訳の分からないまま失った帝国軍は、ネシアの部隊の数倍の兵士が門の周辺にいたにも関わらず、何も出来ずに右往左往するばかりであった。

「門が開いた！　突撃を開始します」

待機していたヴィスパーが号令を下して、一気に多数の部隊が門から城内に侵入を始める。

「ネシアさん！　ここの総大将を確保しましょう！」

剣を片手にヴィスパーがネシアに駆け寄る、辺りは乱戦の様相だが、混乱を収拾出来ない帝国軍は反乱軍に圧倒的に押されていた。
「それが良さそうですわね、逃げられたら、かないませんわね！」
語尾に力を入れながら、彼女は自分にかかってきた兵士を袈裟斬りにした。

＊＊＊

丘の上の教会に避難していた民衆達も夜中の状況の変化を敏感に感じ取り、怒号が遠く微かに聞こえてくる白亜の城を薄暗い月明かりを頼りに見つめていた。
「テスタはいるか？」
神父のサタデーが周りのシスターに聞くと、シスター達は寝床や毛布が足りずにかたまって寝ている孤児の子供達の中に紛れて寝ているテスタを指差す。
幸せそうな顔を浮かべて、小さな子供達に囲まれて熟睡しているテスタ。
「テスタ、起きないか」
サタデーが声をかけると、テスタは目を擦りながら上半身を起こして、辺りを見渡した。
「何ですか？　まだ夜の様ですけど」
「テスタ、どうやら城の方が騒がしい！　兵士達の怒号が聞こえてくるぞ！」
何で起こされたか、訳のわかってない様子のテスタにサタデーが城の様子を伝えると、
「はぁ、そうですか、それは反乱軍が城に侵入を果たしたんですよ、これで反乱軍の勝利だと思います、それじゃあ、私は明日の朝食当番なんで……」

あくび混じりに言いテスタは、上半身を再び後ろに倒し眠りについてしまった。
「やっぱり今日の夜中にやると思ってました」
寝言の様に言って、横で寒さを我慢しながら寝ている男の子を抱きしめる彼女をサタデーは無言のまま見ていた。

大勢は決したが、総大将である領主の行方は依然として知れなかった。
ヴィスパーとネシアは2人で城内を走り回っていた、阻む兵士はネシアが斬り伏せながら城内を奥に奥に進んでいく。
「そろそろ、領主の部屋だと思うけど」
ヴィスパーは戦意喪失した兵から領主の部屋の場所を聞き出していた。
「叩き斬ってやり……」
意気込むネシアは長い廊下で言葉と足を止めた。
「ネシアさん？」
ヴィスパーが廊下の先をみると、そこには大斧を持った女性が立っていた。
黒い軍服に白兵戦用の軽装鎧は帝国士官の標準的な装備だ。
「ヴィスパー君、領主の部屋に行く前に厄介な敵がでてきましたわよ！」
ネシアは不敵な笑顔を浮かべながら、帝国軍の女性士官に構えをとるが、それと同時に帝国女性士官は、
「待ってください」
と、大斧を地面に落とした。

夜が明けた頃、アティナ城の帝国兵は戦死するか、逃亡するか、

降伏するかの三つのどれかを選択せねばならない立場に追い込まれ、大多数は1番最後の選択を選んだ。

メリエルが本隊を率いてアティナ城に入ると、ヴィスパーとネシアがベルクタイとリキュエールを連れて、2人が帝国に謀反を起こした事、そして領主がどうなったかを説明してきた。

「亡くなった？」

「はい、私が領主を部屋に追い詰めて捕らえようとしましたら、窓から飛び降りまして……」

驚くメリエルにリキュエールが申し訳なさそうに説明すると、ベルクタイがメリエルの前に出てきた。

「多分、あまりの恐怖に冷静さを失って、飛び降りて助かろうとしたんだろうと思います」

「そうですか……」

メリエルはふぅと息を吐くと、

「ベルクタイさんもリキュエールさんもこれから私達を助けてくれませんか？　お願いします」

ペコリと丁寧に頭を下げた。

「と、とんでもない！　頭なんて下げないでください、私こそメリエル様にお仕えさせて下さい！」

リキュエールが身を伏せてメリエルに逆に嘆願する。

「俺も面倒見てもらえませんかね？」

頭を掻きながら苦笑するベルクタイ。

「わかりました、宜しくお願いします」

メリエルは微笑んだ。

「お姉ちゃん！」

そこへ山頂の陣から降りてきたプリエルが大声で走り寄ってくる。
突然の同じ顔の登場に、驚いた表情を見せるリキュエールとベルクタイ。
「ああ、まずは妹を紹介しないと、混乱しちゃいますからね」
メリエルはそう言いながら、飛び付いてきたプリエルを抱き留めた。

こうして、アルザード帝国領アティナの中心、アティナ城は地方の村を発端に起こった反乱によって陥落したのである。

第２８話に続く

第二十八話「月光とローゼンフェリア」

1

「アティナ統一」

帝国領アティナの中心地であるアティナ城を占領した反乱軍は日増しに戦力を増し、領内の帝国軍を各個に撃破し、約１万５０００の兵力で北アティナ城を陥落させると、返す刀でザクロイ城を降伏に追い込んだ。

ここに旧アティナ王国領内からほぼ帝国軍の戦力を駆逐したのである。

「ヴィスパー君、ちょっといいかな？」

ザクロイ城攻略から、アティナ城に帰った翌日、ヴィスパーはメリエルに声をかけられた。

「どうしたんです？」

「お話しておきたい事があって……ここじゃ話しにくいの」

ヴィスパーが聞くとメリエルは周囲を気にしている様子だ。

「じゃあ、メリエルさんの部屋にいきますか？」

「そうだね」

ヴィスパーの提案にメリエルは首を縦に振った。

「じゃ、入って」

メリエルの部屋は城内の将軍用の部屋を使っていた。

初めは領主の部屋を使えばいい、と勧めたカナミの言葉を固持し

た結果、メリエルの部屋は何室かある将軍用の部屋に決まった。
　それすらも嫌がったメリエルは士官用の部屋があればいい、この位の広さでプリエルと最近まで2人で暮らしていた、と言い張ったが、カナミに、
「総大将が士官用の部屋に居られたら、他の人間はどうするのよ！　私は将軍用の部屋に入りたいのよ」
と、変な説得を受けて、将軍用の部屋に入ったのである。

　まだ日が経っていないので、部屋には殆ど物が無いが、中庭を望む窓際に花瓶の花が置かれているのがメリエルらしいと言えば、らしいのだろうとヴィスパーは思った。
「で？　メリエルさん、話したい事って何ですか？」
　ヴィスパーも15歳の男であるから、一つ年上の異性に話したい事があると言われれば、当然に意識も緊張もするが、なるべくなら平静を装いたかったので、さりげなく話を聞く姿勢を見せた。
「うん、それはね、これからの事なんだけど」
「これから？」
　どうやら少年のちょっぴり期待していた類の話ではなかった、少し残念だが、おかげでヴィスパーは平静に戻れた。
「そう、この国から帝国軍を追い払ったのはいいけど、それで終わりじゃないだろうし……」
「それはそうですよね」
　ヴィスパーはそれは当然と同意する。
　帝国軍を追い出して終わりました、とヴィスパー達が解散したら、アティナ国全体が無政府状態になり、大混乱してしまうだろう。
　そして、結局は帝国軍が再びやってきて元に戻るどころか、一層と支配は厳しくなるに違いない。
　人々は一段と苦しみ、メリエルやヴィスパー等は帝国軍の苛烈な追求を受けて、処刑が関の山だろう。

「やっぱり、私達が中心となってアティナ国を纏めていくか、どこかに幽閉されたアティナ王国の王族を助けて復興を目指すかなんだけど」
メリエルはベッドに腰掛けた。
「アティナ王国の王族は見つかってないですよね」
ヴィスパーが言うと、
「聞いていたんだ？」
メリエルはため息をついた。
「ええ、それはアティナ城を占領した時に噂で聞きました、なんでも帝国本土に送られたとか」
「うん……だから、その線でいくのは見込みがないってカナミちゃんが言っていたわ」
「そうですよね、じゃあ、僕たちが……」
「そうだね、そうなるんだけど、ヴィスパー君に話したい事があるの」
メリエルはヴィスパーを真剣と言うより、懇願するような瞳で見つめた。

「ヴィスパー君、私はみんなの総大将をやめたい」
「メリエルさん！」
振り絞る様に言ったメリエルの言葉に、ヴィスパーは思わず目を見張って声を上げてしまった。
「なんでですか？　僕たちは帝国軍に勝てたじゃないですか？」
突然の嘆願に慌てて抗議するヴィスパーだが、メリエルは激しく首を振って見せた。
「でも戦いが進めば進むほど、私がみんなにしてあげる事なんて無

くなっていくのを感じていたの！」
「でもメリエルさんが決断しなければ、この反乱自体がなかったんです、みんなメリエルさんについてきたんですよ」
「……私はここまでに前に出て戦ってもいないし、作戦を立てた訳でもないんだよ、居るだけのお飾りだったのよ！」
メリエルは何か鬱積した物を吐き出す様に叫び、
「ごめんなさい」
それだけ言うと黙り込んでしまった。

少しの間の後、
「居てくれるのが、必要なんじゃないのかな？　メリエルさん」
ヴィスパーはメリエルの肩に手を置いた。
「先頭に立って敵と直接戦う、それはそれで立派だけど、そんな事をメリエルさんにしてほしいなんて、誰が言ったんですか？」
「ヴィスパー君……」
「前に出て戦うなら、ネシアさん、リキュエールさんやベルクタイさんがいるし、作戦はカナミちゃんが考えてくれる、プリエルさんも最近は剣技も凄く上達しているらしいですよ」
「プリエルも最前線で戦ってるのに」
メリエルはポツリとそう言ったが、ヴィスパーは肩に置いた手をそのままにメリエルを見つめる。
「だからこそ僕等は安らぎを与えてくれる人を求めてるんです、僕らにとってメリエルさんはそれを与えてくれる人なんですよ」
「私が安らぎ？」
「そうです、僕等はメリエルさんが優しく送り出してくれるから、戦いにいけるんですよ！　帝国に締め付けられて、傷ついた国民達にはメリエルさんみたいな優しく安らぎをくれる人を待っていると思います」

「待ってる？　本当に？」
顔を上げたメリエルに、ヴィスパーは優しい笑みを浮かべて見せる。
「そう、僕たちのリーダーは帝国に傷つけられた人の心を癒してくれる様な人じゃないといけない、後はローゼンフェリアの言った意志の問題だけ」
「ヴィスパー君……」
「僕はメリエルさんを信じてる」
見つめ合う2人。
数秒の沈黙の後にメリエルは微笑みを浮かべた。

「ありがとう、ヴィスパー君、弱気な事を言ってごめんなさい」
「メリエルさん！」
考え直したメリエルにヴィスパーは心底、安心した表情を見せた。
「私は私に出来る事をしながらリーダーを続ける事にする、みんなが私でいいと言ってくれる間はね」
「それでいいじゃないですか、みんなが自分の出来る事を一生懸命やればいいんですよ！」
ヴィスパーは喜んで頷いたが、互いはいつの間にかヴィスパーがメリエルの肩を両手で掴んでベッドに座っているという状態であった。
思わず、顔面が紅潮する2人。

「ありがとう、ヴィスパー君」
メリエルはヴィスパーに軽くキスをした。
「あ……」

軽くだが、本当にメリエルの唇が、ヴィスパーの唇に触れた。
2人は何だが、お互いに苦笑いを浮かべてしまう、やり過ぎちゃったね、とでも言わんばかりにメリエルは舌をペロとヴィスパーに出して見せた。

2

「部屋で待つ少女」

ヴィスパーは真っ赤な顔のままでメリエルの部屋を出た、出ていく時に挨拶は交わしたが、あまりよく覚えていなかった。
無垢な少年はふとメリエルは初めてのキスだったのかだろうか、とかボンヤリ考えながら自分にあてがわれた士官用の部屋に帰って来た。

「お帰り」
そこには黒い瞳の美しい少女が、夕日の差す部屋で少年の帰りを待っていた。
「ロ、ローゼンフェリア！？　どうしたのさ？」
思わずヴィスパーは声が上擦る。
「別に、待ってただけ」
ローゼンフェリアはそう言いながら、黒い瞳でヴィスパーを覗き込む。
「会議室から真っ直ぐ帰ってこなかったね？　何処に行ってたか、聞いてもいいかな？」
いつもの抑揚のないローゼンフェリアの声だが、何かの感情が入っている様にヴィスパーは感じた。

「聞いたって何もないよ、ちょっとメリエルさんと話していただけだよ」
「そうなんだ」
「そうだよ」
別に何があったかをローゼンフェリアにいう事はないだろう、メリエルは再びリーダーを続けると言ってくれたのだから、一度は辞めたいと言った事など誰にも話す必要はないと、ヴィスパーは思っていた。

「ちょっとって何かな？」
ローゼンフェリアはヴィスパーを見上げる視線を僅かに鋭くした。
「ダメだよ！　ローゼンフェリア、いくら聞いても僕は答えないよ」
そう言いながら、ヴィスパーは士官用のベッドに身体を投げ出した。
「そうなんだ……」
ローゼンフェリアはボソリと言った。

＊＊＊

「あれっ？」
ベッドからヴィスパーは身体を起こした。
周囲はすでに真っ暗になっており、ローゼンフェリアの姿も部屋にはない。
「ベッドに寝転がったら、寝ちゃったんだ、ローゼンフェリアには悪い事をしちゃったな」
あの後に追究が続くのは勘弁だが、待っててくれたのに寝てしまったのは、冷た過ぎると感じたヴィスパーは後ろ頭を掻いた。

メリエルは部屋の明かりを消してベッドに潜り込んだが、ドアをノックする音に身体を起こした。
「誰ですか？」
ドアを開けるとそこにはローゼンフェリアが寝間着で立っていた。
「ローゼンフェリアちゃん、どうしたの？」
メリエルはローゼンフェリアを部屋に招き入れようとしたが、ローゼンフェリアは首を振る。
「ここで平気、すぐに帰るから……」
「そう、どうしたの」
中腰になって覗き込むメリエルにローゼンフェリアはいつもの抑揚のない声で一言だけ告げた。
「ヴィスパーなら慰めてくれると思ったでしょ？」
黒い瞳の美しい少女には、窓から差す月明かりがよく似合っていた。

第２９話に続く

第二十九話「女王戴冠」

1
「新しい風と」

「じゃあね」
ローゼンフェリアは踵を返して廊下を歩きだした。
「ヴィスパー君、話したのかな？」
メリエルが後ろ姿に声をかけると、
「どう思う？」
ローゼンフェリアは薄笑いを浮かべて振り返る。
「話してない、ヴィスパー君が話す訳ないもの」
微笑みながらメリエルは答えた。
「都合よく考えるね、ヴィスパーに聞かずに私がどうやって？」
ローゼンフェリアは黒い瞳を鋭くしてみせるが、
「それはわからないけど、ヴィスパー君はそういう事をやたら喋る人じゃないのはローゼンフェリアちゃんが知ってるよね？」
微笑みの表情をメリエルは崩さない。
「信じるのは自由だね」
再び歩き始めたローゼンフェリア。
「文句を言いに来るなんて、よっぽどヴィスパーが好きなのかな？」
メリエルは少し冗談めかした声を出してみたが、今度はローゼンフェリアは振り返らなかった。

メリエルはドアを閉めるとベッドに身を投げ出す様に倒れ込んで、
「たまには慰めてもらいたいわよ」
そう呟きながら、シーツに顔を埋めた。

＊＊＊

昼からアティナ城下は活気に溢れている。
重苦しい支配は長くはなかったが、苛烈で屈辱的であった。
久しぶりに市民達は心から笑っていた、帝国を自国から追い返した救世主が新たな為政者となり、この国の王位に付く事に決まったのだ。

１６歳の若き女王は万雷の拍手喝采を浴びながら、広場に用意された高台から街を埋め尽くす民衆達に手を振った。
きらびやかに彩られた着物や髪飾り、時間をかけた化粧や手入れは、普段は可憐ではあるが、道端に咲く花の印象が否めない彼女を立派な手の入った花園の花に仲間入りをさせていた。

傍らには親衛隊の隊長を任せられたリキュエール・ダンセルが控えている。
この任は初めはネシア・ウェスティンに任命するつもりで女王もいたのだが、当人に、
「つねに先鋒であれとウェスティン家の家訓にあるのですわ、親衛隊は引き受けかねますわ」
と、嘘か本当かは判別出来ないが家訓を出され、断られて、ネシアが推薦をしてきたのがリキュエールだったのだ。

元来の気質なのだろう、サイドテールの緑色の髪が似合う少し童顔の親衛隊長は見てわかる程に緊張していた。
「大丈夫？　リキュエールさん、そんなに緊張しないで下さい、立っていれば良いですから」
見かねた女王がリキュエールの耳元で軽く囁いた。　もちろん、高台のそんな会話は大音声の歓声を上げている市民には聞こえてはいない。
「申し訳ありません、女王陛下、小官はまだこれほどの儀式には慣れていなくて……」
本当に申し訳なさそうに話すリキュエール。
「私もです、ハッキリ言って心臓が口から飛び出しそうです、今朝まではどうやってプリエルに代わってもらおうか考えていたんですよ」
女王はリキュエールにニッコリと笑った。
「女王陛下」
顔を上げるリキュエールに、
「その呼び方も慣れないで困ってるんです、リキュエールさんも公式の場所でなければ、メリエルって呼んでくださいね」
女王はそう耳打ちして観衆達に手を振った。

「お姉ちゃんも慣れない事をうまくやるよね」
プリエルは高台の脇にネシアをはじめとする武将として並んでいた。
「そうだね、でも緊張していると思うよ」
ヴィスパーも苦笑する。
「仕方ない、メリエルは頑張ってる」
横に立っているローゼンフェリアはボソッと言った。
本来なら下でベリーと一緒にいた方が自然なローゼンフェリアだ

が、メリエルがヴィスパーに高台の舞台に一緒に連れていく様に頼んだのである。

まさか帝国でも正式にお披露目をされていないローゼンフェリアの姿はおろか名前すら知っている人間はいるとは考えにくいだろう、帝国でも皇帝には娘がいる程度の認知度であるから、その辺りの心配はせずにヴィスパーはその頼みを引き受けていた。

メリエルが手を挙げて、歓声を制すると、広場の群衆は鎮まった。皆が新しい女王の姿、声、仕草を見ている。

メリエルは声を上げた。

「私は山奥の村から来ました……」

後に村娘の戴冠宣言と言われるメリエルの言葉が始まった。

メリエルは群衆に自分の素姓を一切、隠さずに話をした。

村が貧困に喘ぎ、招いた悲劇を語った。

反乱を決意し、この檀上に至るまでを簡単に語り、王位につく事を悩んだ事まで群衆に打ち明けた。

もちろん、ローゼンフェリアやヴィスパーや他の仲間との個人的な事は話さなかったが、力強い仲間達がいたおかげである事を強調するのは忘れなかった。

素姓を徹底的に隠蔽して、それを探れば処刑にすらしてしまう帝国皇帝フェンリルとはそれは真逆であり、神格化すらされているフェンリルに対するメリエルの統治手段と見る者もいたかも知れないが、大多数の市民には好意的に受け取られた。

次に宣言したのは帝国との対決姿勢であり、これはメリエルの支持の源であり、欠かす事は出来ない。

メリエルは帝国が各占領地域でおこなっている搾取を止めて、謝罪の上でアルザード帝国建国時の領土までの撤退を求め、認められないなら宣戦布告して現在、帝国と戦っている国々との連合に参加する事を発表した。

かなり過激な要求内容で帝国がこの条件を呑む事は万が一どころか、天地がひっくり返っても有り得ないが、

「いきなり宣戦布告するよりも、どうせ戦いになるのなら言いたい事は言っておきましょ、苦しめられてきた人達も少しは溜飲を下げるんじゃない？」

演説の内容の起稿を手伝っていたカナミがそう提案してきた為、メリエルが追加した要綱であった。

群衆は沸き上がる、帝国を倒せ、と掛け声が連呼され、広場は熱狂の渦に巻き込まれる。

メリエルはその様子を見て、一体どれだけの怒りや恨みを帝国は市民から買ったのか想像もつかない事を改めて実感した。

再びメリエルは手を挙げて、民衆を制すると、一緒に演説を起案したカナミにも相談しなかった重要事項を発表する為、高鳴る胸を押さえる様に深呼吸した。

その時、民衆の熱気を冷ます様にさわやかな風が広場を駆け抜けた。

「新しい風が吹いた」
ローゼンフェリアはそう呟いた。

2
「支配者」

その城は絶対的支配者に相応しい城であった。
４年の歳月と大量の物資、人員をかけて造られたアルザード城はアティナ城の数倍の規模を誇る巨大な城である。
アルザード帝国首都アルザードは今や大陸一の規模と絢爛さを誇る一大都市であり、フェンリルは圧倒的な支持を国民から受ける皇帝であった。

その支持の基盤にあるのは帝国本土の自国民の徹底的な優遇措置にあった。
戦争をして得た物は惜し気なくフェンリルは自国が裕福になる政策に注ぎ込んだ。
占領地域の住民を犠牲に自分達が裕福になっていく事に初めの内は戸惑いを覚えていたアルザード国民も夕食がパンと干し肉だったのに、干し肉が焼きたてのステーキに代わり、更にワインがついた頃には戸惑いを忘れ、またそれを作るのが母親や妻ではなく、雇い入れたコックになった時には元には戻れなくなっていた。
今や国内でフェンリルに反抗する勢力こそ大多数の人間から非国民と呼ばれている状態だ。

国内では盤石な状態を築いていたが、フェンリルは安穏とはできなかった。
アティナ方面から入ってくる連絡が、主だった原因だ。
その日の午後もフェンリルは執務室で執務を執り行っていた。
いくつかの報告に目を通しながら、秘書官に資料を用意させ、必要ならば担当大臣や総責任者を呼んで、時には意見を聞き、また叱咤や助言を与えて、命令や裁可をする。

アティナ方面での報告を専門にする様に任命された若い報告官が遠慮がちに執務室に入室すると、フェンリルは一旦は不機嫌そうな顔をした、しかし報告官が思わず恐怖に怯えたような顔を見せると、逆にフェンリルはフッと少し笑った。
「すまないな、別にお前が悪い訳でもあるまい、報告がそなたの仕事だろうに、遠慮せずに報告してくれ」
そう言いながら、フェンリルは書類の決裁をしていた手を止めて、椅子に深く身を沈めた。

そのままの姿勢でフェンリルは目を閉じた。
最近、執務室で報告を聞く時の癖になりつつあるポーズだ。
僅かにウェーブをかけた長い黒髪、均整のとれた体つき、鋭過ぎも無く丸過ぎない輪郭、真っすぐ通った高めの鼻に、薄い唇。
更に今は閉じられているが切れ長の美しい黒い瞳。
見た者は全て美しさの虜になるとまで言われる帝国皇帝にして、生きる最高美術品とまで言われている美しさには報告官もすでに惹かれていた。

「では、報告します」

報告官が敬礼して皇帝報告用の印のついた封筒を開いて報告書を取り出す。
彼もこの時点で初めて報告書に目を通す。
「頼む」
目をつぶったままフェンリルが頷くと、報告官は緊張した声で報告書を読み上げる。
「ハッ！　では報告いたします、ステンシア陥落は前回の報告にありましたが、その後、反乱軍は約1万の戦力でアティナ城、北アティナ城、ザクロイ城と陥落させました」
凶報だ、報告官の悪い予感が当たった、声が思わず震える。
恐る恐るフェンリルを見る、しかし彼女は微動だにせずに、
「続けろ、ランク報告官」
と、冷静な声で名前を呼んで続きを促してきた。
「り、了解です、反乱軍のリーダーはメリエルというメセナの山奥の村の少女だそうです」
「少女？」
「ハイ、報告によれば16歳から20歳くらいではないかと……」
「子供だな」
フェンリルは目を開けて肩をすくめて見せた。

「報告には続きがあります、アティナ国内を押さえたメリエルは王位についた模様です」
ランクの言葉にフェンリルは一瞬、黒い瞳の煌めきが鋭くなった気がしたが、フェンリルの態度には変わりが無く、薄笑いを浮かべ始めた。

「山の田舎娘が王位か、いまさら、群雄割拠でもあるまいに」

「全くです」
フェンリルの言葉にランクは同意した。
すでにブルーヴェルト大陸の八割近くを帝国は押さえている。
フェンリルが歴史に登場する前の様に大陸に国家が２０以上あった時ならわかるが、今や帝国の他には片手の指で足りる国が残るだけだ。
そんな中で一つの国が生まれても、泡の様に消えていくだけだろうと、ランクは考えながら、報告書の最後の一枚をめくった。

「メリエルは国名をローゼンフェリア王国と称したとの事です」

報告を読み終えたランクがふと、フェンリルに目を移す。
そこにいたのは先程までの余裕の態度を見せていた帝国皇帝ではなかった。
「ローゼンフェリア……ローゼンフェリアと、間違えはないか？」
怒りまでが美しいと、言われたフェンリルだが、黒い瞳が鋭く光り、唇を噛み締め、全身を震わせたフェンリルに睨み付けられたランクは正直に金縛りにあった様になり、冷たい汗が吹き出した。
「は、はいっ！　報告書をご覧下さい」
帝国皇帝の娘の名前を知る人間は本当に僅かで、それはフェンリル本人がローゼンフェリアの存在をかなり早い時期から、完全にシャットアウトしていたからである。
もちろん、若いランクは知るよしもなく、突然の皇帝の態度に戸惑うばかりだ、報告書を引ったくる様に取り上げられ、
「下がれ！」
と、怒鳴られたランクは逃げる様に執務室を飛び出していた。

執務室で一人、フェンリルは歯を食いしばり、報告書を握り潰した、全身の震えもまだ収まらない。
やがて震えに同調するように笑いが込み上げてきて、止まらなくなった。
「ウフッ、ウフフフ……やはり生きていたか、ローゼンフェリア！　どにしろこの世界はお前か私に支配されるのだ、人を駒に母娘でどこまでこの世界で地獄を再現出来るか！　やってみせようぞ、ローゼンフェリア！」
フェンリルはヒステリックに笑いの混じった叫び声を上げた。

暗い部屋でローゼンフェリアは顔を上げた。
いつの間にか寝てしまった様だ。
部屋の隅で膝を抱えて、思い出していた。
数日前の戴冠式の最後にメリエルは国名を発表し、市民はその名前を覚え、仲間達は驚きながらも、ローゼンフェリアさえよければと、事後承諾した。

戴冠式直後に現れたメリエルはローゼンフェリアに、
「あなたが全ての始まりだから、これくらいはいいんじゃないかな？」
そう告げ、少しは驚いた？　と付け足し、舌を出してきた。
「別にいいよ、私も戦う事には変わらないから」
ローゼンフェリアはメリエルにいつもの様子で答えた。

数日前のこの事は帝国にはすでに伝わっているだろうか？
おそらく伝わっているだろう。
だとしたら、フェンリルはこの報せを聞いたら、どんな態度をとるのだろう？

きっと顔をゆがめて怒り狂うに違いない。
「フフッ……フフッ、ウフフフッ」
ローゼンフェリアは込み上げる笑いを我慢できず暗い部屋の隅で膝を抱えて笑い出していた。

第３０話に続く

第三十話「フェンリルの決断」

1

「つかの間の」

「ネズミ……」

ローゼンフェリアが欠けた携帯食料を差し出してきたのをヴィスパーは受け取った。

「そうかぁ、ここの倉庫にもいるからね」

思わず苦笑する、少し前はこの城で主計官をやっていて、ネズミを相手に悪戦苦闘していたのだ。

その頃はヴィスパーはアルザード帝国領のアティナの主計管理官であったのだ、その前はアティナ王国アティナ王城主計管理官、そして、今はローゼンフェリア王国女王補佐官という地位に任命されている。

短い期間の間に三つの国に仕える身になっている事に、人の運命の計り知れない物を感じていたが、

「今、やってる事は大して変わんないよな」

と、手際よく、ネズミ捕りの罠を仕掛ける。

「あっ、そういえばこのネズミ捕りも三つの国を跨いでそのまま使ってるな、これからもよろしく頼むよ」

金髪で少し童顔、中性的な可愛いげのある少年がネズミ捕りに笑いかける姿を傍らにいた黒い瞳の少女はジーッと見ていた。

新生王国ローゼンフェリアの女王メリエルは幼少期から決まった教育という物を受けていないのだろうと、リキュエールは生まれや

住んでいた環境から推測していたし、それはおそらく正しかった。
リキュエール自身はアティナ王国の軍幼年学校から士官学校へ進んだ、いわゆる軍職に就く場合のエリートコースをいっていたので、全く失礼な話であるが、女王として政治を行っていく能力があるのかどうかには多少の不安を持ちながらも、親衛隊隊長としての護衛の任務は忠実にこなし、見守っていた。

しかし、メリエルは内政には殆どの口だしはしなかった。
アティナ王国時代の政治担当者を各所に登用して、政治を行わせる一方で自身は識者を招いての勉強を始めている。
アティナ王国時代の政治はよく言えば無難で、悪く言えば長所のような物が無く、政治による国民生活の急な上昇もなく、下落もない。
現在はローゼンフェリア王国の特色はまるで見えない、復興したアティナ王国といった感じで内政は行われていた。

代わり映えのしない内政に対して、ローゼンフェリア王国の外交は大きな動きを見せている。
国の起こった原因が原因だけに帝国に対しては徹底抗戦を表明し、ブルーヴェルト大陸でアルザード帝国に抵抗を続けるバルド王国、ミオクォーレ教主国、サラセナ国に協力を申し出る一方で軍備を着々と整えていた。

「リキュエールさん、今日はもう下がっても平気ですよ」
メリエルは机に向かいながら、部屋の傍らで控えていたリキュエ

ールに言葉をかけてきた。
メリエルはどうも椅子に座る生活をしてこなかったらしく、床にカーペットを敷き、低い机を置いて、足を崩しながら本を読んでいる。
政治関係の本であろう。
「あ、お邪魔でしたか？　女王陛下」
リキュエールは謝って立ち上がった。
「もう、そんな事言ってないのに、それに公式の場所でなければメリエルでいいですってば」
メリエルが振り返って、少しだけむくれると、リキュエールはニッコリと笑った。
「わかりました、メリエルさん、ではお茶とお菓子をお持ちします、勉強の合間には甘い物が良いと聞きますからね」
リキュエールの言葉にメリエルの表情が綻ぶ。
「いいですね、お願いします、でも自分の分を忘れないでくださいね」
「わかってます、私は甘い物が大好きでして」
リキュエールは笑顔のままで肩をすくめた。

「速く動けばいい訳じゃありませんわよ！」
ネシアは怒鳴りながら、プリエルの肩を竹棒で打った。
「いたぁ！」
プリエルは声を上げて練兵場に土煙を巻きながら倒れ込む。
「あなたの動きは速くなれば、速くなるほどに単純で見切りやすいのですわ」
「むぅ～！　ネシアさん、まだ全然、本気になってないでしょ！」
地面に倒れたまま、悔しそうにプリエルはネシアを見上げる。
「必要ありませんもの！」

ネシアは腕を組んで余裕の態度だ。
「まだまだぁ！」
プリエルは竹棒を握りしめて立ち上がった。

ローゼンフェリア王国建国より三週間、帝国に苦しめられていた国民達は一時の平和な状態に感謝し、必ず来るであろう帝国の逆襲を心のどこかで覚悟していた。

2

「防衛作戦案」

アルザード城の軍事作戦会議室はかなりの広さがあり、召集をかければ師団長クラスの人間を全て集める事も可能であるが、今日は数人だけが中央に据えられた円卓についていた。
「では、ローゼンフェリア王国に攻め入るのを待てというのか」
「そ、そうです、国家元帥より私が預かった意見書にそうあります」
皇帝フェンリルのわずかに怒気もこもった言葉に、まだ２０歳にもなっていないであろう手紙を持った軍服の少女は緊張気味に答えた。
青黒い髪は後ろから首を隠す程度に伸ばし、ぱっちりとした瞳に眼鏡をかけた理知的な印象を与える少女であるが、流石に帝国皇帝を前に迫力負けは否めずに汗が頬を伝っている。

「声を高くしたのは悪かった、別にお前を責めた訳ではない、理由を国家元帥から聞いているだろう？　それを話してくれ、レイチェ

ン・ワルツ大尉」
フェンリルが恐縮している事を察して、僅かに笑いかける。
「はっ、御心配おかけして申し訳ありません、お気遣いありがとうございます」
皇帝自らに声をかけられ、少し落ち着きを取り戻した様なレイチェン大尉、まだ緊張気味だが、頭を下げてフェンリルに感謝の意を示すと、手紙を見ながら説明を始めた。
「ではミヤビ国家元帥より預かった手紙を読みます、現在、帝国遠征軍はブルーヴェルト東大陸において北方軍はサラセナ、南方軍はミオクォーレ、東方軍はバルドとそれぞれ攻略作戦を実行中であり、東大陸で東南に位置するローゼンフェリア王国は現在は東大陸全体に影響を与えません」
レイチェンの言葉に出席者は視線をテーブルに広げられた地図に目を移す。

ブルーヴェルト大陸を簡単に言えば、大きな逆三角形の島の右の先端部分に、ほぼ同じ大きさの菱形の島の左の先端がわずかに繋がった形をしている。
勿論、地形だけにそのままではないが、大体の感じはそう考えていい。
西側の逆三角形の大陸は西ブルーヴェルト、菱形の大陸は東ブルーヴェルトと呼ばれている。

西大陸は説明の必要はほとんど無く、全てがアルザード帝国領で、その西の隅にアルザード帝国の本国がある。
東大陸は北部にサラセナ国、東部にバルド王国、南部にミオクォーレ教主国がそれぞれ中央に進出したアルザード帝国軍と戦ってい

る。
三国は完全にそれぞれの地域を確保できている訳ではなく、中央からの帝国軍にかなり侵攻を許している為に、互いの国境が繋がっておらずに反帝国連合の結成の妨げになっている。

「そして、南部のミオクォーレと東部のバルドの間の東南部にローゼンフェリア王国があります」
レイチェン大尉は地図を見ながら説明する。
「ローゼンフェリア王国がこれ以上、拡張すると東部のバルド王国とミオクォーレ教主国がローゼンフェリアを挟んでつながり、強固な同盟として我々に立ち向かってくる可能性がありますので……」
「ならば、より一層討たねばならない、分断されているミオクォーレとバルドの橋渡しになる前に」
レイチェン大尉の言葉を遮る様に声を上げたのは、トマス・モストウィー上級大将で３３歳の女性将官である。
赤茶色の髪を後ろに長く三つ編みにしている。
青い瞳は切れ長で鋭い、そのせいか高い鼻も、口紅で紅い唇も美人の条件を十分に満たしながらも全体として攻撃的な印象を与えていた。

やっぱり来たな！
レイチェン大尉は思わず片目をつぶった。
レイチェン大尉の上司であるミヤビ・オダ国家元帥とモストウィー上級大将には確執がある事は有名だった。
レイチェンから見れば、二人は言ってしまえば、ウマが合わないという感じであった。
ミヤビは３０歳の女性司令官で、アルザード帝国が建国されて、

初めての国家元帥という軍人では最高位、上には皇帝しか存在しない地位に登っている。

モストウィーはミヤビが元帥の地位を受けて、劣らぬ武勲を上げている自分が元帥になれなかった事を逆恨みして、更に溝が深まっている様に思えた。

ミヤビ自身は現在は怪我の療養中であるが、一大事を聞き、副官のレイチェン大尉に意見書を託して、会議に提出させたのである。

「はい、戦力に余裕があるのならば、更に一方面増やしての四方面作戦も可能ですが、我々も東大陸攻略の動員をかけて長い期間になります、状況が有利とはいえ、三方面は膠着状態に入りつつある今は士気の維持の為に兵士を交代で休暇に入らせての一時帰国を認めない訳にはいきませんし、それに……」

「スティングが忌まわしい賊の手にかかったという時に兵士の休暇の話なんて、関係ないわ！」

レイチェンの言葉を遮るモストウィーは震えていた。

モストウィーがスティングにイレ込んでいて、何かと上司として、また時には女として便宜を計っていた事は上級指揮官の間では知らない者はなく、レイチェンもそれは知っている。

「しかし、閣下、現に各部隊では相当数の休暇願いが提出されています、特にモストウィー上級大将の指揮下にあるサラセナ方面軍は特に多いのでは？」

サラセナは東大陸の北部にあり寒さが特に厳しく、帝国軍は三つの方面の中でも最も苦労していた。

「嫌味をいうとは！」

モストウィーに親の仇とばかりに睨まれて、レイチェンはすくん

だが、
「確かにな、兵士には休暇の必要がある」
と、呟いたフェンリルの言葉に周りが注目した。

「では、ミヤビはローゼンフェリア王国にはどう対処するかは書いてあるか？」
「皇帝陛下！」
フェンリルの質問にモストウィーが抗議の声を上げるが、フェンリルが手の平をモストウィーに向けて制すると、流石の上級大将も帝国皇帝の前では黙るしかなかった。
モストウィーの沈黙を確認してから、
「はい、ローゼンフェリアが勢力を拡げるにはローゼンフェリアの北西にあるセリア大河に架かる武装鉄橋ザフォリア橋を渡るルートが一番安全で道も険しくないルートです、ザフォリア橋を守り切れば、安易に大軍を国外に進出させる道は険しく危険な谷や山越えのルートになります、是非とも武装鉄橋にしかるべき武将をとの事です」
と、レイチェンはミヤビからの意見書を読み、フェンリルの様子を見る。

「今は封じておくのか……」
フェンリルは考え込む様に拳を口元に当てた。
「はい、そして我が軍の休養と再編成の後に三方面の内のバルド王国かミオクォーレを叩いてから、ローゼンフェリア王国にかかっても遅い事はないとのお話でした」
レイチェンは頭を下げて着席する。

「そうか……」
フェンリルが椅子の背もたれに寄り掛かり、ゆっくりと黒い瞳を閉じた。
考察の後に判断が下る。その場にいた者はフェンリルの思考に雑念を入れない様に黙っている。

フェンリルは思考する。

確かにミヤビの意見は正論の上に的を得ている。
怒涛の進撃を続けてきた帝国軍もどこかで大休止が必要な事はわかる。

しかし……ローゼンフェリアが、ローゼンフェリアが相手なのだ。
あの娘を後回しになどできるものか……

「バティスタ上級大将！」
フェンリルは瞳を開いて、席に着いていた者の中でも一際、筋骨隆々の褐色の肌の男を黒い瞳で見据えた。
「御呼びですか、陛下」
褐色の男は深々と頭を下げた。

「前線の兵を再編成して、ローゼンフェリア攻略軍を新たに編成する！　お前に指揮を任す！」
「そんな……」
フェンリルの言葉に、レイチェンとモストウィーはそれぞれ違う思惑が外れ、思わず声を上げる。

「沈黙は金」

バティスタ上級大将は、レイチェンとモストウィーに向かって、ニッと白い歯を見せた。

第３１話に続く

第三十一話「ローゼ苦笑する」

1

「ポチョムキン来訪」

ローゼンフェリア王国が建国されてから、一ヶ月が経過していた。
新女王メリエルの忙しさは相変わらずで、それを補佐するヴィスパーも様々な雑事に城や街を往来しての日々が続いている。

「ヴィスパー」

ローゼンフェリアの言葉でヴィスパーは意識を取り戻し、机から顔を上げた。
「え……あっ！」
執務机にいつの間にか俯せて眠っていた様だ。
「寝てた!?　どのくらい寝てた?」
「３０分くらいかな?」
慌てた様子のヴィスパーにローゼンフェリアはいつもの調子で答える。
「油断したかな、全然、気付かなかったよ～」
苦笑してみせるヴィスパーにローゼンフェリアは手にしたトレイから、湯気が上がるティーカップをヴィスパーの執務机に置いた。
「疲れてるね」
「いやぁ、そうかな?　僕よりメリエルさんの方が頑張ってるよ、ろくに寝てないと思うよ」

「メリエルね……私はヴィスパーの心配をしたつもりだけど」
ローゼンフェリアがつまならそうに呟くと、ヴィスパーは慌てて、ティーカップを口元に運んで、
「うん、ローゼンフェリアはもう紅茶のいれ方は完璧だね、凄く美味しい！　本当に物覚えがいいね」
と、愛想笑いを浮かべながら、ローゼンフェリアの頭を撫でた。
「バカ」
ローゼンフェリアはヴィスパーのごまかしに思わず苦笑した。

商人ポチョムキンがアティナ王城に現れたのは、夕方になっての事である。
資金面や武器の買い付けなどで世話になっているポチョムキンの久しぶりの来訪に、メリエルは感謝の意味を込めて、ささやかながら宴をひらいて普段の労をねぎらった。
その席にはヴィスパーやローゼンフェリア、プリエルやカナミ、ネシア、ベルクタイと主だった面々が出席し、更に親衛隊隊長としてリキュエールはメリエルの席の後ろに控えていた。

「いや、すいませんな、いきなり来たのにこのような歓迎をして頂いて」
肥え太った身体を椅子に沈めて恐縮するポチョムキンにメリエルは屈託のない笑顔を浮かべた。
「何を言ってるんですか、本当に世話になりっぱなしでこちらが挨拶にいけなかった事が申し訳ないです」
頭を下げながら、酒の瓶を持ち、酌をしようとするが、ポチョム

キンはとんでもないといった表情で、
「前と違い、あなた様は女王陛下にあらせられます、一介の商人が宴を開いて頂けただけでも恐悦至極にございますのに、何故に酌まで受けられましょうか？」
と、首を振って固持をしたが、メリエルは笑顔のままで言った。
「まぁ、そう言わないで下さい、私はこの国を身分関係なく世話になった人には頭を下げて、感謝の意は上に立つ者こそ皆に示すような国にしたいんです、だから私の感謝のお酌を受けてください、女王自ら実践してないと言われたら、私が困ってしまいます」
「女王陛下……」
「どうぞ」
メリエルが両手で持って差し出した酌をポチョムキンが頭を深々と下げながら受け、宴の席が始まった。

宴席と言っても酒を嗜む者も少ないので、食事会のような感じで、大騒ぎはしないが、各人が好きなテーブルに移動して、話したい者と気ままに話していた。
ヴィスパーはローゼンフェリアと一緒にテーブルの上の料理を食べていたが、そこにポチョムキンがやってきた。
「ヴィスパーさん、お久しぶりです」
年少のヴィスパーにも相変わらずの腰の低さを見せながら、隣の席にポチョムキンは座った。
「ポチョムキンさん、お世話になってます」
ヴィスパーも食事の手を止めて、頭を下げる。
「ヴィスパーさんは補佐官として大変多忙だそうですな」
「アハハハ、元々役人でしたから平時の仕事は周りに迷惑をかけながらも何とかやってますが、戦争中は慣れない戦いに出ているので大変です」

「ほう？」
頭を掻いて笑うヴィスパーにポチョムキンは興味深そうに声を上げた。
「リキュエールさんやネシアさんの様な勇将がいられても足りませんか？」
「そうですね」
ヴィスパーは率直に答えた。
するとポチョムキンは一度、考えるそぶりをして、
「ヴィスパーさん、ならば私は今、仕える場所をさがしている武術に優れた者を知ってますが？」
そう話を切り出した。
「えっ、本当ですか？」
「ええ、ヴィスパーさんの次席補佐官としてならば、戦場で役に立つのではないでしょうか？」

確かにポチョムキンの紹介ならば信用に足りるし、補佐官は女王メリエルを様々な観点から補佐するのが役目だから、次席補佐官に武勇に優れた人物をつける事は補佐官のヴィスパーの裁量で可能である。
「じゃあ、ポチョムキンさん、是非とも、その方をご紹介下さい」
ヴィスパーが頭を下げると、ポチョムキンは頷く。
「わかりました、後日にそちらに向かわせますので、登用されるかは様子を見てからと言う事を伝えておきます」
「お願いします」
最近の悩みの一つから解放されるかもと、ヴィスパーはポチョムキンに感謝した。

ポチョムキンは翌日に忙しく、商用があるとかで他の街に出かけて行った。

ヴィスパーはすぐにメリエルに事の次第を話し、次席補佐官採用の許可を得ると、その日の仕事に取り掛かる。

メリエルの裁可の必要な書類をチェックして、問題がなければメリエルに裁可を仰ぐ、大体がヴィスパーに回る前に各関係各所のチェックを問題無しと通過してきているのだが、たまに見過ごせない物もあるからくせ者である。

数日前はある役所より大臣までの裁可を受けて、ヴィスパーにまで回ってきた予算繰りについての書類があり、大臣印まで押されていたので、メリエルに裁可を仰ぐと、

「ヴィスパー君、この予算繰りなら、二週間前に裁可出したけど……」

と返されたので、慌てて調べ直すと、メリエルの言う通りで、ヴィスパーが大臣も含め、各所に問い合わせに忙しく走り回り原因を調べた結果、簡単なミスで二重に同じ予算繰り案の書類が回っただけであったという事件があった。

最終裁可を下すメリエルが記憶力よく気がついたからいいものをもしメリエルまで裁可を出していたら、新女王陛下に恥をかかせる事になっていたと、大臣がメリエルに謝罪し、俸給を一年間半分返納したいと申し出るまでに事が大きくなったが、

「いえ、それには及びません、私もチェックする人間の一人です、今回はミスを最後の人間が見つけられたという事に過ぎません」

メリエルがそう言い切り、印を押した者への訓告で済ませたのである。

大臣はアティナ王国時代にある程度の高い評価を受けていたベテランであったが、そのような者ですら、新王国建国の忙しさにこういうミスをするのだ、とヴィスパーは身を引き締めて、書類等をチェックしていた。

その中のある村からの陳情の書類にヴィスパーは目を止める。

おそらく、その村の村長がアティナ城に直接持ってきた物なのだろう、衛兵隊長が受け取ったらしく、衛兵隊長が事情を聞き、まとめた正式な陳情書類に村長の直筆の陳情書が一緒に添付されている。

陳情はよくある事だ、内容は千差万別で、いちいち女王自ら裁可を下していてはメリエルがもたない、さして予算のかからない物や簡単な処置で片付く陳情は関係各所に回して、そこに判断を任せるのだが、その陳情は内容を看過する訳にはいかなかった。

ヴィスパーは書類を何度か慎重に読み直すと、女王メリエルの執務室に歩き出した。

2

「村々の窮状」

「ヴィスパー君？」

メリエルの執務室はヴィスパーの執務室とは装いが違う。

机を置き椅子に座っての執務をするヴィスパーに対して、メリエルはカーペットを床一面に敷き、低い机を置いて直接床に座って執

務をしている。
　当然、靴は脱がなければいけない。
「失礼します、女王陛下」
　そう言いながら、靴を脱ぐヴィスパーに、
「誰もいないよ」
　メリエルは声をかける。
「じゃあ、お邪魔します、メリエルさん」
「はい、どうぞ、ヴィスパー君」
　少し照れながら言い直すヴィスパーにメリエルは微笑みを見せた。

「山賊？」
　メリエルは陳情書類を手に取って声を上げた。
「そうなんです、その陳情書によると、数は２０人程ですけど、かなりの腕の持ち主らしく、付近の村を荒らしては食料や水、女性を略奪しているらしくて」
「地方には少数とはいえ、憲兵がいるのに……」
　ヴィスパーの説明にメリエルは首を傾げる。
「それについては報告も上がって来ていないから、わからないけど……使者を出して確かめます？」
　ヴィスパーが口元に手を当て考えるが、
「いいわ、今から使者をその地方の憲兵本部に送るよりも、討伐隊を村に送った方が早く村の人達を救えるからね」
　メリエルはそう答えた。

「そうだね、そうした方がいいですよね、ならば５００位の部隊で一気に追い立てれば……」
　ヴィスパーもメリエルの考えに同意して、自分なりの作戦を提案する。

「でもヴィスパー君、この陳情書のツロウの村って、国の北西側の端よね？」
「え？　そこまでは」
「確か、そうだったよ」
「そうですか」
ヴィスパーもローゼンフェリア領内の大きな街ならともかく、無数に点在する小さな村までは覚えてはいない。
東端の山間の村に住んでいたメリエルが元々、知っていたとは思えないので、女王になってから勉強したのだろう。
「武装鉄橋の近くで今は部隊を展開したくないの」
「そうか……」

ローゼンフェリア北西のセリア大河に架かる武装鉄橋は依然として、帝国の部隊が駐屯している。
ここを通らねば、ローゼンフェリア領域内から万単位の大軍を出撃させるには険しい山越えをしなければならず、強引な山越えは脱落者が多数出る予想がたっている。
その為、武装鉄橋は是非とも攻略したいのだが、まだ動員の準備が整っていなかった。

帝国への態度は国内感情を考えて、早めにハッキリさせたローゼンフェリア王国であるが、本格戦争は少し早いとの判断があり、なるべく武装鉄橋の帝国軍に対しても、警戒は怠っていないが、刺激になる事は避けていたのだ。

「ならば、少数精鋭で助けてあげないと」
「ええ、そうだね」
ヴィスパーの意見に賛成してメリエルは、
「連れていく人は選んでいいから、頼める？　ヴィスパー君」
と、申し訳なさそうな顔をして頼む。
「わかりました、僕が精鋭に入ってると思ってもらえたのは光栄です、そんな顔見せないで、僕はメリエルさんの役に立ちたいんですから」
ヴィスパーがニッコリ笑って答えると、
「ありがとう、ヴィスパー君は私にとってはとびっきりの精鋭だよ」
メリエルは、ヴィスパーに顔を近づけて頬に軽くキスをした。

第３２話に続く

第三十二話「討伐隊出撃」

1

「出　発」

「準備よし！」

ヴィスパーは幌馬車に荷物を積み込んで、

「みなさんも早く積んでください」

と、急かす。

「ハーイ！」

「わかりました」

プリエルとリキュエールは荷物を幌馬車に積み込むが、ベルクタイは面倒臭そうに欠伸をした。

「ヴィスパー君よ、何も日の出とともに出る必要があるかね？　お馬ちゃんも朝早くは調子も出ないだろうに」

ベルクタイは顎の不精髭をいじりながら、大きな欠伸をした。

「ご心配なく、馬は早起きなんですよ、少なくともベルクタイさんよりは」

ヴィスパーはそう答えながら、二頭の曳馬の首筋を優しく撫でた。

初めヴィスパーがツロウの村からの陳情された山賊被害の救済に向かうメンバーに選んだのは、プリエルとベルクタイ、あとは兵士を２０人であった。

プリエルはネシアの指導で最近はメキメキと剣の腕を上げているらしいし、ベルクタイは実戦豊富なアティナ王国軍時代からの士官

という理由をメリエルに伝えると、
「じゃあ、リキュエールさんにも行ってもらいましょう、最近は私の近くにずっといる警護でストレス溜まっているみたいだし」
メリエルからそう提案してくる。
その場でリキュエールを呼び出して詳細を告げると、リキュエールは自分は親衛隊隊長の任務にストレスなんて感じてませんよ、と固持する態度を見せたが、結局はメリエルに押し切られた形で、山賊討伐隊に加わる事になったのである。

三台の幌馬車が練兵場から走り出す、一台はヴィスパー達、もう二台には２０名の兵士が分乗している。
「それじゃあ、出発！」
プリエルが調子よく声をかけると、幌馬車はそれぞれ動きだした。
「ローゼンフェリアちゃんは連れていかないの？」
プリエルはヴィスパーの隣に座った。
「連れていかないですよ、山賊相手にローゼンフェリアを見せたら、年齢なんて関係無しに何をされるか、わかったもんじゃない」
ヴィスパーは首を強く振る。
実はローゼンフェリアは今回の討伐についていくつもりだった様だが、ヴィスパーが説得すると、割とすんなり折れた。
「ヴィスパーが私の心配してるのわかったから」
ローゼンフェリアは微笑みながら言うと、今日の朝早く部屋まで見送りに来てくれたのだ。

「私達は山賊に見せても構わないって言うんだ？」
プリエルは膨れながら、大斧を肩にかけて座っているリキュエー

ルに同意を求める。
「ひどいですね」
リキュエールは控え目に笑いながら答えた。
「リキュエールさんもそう思うよね？　ヴィスパー君ったらローゼンフェリアちゃん一筋なんだから」
プリエルも本気ではもちろんないが、ウブで年下のヴィスパーをおもちゃにしている。
「ち、違いますよ！　そういう意味じゃなくて」
「じゃあ、怖い山賊に襲われちゃうかも知れないメンバーに私とリキュエールさんを選んだ理由を教えてちょーだい」
プリエルのツッコミにまごつくヴィスパー。
「お姉さん達には敵わないねぇ」
ベルクタイにまで冷やかしを受ける始末であった。

「いやぁ……ほら、プリエルさんは最近は剣の腕も凄く上達してるし」
これはメリエルにも話した事だが、本当だ。
元々、運動神経抜群で目も良いプリエルは剣術に向いている。
そう判断したカナミがネシアに指南役を頼み、プリエルに本格的に剣の道に進む様に勧めたのだ。
その勧めにプリエル本人は大変乗り気になったが、カナミはまずは女王メリエルに許可を求めた。
このローゼンフェリア王国の女王メリエルの妹であるプリエルは国にとって決して軽い存在ではない。
これが王族が１００人もいれば、国民にそして軍への示しとして何割かの人間を軍人にして、また、その中の何割かを前線に立たせる事はよくある話だが、プリエルは唯一のメリエルの肉親である。

その事もよくメリエルに話してから、返事を求めると、メリエルは、
「プリエルはこれぞと決めたら私より頑固な一面があるんですよ、私はいいけど教えるネシアさんの迷惑にならなければいいけど」
頬に手を当てながら、お転婆な娘が他人に迷惑でもかけないか心配する母親のような様子で了承したらしい。

「私の腕をかったという事だね？　ヴィスパー君」
「も、もちろん」
顔を近づけるプリエルにたじろぎながらヴィスパーは首を縦に振る。
近づいた顔はメリエルと見分けのつかない顔なのだ。
昨日の出来事を思い出し、思わず赤面してしまうヴィスパー。
「ん？！　ヴィスパー君どうしたのかな？」
キョトンとした表情のプリエル。
「な、何でもありませんよ！　ほら、走っている馬車の中で危ないですよ」
「うわぁ！」
そう注意をした途端に馬車が急に止まり、プリエルが座っているヴィスパーに倒れかかってきた。
幸い、まだ馬車が練兵場から中庭を通り、城門から外に出る手前だったので、スピードが出ていなく、ヴィスパーはプリエルを受け止められた。
「プリエルさん、大丈夫？　どこか打ってない？」
ヴィスパーが覗き込むと、
「ありがと、平気だよ、私は頑丈だからね」
プリエルは笑いながら顔を上げた。

「危ねぇなぁ」
ベルクタイも横に倒れた様で腕を摩りながら、舌打ちをした。
「どうしたんですか？」
リキュエールは前部の幌を開けて、乗り手に状況を確認する。
「はぁ、それが……」
乗り手が困った様な声を上げたので、リキュエールに続いて全員が集まって、前方を確認した。
馬車は城門を通ろうとした直前に止まった様で目の前にアティナ王城の巨大な城門がある。

「閉まってる？」
リキュエールは素っ頓狂な声を上げた。
アティナ王城は戦闘時でない場合は、衛兵がもちろん常時数人は立っているが、城門は開いている。
平時は各地からの報告書を携えた連絡の早馬や物資の輸送の馬車などの往来が頻繁にある為に一々の開け閉めをしていてはキリがないからだ。

「んっ！」
リキュエールが異変に気付いて、馬車を降りて腰に差した短剣に右手をかけた。
「リキュエールさん？」
ヴィスパーが馬車から降りて城門を見ると、そこには3人の倒れている門兵と門に背中をかけて腕を組んでいる少女がいた。

2

「やってきた少女」

「何者ですか！」

普段は温厚なリキュエールはただ事ではない状況にすでに戦闘態勢に入っている。

ヴィスパーもそうしたかったが、間の抜けた事に幌馬車から降りた時に丸腰で降りてしまい、武器が無い事に気づいた。

これが職業軍人とそうでない者の違いだろうか。

それは幌馬車に残った2人にも差が出ていた。

いつの間にか、手にした槍を乗り手の真後ろで投擲する構えを取るベルクタイに対して、プリエルは慌てて自分の剣を取りに走っている。

今から剣を取りに荷台に戻るのはかなりマヌケに思えたヴィスパーは、争い事が起これればリキュエール達に任せる事に開き直り、自分は少女の様子を伺う事に決めた。

少女は背が低い。

ダークグレーの髪は先が少し両肩にかかる程度の長さだ。

上半身はハイネックに袖の無い黒いシャツの様だが、素材が綿や絹ではなさそうで、肌に密着している。

下半身も同じ素材の膝上までの黒いズボン、こちらも肌に密着しているので、身体全体のラインは一目ではっきりわかる。

「凄い恰好だ！」

思わずプリエルが口にしてしまっている。

「ある程度、腕を見せておきたくってな」
少女は不敵な笑いを浮かべる。
「何者かと聞いてます、動かないで下さい！」
リキュエールは声のトーンを強くした。
「そう硬くなるな、リキュエール親衛隊隊長、コイツ達は気絶しているだけだ」
「なぜ名前を？」
リキュエールは少女が自分の名前を知っている事に驚いた表情を見せる。
「コイツ達の詰所にあった外出予定台帳を見た、後はポチョムキンからの話でだいたい分かる」
「ポチョムキンさん？」
ヴィスパーは思わず声を上げていた。

「君、もしかしてポチョムキンさんの言っていた仕官を探してる人？」
「ああ、ポチョムキンがローゼンフェリア王国の次席王女補佐官の仕事を斡旋してやると話をもってきたから、こうしてやってきたんだが……どうやらウィル・ヴィスパーとはお前の様だな」
少女は幼い顔つきに似合わない不敵な笑みをヴィスパーに見せた。

「彼女が次席補佐官？」
リキュエールが声を少し間の抜けた声を上げる。

「可愛いね！」
プリエルはもっと間の抜けた事を言いながらも、
「でも、こんな事はしちゃ駄目だよ」
そう少女に声をかけて倒れた門兵に駆け寄った。
「私の責任ばかりじゃない、事情は話したが信じてくれなかった、ポチョムキンの紹介状を見せても不審がるから、私の腕を見てもらう判断材料になってもらう事にした」
少女は罰の悪そうな顔をして答えた。
「怪我さしてない？」
「気絶させただけだ、傷つける程、てこずる相手でもないよ」
少女の答えに、
「それならいいや、でも門兵さん達にも責任があるとは言え、起きたら謝ってもらうからね」
プリエルが答えると、
「なるほど、女王の妹とはあんたか……いいだろう、言う通りにするよ」
少女はしょうがなさそうに後ろ頭を掻いた。

「ミラちゃんは12歳なんだ！」
走り出した幌馬車の中でプリエルが新たな仲間である少女ミラ・コンティネントにプリエルは興味津々に顔を寄せた。
「な、何だ、なんか変な所でもあるか？」
「んー、無いよ、カワイイな～と思っただけだよ、大胆な恰好が色っぽいよね」
「これは戦闘服だ！」
ミラの体型は本当に華奢で、近い年齢のベリーよりも身体のラインは細そうだった。
顔つきもよく見れば歳相応で、大人びているのは態度だけだが、

プリエルの前にそれも崩され気味だ。

結局、ヴィスパーはミラも今回の山賊討伐に加える事にした。
意識を戻した門兵に簡単に言付けをして、そのまま出て来てしまったのだ。
ミラは立場はヴィスパーの部下になるし、急いでいたので、きちんとした紹介は帰って来てから、メリエルに謁見した時にしようと考えた。

「しかし、まぁ……」
ヴィスパーは色々とプリエルとやり取りをしているミラを見て、ため息を思わずついた。
いくら確認しなかったとはいえ、まさか12歳の女の子が来るとは……

「あの娘がヴィスパー君の直属の部下だって聞いたらローゼンフェリアちゃんがヤキモチやくぜ」
楽しそうに話すベルクタイ、リキュエールは気の毒そうに笑っている。
ヴィスパーはもう一度、ため息をついた。

第33話に続く

第三十三話「暗殺少女ミラ」

1

「山賊達の城」

新たに次席女王補佐官になるミラ・コンティネントを加えた山賊討伐隊は一路、ツロウの村に向かい数日の行程を進んでいた。
街道が途中まで通っている平地が大部分なので、悪路に苦しむ事はないが、馬車に揺られている時間が長く、かなりの退屈をするだろうとヴィスパーは悠長な覚悟をしていた。

しかし、その覚悟は杞憂に終わる、プリエルが一行にいたからである。
まるで、諜報員の様な情報網で得た様々な話題を振ってくる。
やれ小隊長の誰其が部下の女性に惚れたが、簡単にフラれたとか、ネシアの付き人が親衛隊の男と付き合っているなど、本当かガセネタかは微妙だが、とにかく話題が多い。
尽き果てぬ話題に、最後にはミラに五月蝿い、と怒鳴られる始末だが、ヴィスパーにはプリエルのおかげで暇を持て余す事がなかったし、何よりも今まで忙しく、あまり話す事のなかったリキュエールやベルクタイとプリエルの話題を橋渡しにゆっくり話す事ができたのである。

リキュエールは戦場での立ち振る舞いの豪快さとは真逆の女性ら

しい少し控え目な所を会話の端々に見せる。
戦場でも日常でも強気なネシアとは好対称で、とても彼女と互角の一騎打ちをしたとは思えない。
緑の髪は右側にサイドテール、顔は全体的に童顔だが、年齢はネシアよりもひとつ上らしい。

ベルクタイは気のいい中年の典型的な例だった。
若い頃は色々な国を巡ったらしく、色々な国の風習や環境を知っており、それを話している時は多弁なプリエルも興味津々で聴き入っていた。
ちなみに独身であり、現在も相手を絶賛募集中らしいが、馬車の中に立候補する者はいなかった。

そして、ミラ・コンティネント。
年齢は12歳。
身の上についてはプリエルがネシアの連続突きを彷彿させるような質問攻めでも、聞けたのはせいぜい年齢くらいで、あとの質問の殆どは、
「やかましい」
「五月蝿い」
と、睨まれて、終わりであった。
訓練された門兵を1人で制圧した腕前は直接見た訳ではないが、相当な物と考えていいだろう。
ダークグレーの肩にかかるまでの髪、目元は年齢の割に鋭いが、やはり顔立ちは子供である。
変わっているのは、前にも述べたが、黒で統一された彼女の言う戦闘服であるが、ヴィスパーは肌がかなり出てて寒くない？　と聞

いた途端に蹴りがとんできたので、それ以降は服については聞いていない。

そんな一行はいくつかの村に途中に立ち寄りながら、とりあえずの目的地であるツロウの村にたどり着いた。

村の規模は約２００人とプリエル達の住んでいた村より倍近くの人口の村で普段ならば、なりの活気があってもいいはずだが、土壁に藁葺きの家の戸は閉められて、外に出ている者は誰もいない。

「まだ、お昼なのに何か変じゃない？」

プリエルがいち早く馬車から降りると、背中に差した剣の柄に手をかけた。

「ここまで２０人の山賊を恐れるものか」

プリエルに続いてヴィスパーが馬車から降りると、一軒の家から老人がヴィスパーとプリエルに駆け寄り、足元にひれ伏した。

「メリエル女王陛下のお使いの方々ですか！　お待ちして、お待ちしておりましたぞ！」

「村長さんですか？」

「は……はい」

ひれ伏したまま答えた村長にヴィスパーは手を差し延べて、

「さぁ、年長のあなたが僕達みたいな年若の者に頭をここまで下げたらいけませんよ、僕たちが来たからにはもう安心ですから」

遠慮がちに笑いかけたが、村長は頭を上げない。

「いえ、女王陛下に私は死んで詫びる責任があります、私は死なないと」

喚き始める村長にヴィスパーが戸惑うと、プリエルが村長を中腰

で覗き込みながら笑いかける。
「お姉ちゃんは自分へのお詫びに人に死んでほしいなんて、絶対に言わないよ」
「お姉ちゃん？　あなた様はまさか？」
キョトンとする村長に馬車から降りたリキュエールが笑いかける。
「こちらはプリエル様、メリエル女王陛下の妹君のございます」
「妹君様……」
「そうです、女王陛下があなた達の訴えを真剣に熟慮されたのがお分かりでしょうか？」
呆然としてプリエルを見つめる村長、だが今度は顔を地面に付けて、
「妹君まで！　妹君様まで～！」
と、泣き出し始めた。
「駄目だな、こりゃ」
ベルクタイはため息をついて見せた。

＊＊＊

「３００人！？」
思わず椅子から立ち上がったのはベルクタイだ。
「はい、そうです」
申し訳なさそうにうなづく村長。
「だって２０人くらいって陳情書に……」
ヴィスパーが目を見開いて驚く。

村長の家の中である、あまりにも取り乱す村長を落ち着け、とりあえずゆっくりと話を聞こうとヴィスパー、プリエル、ベルクタイ、

リキュエール、ミラの5人は家に上がったのだ。
しかし、村長の口からは予想を超えた事態が知らされたのである。
「まさか、山賊２０人が３００人になるとはな」
ベルクタイが参ったと言わんばかりに首を振った。
それはそうである、多少の加増はあるだろうと予想していたが、まさか１５倍もの差があるとは流石に考えなかった様子だ。
「そうですね、憲兵隊から連絡が無い筈だ」
「村の者の話によれば、私が陳情書を携えてアティナ王城に向かって、数日で爆発的に増えて、憲兵隊の方々もやられてしまったのでございます」
悔しそうに俯く村長。

「村長に責任はありませんが、一度、戻って援軍を求めた方が得策かも知れませんね」
リキュエールはヴィスパーを見た。
「ええ……」
同意するヴィスパー、
「本当に、本当に申し訳ありません」
村長は痛恨の面持ちで頭を下げる。
「気にしないで下さい、すぐに援軍を連れて帰ってきますから！」
ヴィスパーが立ち上がっると、ベルクタイとリキュエールがそれに続こうとした時である、
「待った！　帰らないよ、帰れば時間がまたかかるだけだからね！」
プリエルは腕を組んだままで声を上げた。

「ちょっと、プリエルさん、大丈夫なんですか?」

驚きの表情を浮かべるヴィスパー、リキュエールとベルクタイも同じような顔を見せている。
「余裕だよ！」
プリエルはウインクをして微笑む。
「余裕だよ、って作戦なんかあるのかよ？」
ベルクタイが両手を広げて、プリエルに聞くが、
「ここじゃ言えないよ」
プリエルはそう言いながら立ち上がった。

馬車に戻った一行は地図を中心に車座になる。
「山賊は約３００、相手は山間の渓谷に作られた古い城ザレマ城塞を根城にしているらしい」
ベルクタイは地図を指差す。
「ザレマ城塞は数十年前に渓谷に造られた要塞で、険しい山を背後、切り立った岩の斜面が左右にあり、狭い正面からしか、攻撃不可能な自然を利用した城塞です」
リキュエールが補足に説明を加える。
「まさに自然の要塞と言った感じですね」
ヴィスパーがうーんと唸る。
「で？　妹君様、ここの根城をどう落とす？」
ベルクタイが興味深そうにプリエルを見るが、見られた本人はキョトンとした顔をして言った。
「そんなの知らない」

その答えに一同はア然とした。
「だってプリエルさん、余裕だって言ったじゃないですか」
ヴィスパーが抗議の声をあげると、

「だって村長、見てらんなかったし、それに帰ってたら時間がかかって被害だって広がるし、５００連れて帰って来たら、相手が１００いたらじゃつまらないからね」
プリエルは腕を組みながら答えた。
「プリエルさん……」
リキュエールがプリエルを見つめる。
プリエルはあの場で村長に責任を感じさせない為にあのような事を言ったのだろう。
後の事を考えないと言えばそれまでだが、これがメリエルのそれとは少し性質の異なるプリエルの優しさであるし、実際に引き返すリスクはプリエルの言う通りでもある。
それにあまり数を出すと武装鉄橋の帝国軍を刺激する恐れがあった。
「さぁ、何か手があったらガンガン言っていこう！　遠慮いらないからね」
プリエルは残る４人を見渡した。

「リキュエール」
隅で目をつぶって腕を組んでいたミラがリキュエールを呼んだ。
「何、どうしたの？　ミラちゃん」
「ザレマ城塞はどれくらいの収容人数の要塞なんだ？」
ミラの質問にリキュエールが少し考えるそぶりをみせると、
「谷合は狭いが、要塞自体は谷を切り開かれて、規模はある程度あるぜ、３万が篭城した記録がある」
横からベルクタイが答えた。
「そうか……」
ミラはそう答えると、少しの間の後で顔を上げた。
「いけるな、明日中にはケリをつけてやる」

そう言いながら、馬車を出て行こうとする。

「ちょっと、ミラちゃん、どういう事？　何かあるなら手伝うよ！」

声をかけるプリエルにミラは振り返り、

「今日は平気だ、援軍を呼ばないと言ったのはお前だからな、明日は手伝ってもらうぞ」

と、告げると素早く走り去る。

皆がミラの突然の行動を見守る中でベルクタイが呟いた。

「やれやれ、最近の１２歳は大人びてるねぇ」

第３４話に続く

第三十四話「夕闇の要塞」

1

「夜歩く少女」

周囲が暗闇に包まれる森を彼は獲物をつけていた。
獲物は時折、地面に伏せて何かを採っている、全くこちらに気付いている様子が無い。
旨そうな獲物だ、躊躇の必要はない！
彼は一気に獲物の喉笛に向けて飛びついたが、自慢の牙が相手の喉にたどり着く、ほんの数瞬前に獲物はこちらに振り返った。
もう遅い！
驚くがいい！
彼は思わずほくそ笑んだが、何かがいつもの狩りとは違う。
振り返った相手は、恐怖の表情などなく、薄ら笑っていたのだ。
顔面に鋭い痛みを覚え、彼は遠吠えを上げて意識を失った。

「狼か……」
ミラは足元で痙攣する彼を足で転がした。
「かなり前からつけてきていたが無駄だったな、仕事の最中だったんだ、邪魔をした分の役には立ってもらうか」
ミラは彼の血で染まったナイフを再び彼に向けて突き立てた。

「帰って来ないね」
プリエルはたき火に薪をくべながら、ヴィスパーに呟いた。
待っているのは数時間前に出ていったミラだ。
「プリエルさん、僕が待ってますから寝ていていいですよ」
「やだよ」
ヴィスパーの提案に対して、プリエルは舌を出して拒否する。
「ミラちゃんは私に手伝えって言ったからね！　ヴィスパー君こそ寝なさいよ、子供なんだから」
「子供って、プリエルさんは、一つ年上なだけでしょうに！」
「一つでも年下は年下、お姉さんの言う事は聞きなさいよ」
胸を張るプリエル、ヴィスパーは言っても聞きそうにないので、
「わかりました、じゃあ、その年上のお姉さんの言う事を聞いて寝ますから、よろしくお願いします」
と、腰を上げて村の中央に立てられたテントに歩き出した。

朝日が昇り、ヴィスパーやベルクタイ、リキュエールがテントから起き出して来ると、たき火のそばでミラがあぐらを組んで座り込み、プリエルは横で大口を開けて大の字で寝ている。
「ミラちゃん、帰っていたんだ」
ヴィスパーがミラの隣に座ると、
「ああ朝方にな、アイツ、私が帰ってくるなり寝たぞ、どういうつもりだ？」
ミラはプリエルを横目で見る。
「いや、ミラが帰ってくるのを待っていたんだよ、ミラが手伝ってもらうって言ったからだよ」
「馬鹿な奴だ」
冷たく言い放ち、ミラはそのまま寝転がった。

「あれ？　ミラちゃん寝ちゃうの？」
「しばらく起こすな、仕事は夕方にやる」
「寝るのはいいけど、テントの中で寝た方が良くないかな？」
ヴィスパーは注意したが、ミラはプリエルと並んで寝息をたて始めた。

ミラに仕事は夕方にやると聞いたヴィスパー達はやたら動く事も出来ずにいたが、無為に昼間を過ごすのも勿体なく思い、打ち合わせて、山賊の情報を集めながら警戒をしていようと決めた。
リキュエールは近隣の村の被害確認をする為に馬に跨がり訪ねる事にし、ベルクタイは２０人の兵士と村に山賊が襲撃してきた時の為に持ち運べる防御柵を作り始める。

ヴィスパーは村長や村人から山賊の詳しい動向を訪ねていた。
「じゃあ、死者は殆ど出ていないと？」
「そうです、奴らはこちらが死ぬと生活が困る、物をとる相手がいなくなりますからな、過剰な略奪もしないのです」
村長は答える。
「そうですよね」
ヴィスパーは納得した、山賊達も結局は生きる為に近隣の村の力が必要なのだ、物にしても略奪のやり過ぎは自分の足を食べるタコと同じなのだ。
しかし、待てよ……ヴィスパーはある違和感を覚えて顎に手を当てた。
「どうされました？」
「あ、いえ、何でもありませんよ」

村長の問いにヴィスパーは慌てて手を振った。

朝に出たリキュエールが帰って来たのは昼過ぎであった。
「ご苦労様です」
下馬したリキュエールをヴィスパーが迎えると、
「お出迎えありがとうございます」
そう言いながら、かわいい笑顔を返してくる。
「どうです？　付近の村は全て回れました？」
「ええ、地図にかかれた場所は……3ヶ所ですから、時間もかからなかったですよ」
ヴィスパーの質問にリキュエールは馬の首筋を撫でながら答えた。
「村の規模は？　この村より大きかったですか、過剰な略奪はありませんでした？」
「いえいえ、後はどこも１００人程度じゃないですか？　それに最近は略奪も減っているそうです」
リキュエールが答えながら首を振る。
「やっぱり……」
ヴィスパーは腕を組んで考え始めた。
「どうしたんです？」
リキュエールは首を傾げて見せた。

「帝国軍だと？」
「その通りです」
声を上げたベルクタイ。
ヴィスパーは頷く。
テントの中である。

時刻は昼は大分過ぎて、夕刻が近くなっている。
プリエルとミラもようやく起きていた。
「何でですか？　相手を見ないでわかるんですか」
「ええ、わかります」
リキュエールにヴィスパーは答えると、
「凄い、どうして？」
プリエルがヴィスパーを興味ありげに見る。
「数が多過ぎます、３００は無理だ」
「あっ！　そうですね」
ヴィスパーの言葉にリキュエールが声を上げる。
「そう、わかりましたか？　この周辺にはあと3ヶ所の村がありますけど、それぞれはこの村より規模が大きくない」
「なるほど、自ら生産をせずに略奪で喰っていくには村人の合計が少ないな」
ミラがヴィスパーを見る。
「そうなんだよ、村人が餓死しないような略奪をしていたら、山賊の３００人は相当我慢の生活を強いられると思うよ、略奪しているのにされてる方より貧しくなるかも知れないね」
ヴィスパーが笑いかけると、
「なるほど、それは傑作な事になるな」
と、ミラは口元に笑みを浮かべた。

「じゃあ、奴らは山賊を装った帝国軍って訳で、補給はキッチリ受けているって考えるのか？」
「ええ……彼らが無理な略奪をしていない以上は武装鉄橋との距離も考えると自然と浮かびますよ」
ベルクタイにヴィスパーは言う。
「なるほど、じゃあ何の為に？」

「おそらくメリエルさんが帝国軍の動向を気にしている様に、帝国軍もこちらを気にしています、偵察が目的じゃないでしょうか？」
「始めに２０人いたっていうのはどういう事？」
プリエルが不思議がる、
「始めは２０人の本当の山賊だったのかも知れませんね、それを知った帝国軍が補給と支援をしていると思います」
ヴィスパーもその辺りは推測で答えるしかないが、的外れでもないと思っていた。

「ならどうする？　奴らが帝国軍の支援を受けているなり、帝国軍になりかわっていたら厄介だぞ！　３００の部隊に早速、古城だが堅固な要害をとられた事になるぜ」
ベルクタイは地図を見つめて、ため息をつく。
「関係ないな」
腕を組んだままミラは地図に見下げる。
「どうするの？」
ヴィスパーはミラに視線を送った、山賊の不自然な急増と略奪の不自然さにはある程度の推理をつけたが、ヴィスパーには具体的な対処法はまだなかった。
「山賊だろうが、帝国軍だろうが同じだ、敵は無力化するか、処理するしかないからな」
不敵な笑いを浮かべて、１２歳の少女はテントの外に歩き出した。

2

「潜　入」

山に薄暮の時間が訪れていた。

プリエルは周囲に目配せしながら、岩肌に所々に生えている草や木に移動する、急傾斜の岩の斜面は足を滑らせたら、数十メートルを転がり落ちそうだ。
しかし、プリエルは危なげなく、岩肌の斜面を駆けていき、木の生い茂る部分に滑り込んだ。
「なかなか上手く動くじゃないか」
そこにはミラが先に着いていた、さらにその先を伺いながらプリエルの動きを褒めた。
「もちろん、山育ちの娘だからね」
「なるほどな、じゃあ次は少し登るぞ」
自信ありげに答えたプリエルに、ミラは振り返る。
「それはいいけど、この皮ちょっと臭い」
頭からかぶっている狼の皮をプリエルはポンポン叩いた。
ミラも同じような皮をかぶっている。
「我慢しろ、薄暮から夜にかけてのカモフラージュには悪くない」
プリエルの抗議を全く受け入れる様子のないミラはすでに数十メートルまで迫った要塞を見つめた。
ザレマ要塞が目の前に巨大な姿を現していた。

プリエルとミラはザレマ要塞の左右にある切り立った斜面の向かって左側から近づいた。
「谷間でさ、後ろも切り立った山で、正面の平地も狭いし、守りやすい要塞だよね！　要塞自体の規模も大きいし」
プリエルが驚きの声を上げる。
ザレマ要塞はまさにプリエル言った通りの自然を利用した要塞で、古城である為に所々に破損箇所が見えるが、まだまだ要塞としての機能は健在である様子であった。

「斜面を登って回り込み、要塞の裏側に出たい、行けるか？」
ミラが声をかけると、
「あの煙が上がっている辺りだね、行ける！」
プリエルは答えた。
「煙が見えるのか？」
少し驚くミラ。
「気立てはモチロン、目もいいの！　あれは炊飯の煙だよ、もう暗くて、煙も薄いけど、要塞の裏側から上がっているよ、あそこに行きたいんだよね？」
ニッコリするプリエルにミラは口元を緩めた。
「案外、使えるな」

「忙しすぎる！」
少年は文句を言いながら、粗末な陶器を幾つも調理台に並べた。
最大、万単位の篭城も可能な要塞で、厨房も古いがなりに広い。
「しょうがねぇよ、その代わりに食い切れない位の食料を帝国軍はくれる、奴らの分も作ってやらねぇと」　小太りの中年は大鍋のスープを掻き交ぜながら少年をなだめた。
「食料はいいけど、帝国の奴らが何で急に俺達、山賊に援軍をよこすんだよ？」
痩せた青年が錆び付いた包丁でニワトリを乱暴にさばく。
「うちらのボスを帝国軍の少佐にしてやるから、協力しろって話を持ってきたらしいからな」
少年は乱暴に答えると、幾つか並んだ竈を開けて、炊き上がった米を口に運ぶ。

「ボスが佐官なら、俺達も下士官ぐらいならなれるかもな、旨い飯作って名前を売っておくか？」

小太りの中年が少しニヤつくと、

「バーカ、そんな事で知られたら、炊飯兵にされちまうぜ！」

痩せた青年がさばいたニワトリを乱暴にぶつ切りにしながら怒鳴る。

「ちげえねぇや！」

少年が笑うと、三人は声を合わせて笑った。

ほほえましい光景であるが、背後に迫る危険な刃を持つ少女の存在に彼等は気付いていなかった。

第３５話に続く

第三十五話「少女はナイフを弄ぶ」

1

「殺人技」

「だからさぁ、俺は思うんだけどさ、ボスは帝国に利用されてるに決まってるよな」

少年は話しながら皿に野菜を適当に盛りつける、量はマチマチだが、肉ならともかく野菜でとやかくはあまり言われない。

「俺ね……」

少年は自分達の盗賊グループが、帝国に利用されるのは嫌だった、それをあまり現在の状況で話すのは良くないかも知れないが、いつも調理番をやっている気のおける二人になら話してもいいか、と思い口にしようとした.

だが……それは出来なかった。

何だか、口の中が何かで一杯になって喋れない。

少年は倒れた。

薄れゆく意識の中で痩せた青年も同じ様に倒れているのが、ちらりと目に入った。

「覚悟しろ!」

太った中年は背後から首筋に血に染まったナイフを突き付けられていた。

１０秒……いや、５秒での状況の激変。

彼の身体が動く前に同じ料理番の二人は倒れている。

少年が倒れた音に彼が気がついた時には、背後をとられていたので、相手の姿も人数もわからない。
「た、助けて……」
彼は小さな声を震わせた、大声など上げたら、何者かはわからないが、コイツは絶対に躊躇はしないだろうと思った。
「お前、運がいいぞ……助けてやるよ」
背後の声は低い声で喋ってはいるが、男の声ではないと感じた時、首筋にチクリとした痛みを感じた。

「こっちを向け」
中年が振り返ると、そこにはまだ１０代前半に見える少女が立っていた。
袖のないハイネックの黒い服に黒いパンツ、ブーツまで黒の黒ずくめの恰好をしたダークグレーの髪の少女がナイフを持っていた。
「た、助けてくれるのか」
震えの止まらない声で聞くと、
「ああ、ただし今、首に刺した毒で死ななければな」
少女は薄ら笑う。
「な……」
「慌てるな、入った量は微量で数時間以内に私が調合した解毒剤を飲めば、特に何でもない」
少女は首をすくめた。
「わかるな、お前にはやって貰いたい事がある、ちなみに仲間を呼んで、私を捕まえても無駄だぞ、解毒剤は今は持ってないからな」
少女の冷たい視線。
中年は全く逆らう気が起きなかった。

「ミラちゃん、何も殺す事ないでしょ！」
中年の料理番が食料倉庫に同僚の骸を片付けるのを見ながら、プリエルはミラを睨み付けた。
その眼差しはかなり強い物だが、ミラは知らん顔をして料理番の様子を伺いながら、
「3人いたら2人を殺す、そうすれば残った1人は尋問ならば、こちらが驚く程に饒舌に話してくれる、それと同じ事をした」
と、全く意に介していない。
「次はどうしましょう？」
仲間の骸を片付けた中年の料理番は、緊張の面持ちでミラに聞いてくる。
「よし、料理を完成させるんだ、早くしろ」
「わ、わかりました」
ミラの命令に震えながらも、料理を始める料理番。
「お前も手伝え、人手が減ってるんだから！」
廊下の方向を見張りながらミラはプリエルに声をかけた。
「なによっ、そっちが減らした癖に！」
プリエルはふて腐れながら、皿に野菜を盛りつける作業の続きを始める。
もちろん、ミラの行動は必要な事なのかも知れないし、それを徹底しなければ自分が危ない目に会う事がありえるのだが、どうにもプリエルには受け入れるのが難しそうだった。

「よし、終わった様だな」
ミラはトレイに乗せられた食事を見ながら、腰の小さな荷物入れから瓶を取り出す。
「ま、まさか毒じゃないでしょうね！」
焦るプリエル。

「違う、黙ってろ！」
それを睨み付けてミラは瓶からバジルにも似た細かい物をスープや鶏肉に振りかけていく。
中年の料理番は息を呑んで見ているだけだ。
「いいぞ、この料理を出してこい！　下手を打ったらお前はもがき死ぬからな」
ミラが料理番に命令すると、料理番は首を振った。
「料理を出すのは私の役目じゃありません」
「何？」
眉を細めるミラ、
「本当ですっ！　帝国軍が来て、配る人数が増えたので村々から連れて来た女達にやらせてるんです」
中年の料理番は本当にミラを恐れている様子で首を降り続ける。
「人数が増えたなら、料理もさせるだろうが！　見え透いた嘘をつくと毒のまわる前に殺すぞ！」
ミラが凄んで、ナイフを構えると、料理番はひざまづきながら、
「包丁や火があるから、何をするかわからないと、ボスがやらせないんだ！　それで配膳を足に鎖を付けたまま……」
と、必死に説明を終えたのと、厨房のドアをノックする音が聞こえたのは同時だった。
ミラ、プリエル、料理番の3人は一斉にドアに振り返る。

「あの、食事が遅いとレオ様が……」
そこには両足首に鎖で繋がった枷を付けた少女達が立っていた。
6、7人いる彼女達が近隣の村から略奪された者達に違いない。
粗末な麻の服は掠われたままの恰好だろう。
ミラはドアが開く前にプリエルを引きずり落とし、調理台の陰に隠れたので、2人は彼女達には見られていない。

「あ、ああ、準備は出来てるから早く持っていってくれ」
ミラの刺さるような視線を感じながら、料理番が少女達に指示をすると、少女達は料理を台車に乗せて、厨房を出て行く。

「なに？　何で隠れたのよ、ミラちゃん！　あの娘達に助けに来た事を伝えて、協力を頼めたかもしれないのに！」
調理台の下から立ち上がったプリエルがミラに抗議の声を上げる。
「馬鹿な事だ、どうせ協力などあの食事を配るくらいが関の山だし、伝えてかえって緊張や萎縮されて、ばれるのがオチさ、それにお前には解らんだろうが……」
ミラは廊下を確認しながら、厨房のドアの鍵を閉めた。
「あの掠われた女の中に、山賊の境遇に同情して、結局仲良くやっていたり、幹部クラスに上手く取り入って、村で貧乏をやっていた時よりも遥かに裕福に暮らしていて帰りたくなくなっている者がいたら、一巻の終わりだ」
そう言い、ミラは調理台に座った。
「そんな、そんな訳ないよ、みんな帰りたいに決まって……」
「そうでもない……」
プリエルが更に抗議の声を上げようとした時、料理番がそれを遮った。

「しめしもあって、皆と同じ事をさせているがあの中にはボスの個人的な愛人におさまってる奴がいる」
「えっ？」
思わず声を上げて、料理番に振り返るプリエル。
「本当だ、俺も今、言われて気がついたんだ、そいつにこの事を話せば、もしかしたら……」

俯く料理番、
「だろ？　そういう奴はいるかも知れないとは踏んでいたよ、もっともばれていたら、お前には死んでもらったがな」
ミラはナイフをクルクル手の中で回して見せながら、不敵な笑みをプリエルと料理番に浮かべた。

「頭の回る人だ、もしかして俺を生かしたのも理由があるのか？」
「なくもない」
少し震える声で聞く料理番にミラは答える。
「痩せた男は口調や仕草が横柄で気も強そうだ、その上に包丁を握っていたから先ず殺した、ガキの方でも良いが、あのタイプは最後の最後で勝手な正義感みたいな奴で味方を助ける可能性もある上に、奴は見習いで1人で料理を仕上げる事ができない可能性があったからな」
「……確かに、言う通りだよ、ジョシュは気が強く向こう見ずだし、キルトは幼い頃から俺達に育てられて仲間思いで、料理は最近厨房に入り始めたばかりだった」
料理番は参ったと言わないばかりに首を振った。

「ミラちゃん……」
プリエルはミラを見る、まだベリーと変わらない少女がここまで冷静に状況を判断して、人を殺してしまうのだ。
どういう生い立ちを経て来たのか、当然の様に浮かんだ疑問だが、プリエルは聞く気にはならなかった。
どうせ聞いても答えてはくれないだろうし、ミラも話したくはないだろうと思った。
「さてと、後は時間を待つだけだな、薬が効くのは2時間はかかる、それだけ経てば全員が食べてくれるだろう」

ミラは近くの椅子にドカッと座った。

「あの薬は死んじゃったりしないよね？　それにいつも持ってるの？」

「いつもはあんな量は持ってない、昨日の夜に森に入って材料を調達して調合した、あの薬は強力だが、痺れ薬だ」

プリエルの質問にミラは手を振った。

「あの……そろそろ私の解毒剤をいただけませんか？」

恐る恐る聞いてくる料理番にミラは冷たい目線を向け、

「首筋をチクリとやっただけで死ねるか」

そう平然と答える。

「なっ！」

「えっ！」

料理番も驚いたが、聞かされていなかったプリエルも声を上げた。

「さぁ、これでお前を縛る足枷はないぞ、私とプリエルを倒して味方に走れば間に合うかもな……」

ミラにそう言われた料理番、だが彼は黙って首を振り、その場に座り込むのだった。

＊＊＊

「合図だ！」

ザレマ要塞から、火矢が上空に向けて放たれるのを見てヴィスパーは叫んだ。

「いきましょう」

リキュエールが号令をかけると、２０人の兵士達は一斉に夜の要塞に向けて走り出す。

それを阻む物は矢の一本、石一つも飛んでは来なかった。

第３６話に続く

第三十六話「参謀推挙」

1

「帝国の反攻」

「あっさりだな」
ベルクタイの言葉が全てを表していた。
ミラの仕込んだ薬の入った食事を食べた山賊と帝国兵は身体の痺れ、嘔吐、目眩でその殆どが戦闘力を失い、抵抗も出来ずに要塞を占拠され、症状が軽く逃げ出した１０名程を除き、全てが捕らえられる。
山賊のボスでレオナルドという３０代半ばの男や帝国兵の部隊幹部も身体を地面に横たえながら降伏したのだった。

「早速、お手柄だね」
ヴィスパーがミラに駆け寄ると、
「大したことない」
ミラは縛られて繋がれていく帝国兵をつまらない物を見る様な視線で見ながら腕を組む。
「いや、古城とはいえ、あれだけの要塞にあっさりと潜入出来るんだから、たいした事だよ」
笑いかけるヴィスパーに、ミラは半分馬鹿にしたような笑いを返す。
「あの人数であんなに立派な要塞に閉じこもる様な奴らだからな、３００には３００に合った場所がある、要塞の規模に守備人数が足りてなければ警戒も自然と手薄になるものだ、そんな事もわきまえ

ずにいる敵を捕らえてもたいした事じゃない」
「な、なるほど」
ミラの説明にヴィスパーは後ろ頭を掻いた。

「あの、ヴィスパーさん」
リキュエールが声をかけてくる。
「リキュエールさん、どうしました？」
ヴィスパーが首を傾げて見せると、
「捕虜が多すぎるので、移送が少し難しいかも知れません」
彼女は心配そうな顔をして、切り出してきた。
「そうかぁ、総勢３００近くを２０人でみるんだもんな」
言われてみればそうである、自分達の約１５倍の捕虜はいかにもとりすぎである。
「今から幹部クラスを残して殺すか？」
ミラの過激な提案にはヴィスパーとリキュエールは揃って、不安げな瞳を投げかけるに留まる。
「とりあえず幹部クラスの尋問を終えたら、それ以外の帝国兵は解放しましょう、幹部が捕らえられてるのに反撃はしてこないでしょうけど、数時間おきに何十人かに分けて解放すれば、それぞれが武装鉄橋に退却すると思います」
「ですね、私達もアティナに早く帰りましょう」
ヴィスパーの提案にリキュエールは同意した。

＊＊＊

ヴィスパー、ベルクタイ、リキュエールの3人はその日の夜、帝

国兵幹部のうちで痺れ薬の症状が軽い者を取り調べ始めていた。

「どうですか？　リキュエールさん」

先に取り調べを終えたヴィスパーが別のテントで取り調べを終えたリキュエールに駆け寄る。

「ダメです、名前と部隊名しか答えてくれません」

ため息をついたリキュエールに合わせて、

「僕もです、さすが帝国幹部だけに尋問にもきちんと訓練があるんでしょうね」

ヴィスパーもハァーとため息をつくと、ベルクタイも別のテントから出て来た。

「ベルクタイさん、どうですか？」

期待と不安の入り交じったヴィスパーとリキュエールにベルクタイはニッコリ笑う。

「バッチリ聞いたぜ、相手がしぶといから、強い味方の助けを借りたよ」

ベルクタイがテントを笑いながら見ると、ミラが黙ってテントから出ていく。

「ミラちゃん……ですか」

リキュエールとヴィスパーは取調べられた帝国兵を思い、気の毒そうに声を合わせた。

「こんなに早く帝国軍が来るのか！」

深夜のテント内。

主だったメンバーの集まった中で、ミラから尋問の内容を聞いたヴィスパーは驚愕の表情をみせる。

「ああ、間違いない、話によると司令官はバティスタ上級大将、総

勢約３万５０００」
「３万５０００！！　３万５０００の人がいるって事！？」
冷静に説明したミラに、目を見張り、頓珍漢な事を叫ぶプリエル。
「全く帝国は今でもミオクォーレ、バルト、サラセナと戦ってるのに底無しに兵が出せるな」
ベルクタイは驚きを越えて、呆れる。
「同感です、でも負けられません、早くこの知らせをメリエルさ…
…いや、女王陛下に伝えないと」
頷くヴィスパー。
だが、メリエルの名前を女王陛下と呼びなおした所に、プリエルが吹き出したので少し顔をしかめた。

「ここは先に僕が王城に帰って、女王陛下に帝国の侵攻を知らせます」
「そうだな、誰かが早く知らせに行ってやらんとな、カナミちゃんは情報には敏感だから、すでに知ってるかも知れないが、知らなかったら命とりだ」
ヴィスパーの提案にベルクタイが相槌を打つ。
「じゃ私も行くよ！　ヴィスパー君も1人じゃ寂しいでしょう」
プリエルもヴィスパーとしてはあまり認められない理由で立候補すると、
「ああ、そうだな、ヴィスパー君もいいよな？」
ベルクタイが賛成して、確認してきたので、
「寂しい訳ではないですけど、構いませんよ」
と、ヴィスパーは苦笑するのだった。

＊＊＊

翌日、朝日が昇るとすぐにヴィスパーとプリエルは馬を用意して、出発の準備を整えていた。
リキュエールが見送りに来ている。
「じゃ、ヴィスパー君、気をつけて」
馬上のヴィスパーをリキュエールが見上げる。
「わかりました、後の事は任せます、ベルクタイさんとミラにもよろしく伝えて下さい」
「はい、わかりました、私達も捕虜の解放と捕まっていた娘達を各村に送ったらアティナに向かいます」
ヴィスパーとリキュエールは互いにこの後の行動を確認し合う。
「まったく、ベルクタイさんもミラちゃんも早起きが苦手なんだから」
プリエルは見送りに来なかった2人に文句をつけながら、自分ではまだ騎乗技術が拙いので、ヴィスパーの後ろにリキュエールの助けを借りながら乗り込む。

2

「推　挙」

目の前に積まれた書類を一通り片付けると、ローゼンフェリア王国女王のメリエルは座ったまま両手を上げて伸びをすると、
「終わったぁ～」
と、息を吐き、そのまま後ろに倒れ込む。
すでに夜は更けて、深夜と言っていい時間。
「ヴィスパー君やプリエル達は平気かな？」

誰もいない部屋で、誰に問うでもなくメリエルは呟く。
討伐が順調に進んでも、まだ帰って来るには少し早い、それはメリエルもわかっていたが、一日でも早く無事に討伐隊が帰ってくる事を待ち望んでいた。
「でも、平気よね、ベルクタイさんもリキュエールさんもいるから」
そう自分を安心させるとある事に気付いて、身体を起こす。

ランタンを持って廊下をメリエルは歩いていた。
もちろん、自分の部屋の前には親衛隊の兵士が交代で詰めていて、部屋を出る時に付き従うと申し出て来たが、それには及びませんと断って来ていた。
「つまみ食いに護衛を付ける人も変よね」
メリエルは誰もいない事を確認すると厨房に入る。
書類の整理に根を詰めすぎたメリエルは今日は昼食すら食べずにいた事を思い出したのだ。
周りも気付かなかった訳ではなく、ベリーが昼食の時間の確認に来た時、メリエルから今日は時間が空けばこちらから声をかけると告げていたが、それをまったく忘れていたのである。

「さてと、2食も抜いたから少し多めに……」
メリエルは着物の袖を上げて料理にとりかかろうとして、昔を思い出した。
「そういえば昔は一日一食なんて当然だったな」
ふと呟く。
貧しい山間の村ではたびたび食料不足に陥り、皆で力を合わせても足りず、一日中、何も食べない事もあった。

その頃の自分が今の自分を見たら、どう思うだろうか？
それくらいで何を言ってるの、と怒るだろうか？
堕落したわね、と呆れるだろうか？
「文句言わせない、あなたみたいな食べたくても食べられない人を無くす為、私はやるからね！」
メリエルは自問自答して、包丁を持ち料理を始めるのだった。

毎朝の会議。
本日のメリエルの予定や行政政策の進捗や軍事、外交、あらゆる事の報告や提案、承認が女王の謁見の間で行われる。
今日も一通りの報告や承認が終わり、出席していたネシアやカナミ、各大臣などがメリエルからの解散の言葉を待っていた時であった。
「女王陛下、お時間を頂けますか？」
商務大臣が頭を下げて歩み出る。
彼はすでに初老の男性で白髪の立派な髭をたくわえた経験豊かな大臣である。
「どうぞ、何かあれば遠慮なくどうぞ」
メリエルは微笑む。

「ありがとうございます、私には畑違いで申しにくいのですが、実は私の旧知の人物からの紹介で、女王陛下の役に立ちそうな人物がいますので、軍部に推挙したいのですが……」
「そうですか、商務大臣が言われるのであれば、間違い無いでしょう、会いましょう」
頭を下げる商務大臣にメリエルが答えると、
「実は今朝もう呼んであります、女王陛下さえ宜しければ、今すぐ

に呼んで参ります」
　商務大臣は顔を上げる。
「いいですよ」
　メリエルが笑顔で応じると、商務大臣は、
「寛大な対処に感謝いたします、ではすぐに呼んで参ります」
　再び頭を下げると謁見の間から一旦、出て行った。
「もう呼んであるなんて、せっかちですわね、それはそれは優秀な参謀さんなんでしょうね？　カナミさんもお払い箱かもしれませんわね」
「そりゃ怖いわね」
　ネシアが肩をすくめると、隣にいたカナミも口元を緩めた。

「し、失礼しますっ！」
　ほどなく商務大臣に付き添われ、緊張した声を上げて、入って来たのは、赤茶色のセミロングの髪の少女である。
　丸目で鼻も高くないが唇は薄く、まだ幼さを感じさせる可愛いげのある少女であった。
　黒い修道服を着ているのが場違いな様子。
「テ、テスタ・サトーと申します、女王陛下に謁見出来て、き、恐悦です」
　テスタと名乗った少女は王座につくメリエルに土下座した。
「まぁまぁ、頭を上げて下さい、推挙を受けたからには得意な事は何か教えてくださいませんか？」
　メリエルが優しく声をかけると、テスタは顔を上げて、不安げに商務大臣に振り返った。
　大臣が頷くと、
「あ、あの、戦争に関する戦略、戦術には多少の自信がございます！　宜しければ参謀として末席にお加え下さいませ！」

テスタは震える声でそう申告する。

思わずメリエルは視線をカナミに向けたが、カナミは右手の中指で眼鏡を少し上げ、不敵に笑っていた。

第３７話に続く

第三十七話「夕日のローゼンフェリア」

1

「志願動機」

テスタ・サトーは自己紹介を終えると、ペコリと頭を下げて商務大臣と一緒に立ち並ぶ大臣、武将達の一番後ろに下がった。
緊張はしていたが、テスタの緊張の正体はこの国の新しい女王メリエルに謁見した事にであって、実は登用の合否はあんまり関係なかった。

本当のところを言えば、登用されたくはなかった。
歴史が好きで幼い頃から歴史書を読みあさった。
しかし、歴史を勉強すればするほどに戦争という舞台の緞帳の幕が何回も上がり続ける。
歴史を理解するには戦争をよく知らないといけないのだろう。
幼いながらに自分の答えを見つけたテスタは今度は古今東西の戦争を飽きる程に研究し、深い興味を持ったが、そんな頃、両親が戦災に倒れ、１１歳でサタデーの教会に引き取られた。

そのような過去を持てばテスタは戦争を憎む少女になりそうな物だが、テスタは両親が死んだ事は深く悲しんだが、戦争の事を研究するのは止めなかった。

「無くしたい物ほどにその本質を理解しないといけない、それをしないで無くしたい、止めたいと言っても他の者は聞いてくれないし、何より自分が納得できないだろう」

１０歳の時、女の子の癖に戦争の本ばかり読むんじゃないの、とテスタを叱った母親に対して父親が語った言葉がずっと胸に残っていたのだ。

テスタは戦争を無くしたいとかいう理想は持っていなかったし、ただ歴史の延長線上に必ず存在する戦争に興味を持っているだけであったが、その言葉が戦争が両親を奪った後に、戦争の研究を幸せな家庭の居間から教会の蔵書室に場所が移っても続けた理由なのかも知れなかった。

そして、帝国軍の侵攻、王国軍の決死の戦いの末の敗北、帝国の占領を経て、メリエル反乱軍の快進撃からアティナ城攻略へと濁流の様にテスタの目の前で歴史が動く。

そこで偶然、少年に聞かせたアティナ城攻防の趨勢の予想を神父のサタデーに聞かれ、それについての解説まで話す事になり、事態がほぼその通りに動いてしまう。

その後である。

テスタは神父にこう言われた。

「お前は家事、洗濯に失敗が多く、おっちょこちょいで慌て者だ、とても教会には置いておけない」

この言葉に他に行き場のないテスタは頭を下げて、これからは頑

張るので何でも申し付けて下さいと泣きついた。
テスタの懇願に神父は、
「ならば、何でも良いから私の納得出来るような得意な事を言いなさい」
と告げた。

テスタは考えた、１１歳の頃より3年間、サタデーには褒められた事など、殆どなかった。
元々、厳しい人格で褒める事が滅多にない上に、テスタは失敗が多い。
散々、考えた末にテスタは自分の歴史と戦争についての知識を挙げてしまったのである。

これならば、サタデーにアティナ城攻防の際に見解を披露して、的中させた事もあるし、即興で試されても自信がある。
なによりの理由はそれ以外に思い付く物が無かったという哀しさであった。

しかし、これは結果的にはサタデーの神父らしからぬ罠でだった。
それを聞いたサタデーは、
「確かにそうだな、しかしその知恵は教会で活きるものではない、ならばテスタ、紹介するから女王様に仕えて、その知識を活かすがいい、新たな女王メリエル様は戦争孤児救済にも理解を示し、補助金などの手を差し延べて下さった方だ、その方を助ける事は決して悪い事でない」
そう言って、知り合いのよく教会を訪れる商務大臣の紹介で、女

王への謁見を申し込む事になってしまったのである。

行く当てのないテスタが登用を望まないのは、知識について実践しようとは考えていなかった事と戦争を憎んではいなかったが、それを生業にする気になれない自分がいたからであるが、一番の原因は王城に向かうのを躊躇するテスタに商務大臣が、

「なに、女王陛下が簡単に参謀なんて登用する訳がない、ここはサタデーの気を済ましてやることだ、登用されなければ、私からサタデーに言って教会に戻れる様にするから」

と、耳打ちしてきたからであった。

メリエルはしばらく考え込んでから、カナミを少し見て申し訳なさそうな表情を商務大臣に見せながら口を開きかける。

テスタはメリエルの表情に答えを推測し、安堵したが、

「お待ち下さい！」

鋭い少女の声が謁見の間に響き渡り、メリエルの出かかった言葉を止める。

その声の主はショートボブカットの眼鏡の少女、現在王国軍の軍師役の参謀のカナミであった。

「いいじゃないですか女王陛下、その者を私に付けていただけますか？　彼女の参謀としての能力を見極め、改めて陛下にご報告いたします」

カナミは頭を下げメリエルに告げる。

予想外の出来事であった、もちろんテスタにとってであるが、カナミに気を使い、申し出をやんわりと断ろうとしたメリエルにとってもそうであった。

「ええ、そうね、カナミちゃんが良いなら、そうしてもらえるかな？　テスタさんもいいですね？」

メリエルの言葉にテスタは目をパチクリさせて、

「は、はぁ……」

と、気のない返事をしてしまうのだった。

2

「全力疾走」

へとへとになった馬がアティナ市街に入った途端、最後の力を振り絞る様にスピードを上げる。

「あれっ？　自分の家が近いのわかるのかな？」

プリエルが声を上げて、ヴィスパーの両肩に手をかけて覗き込んできた。

「かもね、厩舎についたらたくさん餌をあげないと」　ヴィスパーも答えながらも、手綱捌きは慎重になっている。

実は道中で一度、後ろに乗っているプリエルを落馬させてしまっていたのだ。

幸いプリエルは草の群生している軟らかい土の土手に落ちて、軽

い打撲で済んでいたが、落馬は時として命取りだ。
「城に入ったよ」
ヴィスパーが馬を厩舎に向かわせようとした時、背中がいきなり軽くなり、同時に悪寒が走る。
「プリエルさん？」
声を上げて、思わず振り返ると、プリエルは落馬などしておらず、自分から飛び降り、かけ脚で城の中に向かって走り出していたのだ。
「いち早く伝えたいの！　馬を厩舎に下げるのはお願いね」
走りながらヴィスパーに叫ぶと、プリエルは自慢の健脚で中庭の方向に走り去って行った。

「いくら並脚でも走っている馬から飛び降りるなんて、やれやれだよ」
ヴィスパーは安堵のため息をつく。
プリエルは落馬した事自体を忘れていそうだ。
「メリエルさんと同じ顔していても、やっぱり別人なんだよね、さてと馬を厩舎に入れてあげないと」
自分も早く帰って、みんなに会いたいが、先にこの帰り道、昼夜を問わずに走り続けた馬を労ってあげよう、みんなに伝えるのはプリエルに任せてもいいだろうと思った。

場内の練兵場のはずれにある厩舎に近づくと、厩舎の馬達のいななきが聞こえる。
「もう夕方なんだね、おっと、いつまでも乗ってて、ごめんね」
ヴィスパーは馬を降りて、手綱を曳きながら厩舎に向かって、練兵場に差す夕日を見ながらゆっくりと歩く。

「あ……」
厩舎の入口にやってきた少年は声を上げて、立ち止まる。

「おかえり」

黒い瞳を持つ美しい少女がいた。
偶然に会ったとは少しも思わなかった。
少女は少年を待っていたのだ、言われなくても少年は何となくわかった。
「ただいま、ローゼンフェリア」
少年は微笑んだ。

3
「報告と対策」

メリエルは突然のプリエルの帰還に驚いていた。
夕方にネシア、カナミ、そして数日前に次席参謀として仲間になったテスタを呼んで会議中、廊下が慌ただしくなったと思った直後にプリエルが応接室に飛び込んできたのである。

「プリエル！」
応接室の為に玉座は無いので、上座にいたメリエルは驚きの声を上げた。
「ヤッホー、お姉ちゃん、特ダネ知らせに来たよ」

プリエルはメリエルにウインクした。

プリエルの知らせた情報にメリエル達は驚きを隠さなかった。
実は武装鉄橋への偵察と情報収集から、近く帝国軍の反撃計画があるとは推測を立てていたが、規模が想定よりも多かったのだ。

とりあえずプリエルとヴィスパーは山賊撃退から簡単な報告をして、久しぶりの入浴を済ませてから、応接室に戻ってくる。

「何かいい対策浮かんだかな？」
プリエルはまだ濡れている髪にタオルを巻いている、ある程度の長さがある為に簡単には乾かない。
「あんたらが風呂に入ってる間に浮かぶ訳ないでしょうが」
カナミが呆れて頬杖をついて見せる。
「全くですわ、いきなり３万５０００なんて言われても簡単にはいきませんわ」
ネシアも唇を噛む。

「ああ、そうだった、こっちはテスタ、次席参謀」
「テスタです、よろしくお願いいたします」
思い出した様に紹介するカナミの横でテスタはペコペコと頭を下げる。
「よろしくね、私はプリエル、お姉ちゃんの妹なんだよ！」
「よろしくお願いします、僕はウィル・ヴィスパー、女王補佐官です」

テスタにプリエルとヴィスパーは自己紹介して席につき、バティスタ上級大将率いる３万５０００の帝国侵攻軍に対する対策会議が始まった。

そして会議の結果、帝国軍の侵攻に対し、ローゼンフェリア王国軍はそのほぼ全力の２万６０００の戦力で迎撃する事に決定した。

ローゼンフェリア王国建国初の対外戦争が始まろうとしていたのである。

第３８話に続く

第三十八話「見上げる空」

1

「出　撃」

ローゼンフェリア王国女王メリエルの下命により、動員された２万６０００のうち先鋒隊８０００がネシア・ウェスティン指揮の下にアティナ王城を出撃して、武装鉄橋の東、ヴァンフォーレ草原に向けて進発していく。

第２陣はメリエル率いる本隊で約１万２０００。

本隊は各地の守備部隊を併合しながら進み、ヴァンフォーレに布陣する時には１万８０００になっている予定である。

合わせて２万６０００、ローゼンフェリア王国軍の約９０％を越える戦力で、これを破られれば、事実上のローゼンフェリア王国の滅亡に繋がる。

ネシア率いる先鋒隊は武装鉄橋と指呼の距離であるヴァンフォーレ草原に差し掛かって、武装鉄橋方面への警戒態勢を固めた。

これまでの報告では、武装鉄橋より帝国軍がローゼンフェリア領内に侵入した様子は無く、まずはネシアは一安心し、

「後は本隊が着くのを待つばかりですわ、まぁ、その前にバティスタ上級大将がやって来ても討ち取るだけですわ」

と、一緒に従軍するプリエルに笑いかける。

「ネシアさん、強いからね、帝国軍も驚くよ」

笑顔を返すプリエルには山賊討伐から続くハードスケジュールの疲れは見えない。

始めメリエルは山賊討伐の後にアティナへの強行軍をおこなったヴィスパーとプリエルには、今回はアティナで休んでいてはどうか、と勧めたが、ヴィスパーにもプリエルにも、今回の戦いはローゼンフェリア王国の大切な時だからと断られた。
プリエルはネシアの先鋒隊に、ヴィスパーは補佐官としてメリエルに付き従っている。

「でも平気なんですの？　リキュエールやベルクタイさん、それと新しい補佐官さんも山賊討伐から合流出来てないでしょうに、本隊が見つけてくれるといいのですけど……」
草原を遥か遠くに見える武装鉄橋を見ながらネシアはプリエルに言った。
「あ、それは平気だと思うな、リキュエールさん達とお姉ちゃん達は帰り道と行く道でバッタリ合うか、１万以上にもなるなら、リキュエールさん達が見つけると思うよ、どにしろ私たちは急いで来たから探してる余裕がなかったよね」
プリエルが楽観的な様子で答えると、
「ま、確かにそうですわね、心配しても始まりませんわね」
ネシアは苦笑した。

ネシア達の先鋒隊はバティスタの部隊が武装鉄橋からローゼンフェリア領内に侵入する前にヴァンフォーレに布陣をする為、かなりの強行軍を敢行しており、途中でリキュエール達、山賊討伐部隊を捜して合流する暇は無かった。
本隊の到着はおよそ４日後になる予定で、少なくともその間はも

し帝国軍が出撃してきたならば、ネシア部隊単独で帝国軍を防ぎ止める必要が出て来る。

「偵察隊からの連絡はまだありませんの？」

ネシアが聞くと、プリエルは首を振った。

「河を渡って武装鉄橋を偵察に出ている隊からも連絡はないよ」

「そう」

プリエルの返事にネシアは安堵の息をついた。

バティスタ部隊はまだ武装鉄橋に到着していないのだろう。

武装鉄橋ザフォリアは早い話が橋を要塞化した物で兵士が居住する事も出来る巨大橋であるが、３万５０００もの戦力は収容不可能であり、バティスタ上級大将率いる帝国軍は武装鉄橋には駐屯せずにそのまま橋を渡り、すぐにローゼンフェリア領内に侵攻を開始すると推測された為に、かなり前の時期から十数名の偵察部隊がひそかにセリア大河を渡って帝国領内に入り、武装鉄橋を通過する前に帝国軍の接近を知らせる役目を担っているのである。

「お姉ちゃん達が帝国軍が武装鉄橋を渡る前に来てくれるといいね」

プリエルが陣を構築している味方の兵を見ながら言ったが、ネシアからの返事はない。

「ネシアさん？」

ふとネシアに視線を移すと、ネシアは鋭く大河を挟んだ帝国側の遠くの山を見つめて、

「……そう簡単ではないですわね」

と、先程ついた安堵の息をため息に変える。

ネシアの視線の先の山々からは幾筋かの狼煙が上がっていた。

「んっ……」

プリエルも思わず瞳を細めた、その狼煙の意味は知っている。
狼煙は対岸の帝国領内に潜入した偵察部隊からの物であり、それは帝国軍の大部隊が武装鉄橋に向かいつつある事を示していた。

2
「回　顧」

メリエル率いる本隊はネシアの先鋒隊に3日程の遅れで、各地の戦力を吸収しながら進み、現在は約1万5000の戦力になり、進行を続けていた。
この規模は旧王国軍の1個師団よりも少し多めにあたる、ちなみに師団の編成定数は各国で違うが、帝国軍も王国軍と定数は同じである。

「女王陛下」
ベリーがメリエルを乗せて進む馬車に駆け寄る。
現在、本隊は通常の徒歩の速度で進行中であり、馬車もゆっくりと進んでいるので、少し早足ならば十分に並んで歩けた。
いくらネシア部隊に早く合流したいとはいえ、ずっと移動速度を上げる訳にはいかない、部隊の大部分を占める徒歩の兵士が疲労してしまうからである。
「ベリーちゃん、どうしたの？　入って話をしましょう、少し止めてください」
ベリーの呼びかけに気付いたメリエルが馬車の窓を少し開けて、乗り手に告げると乗り手は丁寧な手綱捌きとかけ声で、二頭立ての

曳馬に停止の合図を出す。
流石に女王の乗る馬車の曳馬は訓練が行き届いており、スッと馬車はベリーの横で止まった。

親衛隊の兵士が馬車のドアを開く、
「女王陛下、失礼します」
頭を下げて、ベリーは馬車に乗り込んだ。
馬車は3人ずつ向かい合って並ぶ6人乗りの物だが、かなり余裕があり、内装も豪華であった。
「いらっしゃい、ベリーちゃん」
メリエルは薄手の着物姿だった、ベリーに微笑みかけてくる。
「あ、いや」
思わず馬車内を見渡すベリーに、
「ああ、この馬車は帝国軍の領主が巡察とかに使うとかで、城に置いてあった物を使ってるの、本当は外装ももう少し派手だったのは外させたのだけども、内装はすぐにはいかないらしくって……」
メリエルは少しバツが悪そうに俯く。
「そ、そんなメリエルさ……いや、女王陛下、私はそんなつもりじゃ」
ベリーは慌てて手を振りながら頭を下げる。

「いいの、それに公の場所でなければ、昔みたいに名前で呼んでね」
メリエルは顔を上げた。
「メリエルさん……」
「立場は変わってしまったけどね、私は村にいた頃の事やみんなを大切にしていきたいの、あの頃の自分をどこかに残したい」
顔を上げたメリエルは何か悲しげである。

少なくとも今の顔に貧しい山間の村から一国の女王に成り上がる歴史的な快挙を成し遂げた満足感は感じなかった。

「私は初めてこの馬車を見た時、この馬車一台作るお金で私達の村がどのくらい食べられたのだろうって考えたんだ」

ぽつりとメリエルが呟いた。

「この馬車一台のお金があれば、ロット君の家族はあんなにならなかったんじゃないか、村のみんなも苦しまなかったんじゃないかなって……」

「ロット君……」

ベリーも悲しげに村にいた少年の名前を小さな声で言った。

ロットは村にいた少年で父親のカラジと母親のメインと村の中では比較的裕福に暮らしていた。

父親のカラジが畑作業の腕前が良かった上に、母親のメインも働き者だったからであった。

ロットは１０歳で、ベリーとは歳が近かった為によく遊んだ記憶があった。

明るい少年であるが、やんちゃな所が無く、気の優しいイタズラなどはしない男の子だった。

しかし、そんな家族も新しくやってきた帝国の重税に苦しみ飢え、そして悲劇は起こる。

少しでも夕食の足しにする為、山で慣れない山菜採りをして毒草に当たり、メリエルの必死の治療むなしく、ロットとメインは死んでしまい、その怒りを駐屯してきた当時の領主スティングに向けたカラジは斬首に処された。

「いつの間にか私は馬車に乗って、移動する様になって……」
メリエルは前はカナミに勧められた馬車での移動を拒否して、みんなと一緒に歩いていたが、女王になってからは警護上の理由とカナミからの再三の強い勧めで最近は移動に馬車を使っている。
「でも、それはメリエルさんのせいじゃないです」
「わかってるよ、私が馬車に乗った方が警護はしやすいしね」
声を上げたベリーにメリエルは頷く。
「でもね、いつしか豪華な馬車に乗るのが当然になって、村のみんなも思い出せなくなるような自分になるのは嫌なんだ、上手くは言えないけど……」
「わかります、メリエルさんの言いたい事わかりますよ、そんなメリエルさんなら大丈夫です、私はメリエルさんを信じてます」
ベリーは笑う。
「ありがとう、ベリーちゃん、でも私が村の事を忘れている様だったら、叱ってくれていいからね」
「わかりました、任してくださいね」
メリエルの言葉にベリーは嬉しそうに答えた。

「そうだ、そう言えばベリーちゃん、用事は何?」
思い出した様にメリエルがベリーに訊く、
「あっ、そうでした、リキュエールさん達がこの本隊を見つけてくれて、合流してきました」
明るい声でベリーは報告した。

＊＊＊

ベリーが頭を下げて馬車を出ると、馬車はゆっくりと進み始める。
青い空をベリーは見上げた。
懐かしい村での思い出。
ロットはいつも1人の年上の少女が通りかかると、顔を赤らめて、友達にからかわれていた。
しかし、顔の見分けのつかない年上の少女の双子の妹がやって来てもロットだけは見間違えなかった。
なぜだかはわからなかったがロットだけは双子をきちんと見分けていた。

いや、見分けていた訳じゃなかったんだろう。
ロットはメリエルを見つけていたのかも知れないと空を見つめ思いながら、ベリーは呟いた。

「ロット君、メリエルさんはもう村にはいないけど、がんばってるよ」

第３９話に続く

第三十九話「第二次ヴァンフォーレ会戦」

1

「激　突」

ヴァンフォーレ草原。
普段はセリア大河を通り抜けた涼しい風が吹き、人気もない静かな草原に慌ただしい様々な物音が起ちはじめた。
ローゼンフェリア王国軍先鋒部隊が帝国軍を迎撃する為に動き始めたのである。

ほぼ一日前にヴァンフォーレに布陣をしていたネシア部隊はすでに陣地の構築は終えていた。
「すぐに来るかな？」
プリエルが心配そうに聞くと、
「さぁて……相手にも事情がありますからね」
ネシアは答える。
行軍の疲れを武装鉄橋の近くで野営をして癒してから、鉄橋を渡るか。
一気に鉄橋を渡ってくるか。
どちらも考えられ答えようがなかった。

時刻としては昼過ぎで、合戦には不自由はない。
帝国軍も偵察等はもちろん行っているのは当然で、ネシアの部隊が陣地を昨日から構えていて、大体の規模もわかっているだろう。
戦いをいきなり挑んで来る事は充分にある。

出来ればメリエル率いる本隊と合流したかったが、贅沢は言えない。
「プリエル、わたくしにとって戦はいつやるかではなく、勝つ物ですわ！　少なくともわたくしはそう教えられましたの」
ネシアはそう答えて踵を返して歩き出した。

「帝国軍の先鋒部隊が武装鉄橋を越えました！」
「数は約１万４０００、上級大将旗が見えます」
偵察に出した兵士が次々とネシアに報告を上げて、立ち去っていく。
「先鋒部隊に上級大将が位置するとは……」
ネシアは顎に手を当てて、考える仕草をする。
「戦が好きなんだよ」
傍らのプリエルがあっけらかんに言う。
「そんな！」
ネシアは声を上げたが、
「だってネシアさんもそうでしょ……似たような人が来たんだよ」
プリエルにそう答えられると、どうにも反論が出来なかった。

その日の夕方に両軍はヴァンフォーレ草原で向かい合う。
ローゼンフェリア王国軍先鋒部隊８０００を率いるはネシア・ウェスティン。
対するはアルザード帝国軍ローゼンフェリア討伐軍先鋒部隊１万４０００を率いる総司令官バティスタ上級大将。
数の上では帝国軍の有利は動かない。

先に布陣して守る側であるネシアが、それをどこまで活かせるかが勝負の分かれ目に思われた。

帝国軍の陣営ではすでに準備は整っていて、司令官の命令を待つばかりになっている。

「バティスタ上級大将、いかが致しますか」

副官の問いに褐色の肌を持つ筋肉隆々の男は、

「中央を突破しよう、これが確実だ」

そうキッパリと告げる。

「相手は草原の丘陵を利用して、守備陣を構築しています、強引に中央突破をすれば被害は大きいと思われます、別の方法を考えるべきでは？」

副官が頭を下げ、進言するがバティスタは首を振る。

「損害は別にかまわんよ、相手は我々を見誤ってるんではないかな？」

「は！？」

「我々とローゼンフェリア軍は立場が違うのだよ、情報によると、かの女王は約3万の兵を失えば全てを失うが、我々は3万を失ってもまだ残るではないか、相手に相応の打撃を与えられたら我々の損害は考慮する必要など無いのだ……さぁ、突撃だ！」

不思議がる副官に、バティスタは笑い、大きく手を挙げたのである。

「帝国軍が動いた！」

プリエルが指をさすと、帝国軍は一気に雪崩の様に動き始めた。

「中央突破を強引に計るつもりですの？　あいつら馬鹿ですわよ、

弓隊！！」
ネシアが怒鳴り手を上げると、一斉に弓隊が弓を引き絞る。
「充分に引き付けて、放ってくださいませ！」
手を上げたまま、突撃を敢行する帝国軍１万４０００を睨む。
なだらかな丘陵を帝国兵が駆け上がり始めた時に先頭集団と後続集団の距離が詰まる。
「射てっ！」
ネシアの手が振り下ろされ、一斉に矢が放たれた。
矢が雨の様に降り注がれて、帝国兵はバタバタと倒れていく。
しかし、帝国軍の突撃は止まなかった。

2

「凶　報」

メリエル率いる本隊の行軍の速度はヴァンフォーレへの距離が近づくにつれ、上がっている。
ヴァンフォーレまでの距離は僅か1日、明日にはネシア部隊との合流を果たせる距離までに軍を進めていた。
「夜も進めないかな？」
そんな事を思わず漏らしてしまうメリエルだが、
「歩き疲れてヘトヘトになった部隊が戦える訳がないわ、もうちょっと考えなさいよ」
カナミに叱咤されて不安げにメリエルは夕食のスープを口に運ぶ。
「メリエルさん、まだネシアさん達が帝国軍と戦ってる訳じゃないし、しっかり足に地を付けて行きましょうよ」
ヴィスパーもカナミに同意する。

野営のテントの中、メリエル、リキュエール、ベルクタイ、ヴィスパー、ローゼンフェリア、カナミの6人で車座で食事を取っていた。
ここではメリエルは公ではないので、女王陛下と呼ぶのを止める様に皆に告げている。

「確かにそのような知らせは聞いていないけど」
メリエルは俯きながら、鶏のササミを口にした。
メリエルも一般の兵士達と較べたら高級であるが、高級士官クラスとは大差ない食事である。

「とにかく早く寝て、早く起きて進む！　これを実行する為にもう寝るわよ」
カナミが手を叩いて立ち上がると、
「そうだな、今日は酒は少量に控えるか！」
ベルクタイも立ち上がり、伸びをした。
「飲まないで下さい」
リキュエールが苦笑しながら、食べ終わった皿をまとめる。
「じゃあ、今日は早めに寝ましょう」
メリエルが皆を見回した時に報告官が慌てた様子で野営テントに入って来ると、手を震わせながら、報告書を読み上げた。

「女王陛下にご報告いたします、ヴァンフォーレにてネシア中将率いる先鋒隊が帝国軍の先鋒隊１万４０００と戦闘状態に突入する公算が非常に高いとの連絡を先鋒隊との早馬が！」

ゆっくりと顔を上げたローゼンフェリア以外の表情が一変した。
「間に合わなかったか、後はネシアちゃんの粘りにかけるしかないよな」
ベルクタイが首を振る、カナミは、
「相手は先鋒隊よ、ネシアには守りに徹する様に伝えてあるわ、相手も守りに徹するネシア部隊を見て、後続の味方を待つか、様子見をする可能性もある」
と、メリエルを見た。
ヴィスパーもカナミと同じくメリエルに視線を向ける。
「どうする、今からでも援軍を急行させる？」
問われたメリエルは数秒間の沈黙の後、周りを見渡し答えた。
「急行しても、私達が疲れていたら、全くの無駄になってしまうし、戦いの推移もまだ報告にありません、今は次の報告を待ちながら予定通りの休養を！　なお先鋒部隊が戦いに突入した事は他言しないでください、兵が高ぶって休養になりませんから！」

＊＊＊

皆が解散した後のテントにローゼンフェリアが残っているのを、メリエルは呼び止める。
「ローゼンフェリアちゃん、帰らないの？　それとも一緒に寝ようか？」
口元に笑みを浮かべながら、笑いかけるメリエルにローゼンフェリアは顔を向けた。
「どうせ寝れないくせに」

「そうだね、どうせ布団に入っても寝れないね、だって今もプリエル達が必死に戦ってるかも知れないんだからね」
メリエルは笑みを苦笑いに変えながら、簡易ベットに布団を被せた。
「いつかは慣れる」
ローゼンフェリアはいつもの抑揚のない調子で言ったが、メリエルは布団を敷く手を止めて、
「慣れたくない」
それだけ言うと、再び布団を敷き始める。

ネシア部隊の敗北を告げる報告が届いたのは、それから数時間が経った真夜中であった。

第４０話に続く

第四十話「月が欠けるのは……」

1

「暗　夜」

月が照らす夜。
ヴァンフォーレから撤退する部隊の面々は傷つき重い足どりで列をつくって歩いていた。
その列を守る様に付いている２００程の部隊の先頭に立って、ローゼンフェリア王国の女王の妹であるプリエルは東に撤退していく負傷した味方達に、
「大丈夫だよ、落ち着いて歩いて、帝国軍は追って来ていないよ」
「近くに本隊が来ているよ、もう少し」
「倒れそうな味方は支えてあげて、味方を一人助けた人は敵を一人討ち取ったのと同じ功績を陛下に進言するよ」
と、様々な言葉をかけて励ましていた。

そんな本人も無傷ではない、左腕に矢が命中し手当てを受け、帝国兵にシールドを強く額にぶつけられ、流血したのを包帯で止血している。

「プリエル様、さっき言った倒れそうな味方を助けたら、陛下に功績として報告するって、本当ですか？」
怪我をしているらしい味方を背負っている青年の兵士がプリエルに聞いた。

少し柄の悪そうな兵士だが、本人は手傷程度しか負っておらず、元気そうである。
「うん、ちゃんと進言するし、認めさせるよ、もし嫌なんて言ったら、次の日にお姉ちゃんをふん縛って、私が替わりに認めるよ」
プリエルが胸を張って答えると、
「そりゃあスゲェ！」
周りの兵士達はドッと笑い始める。
戦闘が終わって数時間、部隊の者が笑いあったのは初めての事かも知れなかった。

撤退をしていく王国軍を見守りながら、プリエルは西のヴァンフォーレの方向を見つめた。
「……ネシアさん」
「どうされました？　プリエル様」
近くにいた士官に声をかけられて、プリエルは振り返り、
「ちょっと、ここは任せたよ、嫌な予感がするんだ」
そう告げると士官の言葉も聞かずに走り出した。

＊＊＊

夜のヴァンフォーレに剣撃の音が響き、叫び声を上げて帝国兵が倒れた。
激しい息遣いで、倒れた帝国兵にネシアは止めに剣を突き立てる。
「ハァー、ハァー」
ネシアは周りを見渡しながら息を整えると、次の敵を見つけ走り出した。

「ヴァンフォーレで、ヴァンフォーレで負けるなんて、ヴァンフォーレで負けるなんて！」

呪詛の様にネシアは叫ぶと、あまりものネシアの様子に怯えた少年の帝国兵を袈裟斬りにした。

数時間前。

第2次ヴァンフォーレ会戦は帝国軍の苛烈な突撃から幕を開けた。

中央突破を画策した帝国軍に対し、ネシア部隊は弓隊を展開して苛烈な集中攻撃を加え、相当な損害を与えたが、帝国兵の突撃は止まらなかった。

二倍近い数を背景にした強引策に弓隊の矢の壁は突破された、ネシアはそこで帝国軍の突撃を阻む為、自ら先頭に立ち、帝国軍の鼻っ柱に丘陵の傾斜を利用した逆落とし突撃を仕掛けたのだ。

この逆落とし突撃に帝国軍の前衛は押されまくられ、大きな損害を受けて丘陵から押し返された。

勢いを掴んだと確信したネシアは丘陵を駆け降りた勢いをそのままに帝国軍を中央突破により分断し、一気に勝負を決してしまおうと決断する。

「ここは一旦、丘陵の頂上に退こうよ、帝国軍がまた突撃してきたら、同じ事を繰り返す、相手が再突撃を躊躇すれば持久戦になるよね、そしたら、お姉ちゃんが来るまで時間が稼げるんじゃないかな？」

その時、傍らのプリエルが進言してきたが、ネシアは、
「援軍があるのは帝国軍にしても一緒ですわ、それも女王陛下の本隊よりも数が多い、ここは敵の先鋒を壊滅させて圧勝する事が戦局全体を有利に転回させる鍵になりますわ！　もっと全体を見ながら戦わないといけませんわよ！」
と、戦場の興奮も手伝い、プリエルの意見を叱咤して退け、突撃を敢行したのである。

これが分かれ目であった、王国軍が帝国軍前衛を蹂躙し、後衛にさしかかった所で後衛の帝国軍はこれを予想していたかの様な見事な展開で、半月陣を形成して、王国軍の突撃をきっちり受け止めたのである。
そこでバティスタはやっと戦場に自ら率いる特別部隊を後衛から投入した。
通称、巨人連隊。
その名の通り、身長２メートル、体重１００キロ以上、更に高い運動能力を持ち、バティスタ自ら課した苛烈な訓練に耐え抜いた者だけが所属を許されるバティスタ上級大将直属の精鋭であった。

勢いを止められたネシア率いる王国軍に、バティスタ自ら率いる巨人連隊の約３０００を先頭にした帝国軍後衛８０００は半月陣を更に伸ばして、包囲態勢をとりながら圧倒する。
いつの間にか蹴散らした筈の帝国軍前衛も散り散りになった部隊を各個ながら立て直し、ネシア部隊の後方を突き始める、この辺りは訓練、経験の行き届いた帝国軍の見事さである。

ネシアはすでに自分が罠にかかったと自覚した、思い切って部隊を反転させて、各個に部隊の立て直しに成功していた帝国軍前衛を何とか退けて、丘陵の頂上に着いた時には７０００率いて逆落とし突撃を仕掛けた部隊は１５００余りに激減していた。

死傷兵約５５００。

その損害の殆どは巨人連隊の攻撃により受けていた、バティスタを先頭に巨大な剣、槍、鉄棒を振り回す巨人達に王国兵は叩き潰され、舞い上げられ、蹴散らされた。

あまりにも巨大な破壊者達の集団の殺戮劇は普段はネシアを金色の戦女神などと呼んで信頼仕切っていた兵士達の士気をくじき、恐怖と死を与えたのである。

勝敗は決した。

実際、両軍の損害はほぼ５０００と変わらない。

しかし、ヴァンフォーレという戦場に残る帝国軍先鋒部隊は約９０００に対して王国軍先鋒は２５００と圧倒的な物になりかわり、巨人連隊に追い回された者達の士気はすでに戦いを命令できる状態になかった。

ネシアは無傷の兵１０００を自ら率いて、殿を務め、プリエル達には残りの兵を率いて東に撤退し、メリエルの本隊と合流する様に命じた。

2

「死に場所」

「あまり執拗な追撃はありませんでしたわね」
ヴァンフォーレの丘陵に立つネシアを月明かりが照らし出した。
「ハッ、帝国軍にしても相当な損害を受けていますから、夜間の無理な追撃は避けているのでしょう」
近くにいた高級士官が野営の帝国軍陣地を見下す。
「そう……」
丘陵を登って追撃してくる帝国軍を勝敗の決した夕方から防いでいたネシアも細かだが、身体中に傷を負い、疲れ切っていた、自前の青い軍服は自分の者か帝国兵のものかわからない位に血だらけの上に、破れている部分も目立つ。
ネシアは周囲に帝国兵の姿が見えないのを確認すると高級士官に、
「殿の役目は終わりましたわ、全員撤退してくださいまし、任せましたわよ」
と、告げるとその場に座り込んだ。

「あ、あのネシア様は」
駆け寄る高級士官にネシアは笑いかけた。
「不粋な事聞くんじゃ、ありませんことよ」
普段のネシアと違う優しい物言いに高級士官は、
「失礼しました」
と、頭を下げて走り去って行った。

「月って案外に眩しいですわね」
雲間から丘陵を綺麗に照らす月をネシアは座りながら見つめた。
座っているのも少し疲れたネシアは仰向けに大地に身体を預ける。
「月はどうして、満ちたり、欠けたりするのでしょうね」
わずかに欠けた月を見ながら、呟くネシア。
急に睡魔がネシアを襲って来た、自分の傷は各所ともに浅いので、この眠りは戦いの疲れと緊張の糸が途切れたせいだろう。

「あ、こんな所で朝まで寝ていて、帝国軍に捕らえられたら、ウェスティン家の恥さらしですわ」
手探りで傍らの自分の愛用の細身の剣を握りしめて、首もとに当てる。
「まぁ、今でもヴァンフォーレで負けたわたくしは十分にウェスティン家の恥さらしですけど……」
ネシアは瞳を閉じて、一気に剣を引いた。
首筋に温かな鮮血が流れ出したが、不思議と痛みは感じなかなった。

3

「月が欠ける」

ネシア敗北の報を受けたメリエルは起床予定を繰り上げて、陽が昇らないうちに全軍に進行を命じ、カナミとテスタを移動中の馬車

に呼んで、次の対策についての協議もおこなった。
「ヴァンフォーレは突破されたわ、次の迎撃地点を話し合いたいの」
メリエルが切り出すと、
「次はザレマがいいわ」
カナミは即答する。
「ザレマ？　ヴィスパー君達が山賊退治に行ったら、帝国軍の兵士までいた山の要塞がある場所だよね？」
メリエルが膝に置いた地図をみた。
「そうよ、そのザレマ要塞を使いたいのよ」
カナミは相槌を打つ。
「篭城する？」
首を傾げながら、聞くメリエルにカナミは不敵な笑みを浮かべ、
「ええ、一度はしてもらうわね、長くはないわ」
と、だけ答える。

そこにカナミの横に座っていたテスタが、
「相手には長くしてもらうつもりなんじゃ……」
と、少し怯えた声をかけると、カナミはニッコリ笑い、。
「わかる？　あんた、やるじゃない！」
そう言って強めにテスタの肩を叩く。
メリエルには2人のやり取りの意味が全くわからなかった。

＊＊＊

首筋に伝う血液が自分の物でない事にネシアが気付いたのはすぐであった。
「？！」

ネシアがもう二度と開けない覚悟であった瞳を開けると、そこには一人の少女が涙を瞳に溜めてネシアを覗き込んでいた。
「プリエル？」
ネシアは瞳を大きく見開く。
プリエルが首筋に当てた自害の刃を手で押さえ、血を流したのだ。

「あのね、ネシアさん、私、こう思うんだ……」
目を見開いたままのネシアの頬に覗き込むプリエルの涙が落ちた。
「……プリエル」
呆然とするネシアにプリエルは涙を溢れさせていたが、顔は何か全てを赦すような優しい笑顔に満ちていた。

「月がね、いつも満月じゃないのは、きっと、どの自分が１番幸せな自分かわからないんだと思う、毎夜悩んでるんだよ、でも諦めたり止めたりしないで夜が来る度に空にやってくる、毎日、明るく同じ顔を見せてくれる太陽も好きだけど、毎日悩んでも、必ず空にやってくる、私はそんな月が大好きなんだよ」

第４１話に続く

第四十一話「新任参謀」

1

「第二防衛線」

ネシア率いるローゼンフェリア軍の先鋒を破り、ヴァンフォーレ草原を突破したバティスタ上級大将は敗走するネシア部隊を決して全力で追撃するような事はしなかった。

第一の理由は王国軍の敗走兵を仕留める事自体にたいした戦略価値を認めなかった事。

王国軍が殿だけになったとはいえ、丘陵を利用した中々の出来の陣地を構築しているのは事実であり、９０００の兵で力押しすれば敗れない事もなかったが、損害は無視出来ない程度に生じる危険があり、そこまでして止めを刺す必要性をバティスタは認めなかったのだ。

第二の理由は王国軍の本隊が先鋒の敗戦を知り、ヴァンフォーレに急行している可能性が高く、敗残兵を追撃していたつもりが女王が自ら率いているとの情報もある本隊と激突するような事があれば、９０００の帝国軍部隊が巨人連隊あり、武装や訓練度において多少の有利さが働いたとしても、相手の本隊の数の前には苦戦は免れないとして、後続の約２万の味方を待つ判断をしていた。

そして、第３の理由が王国軍が手強かった事であった、実は帝国軍では始めの丘陵への突撃で、王国軍が総崩れになる予想も希望的な観測を立てている者もいたが、激烈な王国軍の抵抗にあった。

流石にバティスタはそのような希望的観測の誘惑には乗らず、王国軍を後衛の半月陣に誘い込む罠を張り、丘陵からの突撃を受け止める事に成功する。

王国軍を罠にかけ、大損害を与えたバティスタだが、帝国軍が受けた損害も大きかった。

王国軍の将ネシアの突撃は帝国軍の前衛に予想外の多大な出血を強いて、予定していた包囲作戦が不完全になり、ネシア部隊を完全に殲滅出来なかったのである。

「予想以上にしぶとい、強引策は通らんかも、知れないな……」

野営テントでバティスタは作戦図を見ながら、１人でポツリと呟くのだった。

＊＊＊

ヴァンフォーレで敗北をしたローゼンフェリア王国軍約１０００はヴァンフォーレの東のザレマ平野で陣地を構築して、帝国軍を待ち受ける態勢をとろうとしていた。

率いているのはベルクタイで次席女王補佐官のミラ、参謀役としてテスタが補佐に付いている。

「よし、そちらにも柵を置いてくれよ」

ベルクタイは陣地を構築している兵士に指示を出しながら、各所をこまめに見てまわる。

「ベルクタイさんは陣地の構築がお見事ですね！」

一緒に歩いていたテスタが感激したように、声を上げると、無精

髭を伸ばした中年男はまんざらでもなさそうに、
「いやぁ、俺はアティナ王国軍にいた頃から、防ぐ戦は得意にしてたんだよ」
と、顎の無精髭を右手でさする。
「そうなんですか、私は戦の陣地を見るのは初めてですけど、兵法書簡などでみた陣地構築の理にかなった堅い陣地だと思います」
テスタはベルクタイに控え目に微笑んだ。

「ありがとよ、褒めてくれたお礼に俺の構築した陣地を参謀殿にご足労が無いように見学させてあげよう」
ベルクタイはひょいとテスタをお姫様抱っこする。
「あああああ？」
いきなり抱き上げられたテスタは訳のわからない声を上げた。
「ほら、いこうぜ、テスタ参謀閣下」
ベルクタイがウインクすると、真っ赤になったテスタは、
「あああう、だだだだた、大丈夫で、ですっ、ひ、1人であ、あるけますぅ」
と、狼狽しながら、手足をばたつかせる。
「いけません、参謀閣下、陣地の隅々まで閣下にチェックして頂くのですからね、不肖ベルクタイがいやらしい気持ちなど一切なく、このままお姫様抱っこで陣地を一回りさせていただきます」
ニンマリ笑うベルクタイ。
「あぁぅ、降ろして下さい、わたし、男の人にこんな事されるの初めてなんですぅ～」
テスタは耳まで真っ赤にして、周りの者が注目するような声を上げるのだった。

ベルクタイが明るく振る舞うのは、もちろん性格もあるが、この後の戦いの厳しさを感じ、それを表に出さない為でもあった。
帝国軍は約３００００、率いているのは帝国軍の猛将の名高いバティスタ上級大将である。
それに対して、３分の１の兵で戦わなければいけないのである、おまけに自分の参謀は現在、自分の腕の中で真っ赤になって、あたふたしている１４歳の陣地すら見るのが初めての元見習いシスター。
そして、副将はその手並みは信頼できるが、無愛想な１２歳の少女ともなれば、ベルクタイのような陽気な男でも、少しは不安を覚えなければ、よほどの神のような名将か２人の少女となら死んでも惜しくないと腹を括った迷将くらいであろう。

「司令官閣下！」
真っ赤になって観念したテスタを抱っこして、陣を視察していたベルクタイに青年士官が走り寄る。
「どうした？」
テスタを抱いたまま振り返るベルクタイに青年士官は一瞬、表情を凍らせたが首を振って持ち直す。
彼は古くからのベルクタイの部下であり、ベルクタイの人となりを熟知していた為、何とか持ち直す事ができたのであった。

「司令官閣下、味方の先鋒隊がこちらに到着し始めています」
青年士官が報告すると、ベルクタイとテスタの表情が一変する。
「ベルクタイさん」
テスタが声をかけ、

「ああ……」
ベルクタイはゆっくりテスタを下に降ろす。
味方の先鋒隊、それはいわゆる味方の敗残兵達であった。

「よし、怪我人はこちらで手当して後方に搬送するようにしよう、ネシアやプリエルは？」
「お二人は部隊の最後列にいるそうです」
ベルクタイの問いに青年士官が答える。
「生きてるか、ならば到着次第、会いに行こう」
「はい……」
ベルクタイは安堵を交えた様子でテスタに促し、彼女も頷いた。

＊＊＊

「怪我人の治療と後送、お手数をかけますわ」
出迎えをしたベルクタイとテスタに頭を下げたネシアは疲れ切っていた。
「ああ、気にすんな、嬢ちゃんは身体平気か？」
「平気ですわ、それよりも次の作戦は？」
気遣うベルクタイにネシアは答えながら、テスタを見た。
「まずはここザレマ平野で防衛戦をおこない、推移をみて、ザレマ要塞に駐留する８０００の女王陛下の軍と呼応しながら、対応していきます」
そうテスタが答えると、
「ザレマ要塞……」
ネシアは呟きながら、要塞のあるザレマ渓谷を見つめた。

ザレマ要塞はザレマ渓谷の奥にはるか昔に、建設された古城で要塞としての規模は大きく、数万の兵を駐屯させる事も可能である。
ザレマ渓谷は左右が切り立った幅の狭い渓谷で要塞のある奥までいけば、ある程度の広さがある。
古城と言っても、未だ要塞の機能は失っていない、むしろ地形の助けもあり、下手な平地の城よりも防御力は高いと言えた。

「ここがそうね」
ザレマ要塞の奥でカナミは兵士達が持ったランプの光が照らし出した扉を不敵な笑みを浮かべる。
「はい、こちらからザレマ山を貫いて裏側に出る様になっている秘密の脱出路です、この扉はカナミさんの言う通り、ここの壁に隠されていました、何で知ってたんですか？」
リキュエールが不思議そうに聞くと、
「昔、ザクレフ将軍に話を聞いた事があったの、この要塞に若い頃に駐屯した事があったらしくてね」
カナミは笑う。
「でもカナミさん、この抜け路をどのように作戦に使いますか？」
「将軍の教えてくれた、この抜け路で私はバティスタ上級大将を刺す！」
リキュエールの問いに、カナミは勢い良く扉を開け放った。

バティスタ上級大将率いる帝国軍は5日間で、後続との合流と再編成と休養を終えて、再び侵攻を開始した。

ヴァンフォーレから東に進み、ザレマ平野に出るとベルクタイ率いるローゼンフェリア王国軍の守る陣地が立ちはだかる。

「バティスタ上級大将、王国軍は目の前の陣地とザレマ渓谷のザレマ要塞に兵を分けて配置しています、なお偵察兵によりますとザレマ要塞には女王旗がかかっています」

副官からの報告にバティスタは腕を組みながら、作戦図を見つめる。

「なるほど、2ヶ所の連携で守るつもりだな、女王を堅固な要塞に入れて守りながら……」

王国軍の防御態勢は上手く機能すれば、効果をあげられそうだが、高度な連携技術を必要とする。

はたして王国軍にその高度な戦術をおこなう練度があるのか疑問だが、バティスタにはヴァンフォーレでの王国軍の予想外の戦いを思い出した。

「ならば連携のとれない、あるいはとりにくい状況で各個に撃破するしかあるまいな」

「それは？」

副官の問いにバティスタは口元に笑みを浮かべて、答えた。

「それはな……」

「夜襲です」

「夜襲？」

テスタの言葉にベルクタイ、ネシア、プリエルが声を上げ、ミラはテント内の隅で腕を組みながら、顔を上げた。

「はい、防御連携をとりにくい夜襲を仕掛けてくる可能性がありますし、それも狭い渓谷を夜に通るとは思えませんので……」

「こちらに来るか」
ベルクタイは顎に手を当てる。
「わかっていたら、手段はあるでしょう？」
ネシアはそう言いながらテスタを見るが、テスタは首を振った。
「いえ、例え予想していて警戒していても、３倍の敵に夜戦の練度から見ても、退ける事は中々、難しいかと」
「じゃあ、どうする？　負けちゃうよ」
プリエルの言葉に、
「はい、だから一度負けちゃいましょう」
テスタは苦笑まじりに答えたのだった。

第４２話に続く

第四十二話「ザレマ平原夜戦」

1

「大夜襲」

「ま、負けるぅ？」

声を上げるベルクタイにテスタは頷く。

「はい、仕方ないです、現在は正面から戦えば、勝ち目はまずないです、従って敵の夜襲があれば、敵わないですよ」

「ちょっと、よろしいかしらテスタさん」

ネシアが手を挙げる、本来ならばネシアやプリエルは負傷兵と共にアティナに帰り、養生しなければ、いけないのだが、たっての希望でネシア部隊の無傷の兵士１０００人とともにベルクタイ部隊に合流していたのである。

「相手の夜襲がわかるなら、伏兵を置くなり、罠を仕掛けるなりしたら、どうですのよ」

「そうだよ、弱気過ぎないかな？」

ネシアの意見にプリエルも同意したが、テスタは遠慮がちに首を振る。

「私たちは夜間の戦闘訓練が十分ではないですから、伏兵や罠を仕掛けるといった戦術はかえって薮蛇になりかねません、それに敵は回りくどい奇襲をおそらく狙ってませんよ」

「え？　どういう事ですのよ？」

ネシアが怪訝な顔を見せると、

「はい、帝国軍が夜襲を仕掛けるメリットは私達とザレマ要塞の味

方の連携防御の阻害に闇を利用しているだけで、元来、兵士数に練度が優る敵が劣勢の私達に奇襲する必要ないですから、敵としても下手に凝って隙を見せるより、堂々と戦いを挑んできますよ」

テスタは肩をすくめる。

「堂々と夜襲ねぇ」

一同の中でも軍隊経験が長いベルクタイは腕を組んで難しそうな顔だ。

夜襲という戦術は奇襲とのセットになっている事が多い。

戦史を紐解けば、その二つをセットに使用している例はいくつも見付かる。

「結局、何も動かないで昼間に普通に戦いを挑んでくる事もあるよね？」

「だよな、相手は3万の大軍だ、時間をかけてゆっくりくるかもしれないぜ」

プリエルの意見にベルクタイも同意するが、テスタは笑顔を見せる。

「いえ、相手がゆっくり時間をかけてよかったのは、ローゼンフェリア討伐軍が全軍そろうまでです、これからは急ぎ足にならないといけません」

「なんで？」

即座にプリエルが疑問を呈する。

「はい、それは相手の指揮官にも、というより帝国軍にはある縛りがあって戦線の膠着が1番の恐れになっているからです」

「縛り？　帝国に急がないといけない理由が？　よくわからんな」

テスタの言葉にベルクタイがそう言って、再び考え込む。

「この戦場だけを見ていたらわかりません、帝国軍はこの東ブルーヴェルト大陸ですでに極北でサラセナ、東でバルト、南でミオクォ

ーレという国々との戦の最中なんです」
テスタは傍らの東ブルーヴェルト大陸の地図をテーブルの手元に寄せた。
「帝国がいかに何十万の戦力を持とうとも、私たちを含めて、４つの方面で戦いをするのは得策ではありません、植民地域からの搾取で潤っていた帝国経済もこの浪費は堪えます」
「４つの国を相手に戦争するのは、お金がかかるんだね」
テスタの説明を理解し笑顔を見せるプリエル。

「しかし、帝国軍は８０万という動員兵士数を誇るからな、まだまだ余裕があるんじゃないのか？」
「そうですわ、帝国軍の戦力は膨大ですのよ」
ベルクタイの意見にネシアが相槌をうつ。
だが、テスタは、
「公称１２０万、実数８０万と言っても、その内の半数は今まで占領してきた国々から半ば無理矢理に引っ張って来て、まともな装備や訓練も受けていない予備軍クラスです、残りの４０万も補給や休養を考えれば常に前線に出せるのは、２０万をどうにか上回るくらいな物ですよ」
そう言いながら控え目に微笑む。
「控え目の癖に随分と強気な事をいいますわね」
「いや～、その～」
ネシアにツッコミをいれられると、テスタはビクッとなりながらも、
「おそらく見立ては間違えていません、カナミさんが各地に張り巡らした情報をきちんと二人で検討しましたから、それに帝国軍が実際に８０万の軍全てに訓練と補給を行き渡らせ、前線に送り出していたら、とっくに大陸は統一されていますよ」

と、小さめの声ながら断定する。

「確かにそうだね、その通りだね」

プリエルには説得力が大であった様であり、結局は他の者も大方は納得する。

「さぁ、皆さん、それでは敵の夜襲に対しての作戦を説明しますので、各部隊の皆さん宜しくお願いしますね」

テスタが皆のある程度の理解に安心した様な様子で、安堵の息をつき、作戦の説明を始めた。

＊＊＊

「上級大将、準備は整いました、いつでも出陣可能な状態です」

日付が変わろうとする夜半、バティスタは副官の声で目を開けた。

ほんの少し前に仮眠をとろうとベットに横になった事を思い出す。

「時間は？」

「もうすぐに日付が変わります」

「予定通りだな、それでは始めようか」

バティスタは自らの褐色の鋼の肉体を鼓舞する様に分厚い胸板を右の手の平で叩いた。

「焦るな、堂々と敵に迫るのだ、夜戦の訓練通りにやればいい」

バティスタが自ら先頭に立ち3万の帝国軍は整然と前進を開始した。

同士討ちを避ける為に松明を持つ兵を増やし、罠や伏兵に対応出来る様に進行もゆっくり、そしてバティスタの命令通り堂々と進んでいく。

少なくとも、隠蔽の意図は全くなかった。

勿論、バティスタはその間にザレマ要塞を忘れるような事は無く、渓谷入口に偵察部隊を置き、ザレマ要塞の部隊が夜間をおして出陣し、帝国軍の背後を襲うのを事前に警戒する準備もしていた。

「帝国軍がきたぞ！」

見張りの兵が闇夜に幾つも現れた松明の光を指差して、まるで死に神が現れたかの様に叫ぶと王国軍の兵士達は警戒にあたっていた者は寝ている仲間達を叩き起こし、それぞれの小隊、中隊の隊長達は素早く持ち場の点呼をとる。

ネシアも自分の指揮部隊の生き残り１０００の部隊を率いて、ベルクタイの指揮下に入り、プリエルを従えて帝国軍を待ち構えた。

「さぁ、バティスタ上級大将に私の腕で挨拶しますわよ！」

ネシアはまだ身体の所々に傷は負っているし、自慢のまるで乗馬服を思わせる様な青の軍服も破れがいくらか目立つが、彼女の闘志はすっかり快復していた。

むしろ、第2次ヴァンフォーレ会戦の借りを返そうと逆襲の念に燃え上がっている。

「あの～、ネシアさん、テスタさんの言った作戦はわかってるよね？」

苦笑しながら注意するプリエルをネシアは思いっきり睨んだ。

「わかってますわよ！　でも合図が出るまでは突出しなければ、個

々の部隊に任せると言われてますわよ、それなら一騎打ちでバティスタ上級大将を討ちとっても構わないでしょ！」

「アハハハ、そうだね、部隊の指揮は忘れないでね」

プリエルはネシアの気迫に多少戸惑いながらも、元気になった彼女に嬉しさを隠せなかった。

王国軍が守備陣形を整えて待ち構えた数十分後にバティスタ上級大将率いる3万の帝国軍は正面より1万のベルクタイ、１０００のネシアのローゼンフェリア王国軍に堂々と夜襲を仕掛けた。

「敵は夜戦には素人だ、鍛え抜かれた帝国軍の強さを素人の集まりに見せ付けるのだ！」

バティスタは吠え、巨大とも言える槍を振り回し、巨人連隊の戦闘に立ち、王国兵を蹴散らす。

バティスタの勇猛さは常軌を逸している、王国兵はバティスタと巨人連隊に早くも追いまくられ始めるが、そこにネシアが立ち塞がる。

「バティスタ上級大将、わたくしは貴方とヴァンフォーレで相まみえた王国軍中将ネシア・ウェスティンですわ！」

ネシアの様相を見てバティスタは鼻で笑う。

「おお、貴女がヴァンフォーレの王国軍の指揮官か、私が貴女を敗北の屈辱や後悔の念から、救ってみせましょう、貴女を楽にしてさし上げる」

槍を構えるバティスタ。

「お気遣い感謝しますわ、しかし、わたくしの屈辱を晴らす為には貴方の首をとること一番ですわ」
ネシアも愛用の細身の剣を抜いた。

「いきますわよっ！」
ネシアはバティスタの弱点を懐と読んだ。
巨大な槍に2メートルを越える身体を持つバティスタに、女性では背は高い方のネシアだが、リーチでは話にならない。
先ずは完全に優っているであろうスピードで懐に飛び込み、バティスタの長い攻撃の間合いを潰そうと目論む。
「せありゃぁぁ！」
裂帛の気合いと共に素早い踏み込みでバティスタの懐に入る。
「しめた！」
完全に槍の使えない距離だ、ネシアは細身の剣をバティスタの右脇腹に向かって斬りつける。
が、バティスタの左拳がネシアのボディーを突き上げる様に捉えたのも同時であった。

ネシアの身体は宙を舞い上がり、したたかに身体を地面にうちつける。
「はがぁぁぁっ！」
肺の中の空気をすべて吐き出した様な感覚にネシアは自分の胸元に嫌な乾いた音が響くのを聞いた。
だが、怯まずに直ぐさまに立ち上がり構えをとる。
「素晴らしいな」
バティスタはネシアに微笑んだ。
脇腹から流れる血には目もくれない。

「ネシア中将、私は久しぶりに戦場で血を流したよ、君の踏み込みは目にも止まらなかったよ」
「光栄ですわ、わたくしも踏み込みに反応されて、当てられたのは2人目ですわ、さすが上級大将」

口では余裕を口にしながら、ネシアは全身から汗が吹き出していた。
バティスタの着けている鎧は軽装であり、脇腹は褐色の地肌がさらけ出されている。
瞬間にボディーパンチを喰らい、その分完全には斬りつけられなかったとはいえ、脇腹には深刻なダメージではなさそうだ。
極限まで鍛え上げられた肉体は細身の剣では、完全に斬りつける必要がありそうだった。

「もう一度飛び込む必要がありますわね」
ネシアは覚悟を決めた、おそらく自分は肋骨が何本か折れている。
幾らスピードに優ってもバティスタの初撃に対しての反応を見れば、二度目は勇気のいる行為だ。
しかし、勝負を避ける選択肢はない、痛む胸を落ち着け、ネシアは一歩前に踏み出した。

「待ちなよ、1人で楽しまないでくれ」
ネシアとバティスタの間に黒い戦闘服に身を包んだ少女が立った。
「あ、あなたっ！」

驚くネシアに少女は不敵な笑みを見せ、そのままの表情でバティスタに向き直った。

「私はミラ・コンティネント、女王補佐官だ、上級大将の首を頂く！」

構えたミラにバティスタは白い歯を見せ、満面の笑みを浮かべた。

第４３話に続く

第四十三話「ザレマ平原夜戦？」

1

「割り込み」

「あなた、何を考えてますのよっ！　私の相手ですわよ！」
ネシアは血相を変えて、割り込んできたミラに詰め寄るが、ミラはバティスタを睨んだままで構えをとっている。
「ちょっと、聞いてます？　ぐううぅっ！」
ミラの更に前に回ろうとしたネシアは言葉の途中で思わず声を上げた。
何をされた訳でもない。
前に割り込もうとした時にミラに左手で軽く胸を触られただけだ。
「何本かいってるな、あいつが見逃すタマか、もう一度カウンターで入れられたら折れた肋骨が心臓に刺さる、引っ込んでろ！」
ダメージを見破られている、ミラに怒鳴られネシアは痛みの冷や汗のまま眉をしかめた。

「わかりましたわ、ここは譲りますわよ」
ネシアは素直に退く、胸の痛み以上に心が痛むが、バティスタに受けたダメージが大きいのと、合戦中にもかかわらずネシアを心配そうにチラチラと見ているプリエルの視線に気付いたからである。
「私を恨むなよ、恨むならダメージを軽減できなかった薄い胸と止めてくれと私に喚いたプリエルを恨むんだな！」
「む、胸？！」
声を上げるネシアを尻目にミラはバティスタに向かって走り出し

た。

「待たせたな、上級大将、さぁ、始めるかっ！」

武器を持たずに走るミラの右腕につけた鉄甲から３０センチ近い刃が飛び出してくる。

「ほぉ、パタだな」

バティスタはニヤリと笑って槍を手放し、腰のサーベルに手をかける。

ミラは急速に距離を詰める。

武器の特性からして、接近戦以外に有り得ない。

「ぬんっ！」

バティスタの横に薙ぎ払う剣撃。

ミラは素早く伏せて躱す。

そこにバティスタは前蹴り。

剣撃は囮で前蹴りを当てるのが本命だ、ミラの体格では受け止められない。

ミラの身体が宙に舞う

しかし、バティスタは舌打ちした。

ミラは彼の前蹴りの足の裏に自分の足の裏を合わせて、威力を利用し後方に自ら舞ったのだ。

大きく飛んだミラは後方に宙返りを一回転すると、着地する。

「格闘の方が好きそうだな、上級大将」

低い姿勢で構えるミラ。

「同じ手は駄目か、金髪の彼女に感謝するんだな」

バティスタはニヤリと笑って、剣を構える。

「ネシアに対しての攻撃を見ていたから、今の前蹴りをかわせたとでも言いたそうだな……別に見ていなくてもこれくらいはどうってことない」
ミラは年齢に似合わない不敵な笑いを返した。

「こちらからもいくか！」
バティスタはミラに向かって走り出す。
軽量のミラやネシアには匹敵しないものの、バティスタの瞬発力はその巨体からは想像が難しい程に素早い。
「ぬんっ！」
振り降ろすサーベルがミラに襲い掛かる。
しかし、バティスタの瞬発力を上回るスピードでミラはサーベルを見事にかわして薄笑いをみせる。
「筋肉ダルマが、サーベルが止まって見えるぞ」
ミラの一言に、バティスタの表情は怒気を帯びる。
相手がひとかどの武将ならば一撃かわされた位で表情を変えるバティスタではないが、何せミラは１２歳の小娘である。
帝国軍の上級大将の地位に就く者がその辺りの小娘に剣撃が止まって見えるとかわされて、そのままで見逃す訳がなかった。

全体の戦局は帝国軍が数と練度の差で優勢ではあるが、まだ勝敗は見えてこない。
序盤ではあるが、現在、王国軍に崩壊や壊乱の兆候は全く見られなかった。
その原因は帝国軍が同士討ち等の混乱を避ける為に奇襲を狙わなかった事が上がるが、それよりも重要な事はあらかじめテスタとカ

ナミが夜戦を予想していた事とベルクタイの守戦の上手さがあった。
さらに付け足すならば、バティスタ本人がネシア、ミラという2人に足止めを受けている事が予想外に大きい。

「第2連隊に意地でも通すなと伝えろ！　3連隊は反撃しろ、押し返せ！　伝令走れっ」
ベルクタイが叫ぶと伝令の兵士が走り出す。
自身はやや後方に司令部を配置して、ベルクタイは各部隊に伝令や炎の明かりを使った信号で指揮を伝える。
彼は自分が最前線でバティスタとぶつかれば、蹴散らされてしまう事は承知していた。
自身はいわゆるネシアやリキュエール、そしてバティスタの様に自ら最前線で敵を討つタイプの指揮官ではなく、味方を鼓舞して少しでも的確な指示を送れる指揮官を目指すのが性に合っていると判断し、実行しているのである。

「どんな感じですか？　ベルクタイさん」
ベルクタイに駆け寄るテスタ。
「いや、よく見えないが、互いの明かりの様子を見れば、まだ良い方かな？　朝まで持つかもな」
ベルクタイは肩を竦めて、テスタに答えたが、
「朝まで？　ダメですよ、予定通り、予定通りで負けてくださいね、退却ですからね」
と、慌ててテスタは告げる。
「やれ、やれ、上官から一秒でも長く持たせろと命令された事はあるが、予定通りに負けろ、って言われた事は初めてだよ」

ベルクタイはため息をつきながら、戦場の一際明かりが集まっている場所を指差した。
「あれは？」
首を傾げるテスタに、
「あれはな、相当名のある奴が一騎打ちをしてるな、周りが明るくしてやってるんだよ、巨人連隊のいる方だ、ネシアちゃんの部隊が止めに入ってる、予定通り負けたきゃ、ネシアちゃんに言わなきゃ！　もっとも俺はそんな恐ろしい事出来ないけどね」
ニヤつくベルクタイ。

もちろん、退却するのは作戦でネシアも承知であるが、第2次ヴァンフォーレ会戦の借りのあるネシアが熱くなれば、素直に退却しないかも知れない事をベルクタイは言っているのであった。
「ああ……あれですか、大丈夫ですよ、バティスタ上級大将本人を止めれば、やはり巨人連隊の進撃は一緒に止まる、よくも悪くも一心同体です」
テスタは遠慮がちな笑みすら見せる。
「いや、テスタちゃん、わかってないな、ネシアちゃんがバティスタ相手に簡単に退くか？　そういう話をしてんの」
テスタの言葉に呆れた様な声を上げるベルクタイたが、テスタは遠慮がちながらも笑みを絶やさずに言った。
「平気です、ネシアさんが無理をしたりしたら、ちゃんと止めて、代わりに戦うようにある人に頼んでありますからね」

幾つもの松明の明かりですっかり辺りは明るく、華奢な体つきがハッキリとわかる黒い戦闘服の少女が華麗に舞い、バティスタの攻

撃をかわす度に王国軍兵士からは歓声が上がり、帝国軍兵士からは悔しそうな声が聞こえる。
　１０回目のバティスタの攻撃をかわしたミラは軽いステップで構えた。
「当たらないねぇ？　上級大将」
　息を整えながら、ミラはバティスタを馬鹿にするように笑った。

「ミラちゃん、凄い、全然当たんないよ」
　プリエルがネシアの傍らで歓喜したが、ネシアは首を振る。
「あの娘は始めからかわしにいってますわ、あれでは討ち取れる訳がありませんわよ」
「ネシアさん？」
「わたくしがやられたからって言ってる訳じゃありませんわ、ミラは攻撃を棄ててます、バティスタ上級大将を足止めしてるのですわよ」
　ネシアの説明を聞けば、プリエルもミラは攻撃をかわしてはいるが、攻撃を仕掛ける事はほとんどしていないのに気付く。
「わざと攻撃をしてないのかな？」
「いいえ、出来るなら攻撃してます、しかしバティスタ上級大将の攻撃はミラぐらいの俊敏さを持ってしても、かわしに集中しないといけない位に鋭いのですわ、変に攻めっ気を出したら、ミラの体格なら一撃で決まりですわ」
「そんなぁ」
　余裕に見えるミラが実は必死にかわしに専念している。
　そう思うとプリエルの笑顔は引きつってしまうのだった。

　肌に密着した黒い戦闘服は自身の汗で濡れ、身体からは湯気が立

ち始めている、ミラは軽快なステップは変わりがないが、スタミナ面での消費が激しかった。
バティスタの攻撃は見た目は派手で、大振りに見えたが、実は鋭く正確で、空いた左手や脚によるフェイントの攻撃もありと気が休まらない。
カウンターを取るなどして反撃に出たいが、隙がなく、あったとしても誘いの可能性もあり、容易には出れなかった。
「クソッ、テスタの奴、バティスタを討ち取るか足止めしてくれ、なんて気安く言いやがって……とんでもない化け物じゃないか」
ミラは小声で言いながら舌打ちし、自分に指示を出した参謀を恨んだのだった。

「バティスタ様、王国軍も必死に抵抗しており、もう一押しが足りません、そろそろ巨人連隊を押し出し一撃加えたい所です」
ミラが距離を置いたのを見計らい副官がバティスタに近寄って、提案する。
暗にバティスタに一騎打ちをここで止めて、部隊の指揮に専念する様に提言しているのだ。
「なるほどな……」
激しい連撃でミラを追い詰めていたバティスタだが、すでに息は整っていた。
「あの小娘はやはり時間稼ぎだったのだな、わかって楽しんでしまったよ」
バティスタはミラを見て笑った。

「しまった、と言って喚いた方が強がるよりも格好がつくと思うが

な」

ミラは前進した、もう時間稼ぎではなく、決着をつけるつもりだ。

「きちんとやる気があるなら、もう少しのってあげよう！」

バティスタはサーベルを腰の鞘に差し、両手を広げて大きく構えた。

「感謝するよ、上級大将」

ミラが間合いを一気に詰めようとした時、

「一騎打ちの時間は終わりだよ！　かかれっ！」

プリエルの声が響き、王国軍兵士がバティスタ目掛けて走り出す。

「なっ！」

プリエルの突然の行動に慌てたミラ。

総大将をやらせてなるものかと、バティスタを守る巨人連隊とプリエルの号令に従いバティスタに向かって、走り出した王国軍は正面から激突した。

第４４話に続く

第四十四話「跳ねる少女」

1

「退却と反転」

プリエルの号令で巨人連隊と激突を始めた王国軍だが、あっという間に押されてしまう。
まるで、大人と子供の力比べである。
「あら、まずいな」
命令を下したプリエル自体の予想を超えて、巨人連隊の圧力は強烈だ。
「お前、邪魔してくれたな、覚えてろ！」
ミラが戦いながら、プリエルに悪態をつく。
「知らないよ！　私はミラちゃんが怪我や死んじゃうくらいなら、怒られちゃう方がマシだよ」
プリエルは巨人連隊の兵が眼前に迫るのに対して剣を構えながら答えた。

巨人達の振り下ろす武器は巨大で重く、当たれば一撃で致命傷を高い確率で受けるだろうが、スピードはプリエルには見切れた。
決して、巨人部隊の兵士の武器を扱うスピードが遅い訳ではない、プリエル自身が元々に動態視力や反射神経、あとは身体能力に優れていた為だ。
今までは戦闘での経験不足からくる緊張や焦りがそれらの能力を殺していたが、何度目かの実戦の経験とネシアによる鍛練でようやく自己の能力を戦いに活かせる様になっていた。

プリエルは巨体の兵士の斧による攻撃を横にかわし、そして素早く相手の懐に入り込む。
来るな、とは感じていた、プリエルはバティスタが一騎打ちの際に懐に入り込んだ敵を素早く迎撃するのを2回見ている。
巨人連隊の兵士には懐に入り込まれた時の対処方として、素早く攻撃する事が訓練として叩き込まれているかも知れないと読んでいたのだ。

そして、読みは当たっていた、その巨人兵士は左拳をプリエルに向かって振り降ろした。
『！！』
不思議な感覚だった、あっという間の短い感覚だったのに、プリエルは自分がその攻撃を見て、息を止め、右手に持った剣で振り下ろされた左拳ごと巨人兵士の左肘から先を斬り払う。
それをまるで、遅く進む時間の中での様に冷静におこなえたのである。

「……！？」
巨人兵士は目を見開いたが、まだ彼にとっての悲劇は終わっていない。
プリエルは左肘から先を斬り払った剣をそこで止めなかった。
その勢いをそのままで斧を持つ彼の右腕まで一気に斬ったのだ。

左腕が落ちて、右腕も落ちる。

「オワァァァァ！」
巨人兵士は絶叫を上げ、プリエルは止めていた息を吐く。
素早く剣を巨人兵士に一度、突き付けると何も言わずに走り出した。

「やるな」
走り出したプリエルにミラが声をかけると、
「うん、でも両手ともやっちゃったのはやり過ぎたかも知れない」
プリエルはミラと背中合わせになった。
「馬鹿だな、あそこまでやるなら、私なら止めを刺していた」
「……」
何も答えないプリエル。
「忘れるな、敵は私やお前を殺す為にここにいる！　いい娘さんでいたければ、元にいた村に帰ればいいだろう」
ミラはそう言い放つと、再び戦場の人の渦に身を踊らせた。

戦いは激しさを増し、ネシア部隊は巨人連隊の前に各所で崩されかけている。
ネシアも痛む胸元に耐えながら必死に指揮するが、精鋭の巨人部隊にこれ以上は戦線を崩壊させずに持たせる限界を越える損害を受け始めていた。

「そろそろ、乱れ始めた部隊がチラホラ見えるぜ」
ベルクタイは注意深く各部隊の動きを見守っている。
「わかりました、あと少しだけ、あと少しだけ抵抗を続けてください」
テスタも目を凝らして、大量に闇にうごめく松明の明かりを見ている。
「わかった、やっぱり朝までは持たないか、流石は帝国軍だな、読み違えたみたいだぜ」
ベルクタイは舌打ちしたが、
「いえ、とても頑張っていると思いますよ、後は上手く撤退出来れば合格点が出せますよ」
と、テスタは頷く。
「それが1番難しい問題なんだけどな……」
不精髭を弄りながら苦笑するベルクタイ。
「お願いしますね、そこが今回の要です、是非ともお願いします」
テスタは念を押す様に告げた。

夜戦の為、練度の高い帝国軍でも多少の混乱は生じていた。
同士討ちや戦闘によって展開した部隊が集結出来なかったりが、主な混乱であったがそれは戦前にバティスタとその幕僚達の予想の範囲内である。
実はバティスタと幕僚達の予想外な事とは時間の問題であった。
「敵が粘る、このままでは予定が狂うな」
バティスタが周りの王国兵をひとまず血祭りにあげ、戦場を見渡した。
「はっ、上級大将のお察しの通りです、戦況全体は有利に展開し、我々のこの戦場での勝利はもはや確実ですが、予定よりも敵軍の守

りは頑強で時間がかかっております」
参謀がバティスタの足元に伏しながら報告した。
バティスタは数秒間の思考の後に、
「次の作戦に電撃的に移行する時期を失うのは避けたい、多少強引策に打って出る、部隊を再編して中央突破を敢行しよう」
と、断を下した。
「了解です、しかし、部隊の再編中に王国軍の逆襲があれば、ある程度の損害が出ますが」
命令を了解しながらも参謀は注意はうながすが、
「3、４０００は覚悟してるさ、戦だからな」
バティスタは汗だらけの顔でニッコリと笑顔を見せたのだった。

「うわぁっ！　こりゃまずいかもな」
ベルクタイが上げた声にテスタが振り返る。
「どうしたんですか？」
「帝国軍が陣形の再編成をしてるんだよ、全面攻勢じゃあ勝ちは動かねぇが、時間がかかるとみて中央突破を計るつもりだぜ、勝ってる最中に陣形を再編するとは大胆な」
ベルクタイは唸りながら腕を組む。
テスタは何も答えず、目を暗闇に細めた。
「今なら陣形を再構築中の帝国軍に大打撃を与えるチャンスだ」
ベルクタイの言葉が終わらないうちに、
「今だっ、今です、今！」
と、テスタがぴょんぴょん跳ねながら、大声を上げる。
「わ、わかったよ、じゃあ反撃の指示を！」
ベルクタイがテスタの様子に少し怯みながら近くの部下に命令すると、テスタはまるで別人のような大声で怒鳴った。
「ダァーッ、違うっ、違います、全部隊全面撤退っ！　とにかく全

力撤退、同時に作戦開始！」

「上級大将閣下！　あれをご覧くださいっ！」
参謀に声をかけられる必要無くバティスタはそれを見ていた。
帝国軍が全面攻勢の横に広げた陣形から、中央突破を計る紡錘陣形に切り替えを行っている最中に、反撃を目論むと見ていた王国軍の明かりが波が引くように一斉に下がり始めたのである。
「どう考える、参謀」
バティスタは退却していく王国軍の明かりを見つめたままで、参謀に意見を求める。
「小官が考えるにこれは罠の可能性を考えなければいけませんが、王国軍には戦力に余裕はないと思われ、低い可能性でしょう、ならば先程までの全面攻勢が我々の想像以上に王国軍に打撃になっており、今の機に退却したのではないでしょうか？」
参謀がそう示唆すると、
「情報でも王国軍にはもう大規模な予備戦力はないと聞くからな、私も罠とは考えないな」
バティスタは同意した。

「紡錘陣形はまだ組み上がらないか？」
バティスタの問いに参謀は周りを見渡して、
「約半数の部隊が集結を終えました、まだ少しだけかかりそうです」
と、松明の明かりを確認した。
「半数で構わん、突撃をしかけよう、あの部隊に少しでも損害を負わせた後に反転して全軍合流し、作戦目標であるザレマ要塞を急襲

して、女王メリエルを捕らえるのだ！」
バティスタは即答する。
「了解しました！　ザレマ要塞にもまだ大きな動きはないようです、ようやく作戦通りになってきました」
参謀は安堵したような声で言った。

帝国軍の作戦とは正面からの夜襲でベルクタイの部隊を早い時間で敗走させ、反転し一気にザレマ渓谷になだれ込んで要塞をも夜襲しようという王国軍の連携の取りにくい夜を利用した大胆な各個撃破作戦であった。
予想外のベルクタイ部隊の粘りであったが、ようやく第一段階がカタが付きそうだとバティスタも参謀達も考えていた。

「帝国軍が突撃を開始して来ました！」
「やけに早いな」
副官の報告にベルクタイは舌打ちする。
テスタも後方の帝国軍に振り返り、
「やっぱり逃がしてくれませんか」
と、ため息をつく。
「どうする？　テスタちゃん、バティスタ上級大将はただじゃ見逃がしてくれない様だぜ」
ウインクしたベルクタイにテスタは、
「まぁ、私達の逃げ脚も中々な物ですし、８割方は大丈夫でしょう」
と、苦笑した。

しかし、編成途中の不完全な状態だったにも関わらず、帝国軍の突撃部隊は全力逃亡中の王国軍の後背を捉え、約２５００近い損害を与え、改めて戦に慣れている強みを見せたのであった。

「よし、反転するぞ！」

バティスタは退却する王国軍の明かりを見ながら全軍に告げる。

粘られはしたが、まずは約1万の王国軍の部隊に５０００以上の損害は与えたとの報告にバティスタは満足した。

帝国軍の被害は２０００は越えておらず、完勝と言って差し支えはない。

「全軍、ザレマ渓谷になだれ込み、要塞を攻略するのだ！　今宵の勝利の宴には皆でメリエル女王陛下の酌で旨い酒を飲んで見せようではないか」

バティスタが告げると、幕僚や周りの兵士達は一斉に喚起の声を上げた。

第４５話に続く

第四十五話「渓谷の檻」

1

「強襲」

バティスタ率いる3万の軍勢と戦ったベルクタイ部隊は約半数の５０００、ネシアの部隊は7割の７００の死傷者を出していた。

「どうやら追ってこないな、作戦通りかい？」

篝火を焚いて、負傷者の手当をしている者達を見ながらベルクタイはテスタに話しかけた。

「はい、帝国軍の狙いはあくまでも要塞のメリエル女王陛下に違いありません」

テスタはそう答えると、負傷者達を治療する看護兵の隊長と二、三言やり取りをしてベルクタイに振り返る。

「さぁ、ベルクタイさん、兵をまとめて下さい、帝国軍を追いかけますよ」

「な！？」

驚きベルクタイはテスタに詰め寄る。

「この部隊は帝国軍と戦って撤退したばかりだ、行けと言われても無理だ！」

「撤退したのは作戦の一環です、まだここには５０００を越える戦力がいるんです」

テスタは顔を上げて即答した。

「しかし……」
ベルクタイは躊躇する、作戦上の撤退とはいえ、兵士達は実際に3倍の敵と戦い撤退の際に追撃を受けたのである、無傷な者でも疲労が無い訳がない。
「私達の部隊がいれば成功の確率は格段に上がります、作戦は順調に推移しつつあるんです」
普段は弱気なテスタだが、こと作戦に関しては引く様子がない。
「どうしてもか？」
「勝ちたいならば」
「わかった、いけそうな兵を選抜するよ」
短いやり取りの後、諦めた様に答えるベルクタイ。
「はい、負傷者と看護中隊をここに残していく手筈はついてます、帝国軍も私達がすぐに追跡を開始するとは思ってないと思いますから」
テスタは頷きザレマ渓谷の方角を見つめるのだった。

帝国軍の進行速度は速かった。
一度、戦った疲れは残っているが、勝ち戦で士気は上がり、次の目標は敵の総大将であるローゼンフェリア王国女王メリエルである事を全ての兵士達が意識している。
「上級大将閣下、そろそろザレマ渓谷に入りますが、補給部隊がついて来れていません」
参謀が声をかけるが、
「構わん、補給部隊は後でもいい！　今は渓谷を駆け抜けザレマ要塞に襲いかかるのだ！」
バティスタは怒鳴り返し、更に馬に鞭を打った。

帝国軍はバティスタを先頭にザレマ渓谷に入る。
渓谷は横幅が狭く、どうしても長蛇の列になってしまうが、それを承知で進行する。
切り立った渓谷の両方の崖に弓兵を配置されて狙われるなどしたら、逃げ場が無く大損害を被るような地形だが、帝国軍は何の抵抗も受けずに渓谷を抜けて、ついに要塞正面に着いたのである。

「なかなかに堅そうな要塞だな」
バティスタは馬を降りて要塞を見上げた。
要塞には篝火が焚かれて、ローゼンフェリア軍の旗が多数立っている。
「覚悟するがいい、メリエル女王」
到着しつつある味方を確認し、山城を睨みつける。

帝国軍は約２８０００、ザレマ要塞を守るメリエル率いる守備隊は８０００から1万の間とバティスタは報告を受けている。
通常、攻城戦ならばもっと戦力が欲しいが、バティスタはその部分は旺盛な士気と練度の違い、そして率いる将の差で圧倒できると確信していた。
ほんの最近まで山間の村娘だった王国女王に戦で負ける訳がない。
驕りでは無く、今までメリエルの人生よりも長い年数を戦いに生きて、輝かしい実績を上げてきたバティスタには当然にそう考える資格があるはずであった。

「あと少しで攻撃部隊が全て渓谷からこちらに抜けてきます！」

参謀がバティスタに興奮気味に報告してきた時、空が少しずつ明るくなり始める。
「夜明けの太陽が見えたら攻撃と行こうか」
バティスタが笑顔を見せる。
その時。
雷のような大音響が通過してきた渓谷の方向から響き渡って来たのだ。
「何事？」
「何だ？」
「どうした？」
意識の殆どを目の前の要塞に向けていた兵士達は背後から聞こえた大音響に驚いて、口々に私語を始めている。
「……」
大音響の余韻が渓谷に反射しているが、バティスタは何も言わずにザレマ要塞を凝視していた。

「バティスタ様……今の音は何でしょう？　まさか石火矢では」
副官の言葉にバティスタは目線も表情も変えないままで、
「馬鹿者、帝国でも一個師団分の装備も無い物を王国軍が持っている訳なかろうが……あれは崖崩れの音だ」
と、ボソリと呟く。
「バティスタ様？」
バティスタの様子はあからさまに変わっている。
普段は厳しくはあるが、滅多に部下を罵ったりはしないし、大音響が聞こえたというのに全く振り返らずにザレマ要塞から目を離さないでいた。

「上級大将閣下！　後方部隊より報告ですっ、ザレマ渓谷の中ほどで大規模な崖崩れです！　道が遮断され、後続部隊との連絡が遮断されました」

馬に乗った伝令が叫びながらやってきた。

「我らを閉じ込めて、城から打って出てくるつもりかも知れませんな、とにかく城を陥落させて、崖崩れを復旧させ……」

参謀がそこまで言ったところでバティスタは正面は要塞、残りは先の閉ざされた狭い路と絶壁に囲まれた広場に響き渡るような声を上げた。

「馬鹿者が！！　あの古城には誰もおらぬわっ！」

まさしく、その通りであったザレマ要塞に偵察兵が近づいても、一本の矢も飛んでこないし、城壁に兵士も現れなかった。

「引き返すのだ！　これは我々を封じる罠だ、引き返して崩れた道を強引にでも這い登り、ザレマ平原に戻るのだ！」

バティスタの怒号にも近い命令が下され、約２８０００の帝国軍はザレマ渓谷を全力で引き返し始める。

しかしながら、そうは簡単にはいかなかった。

左右の絶壁の上から王国軍の弓兵が現れ、先頭に集中して矢を放ってくる。

弓兵の数は左右合わせても数百だろうが、遮蔽物のない場所での高所からの狙い撃ちには流石の帝国兵も脚が止まってしまう。

停滞して密集した所に粗末な陶器の瓶が投げ込まれる。

瓶は直接頭にでも直撃しなければたいした事はなかったが、避ける事が出来ずに瓶の中身の液体を浴びた者はまるで死刑宣告を受け

たかのような叫び声を上げた。
「油だぁ！」
そこに向かって火矢が打ち込まれた。

火だるまになる兵士達、次々と油の入ったと壷と火矢が飛んでくる。
阿鼻叫喚の火炎地獄に矢が降り注ぐ。
「バティスタ様、これでは崖崩れを復旧する事は不可能です！　ザレマ要塞が空城ならば、ひとまず下がりましょう」
参謀が降り注ぐ火矢を避けながら、バティスタに必死に進言する。
「ダメだ、ここで突破出来なければ、ぐおっ」
怒鳴った瞬間、上級大将の右脇腹と左肩に矢が刺さった。
倒れ込むバティスタを数人の幕僚が支え、参謀長が兵士達に、
「上級大将が負傷された、ひとまずザレマ要塞に駆け込むのだ！」
と、叫んだ。

「やったぞ、相手が要塞に戻っていくぞ！」
渓谷を抜けて、平原に出るのを断念し、要塞方面に逃げていく帝国軍を左右の絶壁の上から見下ろした王国軍兵士達は歓声を上げて喜ぶ。
クロスボウを持ったヴィスパーは帝国軍を見て安堵の息をつく。
ヴィスパーは反対側の岸壁で弓隊を指揮しているリキュエールに手を振ると、弓を手にしているリキュエールもこちらに向かって、笑顔で大きく手を振り返してきた。
渓谷は横幅が狭く、声を少し大きく上げれば、会話が可能だ。
「リキュエールさん、ご苦労様です、ここはひとまず任せて、女王

陛下の本陣に帰りましょう」
ヴィスパーが口に手を当てて、声を上げると、
「了解しました、ではまた後で！」
リキュエールは弓を肩にかけ両手を口に手を当てて返事をしてきた。

メリエル率いる本隊は帝国軍がベルクタイ部隊に夜襲をかけたと知るや要塞から秘密の出口を通り脱出を始めていた、そしてザレマ山の北側に出て、帝国軍が南側から渓谷を進んだのを見計らい、山の周りを時計周りに進み南側に進出して渓谷を塞ぐ位置に現在は布陣している。
ヴィスパーとリキュエールはそれぞれ３００ずつの弓やクロスボウを持った兵と５０人ずつの土木建築等の経験者の兵士を連れ、地元の山を縄張りにする猟師の道案内で、すでに昨夕から、渓谷の絶壁の隘路を上から見渡す位置を確保し、道を塞ぐ為に岩や木を用意して待ち構えていた。
そして、帝国軍を通過させた後に両方の岸壁から大量の岩や木を落として引き返す道を塞いだのだ。

簡単に言えば、メリエルを囮にして、バティスタという猛獣をザレマ要塞という檻に閉じ込めた形になっている。
もちろん、メリエル達は要塞にあった脱出路は入念に塞いできていた。

更に帝国軍には追い討ちが襲う。
テスタが相当な無理を言って、ザレマ要塞に向かう帝国軍を追跡させたベルクタイ率いる３５００の王国軍に、バティスタが先を急ぎ後方に残してきた補給部隊が捕捉されて壊滅していたのである。
これは偶然や幸運ではなく、テスタの読みであった、短期決戦を狙うバティスタは前線に補給部隊を張り付かせる事よりも早くメリエルを捕らえて、ローゼンフェリア王国討伐を成し遂げる方を最優先すると読み切り、だからこそベルクタイの反対を押し切る形になっても無理を通したのだ。

結局、バティスタ上級大将の立てた一晩にして、王国軍を壊滅させ、女王メリエルを虜にする電撃作戦はローゼンフェリア王国軍の弱冠１４歳の２人の軍師カナミとテスタに完全に読まれ、見事な切り返しを受けてしまった。

アルザード帝国ローゼンフェリア王国討伐軍は、依然として２万５０００を越える強大な戦力を持ってはいるが、総司令官のバティスタは重傷を負い、補給物資もないままで、深い渓谷の奥の絶壁に囲まれた要塞に完全に封じられてしまったのである。

第４６話に続く

第四十六話「上級大将の苦悩」

1

「武将のけじめ」

バティスタが目を覚ますと見覚えのない部屋のベットに寝かされていた。
天井から架けられたランプの光が煌々と見知らぬやや粗末な部屋を照らしている。
「気がつかれましたか、バティスタ様」
副官が心配したような声を上げながら、部屋に入ってきた。
「ああ……」
身体を起こすと、上半身は装備を解かれ、褐色の肉体に、白い包帯が肩から腹部にかけて巻かれている。
「ここは？」
バティスタが尋ねると、副官は俯き加減に、
「此処はザレマ要塞にございます」
と、答えた。
「私が倒れてからの状況を説明してくれ」
目をしばたきながら少し冷めた様な声で命令するバティスタ。
「了解しました」
声のトーンが下がる副官だか、バティスタが倒れてから判明した事、補給部隊が渓谷に入って来ておらずに物資面で苦しい事や要塞内には食糧や燃料が殆ど残されておらず、女王を始め敵の本隊の秘密の逃げ路となった通路を発見したが、念入りに塞がれている事等を正確に報告した。

「そうか……私はどれくらい寝ていた？」
呟く様に答え、バティスタは立ち上がる。
「はい、半日程です、今日の朝に我々はザレマ要塞に入りました、現在は夜になったばかりです」
副官の返事は覇気が無い。
「わかった、軍服を用意してくれ、幕僚達を集めて今後の作戦を協議する」
だが、そう申し付けたバティスタの声には全くショックの色はなく、いつもの様子なので、
「り、了解しました！」
と、副官もそれをわずかながらにでも取り戻し、敬礼して部屋を出た。

副官が出ていくのを見送ったバティスタは、右拳を振り上げ、力任せにベットに振り下ろした。
乾いた音をたて、木製のベットは中央からへし折れる。
折れたベットにひざまづき、嗚咽ともうめき声にも取れる言葉をバティスタは発していた。
「王国軍め、あの連携防御の構えからして、私に各個撃破させる為の誘いであったのかっ！」
始めから王国軍は連携防御で帝国軍を防ぎ切ろうとも、ザレマ要塞の防御力をいかして守ろうとも考えていなかったのだ。

今のこの状態を作りだし、総合力で圧倒的な戦力を誇るローゼンフェリア王国討伐軍を無力化する事が目的だったのだ。

考えれば、ザレマ平野で戦った1万の軍が粘りを見せたのは、要塞からの味方の救援を期待しての事だと考えていたが違ったのだ。
各個撃破の第1段階を遅延させて、次の段階への対応を急がせて、おろそかにさせようと粘ってみせたのである。
実際に次の段階の帝国軍の動きは今にして考えると場当たり的になった。

そのひとつが紡錘陣形を敷いた時に一斉退却を始めた王国軍に対してバティスタは逃げられないうちに半端な陣形ながらも突撃を敢行し、ある程度の打撃を与えて満足してしまった事である。
1万の王国軍を完全に潰滅させてから、女王率いる本隊と戦えばよかったのだが、ただ電撃的な作戦を遂行し、女王の捕獲を優先した為にそれにも気付けなかった。

そして、ふたつ目は短期決戦を意識するあまり、無力で重要な補給部隊を置き去りにした事。

みっつ目は要塞への急襲の成功を望む為に、渓谷をすんなり通れた事に何も疑問を覚えずに要塞正面までまんまと誘導された事であった。

今、気付いても全てが後の祭りである。
バティスタは肩を震わせて歯を食いしばった。

2

「情け容赦なく」

同じ頃、帝国軍をザレマ渓谷に閉じ込めたローゼンフェリア王国軍はザレマ平野の渓谷入口に集結を果たしていた。

「お姉ちゃん！」

ランプが幾つも燈り、明るい女王専用のテントの中でプリエルは久しぶりに会ったメリエルに思わず飛びついた。

「プリエル、怪我はしてない？」

バランスを崩しながらもプリエルを受け止めて、メリエルは互いの鼻が付くぐらい顔を近づける。

「へへっ、腕に矢を受けて、おでこを盾で叩かれちゃったよ」

あっけらかんに答えるプリエル。

「ちゃんと看護兵の人には診てもらった？」

「まぁね、ヴァンフォーレでは忙しくて自分で手当てしたけど、後でね、しつこい位に診られたよ」

メリエルが心配そうに聞くと、プリエルは舌を出して笑う。

プリエル本人の自覚はどうあれ、女王の双子の妹であるプリエルの負傷である、ベルクタイ部隊と合流した時に看護兵長自ら丁寧に手当てされていた。

「メリエル女王陛下」
姉妹の再会を温かく見守る仲間の中からネシアが歩み寄って、突然、メリエルとプリエルの足元にひれ伏した。
「ヴァンフォーレでの敗戦の上に、妹君に怪我まで負わせる責任、本来ならば自害すべきですが、女王陛下に直接に罰を受けるべく、おめおめと現れましたわ、どうかわたくしに沙汰をお申し付けください」
そう言いながら、涙声でネシアは額を下に敷かれたカーペットに着ける。

「ネシアさん、ダメだよ！　そんな事したら！」
プリエルはメリエルから離れて、ひれ伏したネシアの手を取ったが、
「いいえ、プリエル、これは責任を負わなければいけない事ですわ、わたくしは戦場での功を焦って、味方に要らぬ損害を出した上に敗北したのですわ、更に雪辱を果たす為にした敵将との一騎打ちにも敗れましたわ、これが失態でなければ、なんなんですのよ！」
そう叫ぶと、ネシアはひれ伏したままで首を振って、プリエルの手を振り払う。

「ネシアさん」
メリエルが口を開いて、ひれ伏したネシアに膝をついて座り込む。
「……」
見上げるネシアにメリエルは微笑んだ。
「次も勇気を持って戦ってください、私もみんなもネシアさんを頼

りにして、かけがえのない仲間だと信じてますからね」
そう言って、ネシアの手を掴んで振り払ったプリエルの手を再びとらせた。
「でも、敗北の責任はどうすれば……」
俯くネシア。
「ネシアさん、そういう最終責任は私にあります、敵に対して少ない戦力でネシアさんはよく戦いました、勝敗は戦にはあります、次の戦いに期待します、早く怪我を治してください」
メリエルは優しく言って、両手でネシアの顔を上げて、顔を近づける。
「女王……陛下？」
目を見張るネシアにメリエルが、
「ネシアさんが元気がないとプリエルの機嫌が悪いんです、早く元気になってくださいね、あと公式の場でなければメリエルって呼んでください」
とウインクをすると、プリエルも顔を並べ、
「早く怪我を治して元気になってね、早く帰って来ないと私の方が実戦を積んで凄くなっちゃうぞ！」
ニッコリ笑って、同じくウインクをネシアにしてみせた。
ひれ伏したネシアを2人の同じ顔の姉妹が笑顔で励ましてくれている。
ネシアの頬には、先程までの情けなさに流した涙とは違う涙が流れていた。

＊＊＊

女王専用テントで主だったメンバーで夕食をとる事になった。

ベルクタイは閉じ込めた帝国軍の警戒に道案内を連れて山に入り、ネシアは怪我を女王付きの医者に診てもらう事になったので席を外す。

夕食が始まる。

話題はやはり戦況の事になりがちだ、バティスタ上級大将らしき人物に矢を命中させたという情報もあり、帝国軍はザレマ城に逃げ込んだまま出て来ていないが、今だ戦力は王国軍の倍近くを保持しているのだ。戦勝パーティーにはまだ気が早過ぎる。

「まずはひたすら待つかしらね、まず相手は食糧、物資がないからね、いつかは出てくるわよ」

カナミはコーンスープをスプーンで掻き混ぜながら笑みを浮かべた。

「出撃はしてくるかな？　武装鉄橋からの救援を待つ可能性は？」

ヴィスパーはなぜかローゼンフェリアが口に運んでくるフォークに刺された唐揚げを食べながら、カナミに聞く。

「それはないわね、武装鉄橋の守備兵は多く見積もっても２０００、今も偵察は続けているから出撃はまる見えだし、薮蛇で鉄橋とられたら目も当てらんないと思うわ、それに待つ程の食糧が敵にはないわよ」

カナミは肩をすくめる。

「ならザレマ要塞から覚悟を決めて出撃して、渓谷突破を狙うかな？　強行突破に対しての備えは？」

メリエルはローゼンフェリアのフォークに刺して出してくる料理を断り切れずに口に入れるヴィスパーを見てクスリと笑ってから、

これもカナミに質問する。
「それについては今さっき出て行ったベルクタイをそのまま配置するわ、あういう戦いは得意そうだし、簡単には帝国軍を通さないわ、岸壁にはベルクタイの弓隊、そして奴らが万が一にでもせき止めた地点を乗り越えても、そこにはリキュエールの兵に守られたバリスタ隊を配置して狙い撃ちする、この部隊はヴィスパーに率いてもらうわ」
カナミに視線を送られたヴィスパーは、口一杯の料理を必至に咀嚼しながら頷く。

「じゃあ、対策はオッケーだね、岸壁は見張りのベルクタイさん達も大変だろうから、明日は何か食べ物を持っていってあげようかな？」
プリエルが塩をかけたサラダを食べながら、ニッコリ笑うと、
「そうね、私も行きたいけど無理だから、道案内の人と何人か護衛の兵士を付けてベリーちゃんと行ってきたら？」
メリエルもプリエルが岸壁で見張る兵士達への陣中見舞いに行く事に賛成をする。

「あのぉ～、対策について少しいいですか？」
大人しくコーンスープを飲んでいたテスタが小さく手を挙げながら、聞こえるか聞こえないかの様な声で言った。
「テスタちゃん、何か良い案があるの？　あれば遠慮しないで」
メリエルに笑いかけられると、テスタは安堵した表情を浮かべ、
「はい、では遠慮なく、ザレマ山なんですけど……この際、火をはなっちゃいませんか？」

と、やはり遠慮がちに周りをみた。

第４７話に続く

第四十七話「姉妹対立」

1

「二人の軍師」

「ちょっと、あんた、どういうつもりよ！」
カナミが激しい言葉を向ける。
「い、いえっ、どういうつもりも山に火を放ったらどうかな？　と意見を言っただけ……」
うろたえるテスタ。
見かねてメリエルが助け舟を出す。
「まぁ、待ってカナミちゃん、テスタちゃんだって考えがあるから、とりあえず聞いてみましょう」
女王であるメリエルにそう言われたらカナミも言い返す事もなく、首を縦に振ったので、テスタもフゥと安堵のため息をついて、説明を始めた。

「ザレマ山を焼く第一の目的は篭城する帝国軍に燃料を与えない為です、いくら補給部隊を叩いたとはいえ、部隊事に食料は数日分は携帯していてもおかしくありません、しかし薪など燃料となると特殊な事のない限りは部隊事に持っている事はないはずです」
「そうですね、案外に重い燃料まで実戦部隊が持つのは負担になりすぎますからね、テスタちゃんの言っていることは当たっていると思います」
リキュエールが口元に手を当てて同意すると、テスタはお礼の様に笑顔を浮かべながら頭を下げ、説明を続ける。

「薪など山の木を切る事や木造の建物を解体したりで、敵国内でも手に入れられる燃料ですが、それがないと食料を調理する事が出来なくなる大変に重要な物資です、夜は暖をとるのにも重要な役目を果たしますから、篭城する帝国軍にとっては食料に並ぶ生命線です」
「山を燃やせば、山に薪を求める事が困難になり、燃料が手に入らない、すなわち帝国軍は篭城が更に困難になりますね」
リキュエールはテスタの意見を理解した様だ。
「有効な方法だな、食料もない、燃料もないとなれば帝国軍の士気は大きく下がるのは確実だな」
すると、今まで腕を組んで目を閉じて話を聞いていたミラも目を開け頷く。

「そんなのダメだよ！」

いきなり野営テント内に響くような声を上げたのはプリエルだった。
「だって、山に火を付けたら簡単には消えないよ、山から物を採ったり、狩りをしたりして生活してる人だっているんだ、そういう人達に何て言えばいいの？　それに山を燃やすなんて、木や動物たちを……」
その声は感情的になって震えている、みんなを見渡した後でメリエルに強い眼差しを向けて、何かを訴えかけていた。
「それに今回は道案内とかで地元の猟師とかに力を借りている事があるし、燃料が尽きても数日間、帝国軍の瓦解が早まるくらいよ、

この状態なら渓谷の入口を封鎖しているだけで十分な筈よ」
カナミもそうメリエルに視線を送る。

「……僕もプリエルさんの言う事に賛成するよ、やっぱり山に火を放つのには協力してくれた地元の人達に迷惑がかかりすぎる」
「ヴィスパー君」
ヴィスパーもプリエルとカナミに賛成すると、明るい表情でヴィスパーに振り返るプリエル。
メリエルと視線が交わるが、意外にもメリエルが迷っている様にヴィスパーには見えた。
「メリエルさん……」
思わず呟いてしまう、山に火を付けるなんて策をメリエルが選択する筈がないとヴィスパーは思っていただけに迷いが見られるのは予想外だ。
戦争や権力のエゴで自分達の生活の場所を傷つけられるのは村にいた時、苦しい生活の支えになっていた森を焼かれたメリエルなら十分過ぎる程にわかっていると思っていた。
プリエルが激しい反対をしているのもその時の思いが強く作用しての物に違いなく、反乱への最後の引き金と言っても過言ではない帝国軍の行為にも似た行動をメリエルが許す訳がないとヴィスパーは思っていたのだ。
決定権力を持つ女王メリエルがプリエルやヴィスパーの言葉に対しても、俯き加減に無言になってしまうと野営テントの中に静寂が訪れた。
誰も料理にすら手をつけなくなってしまう。

ヴィスパーの言葉を最後に無言になった空間を終わらせたのは、やはり今の議論を呼び起こした張本人であった。
「カナミさん……」
そうボソリと声を上げるテスタ、その声は相変わらず小さかったが、怯えた様な響きはなかった。
「何よ？」
明らかに強い調子でカナミが応じると、テスタはカナミを見つめて、
「先程の意見は本当にカナミさんの考えと取っていいですか？」
と、切り出したのだ。

「どういう意味よ！」
叫ばんばかりの調子のなるカナミに、
「そのままの意味です、確かにこのまま渓谷の入口を守り切れば勝利は動かないでしょう、その意見にはもっともだと思いますが、その期間が数日早まっても、早まらなくても大して変わりがないとするのには参謀として同意できません」
テスタは圧され気味ながらも反論する。
「なんですって！　私が間違えてるとでも？」
「私の意見とは違います」
カナミは凄むが、テスタも引く様子はない。
「戦場では出来る事は全てやるべきです、ましては相手は格上の帝国軍なんです、私達は数日間なんて言わずに1時間でも早く帝国軍を瓦解させる方法を可能な限り採るべきじゃないんですか？　私は戦場の数日間の重要性をカナミさんが認識していない筈がないと思って確認したんです！」
「……グッ」
カナミの恐怖感から逃れるようにまくし立てる様に見えたテスタ。

だが、強気な筈のカナミは返す言葉に詰まった。

「カナミちゃん、確かに山に火を入れるのは迷惑がかかるけれども、万が一にでも帝国軍に渓谷から平原に抜けられたら、この国の存亡がかかってくるんじゃないのかな」

メリエルがカナミを諭す様に口を開いた。

「お姉ちゃん!?」

テスタの意見を肯定するようなメリエルの言葉にプリエルがびっくりして声を上げる。

「プリエル、わかっているから、なるべく火を入れる場所は要塞から近くの場所に限るし、猟師や迷惑をかけた人達には配慮するから……わかって」

「嫌だよ、わかってないよ！　お姉ちゃんは帝国に私達の村が何をされたか忘れたんだ？」

そう叫ぶとプリエルは食べかけの食事をそのままに野営テントの外に走り出す。

メリエルはプリエルの走り去った後のテーブルを数秒見つめた後、

「テスタちゃんの案を採用します、作戦会議をするから、この食事の後で少し間を置いてからみんなはここにまた集合してください」

と、周りを見回した。

当たり前だが、その表情はどこか暗い。

「もう一人でたべれるよね？　ヴィスパー」

「え？」

勝手にフォークに食べ物を刺してはヴィスパーの口に運んできていたローゼンフェリアはそう言うと、ぴょんと椅子から降りてプリエルの後を追うようにテントの外に出て行ったのだった。

＊＊＊

夕食が終わり、メリエルの言葉通りに作戦会議が始まる事になったが、皆は一度、帰っていたので、テント内にはメリエルと資料を整理するカナミだけになっていた。

「カナミちゃん……ごめんなさいね」

ふと謝るメリエル。

「気にしてないわ、確かに燃料を絶えさせれば帝国軍の苦しむのは確かなんだから、それにしてもプリエルはいいの？」

資料の整理を片付けたカナミは頬杖を付きながら作戦図に視線を落とす。

「理解出来ないなら、プリエルには会議には出てもらわなくてもいいから」

少し俯いて答えたメリエルに、

「無理をして……」

苦笑するカナミ。

「カナミちゃんこそ、私やプリエルが嫌がると思って山に火を付ける事に反対したんだよね？　テスタちゃんに言われるまでもなく、燃料を絶つ事はカナミちゃんは思いついていたんだよね、でも私やプリエルがどういった事を帝国軍にされていたかを考えて言わないでおいたんだよね」

メリエルの言葉にカナミは作戦図に落としていた視線を上げた。
「あたしがそんな甘ちゃんに見える？」
「ええ、カナミちゃんは優しいよ、私やプリエルは例え楽に勝てても火を付けたら少なからずショックを受けるし、地元の人達にも迷惑がかかるからね」
メリエルに即答されたカナミは、
「何だかテスタが悪い奴みたいね」
と、肩をすくめる。

「違う、やり方の違いがあるだけだと思うよ」
「なら今回はテスタのやり方がいいと思ったんだ？」
カナミの言葉にメリエルは少し間をおいて、
「うん、私は決めないといけないからね、カナミちゃんに謝ったのは意見を採用しなかったからじゃなくて、カナミちゃんに私やプリエルが気を使わせちゃったから謝ったんだよ」
プリエルの事が気にかかるのだろう、少しちからなげに微笑むメリエル。
「大変ね、偉すぎるのも考え物だわ、ご苦労様」
カナミは優しげに微笑みため息をついた。

ザレマ平原を駆け抜ける夜風をプリエルは受けて、土手に寝転んでいた。
少し遠くには王国軍の篝火が大量に見える。
「そういえば、いつの間にこんな風になったんだろ」
プリエルは呟く。

今の状態に後悔はしていないつもりだ、覚悟をして迎えた現状の筈だった。
しかし、プリエルにはメリエルの選択はショックであった。
「ちょっと、わからないな、しばらくは戻らない方がいいかな？」
どうにも双子で一緒に生きてきた筈のメリエルとの間に何かのズレをプリエルは感じていた。

「探したよ」
抑揚のない声が聞こえて、プリエルが身体を起こして振り返ると、そこにはランプの光に照らされた黒い瞳の少女が立っていた。

第４８話に続く

第四十八話「頭を下げる少女」

1

「姉と妹」

「ローゼ、どうしたの？」
プリエルがビックリした声を上げると、ローゼンフェリアは、
「探したって言ったけど……」
と、言いながら隣に座る。
「あっ、そうだっけ？」
頭をかくプリエル。

「メリエルきっと心配しているよ」
「わかってる」
ローゼンフェリアの言葉にプリエルはポツリと答える。
「わかってて、出て来るなんて意地悪だね」
ローゼンフェリアはそう言いながら、草原の土手に寝転んだ。
「かもね」
プリエルも両手を頭の後ろにして、寝転ぶ。
「お姉ちゃんがわからなくなってきたような気がするんだよ」
プリエルがため息をつくと、ローゼンフェリアは、
「今まではわかっていたんだ？」
いつもの冷めた様子の声でプリエルに聞いた。

「わかっていたと思うよ、前は喧嘩しても平気だったんだけど」
「プリエルとメリエルはもう違うんだよ」

「えっ？」
　ローゼンフェリアの言葉にプリエルは眉をしかめる。
「メリエルとプリエルは双子だけど違う人間だよ、前は同じ村で同じ様に働いて、同じ物を分け合っていたかも知れないけど、今はメリエルはこの国の女王なんだよ」
「……それはそうだけどね」
　バツの悪そうにプリエルは顔をローゼンフェリアから逸らす。
「メリエルはこの国の人間を一人でも多く、帝国みたいな侵略者から守らないといけない、それが女王の役目」

「だからって、火を山につけていいの？」
　プリエルは上半身を起こした。
「じゃあプリエルは戦いが長引いて、千人単位で戦死者が増えてもいい？」
「それは……」
　詰まるプリエル。
「山に火をつければ、地元の猟師の人達は困るし、罪のない動物や草木が燃えてしまう、それは確かだけども、帝国軍に余力を与えたら沢山の犠牲が出る可能性がある、メリエルはどちらかを選ばないといけない立場にあるんだよ」
　ローゼンフェリアは身体を起こし、プリエルの頬に手を当てると顔を自分に向けさせた。
「んっ……」
　月明かりに照らされた黒い瞳の美しい少女にプリエルは一瞬、圧倒される。

「プリエルはメリエルから目を反らしちゃいけない」
「……ローゼ」
「メリエルが辛い選択をそれも一刻も早く迫られている事は理解できるね？」
ローゼンフェリアの口調は優しく諭す様である。
「ごめん、そこまで考えてなかった……私はとにかく帝国軍と同じ様に目的の為に山や森に火を放つのが許せなくて」
ローゼンフェリアの瞳に見つめられたプリエルは自分の気持ちを隠すつもりにならなかった。
「それでもいい、その意見だっていい、会議で言いにいこう、逃げるのはダメだよ、ちゃんと意見を言ってメリエルの決めた事を精一杯やろうよ、だって私達が認めた女王でプリエルのお姉さんなんだよ」

「……」
プリエルはローゼンフェリアという自分の年齢の半分の少女の言葉の言いようのない説得力に言葉を失っていた。
これが8歳の子供の言葉だろうか？
いくら英才教育を受けていようとこんな考え方が出来るのか？
将来の皇帝になるような少女というものはかくも精神的に成熟しているのか、とプリエルはローゼンフェリアに感心を通り越した驚愕すら覚えていたのだ。

「それにプリエル、私を捜す為にあなた達の森に火をつけた帝国とメリエルを一緒にしちゃ駄目、メリエルは確かに山に火をつける決定をするかもしれない、けれど、それは帝国軍を倒して住民達を幸

せにしたいからなんだよ」
ローゼンフェリアの言葉。
「わかるよ、そうだね、私は女王のお姉ちゃんをどこか認めていなかったのかも知れないね……テントに戻るよ」
プリエルが笑うと、
「わかってくれて、よかった」
ローゼンフェリアは口元を緩めたのだった。

＊＊＊

「じゃあ、会議を始めます、山に火を放つ方針は決まってますが、細部やそれを受けての帝国軍の動きに対しての対策を検討しましょう」
メリエルは食事の解散時に食堂に揃っていた面々を見渡しながら、会議の開始を告げる。

「待ってよ、お姉ちゃん、迷惑をかけた人達への補償はきちんとするんだよね、その辺りはハッキリしてもらうからね」
テントの入口が開き、そこにはプリエルとローゼンフェリアが立っていた。
メリエルはプリエルと視線を一瞬、交わして、
「もう会議は始まってるのよ、早く座りなさい」
と、メリエルの席の隣を指差したのだった。

2

「頭を下げる軍師」

「バティスタ上級大将、バティスタ上級大将！」

慌てる副官にバティスタが起こされたのは夜明け前であった。

「どうした？」

バティスタは直ぐさま起き上がる、軍人としての性もあるが、この戦況では深い眠りにはつけなかったのである。

「山火事が起きています、数ヶ所でかなりの火勢です！」

バティスタは副官の言葉に返事はせずに、素早く軍服に身を纏うと外が見える城壁まで早足で出た。

「おおっ……！」

思わずバティスタは声を上げていた、要塞の付近は岩肌の露出した部分が殆どで引火の心配はいらないが、少し離れた木々の繁る辺りからあらゆる個所が炎に包まれて、まるで早めの朝日が様々な方向から昇り始めている様だった。

「まさか、ここまで早く手を打ってくるとは……」

バティスタは周辺を見渡しながら、

「薪や燃料の状態はどうなっている？」

と、尋ねる。

「ハッ、昨夜の炊飯に必要な量は部隊で持っていた薪を使用した様です、ですが今日からの燃料は夜が明けたら薪拾いに行く予定だったらしく……」

副官は申し訳なさそうに頭を下げる。

「そうか、昨日は戦いで疲れ果てていたからな」

バティスタはボソリと呟いた。

薪などの燃料確保の責任は輜重（補給）部隊にあるが、その部隊が今はいないのだ、全ての責任は自分にあると自覚していたバティスタは自分のあまりもの迂闊さに唇を噛んだ。

疲れていた。

兵はそれで良い。

しかし、総司令官には戦いで疲れていたなどという言い訳は許されない。

ただでさえ絶壁に囲まれた要塞なのだ、木を伐りに行くにも崖に梯子をかけての面倒な物になるのは確実であっただけに、この状態では薪を確保するだけに決死隊すら編成しなければいけないのである。

「幕僚達を集めてくれ」

バティスタはそう言って身を翻した。

「ここからは火を回さない様に木を伐って、水を用意しておいて！」

プリエルが地図を片手にキビキビと指示を出すと、兵士達も素早く動き出す。

「プリエルさん、沢からの水が届きました！」

ベリーが声を上げながら、水瓶を幾つも括り付けた手押し車を押した兵士達を先導して走ってくる。

「他の人達と交代して、もう一回行ってきて！」

プリエルが叫ぶ様にベリーに言うと、

「わ、わかりましたぁ」

来た山道を引き返し、空の瓶を載せた手押し車を押すベリー、兵士達もそれに続く。

「せめて余計な場所は絶対に火を入れないからね、早く諦めてよ！」
プリエルは燃え広がる炎で絶壁の向こうに浮かび上がるザレマ要塞を睨むように見た。

一方、ベルクタイやリキュエール、ヴィスパーの各部隊は山に火を入れてからは警戒態勢に入ったままであった。
ベルクタイは弓隊を指揮して渓谷の左右の崖の上から、ヴィスパーはバリスタ部隊を率いてせき止めた道を平原側から見るような場所に、リキュエールはヴィスパーの部隊を護衛する位置でそれぞれ警戒をしていた。

「ヴィスパーさん、ご苦労様です」
テスタがヴィスパーに歩き寄ってきた。
「あ、テスタちゃん、まだ帝国軍には動きはなさそうだよ、左右の崖の方から要塞を見ているベルクタイさんからは知らせがないからね」
ヴィスパーが崖を見上げる、そこには木々に潜む様にベルクタイの部隊の兵士が見えるが動きはない。
「でも帝国軍は今日中には動きます、警戒をきちんとお願いします」
テスタはペコリと頭を下げる。

「うん、わかったよ、ベルクタイさん達の部隊の方には火が回ったりしないよね？」
ヴィスパーが崖の上を見上げて心配そうな顔を見せると、

「はい、平気です、山を焼くのは要塞から木を伐採出来そうな近場に限定して、あらかじめ延焼しない様にしてます、また、消火に当たる兵士も増やしているので問題ない筈です」
腰の低い商人の様にテスタは頭をペコペコ下げながら言った。
「あ、そうなんだ、テスタちゃんのやる事だから安心だね」
実際にヴィスパーはまだテスタの手並みをよくは知らなかったが、あまりにもテスタの腰の低さに、調子よく笑いかける。

「あ、ありがとうございます、わ、私がんばります」
更にペコペコ頭を下げるテスタ。
「いや、頼りにしてるから本当に頑張ってね、それと何でテスタちゃんは今日にでも帝国軍が出撃してくると思うの？」
少し戸惑い苦笑しながら、ヴィスパーが質問するとテスタはまだ頭を下げたままで、
「ハイッ、疑問に思うのはわかりますし当然ですよね、それは帝国軍の司令官が優秀だからです！」
と答えた。
「え？　優秀だから？」
ヴィスパーがテスタの答えに迷った時である。

「帝国軍だ！　要塞から帝国軍が出撃してきたぞ！」

崖の上から、ベルクタイの部隊の兵士が叫んで、ヴィスパーやリキュエールの部隊に旗を振ってきた。
崖の上から振られる帝国軍出撃の合図。

朝日が照り始めて、周りが明るくなり始める。
「テスタちゃん!?　凄い、読み通りだ」
ヴィスパーは驚いてテスタに振り返る。
テスタはまだ頭を下げたままだった。　しかし、彼には一瞬、その口元が笑んだ様に見えた。

第４９話に続く

第四十九話「崖の上には悪魔がいた」

1

「強行突破」

「全員、力を尽くして敵中突破せよ、ザレマ平原に抜ければ思うがままだぞ！」

バティスタは自ら先頭に立ち、部下達を叱咤激励しながら渓谷を進む。

総勢3万のうち約2万が渓谷突破を目指し、動きを開始した。

「山に火を入れた途端にきやがったな、弓隊構え！」

渓谷を勢いよく進む帝国軍を見てベルクタイは手を上げて部隊に指示を出す。

「どうせ、すぐに出てきたんだったら山に火をつける必要があったのかい？　プリエルちゃんが怒ったんだろ？」

ベルクタイはニヤつきながら、様子を見に来ていたカナミに振り返った。

「誰に聞いたのよ？　あんたはいなかったでしょ」

「いや～ね、ベリーちゃんが沢の位置を確認に来たから尋問を……色々ね」

ニヤつくベルクタイの答えにカナミは眼鏡を左手の中指でツイと上げながら、

「尋問？　変態！」

と、真面目な様子で睨む。

「いや、いや、カナミちゃんだは会議の決定事項を伝えてくれたけど、どんな様子かは教えてもらえなかったから、おじさんは寂しくてね」
誤解されてはと、ベルクタイは慌てて手を振った。

「まぁ、いいわ」
カナミはため息をついて要塞から進撃を開始した帝国軍を指差す。
「テスタは、山に火を入れれば、帝国軍が今日にも出撃せざるえないのがわかっていたのよ、例えこちらの備えが万全でもね」
カナミの答えにバティスタは顎に手を当てる。
「帝国軍には食い物が僅かにあっても燃料がなくなる、じり貧よりは一気加勢の賭けに出るって事か？」
「そうよ、燃料がなく、食料に事欠けば、いかに精鋭でも士気は大幅に下がり、この閉鎖された状況下では、二日目には脱走や反乱の心配が出てくる、そうなればバティスタが名将だろうがもう勝ち目はないわ」
カナミが説明すると、ベルクタイは、
「無駄に篭城を引き延ばさずに死中に活を求めるのが正しい判断か、じゃあテスタちゃんはバティスタの判断力の正しさも計ってのこの警戒だったんだな？　たいしたもんだね」
と、肩をすくめる。
「まぁね」
視線を帝国軍に向けて、カナミはつまらなそうに答える。
「まぁ、それを説明出来るカナミちゃんも負けてないよ」
ベルクタイがカナミに笑うと、
「ありがと、でもあいつの作戦は性格悪いのよ」
そう言ってため息をついて、
「ほら、話している間に帝国軍が来たわよ、相手は必死よ、頑張っ

て防がないとね」
彼女は背負ったクロスボウを取り出した。

帝国軍に降り注ぐ矢はまるで雨の様である、かわす事はほぼ不可能だ、盾で受けるか自分に向かって飛んでこない事を祈って突き進むしか、帝国軍には手段はなかった。
帝国軍の弓隊も果敢に崖の上に向けて矢を放ち反撃するが、高低差に加えて、左右から挟み撃ちを受けているはハンディは大きく王国軍の弓隊に狙い撃ちをされて、一度に十本もの矢が刺さり壮絶な戦死をする射手もいた。
「進めっ、進むのだ、あと少しで道をせき止めている地点だ！　そこを乗り越えれば、後は弱兵の王国軍などやり放題に殺せるぞ！」
バティスタは盾で矢を吹き飛ばして激を飛ばしながら、自分達の出撃してきたザレマ要塞に振り返り、
「よし！　頼んだぞ」
と、頷く。

「大変ですっ！　ベルクタイ様」
慌てた部下がザレマ要塞の方向を指差す。
「えっ？　何々……げっ、マジかよ」
弓を構えた時に部下に呼ばれたベルクタイは、横目で一瞬だけザレマ要塞の方向を見ただけであるが、目に飛び込んできた光景に思わず矢を適当に放って、声を上げると、その場の木陰に伏せた。
「あいつら……なんて無茶苦茶しやがるんだよ？」
ベルクタイは帝国軍の反撃の火矢で燃えている木を手斧で切り倒しているカナミに向かって走り寄る。

「おい、カナミちゃん、残っていた帝国軍が要塞の西側の崖をよじ登ってやがるぞ！」
　ベルクタイが大声でカナミに叫んで、ザレマ要塞を指差す。
　要塞の前の広場に集まった帝国兵が西側の断崖に取り付いて、少しずつ登っていく様子が遠くに見える。
「広場に集まっているのは５０００は越えてる、半分も登られたら、俺達の方に切り込んでくるぞ！　正面突破は囮だ！」
　ベルクタイの声は焦っていた、西側の崖上をみると火は下火になっている。
「ギャーギャー言わないでよ、うるさいわね！」
　自分の二倍を少し越えるような燃え盛る木をやっと切り倒して、
「ほら、火矢が当たった木はすぐ下の奴らに落としてやりなさいよ、要塞の方はいいから」
　そうカナミは答え、まだ燃えていない部分を蹴りながら転がし、崖下に落とした。
「おい、要塞の方の帝国軍はいいって……まさか、じゃないだろうな」
　少し引き攣った笑いを浮かべるベルクタイにカナミはため息をつき、
「あのね、私じゃないわよ、さっきも言ったでしょ？　テスタの作戦は性格の悪さが滲み出てんのよ、西の崖上に火が少ないのはわざとに決まってるでしょ？」
　と、呆れた声で答えながら、クロスボウに矢をセットする。
「マジかよ、あのテスタちゃんがねぇ……最近の女の子は怖いねぇ」
　ベルクタイは口笛をヒューと吹きながら、弓を構えて崖下に放っ

た。

バティスタ率いる本隊が渓谷の出口に向かって突撃を仕掛けている時、副将のリカルド中将率いる別動隊７０００が火の手が比較的に少ない西側の崖上目指して断崖を登る作戦になっていた。

要塞攻略用に準備した梯子を架けても断崖の半分も届かない為、そこからは岩壁に鉄杭を打ち付けて足場を確保しながら、縄ばしごを設置する難儀な作業である。

「焦るな、岩壁は途中からは特に傾斜がきつくなってるぞ」

リカルド中将は戦場の勇者もともすれば震えを禁じ得ない単純な高さという恐怖を意識して封印しながら、自ら鉄杭を岩壁に打ち付ける。

バティスタ上級大将指揮下には部下に苦しい事をさせるならば、自らも実践してみせる指揮官が多く、リカルドもそうする事により、部下達に恐怖を克服させようとしている。

「我々が登り切れば、崖上にいる弓隊を片付け、一気に上級大将の部隊が渓谷を突破し後は王国軍など蹴散らし放題だぞ！」

リカルドは懸命に兵達に声をかけて激励する、かなりの兵士達が岩壁に取り付いて崖を懸命に登り、ついに崖上まで数メートルの地点までやってきた。

しかし、リカルド達にとって地獄からはい上がる断崖の先には天使は待っていなかった。

「ご苦労様だな」
冷めた物言いでリカルド達を見下げたミラの姿は彼らにとっては天使どころか悪魔そのものだった。
「……」
リカルドや帝国兵達は絶句する他にない、数メートルの高低差には絶対的な力の差がある。
ミラに続いて姿を表した数百の王国兵は手に弓や石、松明や油の入った瓶、中には伐った木などを持ち、絶望的な表情を見せながら絶壁に縄ばしごやロープで縋り付く帝国兵に向かって攻撃を開始した。

「バ、バティスタ様！」
降りしきる矢嵐の中で、副官の呼びかけは悲鳴に近い物だった。
「どうし……」
振り返った時に要塞の西側の崖を視界に入れたバティスタは言葉を失う。
西の断崖は燃え上がっていた、あと僅かで登りきりそうであったリカルド中将が率いる兵士達がバラバラと断崖から落下していくのが遠目に見えた。
「ば、馬鹿な……西側の断崖は罠だったのか！」
バティスタは一瞬、頭が真っ白になる。
それは本当に一瞬であったのだが、まるでそれを待っていたかの様に2本の矢がバティスタの腿と肩を捉えた。

「ぐおっ！」
声を上げてひざまづくバティスタ。
「バティスタ様！」

慌てて副官が駆け寄り、周りの兵士が盾を持って集まり守る。
「バティスタ様、リカルド中将率いる別動隊の行動は読まれていたようです、あれでは成功は難しいと考えます、一度、我々も要塞に帰りましょう」
副官の進言にバティスタは、
「馬鹿者」
と、静かに言いながら立ち上がり、刺さった矢を引き抜く。
「あくまでも別動隊の失敗で本隊が何を震え上がる必要があるのだ、停まらずに進撃するのだ！」
バティスタは周りの兵を見渡して叫ぶと、再び進撃を命じた。

ヴィスパーは手を上げたまま崖の上の兵士達を見上げている。
数十メートル前は道を塞ぐ土砂や倒木で進撃してくる帝国軍は見えない為に崖上からの合図を待っているのである。
「ベルクタイさん達の攻撃でも退かなかったんだ……凄いな」
帝国軍が迫るとの合図を受けたヴィスパーは息を吐きながら、顔を引き締める。
攻撃は土砂越しになる為に発射のタイミングは合図に任せるしかない、それを見逃さない様にヴィスパーは手を挙げたまま、発射の合図を待っていた。

帝国兵達のかけ声が既にうるさい位に聞こえ始めて始め、視界に入るまで近くの左右の崖上の弓隊が一斉に崖下に向かって射撃が始まった時に、ヴィスパーに向かって大きく赤い旗が振られる。
「よし！　全隊射撃開始してください！」
ヴィスパーは声を振り絞り、叫んだ。

第５０話に続く

第五十話「勝利……そして」

1

「バティスタの最期」

土砂は5～6メートルは積み上げられていた、倒木も沢山混じっており、とても簡単には登れる物ではない、果敢に帝国兵は土砂をよじ登ろうと近づくが、そこに土砂を飛び越して、雨のような矢が降り注ぎ、たちまち何十人もの帝国兵が倒れる。

ヴィスパーが率いる数十を越えるバリスタ部隊が前方から、左右の崖上からは弓隊がそれぞれ猛射を繰り返すと、それまででさえ大損害と言ってよかった帝国軍の損害は更にうなぎ登りに跳ね上がった。

「バティスタ上級大将、駄目ですっ、被害が大きすぎます、退却すべきです」

参謀の一人がバティスタに駆け寄って来たが、バティスタの目の前で矢に倒れる。

バティスタの周りには沢山の兵が倒れ、まさに悪夢を見ているような状況である。

すでに巨人連隊の兵士達も姿が見えない、途中で足止めを受けたか、要塞に向けて退却したのか、あるいは全滅したのかは、上級大将にもわからなかった。

ただ、わかる事は渓谷の突破は既に不可能になりつつある事……すなわち、自分は負けたという事であった。

数十メートル先にある土砂の壁を越えれば、後は弱小な王国兵をいくらでも殺せる。
バティスタは矢が何本も刺さった盾を捨て、土砂の壁に歩き出した。
鎧を脱ぎ捨て、剣も地面に置く。
最期は頼れるのは己の肉体なのだ、バティスタは盾を構えてやってくる兵士を手で制すると、
「もういい……」
と、だけ告げて、歩き始めた。

バティスタが顔を上げると無数の矢がまるで自分だけを目指している様に向かってくる。
「フッ……」
バティスタは両手を広げて矢嵐に向かって、微笑みを見せた。

バティスタ上級大将の渓谷突破作戦はこうして途絶した。
総司令官を失い、大損害を出しザレマ要塞に撤退した帝国軍はそれから3日後、全軍が降伏した。

2
「戦いの後」

結果的には帝国皇帝フェンリルが直接に決断し、バティスタ上級大将に命じて発動したローゼンフェリア王国討伐作戦は大失敗に終わった。

参加兵士数３万のうち死傷者約１８０００、残りの者は殆どが降伏し、武装鉄橋に逃げ込んできた者は１００名にも満たなかった。

ローゼンフェリア王国軍も第二次ヴァンフォーレ会戦、ザレマ平原会戦、ザレマ要塞封鎖作戦の一連の戦いで１万を越える損害を受けていた。

しかし、ローゼンフェリア女王メリエルは降伏した帝国兵の護送に兵を割いた後も約１万の兵を率いて、ザレマ平原に駐留していたのである。

ザレマ要塞の帝国軍が降伏して、数日も経つと流石に陣内を支配していた戦勝気分も薄れていた。

ヴィスパーとローゼンフェリアは昼を一緒に食べようとメリエルから誘いを受けて、女王専用の野営テントに向かい、並んで歩いている。

「ヴィスパー、あそこの食糧、帝国の印がある」

陣内に詰まれた食糧の木箱の帝国印をローゼンフェリアは指差した。

「ああ、あれは帝国の補給部隊を撃破した時の戦利品だよ、食べ物はみんな一緒だからね、帝国印があるからって王国兵の口から逃げていく訳でもないから、そのまま使わせてもらっているよ」

ヴィスパーがそう答えると、

「そうだね、印を消すのも、箱を入れ替えるのも手間がかかるからね」

ローゼンフェリアは納得した。
「本当にみんながローゼンフェリアみたいに物分かりがよければ良いんだけど、兵士の中には帝国印の入っている食糧なんて不愉快だから、印を王国の物に付け替えるか、木箱を入れ替えろって文句も出てね、意味がわからないね」
ヴィスパーが苦笑するとローゼンフェリアは首を横に振る。
「意味はわかる、戦っていた仲間や家族を帝国軍に奪われた人ならそうなるかも知れない、例え何も出来ないとしても理解しようとするのは大切だよ」
ヴィスパーを見上げ、平然とそう言ったローゼンフェリアに、
「そ、そうだよね、色々な事情があるからね、これからは気をつけるよ」
一本取られたヴィスパーはローゼンフェリアの頭を軽く撫でるのだった。

＊＊＊

メリエルに昼食に招かれたのは、ヴィスパーとローゼンフェリアだけではなかった。
護衛の兵士に女王専用のテントに通されると、怪我の療養をしているネシア以外のいつものメンバーが揃っていた。
「あっ、ヴィスパーくん、早く早く、来ないから食べないで待っていたんだよ」
プリエルがヴィスパー達を手招きする。
「あははは、ゴメンね」
ヴィスパーが頭を掻きながら席につくと、
「一緒にきたんですか、いつも仲良しですね？」
隣の席のリキュエールがヴィスパー達に笑いかける。

「あはははは、まぁ」
苦笑しながら座るヴィスパーに対して、
「仲良しだから、隣の席を譲って」
と、リキュエールに要求してしまう逞しさと言うか、図々しさをローゼンフェリアは発揮していた。

メリエルの陣中での食事は王女とは思えない質素さであった。
パンとコーンスープに鶏のむね肉の塩焼き、あとはテーブルの中央にサラダが盛られているだけだ。
しかしながら、村で暮らしていた時から比べればメリエル、プリエルにとってはこれは十分な食事になるらしく、プリエルなどは夢中で食べている。
「お姉ちゃん、そろそろアティナ城に帰ろうよ、兵士達も長く戦場にいたら、家族も恋しくなるよ」
コーンスープを飲み干して、おかわりをなぜかメリエルに差し出し、プリエルは言った。
ここには給仕などはいない、しいて言うならばベリーがメリエルの身の回りの世話係だが、メリエルは皆が食べている時にベリーにだけ給仕をさせるのには抵抗があると、公式な食事会など以外ではベリーも一緒に同じ物を食べている。

「もう、食べちゃったの？　太るからね」
差し出された食器を持ってメリエルは立ち上がる。
「あ、あの、私が！」
ベリーも慌てて立ち上がるが、
「平気、平気」

と、メリエルは笑顔を見せて首を振り、テントを出ていく。
厨房になっているテントにおかわりを取りにいったのだ。
「お姉ちゃんが私のおかわりを取りに行ったなんて、厨房の炊事係も驚くよね」
プリエルは悪戯の成功した子供の様に笑う。

「まったく、メリエルさんは女王陛下なのに……」
ヴィスパーは思わず苦笑いをした、もちろん公式な場ではお互いにこんなやり取りはしないだろう。
「プリエルがいるから、メリエルは忘れない、メリエルがいるからプリエルも見失わないんだよ」
ローゼンフェリアはそう呟くと、コーンスープに口をつけた。

「これでみんなでおかわり出来るよね、何度も行くと炊事係さんに気を使わせるから」
メリエルはそう言って笑顔で、重そうに寸胴鍋ごと持って来る。
「お～流石、お姉ちゃん」
「女王陛下っ！」
「メリエルさん！」
手を叩くプリエルをよそにリキュエールやベリーは慌てて、メリエルに駆け寄った。

食事が再開されると、プリエルは熱いコーンスープに息を吹きかけながら、
「ああ、そうだった、お姉ちゃん、さっきも言ったけど、みんな帰

りたがってるんだよ」
と、忘れずに話題をまた切り出す。
ヴィスパーにしても、帝国軍を撃退した後の滞陣には疑問を感じていたので聞きたい質問だった。
「ああ、うん、それなんだけど……実はそのまま武装鉄橋を攻撃できないかな？　と思ってね」
メリエルはみんなを見渡して言った。

全員の動きが止まってしまった、バティスタ相手の大きな戦いが終わったばかりでこれから武装鉄橋をも攻略しようと言うのだ。
「反対よ！　ここは一度、帰ってから休養し、兵を新たに募集してから攻略作戦を実施すべきよ」
カナミが声を上げて反対すると、
「俺もカナミちゃんに賛成です、女王陛下、今回の勝ちはここまでで十分じゃないですか？」
ベルクタイがカナミに同意する。
「すいません、私も反対です、兵は疲れています」
続けてリキュエールもメリエルに頭を下げながら、意見を述べた。

「お姉ちゃん……私も今回は大人しく下がった方がいいと思うよ、やめておこうよ」
プリエルが反対が多そうな事を見越した様に口を開いた。
メリエルは、
「そう……でも今は相手に増援もないだろうし、討伐軍も負けて、武装鉄橋の帝国軍も士気が下がっていると思ったのだけど」
口元に手を当てて、首を傾げて見せる。

「こちらは1万、守る武装鉄橋が2000とみても必ず落とせる差でもない、戦力を整えた方が得策かも知れないな」
黙って聞いていたミラからも反対の意見が出ると、流石にメリエルも少し表情を曇らせた。

「でも、メリエルさんの言う事も一理あるんじゃないかな？　ここは勝ちに乗るのも有りじゃないかな」
ここでヴィスパーはメリエルに同意する意見を出した、実はこれは本心からではないかも知れない。
周りから反対されるメリエルに少し同情したのは確かであった。
「ヴィスパー君……」
メリエルがわずかに安堵の表情を見せるが、自分が賛成でも、周りが全員反対ならば、メリエルは自分の意見を取り下げるだろうと、ヴィスパーは思った。

「普通に攻撃しなければ良いんですよ、攻略にとりかかる時期としてはベストに近いと思います」
その少女の声は遠慮がちな声だったが、静かなテント内ではよく聞こえる。
ヴィスパーの意見は半分メリエルへの同情から出た物だが、その少女はきっとそうではないだろう。

皆の注目が集まると、テスタは少しだけ愛想笑いを見せた。

第５１話に続く

第五十一話「自ら動く」

1

「攻略検討命令」

「あんたはまたっ！」

「わー、ごめんなさい、ごめんなさい」

カナミがおもいっきり睨み付けると、テスタは顔の前で手を振って謝り始めてしまう。

シチュエーションがザレマ山に火を付ける作戦をテスタが言い出した時と非常に似ている事にヴィスパーは妙な気分になる。

「前の作戦が少し図に当たったからって、調子に乗るんじゃないわよ」

立ち上がり、腰に手を当てて椅子に座っているテスタにズイと迫るカナミ。

まるで意地悪な先輩だ。

「あ～、あのぅ、でも武装鉄橋は早く陥落させる必要があるのでは……時期的に女王陛下の言われる様に絶好な時期と見るのは確かではないでしょうか」

テスタが苦笑いを浮かべながら反論する。

「確かにそうよ、外交的にも経済的にも、そして軍事的にも絶対に武装鉄橋は落とさないといけないけど、今は私達も無理は出来ないのよ」

そうカナミは武装鉄橋攻略の必要性は認めながらも、無理は出来ないという現実的な意見を言った。

「カナミちゃんの言う事ももっともだね、テスタちゃんには無理をしないで武装鉄橋を何とかできる手段があるの？」
メリエルが聞くと、
「あるとはハッキリ言えません、ただし研究してみれば弱点はあるんじゃないかと思います」
テスタはメリエルに向かって答える。
「研究？　あんたの研究が終わるまで1万の兵士はここで野営してろって言う訳なの？」
カナミが更にテスタに迫ると、テスタはアワワと言い出しそうな表情に変わり首を振った。
「い、いえ、滅相もない事ですっ！　武装鉄橋警戒の名目で３００も残していただければ……」

「……」
震える声のテスタをカナミは少しの間、見据えていたが、メリエルに振り返って、
「まぁ、どにしろ武装鉄橋を警戒しないといけないんだし、絶対に無理をしないという約束なら構わないんじゃないかな？」
と、肩をすくめながら、そう告げた。

どにしろ国境地帯で帝国に備えなければいけないというカナミの意見はもっともであり、加えてテスタにはメリエルから、
「武装鉄橋の攻略を検討するだけで十分です、あくまでも国境守備が第一の使命だと思ってくださいね」
との命令を下す事で、その場で反対していた者達もある程度の納得をみたのであった。

＊＊＊

「じゃあねプリエル、任せたわよ」
馬車の前でメリエルはプリエルに優しく微笑む。
「まぁ、任せておいて」
プリエルはニッコリ笑う。
「守備が固かったら武装鉄橋には何もしなくていいからね、余計な事をした方がまずいからね」
メリエルはプリエルに真顔で顔を近づけて、念を押した。
「ん……わかってる」
口元を引き締めるプリエル、メリエルは傍らのリキュエール、ミラ、テスタにも、
「無理をしないで、よろしくお願いします」
と頭を下げた。
リキュエール、テスタもそれぞれ頭を下げて返礼し、ミラはコクリと頷く。

結局、武装鉄橋の警戒、攻略検討に当たる事になったのはプリエル、テスタ、リキュエール、ミラの４人と３０００の兵士達に決定した。
言い出したテスタが残るのは当然で、ミラはテスタの希望により、プリエルは自分からの立候補である。
いくらかの怪我を負っていたプリエルであるが、すでに全快に近く、軍医からも許可が出た為、メリエルとしても無下には却下出来なかった。

残るリキュエールはメリエルからの推薦である。
本来、リキュエールは親衛隊隊長という役職上、女王メリエルから離れての任務は好ましいとは言えないが、メリエルとカナミはテスタ、ミラ、プリエルの組み合わせには冷静で温厚なリキュエールを加えておきたいと考えたのだ。
言わばリキュエールは歯止め役を任された損な役まわりかもしれない。

「じゃあね、お姉ちゃんの方もしっかりね」
プリエルは馬車に乗り込んだメリエルに手を振る。
「うん、わかった」
窓からメリエルもプリエルに手を振り返す。
首都アティナに帰るメリエルにもやらなければいけない事は沢山あるのはプリエルにもわかっている。
馬車が進み始めてもプリエルはしばらく手を降り続けてから、テスタ達の方に振り返って、
「さぁ、頑張ろうか！」
と、笑顔を見せた。

女王メリエルと約７０００の兵はザレマ平原を東に進み、半日が過ぎた。
ヴィスパーは走行中のメリエルの馬車の中でメリエル、カナミと今後の事についての案件を協議をする事となった。
アティナ城に帰ってから、とも思ったが、バティスタ上級大将率いる討伐部隊との戦いの間にも国内外での決定しなければならない協議事項はたまっていたのである。
ザレマでの戦闘終了を受けると、各大臣から祝辞の通達とその数

倍を越える女王や補佐官決裁が必要な事項の関係書類が早馬で送られてきたので、多少想像力が鈍いヴィスパーでも首都の大臣達の状態を想像する事が出来たのであった。

「取りあえずは1万を越える捕虜はどうするのよ？　どこかに剣一本持たせて突撃させちゃう？」

カナミが背もたれに身体を預けながらメリエルに聞いた。

「そんな事したら、みんなが回れ右して、こっちに突撃してきちゃうよ」

そうメリエルが苦笑すると、

「違いないわ」

カナミも肩をすくめる。

「ヴィスパー君には何か名案はないかな？」

メリエルがヴィスパーに意見を求めてきたので、

「本来なら帝国との間に捕虜交換したいけど、交換するほど、こちらは捕まってないしね」

と、首を傾げた。

「なら身代金とれないかな？　莫大な金額を要求したって兵士1万以上だもの、払うかもしれないわ」

カナミは半ば本気の表情で声を上げる。

「いいんですか？」

驚くヴィスパーにカナミは、

「よくある事よ、国によっては相手の部隊に貴族らしい人間がいれば、殺さずに捕まえて身代金を要求する事が横行してたわよ」

と、平然と答えたが、

「いけません、そんな事は許しません！　集団で山賊をしてるんじ

ゃないんですからね！」
メリエルが珍しく一喝した。
「じゃあ、どうする？」
カナミは身代金なんて手段をメリエルが選ばない事は始めからわかっていた様子であった。
少し口元に笑みを浮かべてメリエルに問う。

「まだ決めていないけど、酷い扱いは絶対にさせない、気付いてもらえる事は絶対にある」
メリエルはしっかりとした口調でカナミに答えた。
「そうなの？　まぁ、しばらくは収容施設に入れて置かないとね、また帰ったら相談しましょ」
決めていないと言うなら仕方がないといった感じでカナミは答える。
「なら次は……」
ヴィスパーが膝の上に乗せた書類をめくると、
「ヴィスパー君、サラセナ、ミオクォーレとバルドの三国からの返事は着てないかな？」
メリエルの方から、そう切り出してきた。

「えっと……ちょっと待ってくださいね」
ヴィスパーは外務大臣からの報告書を探して取り出した。
「ああ、ありましたよ……バルドからもミオクォーレからも返事が着ていないようですね」
「そうかぁ～」
メリエルはヴィスパーの返事に息をつき、背もたれに身体を深く

預ける。
　馬車の内装は元々が帝国領主の為に造られた物で豪華だ、二人ずつ向かいで座る座席は高級ソファーの様にメリエルの身体を包み込んだ。

　メリエルは建国直後に極北のサラセナ、南のミオクォーレ、東のバルドの三国にそれぞれ対帝国同盟を要請する使者を送っていたのである。
「無視されているか、まだ考えているのか……」
　カナミは腕を組んで考え始めた。
　使者が親書を届けて、帰国したのはまだバティスタ上級大将の侵攻が始まる直前なので、極北で遠く交通事情の悪いサラセナ以外の二国からは、時間的にはすでに返事がある筈なのである。
「様子を見られている、とは考えられないかな？」
　ヴィスパーの言葉に、
「それもあるわね、とにかく今回の勝利で反応があるかもしれないわね」
　カナミは腕を組んだままで言った。

「相手が動かないなら、私が動いていくまで」
　メリエルは顔を上げた、普段の彼女には似合わない少しきつめの目つきだ。
「自分からって、どういう事？　メリエルさん？」
　ヴィスパーがメリエルの言動に微かな不安を抱きつつ聞くと、
「決まってるでしょ？」
　メリエルの真意を理解した様子の隣のカナミがニヤニヤしながら、ヴィスパーの肩を叩く。

「私はローゼンフェリア王国の女王だぞっ、親書の返事はどうした？　ナメてんのか、って聞きに行くのよね？」
と、笑顔でメリエルの方を見たのである。
「ですね」
ニッコリ微笑んで、肩をすくめるメリエル。
「女王の自覚がでてきた様で嬉しいわ、女を無視すると怖いわよ～！」
カナミは楽しそうな声を出し、左手の中指でツイと眼鏡を上げた。
「え？　本気ですか？」
ヴィスパーは各大臣がまたすぐに女王が今度は首都どころか国を空ける事態にどんな態度になるかを想像したが、あまりに恐ろしく想像がつかなかった。
しかし、それに対する有効な手段が思いつかなければ、想像などつかない方が幸せなのかも知れなかった。

第５２話に続く

第五十二話「本音の女王陛下」

1

「女王の帰還」

首都アティナに帰ってきたメリエルはいきなり精力的に仕事をこなし始めた。

もちろん、メリエルが忙しくなれば補佐官のヴィスパーも仕事が急増するのは言うまでもない。

大臣達はとりあえず討伐軍を撃退した事とメリエルがたまっていた案件を素早く片付けていくのに一安心している。

メリエルの政治的な事務手腕はまだ素人の域を出ない、勉強は必死にしていて、たまに鋭い指摘をして周りを驚かせる事もあるが、また初歩的な勘違いもするレベルである。

しかしながら案件が片付いていくのは、元々事務能力を買われて旧王国の王城主計部にいたヴィスパーや軍務にその知識の留まらないカナミ、そして経験豊富な大臣や官僚達がいるお陰であった。

そして、メリエルを中心とした彼等が高い意識で積極的な仕事をしているのはやはり、一度は主権を完全に奪っていった帝国と戦争をしている緊張感が大きかった。

「メリエルさん、もしかして仕事を一通り終わらせてから、バルドやミオクォーレに行くつもりかな？」

そうヴィスパーが思わず呟いてしまう程に帰ってきてからのメリエルはパワフルに仕事をこなしている。

おかげでヴィスパーもここ数日はすっかり寝不足なのだが、女王であるメリエルがそうやって働いているのだから文句など言える筈がなかった。
「さぁ、この書類も今日中にはメリエルさんに提出できる状態にしないとな」
ヴィスパーは書類の束を前に腕まくりをする。
王城の窓から見える城下街はすでに暗くなっていたが、ヴィスパーは補佐官室に一人で残っていた。

「ヴィスパー君、ご苦労様、コーヒーなんてどう？」
手にカップが二つ乗ったトレイを持って、部屋を覗き込んできたのはメリエルであった。
「メリエルさん、ありがとうございます」
普通ならば、女王であるメリエルがコーヒーを差し入れてくれるなんて事は有り得ないが、メリエルは立場など関係無しの気遣いの出来る事を知っているヴィスパーは驚きではなく、素直に感謝の気持ちで微笑みを見せた。
「ごめんなさいね、その書類は食糧不足の村への配給表だよね？私が明後日までに、って言っちゃったんだよね」
メリエルは申し訳なさそうに言いながら、ヴィスパーの前にコーヒーを置いてから、隣の真新しいままの席に座った。
その席の机には何も置かれていない、ヴィスパーの机の上がまるで書類の墓場の様になっているのとは対照的である。
それもその筈、その席は次席補佐官のミラに用意された物で、ミラは未だ王城の自分の職場に立ち入っていないのだ。

「大丈夫です、この書類は明日の昼にはメリエルさんに回るように

しますよ」
ヴィスパーはコーヒーカップを口に運んだ。
「本当に？　助かるわ、ヴィスパー君」
メリエルも両手でコーヒーカップを持って、少し飲んだ。
「ヴィスパー君、わかる？　わかったかな？」
いきなりのメリエルの問いにヴィスパーは、
「どうしたんですか？　いきなり……」
と、首を傾げた。

「やっぱりわからないよね、このコーヒーは帝国南部のコーヒーの名産地のジリータ産の物なんだって、わからないよね？」
「え？」
ヴィスパーはメリエルに言われて、自分の飲んでいるコーヒーに目線を落として、
「うーん」
と、唸ってしまう。
「バティスタ上級大将の率いていた補給部隊にあったらしいの、他の産地のコーヒーとわざわざ分けられていたらしいけど」
メリエルはニッコリと明るい笑顔を見せた。
こうしてニッコリと満面で笑うメリエルは案外、珍しい。
こういう笑い方はプリエルの方に多い。

「よかったぁ、わからないのは私だけかと思った、カナミちゃんやベルクタイさんは判るらしいし、ベリーちゃんまで何となく判るって言ったから、もう私だけが味音痴なのかな、とか思っちゃって……」
ペロッと舌を出したメリエル。
ヴィスパーはそんなメリエルに優しく微笑んだ。

「二人して味オンチなのかもしれませんけど、いいじゃありませんか、最高級のコーヒーの味がわからなくてもメリエルさんは今まで最下層と帝国に虐げられた民衆の人達の気持ちがわかるじゃないですか」

「ヴィスパー君……」

ヴィスパーの言葉にメリエルは嬉しそうな声を上げた。

「でしょ？」

金髪の少年はまるで、少女のような表情で微笑んでいる。

「そうだね」

両手で持っていたコーヒーカップを机の上にメリエルは置いてから、その両手でメリエルはヴィスパーの両頬を軽く押さえた。

「メリエルさ……ん」

頬に伝わる温もりはさっきまでメリエルの持っていたコーヒーカップの温もりだろう。

「ありがとうヴィスパー君、頼りにしてる……大好きだよ」

そう言ってメリエルはヴィスパーにキスをした。

メリエルからの二度目の唇へのキスは、軽く触れただけの初めての時と違い、ちょっとだけ長い時間のキスだった。

「ごめんなさい、もう時間だ、私もこれから商務大臣と副大臣と会議を兼ねた夕食の約束があるんだ」

キスの後で少しの間、ヴィスパーの肩に寄り添っていたメリエルは思い出した様に顔を上げた。

「大変ですね、頑張ってくださいねメリエルさん」

ヴィスパーはメリエルの肩にまわしていた手を離した。

「うん、ヴィスパー君も、もう一息頑張ってね」

メリエルは手を振りながら歩いて行く。

再び一人になったヴィスパーは、机にあらためて向き直り、顔面を真っ赤にしながら机に俯せた。
「メリエルさん、すごく可愛かった……」
金髪の見ようによっては美少女にも見えてしまうヴィスパーが顔面真っ赤にして、そんな事を呟く姿は少し異常である。
こんな事をしている場合じゃない……
ヴィスパーが自己を取り戻し、夢うつつな状態から起き上がった時、
「ヴィスパー」
背後から声をかけられたので、思わず背筋を伸ばして振り返る。

そこに立っていたのはカナミだった。
なんだか安心した表情を見せたヴィスパー。
「ど、どうしたのカナミちゃん」
頭を掻きながら応対するヴィスパーに、
「奪取した物資の主計報告書を持ってきてあげただけだけど、何をそんなにびびってるのよ」
カナミは不思議そうに報告書の束を差し出す。

「あ、ありがと」
カナミの差し出した報告書を受け取るヴィスパーは一体、自分は誰を畏れてカナミの声に驚いたのか考えてみるが、考える間でもなく黒い瞳の美しい少女の姿が浮かんでくる。
「ヴィスパー、何ボーッとしてるのよ、働きすぎじゃないの？」

「あ、いやいや、大丈夫だよ、メリエルさんやカナミちゃんも頑張ってるのに疲れていられないよ」
カナミにどやされたヴィスパーは首を振った。

「まぁ、メリエルは今は仕事を全力で整理しながら、待ってるのよ」
と、言いながらメリエルの座っていた椅子に座る。
この椅子はこれで正式な主を迎える前に2人の人間に座られてしまった。
「待ってるって、まさか使者の返事？」
「馬鹿」
ヴィスパーの質問にカナミは冷たく短い返事を返して、
「そんなのもうある訳無いでしょうが、待ってるのはプリエル達の成否よ」
と、肩をすくめた。

「成否って、武装鉄橋の攻略？　だってあれは無理にしなくていいってメリエルさんが言ったんだよ」
声を上げるヴィスパーだが、
「無理して攻略しなくていいとは言ったけど、それは無理をしないで攻略出来るならしろ、って意味よ」
と、平然とした顔で答えるカナミ。
「ええーっ？　メリエルさんに限って、そんな裏表のある命令をする訳がないでしょう」
ヴィスパーは首を振りながら苦笑する。
「別に裏表なんてないわよ、だいたい武装鉄橋を攻略しようと言い出したのは誰なのよ？」

カナミに突っ込まれて、ヴィスパーは思わず言葉に詰まってしまった。

「撤退をわざわざ遅らせて武装鉄橋を落としたがったのはメリエルなの、メリエルは玄関を押さえられたままの国じゃ、ミオクォーレもバルドも外交で相手にしてくれないのを、あの時に気付いていたのかもね」

口元に手を当てながら言うカナミ。

「でも、それならどうしても攻略したいって言うんじゃないの？だってメリエルさんは女王なんだよ、そんな無理しなくていいなんて遠慮しなくても」

ヴィスパーも言い返すが、カナミは、

「馬鹿ね、あの状態から無理に武装鉄橋攻略をおこなって、ただでさえ大損害が出ていた兵力を擦り減らしたら、それこそ相手にもされないわよ、武装鉄橋を攻略したいのも無理をしたくもないのも本音なの」

少し怒鳴る様に答えた。

「じゃあ、今はメリエルさんは待っているんだね、プリエルさん達が無理もせずに武装鉄橋を攻略してくれるのを……」

「そうよ、そしてそれがならないとメリエルの外交は苦しい闘いになる」

ヴィスパーの言葉にカナミはうなづいて、椅子から立ち上がり、笑いながら肩をすくめた。

「女王にもなれば命令に建前と本音ぐらいは出て来るわよ、まぁ、ヴィスパーはメリエルが可愛くてたまらないみたいだから、仕方が

ないけれどね」

そう言われたヴィスパーは再び顔面が真っ赤になるのを抑えられなかった。

第５３話に続く

第五十三話「糸口」

1

「攻略を検討する」

月夜のヴァンフォーレ草原を駆け抜ける風は冷たかった、昼間が少し暑かった為に始めはそれを喜んでいたプリエルも次第に身体を摩り震え出していた。
「寒くなって来たね」
「ええ……」
プリエルの言葉にテスタは筒状の望遠鏡を覗きながら答えた。
「今日も一日中、隠れながら武装鉄橋を眺めていただけだったね……」
「そうですね」
「見続けて、今日で何日になるかな？」
「6日目になります」
テスタは望遠鏡から目を離さない。
「だね～」
飽きがきてしまっているプリエルは荷物袋から、毛布を取り出して、身体に巻いた。

武装鉄橋の警戒と攻略の任を受けた３０００の王国軍はメリエル達と分かれた翌日にザレマ平原からより武装鉄橋に近い東のヴァンフォーレに移動した。
王国軍にとっては第二次ヴァンフォーレ会戦で一敗地にまみれた場所であり、直接参加していたプリエルには嫌な場所だったが、テスタは何も気にしていないようにネシアが陣を張った丘の頂上に、

また同じ様な陣を張ると、毎日、丘を降り、見つからない様にプリエルと武装鉄橋の攻略の糸口を見つけ出そうとしているのである。

「いい加減、何かないものかな？　テスタちゃん、時間だよ、代わろう」
「わかりました、期待してますから、頑張って下さいね」
見張りは眼のいいプリエルに変わり、
「明日は陣まで帰って、お風呂に入れますからね」
励ましになるのか、ならないのかわからない事を言いながら、テスタは毛布に包まった。

テスタが寝息を起てはじめた頃である。
「テスタちゃん、テスタちゃん！」
プリエルが慌てた声でテスタを揺らす。
「にゃ……なんですかぁ～？」
テスタは寝ぼけ眼を擦りながら起き上がる。
「見てみて、こっち側の方から、ランプの明かりを点けた集団が武装鉄橋に近づいていくよ」
プリエルの手に持つ望遠鏡にテスタは目を当てて、見ると確かにランプのいくつかの明かりが武装鉄橋に向かって進んでいく。
「なんだろ？　偵察隊でも出していたのかな？」
「いえ、それにしては３０人位まとまって、隠れるつもりがなさそうですし」
プリエルの言葉にテスタは首を振った。
「しばらく様子を見てみましょう」
「うん」

様子を伺っていると、明かりは武装鉄橋の手前で止まる。
すぐに武装鉄橋内から、数人の人間と思われる別の明かりが接触した。
「なんだろ？」
「さぁ、なかなか中に入りませんね」
プリエルとテスタは首を傾げる。
すると、武装鉄橋内から出てきた明かりは鉄橋内に戻って行き、やってきた明かりはUターンして、やはり来た方向に帰っていく。
「あらら……」
拍子抜けしたような声をプリエルは上げて、
「どういう事かな？」
と、首を傾げる。
「荷物とかを受け渡した様子はないし、情報交換にしては時間が短すぎますね、追いかけてみますか！」
テスタは毛布を片付けてプリエルに振り返った。

月明かりがあるので、念の為に距離を離しての尾行だが、集団は明かりを何本か点していたので追跡は案外に容易だった。
３０人程の集団はやがて小さな集落に着き解散したようである。

「村の人達だったのかな？　夜に武装鉄橋に何の用事なのかな？」
ますますプリエルには訳が分からなくなっている様である。
武装鉄橋より2時間近く西へ歩いたローゼンフェリア王国領の集落の人間が何をしているのだろうか？
テスタはしばらく考え込んでいたが、

「陽が出るまで野宿して、それから集落を訪れてみませんか？　もしいいなら、プリエルさんの背中の剣はその辺りに隠していただきたいのですが……」
と、遠慮がちに微笑みながら眠そうな眼を擦った。

集落を少し外れた森の中に小さなテントを張り、眠りにつく。
朝になり、太陽が昇り、大分経ってからプリエルとテスタは起きた。
集落を見れば、小さな村である、１００人は住民はいないだろう。
「じゃあ、仕事を探して放浪している二人組という事でいいね」
「そうです、お願いしますね」
集落を訪ねるのに、まさかローゼンフェリア王国女王の妹と軍の次席参謀という訳にいかず、考えた設定を確認してきたプリエルにテスタは頷く。
プリエルの剣は小型テントと一緒に森に隠したので、持っている武器は３０センチ程の長さの小剣を互いに一本ずつ持っている。
旅の護身用と言えば、疑いはされないだろう。

あくまでも旅の途中で偶然に立ち寄った様に集落に入る。
すると、遊んでいた小さな子供達がプリエルとテスタを見つけて、大人達を呼びに藁葺き土壁の家に入っていく。
すぐに村長らしい男と数人の中年の男が現れた。
「任せてください」
テスタは小さな声でプリエルに告げると、頭を下げながら自分から村長の方に近づいて行き、挨拶を交わしてから、
「私達は戦いで村が無くなってしまい、放浪の旅をしてきましたが、

路銀も尽きてしまいました、何でもいたしますから村に置いて頂けないでしょうか？」
と、切り出したのだ。

「ちょ、ちょっと」
プリエルは村長と中年達が何やら相談している隙をみて、テスタを引っ張る。
「どうしました？」
「いや、テスタちゃん、テスタちゃんは街に住んでたからわからないかも知れないけど、こういう村はみんな大変なんだよ、帝国の重税を逃れたばかりで、そんなに余裕ないよ」
プリエルは真顔でそう注意してきた。
「あ、あのプリエルさん、目的覚えてます？　本気で世話になると思ってるんですか？　ま、まぁ、任せてください」
テスタが答えると、
「あ、そういえば、そうだね……昔の村を思い出して、つい」
プリエルは舌を出して見せる。

ちょうど、村長との相談が終わった中年の男が近寄って来て、
「何でもできるなら、仕事がない訳じゃないが、一応話をしてみるか？」
集落の中の一軒の家を指差したので、
「はい、話だけでも！」
テスタはペコペコと頭を下げる。
「じゃあ、ついてくるといい」
中年は歩き出した。

男の指差した家に通されると、そこには３０歳になるか、ならないか位の女がいた。
かなりの美人で、きちんとした化粧に身なりをしており、村の貧しそうな様子から見ると、全く釣り合わない。
「あ、あの……」
テスタが村長にした説明を再びすると、女は薄笑いを浮かべた。
「そう、あなたたちは可愛いから、相当稼げるわよ、私はレスト、今はこの村で何軒かの家を借りて、２４人のあなた達みたいな女の子を連れながら、男性を愉しませる事をしてるわ」
レストと名乗った女はそう言って笑いかけてきた。

「え!?」
素っ頓狂な声を上げるプリエル。
全く予想の範囲外だった様である。
「あら？　そこまでは出来ない？　私は無理強いしないけど……この村は貧しくて、私達の稼ぎを当てにして拠点となる場所を貸してる位だから、他に仕事はないけどね」
プリエルの反応を見て、レストは肩を竦めた。
「……あのう、質問いいですか？」
申し訳なさそうな声を上げるテスタ。
「なに、どうしたの？」
余裕の表情のレストに、
「この辺りに大きな街はありませんし、お金を払って女性を愉しむお客さんがいるんですか？」
テスタは聞く。

「ああ、それね？　それなら２５００人以上もいる武装鉄橋があるから……平気だったんだけど」
　余裕だったレストの表情がいきなり陰り、
「昨日、行ったら警戒中でこちら側からは人は入れられないと断られてね、しばらくはかなり遠くの街に出稼ぎになるわね、全くダイアナの奴に客を取られるのはムカつくわ！」
　と、感情をむき出しにして、舌打ちをした。
「ダイアナ？」
　プリエルが首をかしげると、
「鉄橋の帝国側で同じ事をしてる奴よ、２５００の兵士がいても高級士官は一握りだから、金払いのいい高級士官はいつも取り合いなのよ！」
　そうレストは毒づく。

　結局、と言うより当然にプリエルとテスタはそこまでは出来ないと断り、集落を出る。
　レストは去る者は追わずと無理に引き留めはしなかったが、
「思い直したら、またいらっしゃいね、あなたたちならきっといいお金になると思うから」
　と、告げてくる。
「ハイ、どうしてもダメならまた来ます」
　そうテスタが頭を下げるのを見ていたプリエルは騙してしまった事に多少の罪悪感を覚えた。

「結局、わかったのは武装鉄橋の警戒が強まって、こちら側から人を入れなくなったって事だけだね？」

森に隠したテントを片付けながら、プリエルは苦笑したが、

「そうですか？　大収穫ですよ、やっと武装鉄橋攻略に糸口が見えてきました」

テスタは満面の笑みを浮かべながら、毛布を丸めた。

第５４話に続く

第五十四話「武装鉄橋攻略作戦決定」

1

「長滞陣」

ヴァンフォーレにローゼンフェリア王国軍武装鉄橋警戒部隊が陣を敷いて、早くも2週間が経とうとしていたが、何も動きが無く状況は推移していた。

警戒部隊の部隊長にはリキュエールが当たっている。

本当ならば、女王の妹であるプリエルが立場的には適任なのだが、戦場の場数は少しずつ積んできていても指揮官の経験が皆無に近い為に今回は見送られていた。

リキュエールが日課の陣内の朝の巡回を終えて、炊飯をしていると、

「リキュエール、ちょっといいか？」

ミラが歩いてきた。

「どうしたの？」

リキュエールは石を積んだ竈の火から陶器の釜を厚手の布を取っ手にかけながら持ち上げる。

「自分でやってるのか？　指揮官だろうに……」

呆れた様な声を出したミラ。

「炊飯ぐらいできないとお嫁にいけません、私の夢は専業主婦なんだから」

リキュエールは真面目な声で言い返す。

「浮気したら、大斧を持って追いかけてくる嫁にもらい手があるか」

ニヤつくミラに、

「もう、そんな事しないわよミラちゃん、ところで用事はなに？」
リキュエールは笑いながら、ミラがやってきた用事を聞く。

「ああ、そうだった、どうするんだ？　もう2週間が経つが鉄橋には手出しもしないのか？」
ミラはそう言いながら、リキュエールの隣に座る。
「いや、それについては何か良い作戦がないとなぁ……力攻めが通用するとは思えないし、今、テスタちゃんは考え中みたいなんだよね」
リキュエールはそう言いながら、釜の蓋をあける。
「テスタ次第か……あいつも身勝手な奴だな」
ミラはそう言いながら右拳で左の手の平を叩くが、釜から立ち上った湯気と上手く炊けている香ばしい白米の匂いに少し目を奪われてしまう。
「食べる？」
リキュエールに聞かれたミラは、
「そうだな、あいつが何かしら考えてるなら、待つしかないか」
と答えて、陶器の皿を手にとるのだった。

テスタは自分のテントの中で眠っていた、明け方近くまで集めた情報を検討していたのだ。
いわゆる娼婦達の長であるレストのいた村から帰ってきた翌日から、密偵にセリア大河をひそかに渡河させてレストのライバルであるダイアナのグループの情報を集めていたのである。
密偵にとってみれば、軍隊の内情をさぐるよりも遥かにたやすい任務であったらしく、いくつかの情報がすぐに入っていた。

まずはダイアナのグループの人数は３０名程度で１０代から３０代くらいまでの女性で、帝国側に武装鉄橋から一時間程行った村に暮らしているらしい。
そしてレストと同じで小さな村に金を支払い、住ませて貰っている様だ。
また武装鉄橋には最近はかなり頻繁に仕事に行っている。
その他にも細かい情報が入っており、それらを検討しながら、作戦を考えていたらいつの間にか寝入ってしまったのであった。

「朝かぁ」
テスタは目を擦りながら起き上がり、
「まぁ、こんな感じでいいかな……」
独り言をつぶやきながら、寝入ってしまう前に立てた作戦を頭の中で反芻した。
テントから外に出ると、テスタは空を見上げて大きく伸びをする。
「ん～、いい天気だな、これはしばらくは待ちになるかな」

更に数日が経過したが、王国軍は武装鉄橋に対して特にアクションを起こす事もなく、時間だけが経った状態になっていた。

＊＊＊

「リキュエールさん、一緒にご飯いいかな？」
朝早く炊飯の準備をしているリキュエールは、手に朝食がのったトレイを持ったプリエルに声をかけられた。
「お早うございます、プリエルさん、いいですよ、一緒に食べましょう、何か用事があるんですか？」
そう答えながら、リキュエールがニッコリ笑いかけるとプリエルは、
「うん、作戦についてお話があるんだけどね」
と、苦笑いを浮かべながら、長椅子代わりになっている丸太に座った。

「わかりました、私もすぐ用意しますね」
リキュエールは火をかけた竈から陶器の釜を上げて、蓋を開ける。
中から湯気が上り、白米の炊き上がった香りがプリエルまで匂ってきた。
白米を椀につぎ、あらかじめ当番兵に届けられていたおかずと一緒にトレイにのせて、プリエルの隣に座り、
「お待たせしました」
と、頭を下げる。
「炊きたて美味しそうだな、私もやろうかな！」
プリエルはすっかり冷えてしまった自分のご飯と見比べて声を言った。

15分程で2人は朝食を食べ終わる。
「そうですか……」
リキュエールは食べ終わったトレイを見つめながらため息をついた。

「うん、やっぱり何も無しに警戒だけしている状態にはみんな不満げみたいなんだよ……もう3週間くらい経つよね、ここにいる兵士の人はその前の帝国軍が侵攻してきた時から出動しているから、随分と帰ってないんだから」

プリエルは呟く。

「なるほど……確かにそうですね、他の部隊はとっくに帰還してますしね」

そう言いながらリキュエールは周りで警戒にあたる兵士を見渡す。

もちろん、目に見えてサボっている兵士などはいないが、内心は早くこんな警戒任務など終えて、帰りたいのだろう。

「やっぱりテスタちゃんの作戦待ちかな？」

うーんと、腕を組みながら唸るプリエル。

「そうみたいです、今は地元のお年寄りに色々と話を聞いてるみたいだから、何かを考えているとは思うんですけどね……そちらはテスタさんに任せるとしてこちらは兵士の士気を維持しないといけませんね、少し何か考えないと」

リキュエールはそう答えて口を結んだ。

2

「攻略作戦発動」

翌日からリキュエールは長い陣内生活で低下しがちになる士気を高める為に部隊ごとに完全休養日を増やし、その間の娯楽の為に大

きな街から劇団を呼び寄せたり、街で屋台を出店している組合と交渉して、珍しい食べ物の屋台を陣内に出させ、格安で兵士に提供して兵士達にリフレッシュや気晴らしになるように工夫をし始めた。
その反面、リフレッシュさせる分だけ、軍務中の怠惰な態度やサボタージュには厳しく応じて、警戒がおろそかにならないように必死に努める。
そんな苦労が実を結んだのか、部隊内でのトラブルなどはゼロとまではいかないが、非常に少ないレベルで抑えられて、ひとまずはリキュエールも胸を撫で下ろしていた。

更に数日が経過した日の夜である。
今日は朝から弱い雨が降っていて、少し湿気っぽいのを気にしながらリキュエールが部隊内の訓練内容を新しくする為に検討していると、
「すいません、テスタですけど……」
と、指揮官用テントにテスタが訪ねてきた。
「ああ、テスタさん、こんばんわ、どうぞ」
「こんばんわ、夜分に失礼します」
リキュエールが応じるとテスタは頭を下げながら、中に入ってくる。
雨の中を歩いてきたテスタは少し濡れていた。
「まぁ、座って、ああ、まずタオルを……」
「あ、失礼します」
リキュエールが傍らのタオルをテスタに渡しながら、椅子を勧めると、テスタはペコペコ頭を下げながら受け取って座る。

「どうかした？」
「あ、あのぉ……長くお待たせしてすいませんでした、明日くらいから攻略作戦を準備させて頂けないでしょうか？」
リキュエールの問いにテスタは申し訳なさそうにタオルを被った顔を上げた。
「いや、テスタちゃんがいうなら良いのだけど、明日も雨だったら？」
リキュエールは注意した。
現在は雨足はたいした事はなく、指揮官用テントに当たる音も聞こえてこない程度だが、明日に止む保証などはない。
雨天の作戦はあらゆる事に障害が出る為、なるべくなら避けたかった、訓練が足りない王国軍なら尚更である。
リキュエールは不慣れな王国軍には悪天候での作戦実施はさせたくなかった。
しかし、首を左右に振って、
「あ、雨が振ってくれないと困るんです、このセリア大河で漁業をやっている人から聞きました、この時期はこういう雨降りから、何日かまとまって雨が降るそうなんです、これを利用しない手段はありません」
テスタは言った。
「雨を利用するって……どうするの？　ま、まさかっ！」
リキュエールはテスタの顔を驚いた顔で見る。
「わかります？」
テスタはリキュエールを見てニッコリと笑った。
「私が間違ってなければ、それは認められません！　武装鉄橋を破壊しては、私達も後で困るのよ！」
リキュエールは厳しい調子で言った。

リキュエールの読みが正しければ、テスタは武装鉄橋を雨で増水したセリア大河を氾濫させて沈めるつもりなのだ。
セリア大河の川幅は広いが、千人単位で北にある上流を堰止めれば、氾濫させて武装鉄橋に深刻なダメージを与えられる。

しかし、それでは作戦の意味の大半を失ってしまうのだ。
武装鉄橋はあくまでも使用可能な状態で占領しなければ、ローゼンフェリア王国の大陸中央への玄関の役割は果たさないのだ。
メリエルが占領したがったのは、万を越える軍隊が使用可能な強固な橋なのだから、深刻なダメージを与えるのは問題外なのである。
新しくかけ直すにも修繕するにも、川幅が大きいだけに資金と手間がかかりすぎるのだ。

「どうなの？」
リキュエールが問いただすとテスタは、
「あ、あの……ハズレです、確かに増水したのを見計らって、セリア大河は堰止めるつもりです……でも、せき止めるだけですよ、氾濫させないですよ」
と、慌てて手を振って弁明してみせる。
「え？　はい！？　せき止めるだけ？」
テスタは弁明したつもりの様だったが、その訳がわからなく、リキュエールは思わず普段上げないような声を上げた。

第５５話に続く

第五十五話「セリア大河を渡れ」

1

「作戦会議」

リキュエールはテスタが帰った後、テーブルの上の作戦図を眺めていた。
テスタには作戦の全容を説明させている。
３０００の兵でほぼ同数の敵が立て篭もる要塞を攻略するのだ、攻撃側は守備側に対して質的に互角ならば少なくとも5～１０倍は兵が必要とされる常識から考えれば、同数の戦力で要塞に閉じこもる敵を攻略するのは無茶である。
しかし、テスタはそれをなそうと作戦を立てたのだ。
成功するか、失敗するかは誰にもわからないが、その作戦には鮮やかさと何か際どさがあった。
際どさ……それは何かが躓けば、玩具の積み木の城が崩れる様になにもかも駄目になるような危なっかしい部分と言えば、わかりやすいかも知れない。

「でも……よく、こんな事を思いついてしまうものだよね～」
リキュエールは作戦図を前に腕を組む。
結局、テスタの立てた作戦の発動を現地指揮官の権限で許可していている。
際どさは十分に感じている、しかしながらリキュエールは作戦を採用する事に迷いはなかった。
成功の算段はあるし、だいたい安全策で現在、武装鉄橋を攻略できるとは考えられない。

戦いをする以上は際どさは避けられないのは当たり前なのである。

朝方から急に雨足が強まり始めた。

朝食を食べた後に作戦会議がリキュエールのテント内で行われている。

リキュエール、テスタ、プリエル、ミラの４人が作戦図を前に顔を合わせていた。

「リキュエールさんは昼間にセリア大河を北上して、上流地点で堰を構築して下さい」

テスタの説明が始まる、リキュエールはすでに作戦の全容を知っていたが、ミラとプリエルもいるので、テスタは一から作戦を説明していた。

「私とミラさん、プリエルさんは夜になったらセリア大河を３０名程の女性兵と渡ります、筏は昼間に陣内で作りましょう」

テスタはミラとプリエルに告げた。

「夜に河を渡るのか、危険だそ、増水してるんじゃないのか！」

ミラが声を上げるが、

「えっと……上流を堰で止めているので、そこまで増水してないと思います」

テスタは作戦図の上流を指差して答える。

「でも……きつくないかな？」

さすがのプリエルも不安げな表情を見せたが、

「あの、申し訳ありませんけど、これも戦のひとつです、筏は５、６隻に分乗していきますから、半分沈んでも作戦は可能です、これから話す作戦は渡河しないと意味がなくなるんです」

頭を下げながらもテスタは折れる様子がない。
「……テスタちゃん」
プリエルはテスタの普段とは違う雰囲気みたいな物を感じ取った。

「わかったよ、ならば渡河してどうするんだよ？」
作戦に関しては意志の固いテスタには何を言っても無駄だと悟ったミラは手を頭の後ろに組んで、背もたれに寄り掛かりながら、作戦の続きを聞く。
「ああ、それは向こうで娼婦さん達の仲間になって、武装鉄橋に仕事をしにいくんですよ」
テスタが答えると、
「ああ、なるほどな、娼婦として武装鉄橋にな……って、えええええっ！」
ミラは思わず椅子ごと後方に崩れ落ちた。

「どういう事だ？」
ミラは赤面しながら、立ち上がり机を叩く。
「は、はい？」
剣幕に驚くテスタにミラは迫った。
「お前、仮にもシスターだろ？　それが……」
「あ……あの、シスターなら見習いで、それすらも首になりましたけど」
ミラに顔を近づけられて、テスタは怯えながら答える。
「それは無理だよ、きっとお姉ちゃんにも叱られるし、私、まだ……」
プリエルもテスタを苦笑いしながら見た。
「駄目ですか？」

うなだれるテスタ。
「当たり前だ！　お前は私を一体いくつだと思ってるんだ？」
迫力が増すミラはテスタの襟を掴んだ。
「……１２、全然見えないけど」
テスタは１４歳の意地にかけてか、上目づかいでボソッと答えた。
「き、貴様っ！」
ミラが歯を食いしばったところに、
「待ちなさい！」
リキュエールが声をかけた。
「なりすますだけで、実際に仕事しろなんて言わないから！」
少し大きめの声で言うリキュエール。
「あ、そうなんだ、なりすますだけか、よかったよ」
プリエルが安心したような声で息をつく。
「な、こいつは仕事をしろと……」
テスタの襟を掴み、赤面のままリキュエールに振り返るミラ。
「仕事っていうのは、皆さん本来のお仕事、戦う事ですよ～、ミラさんのお仕事は戦う事ですよね？」
テスタが苦笑いを浮かべると、
「この……まぁいい、作戦の続きを説明しろ！」
ミラはテスタの襟にかけた手を離し、ドカッと椅子に座り込む。
「やっぱり１２歳には見えないですよ」
襟を正しながら、呟くテスタ。
だが、ミラの鋭い視線を受けてしまい、
「さ、作戦の続きを、せ、説明します」
と、怯えて直立した。

2

「作戦発動」

「ならば、そのダイアナとかいう女の率いている女の仲間という事にして、武装鉄橋にいくのか？」

ミラの質問に、テスタは頷く。

「はい、ダイアナには密偵を通じて、交渉がまとまっており心配ありません、あとは武装鉄橋周辺の村々に最近、ダイアナが儲けを増やす為に女性の人数を更に増やしたとの情報も流してあり、帝国軍も知っているでしょうから多少の人数の変化は怪しまれないと考えます」

「いわゆる、いい手回しだね！」

プリエルはうんうんと満足げに言ったが、ミラは首を振った。

「馬鹿っ、鉄橋内部には３０００の守備隊がいるんだぞ、３０ばっかし兵を入れてもどうにもなるものでもない」

「あっ、そうだね！　１人で１００人やっつけないと間に合わないや！」

頭を掻きながら、テスタを見るプリエル。

「大丈夫ですよ、プリエルさん、それをこれから説明しますから」

テスタはそう言って作戦図に視線を落とした。

「では行ってきます」

雨が強く降る中でリキュエールはプリエル達に笑いかけ、指揮官用の軍馬に跨がった。

「お願いします」

テスタが頭を深々と下げると、

「そちらも気をつけて、筏で流されたなんて洒落になりませんからね」

リキュエールはテスタに注意してから、

「では、いきます！」

と、指揮下約３０００の兵に向かって大きな声で進発の命令を下した。

リキュエール率いる部隊は一度、東に擬装進路をとって、迂回してからセリア大河の上流を目指す。

長く滞陣した場所を部隊が遠く離れていくのを、濡れたままテスタは眺めていたが、プリエル達に振り返って、

「皆さんもお願いします、筏は材料は揃えてあります、後は組むだけにしてありますから、河まで運んでいきましょう！」

そう笑顔で激を飛ばした。

プリエル達は武装鉄橋より下流の地点から渡河を計画し、筏を荷馬車数台に分けて移動する。

３０人の女性兵と約１０人の兵士だ、１０名の兵は河までついていき、筏を組む手伝いをしたら、荷馬車で陣に帰る予定の経験の浅い新兵達である。

セリア大河の河岸について、そこで筏の組み立てを始める。

相変わらずの雨が体力を奪うが、そんな事を言っている暇はなかった。

筏を組み上げると、テントを張り、焚火をして身体を暖め、渡河のタイミングを見る。

朝からの雨で大分、水流は激しくなっている、早く渡り始めたいが、まだ夕方だ、雨空で誰かに見つかるとは可能性が高いとは思え

ないが、テスタは発見される危険の少ない夜に渡河したかった。

「リキュエールさん達、上手くやってるかな？」

プリエルが毛布を身体に巻きながら、テントから河を眺める。

「上手くやってくれると思ってます、信じていないと作戦なんてできませんからね」

テスタもテント内に焚かれた火にあたる、排気が雨の為に大変だが、テントの横面を開けて上手く排気していた。

「時間が経てば経つほど、増水して渡河が難しくなるぞ、暗くなったらすぐに出よう」

ミラも毛布を被っている、皆がそうしているのは下着まで濡れて、焚火で乾かしている為にほとんど裸だからだ。

「……」

テスタはその言葉には何も答えずに空を見上げる。　雨空は灰色からやがて黒みを帯び始めた。

「まだか？」

暗くなった空を見上げミラは言った。

「もう少し待ちます」

テスタは強い流れの河を見ている。

全員が服を着て、テントからすぐに外に出て筏に乗り込む準備ができていた。

「服はだいぶ乾いたけど、すぐに濡れるよね、私の下着なんだか縮んじゃってるんだけど、今度また乾かしたら履けなくなっちゃうかも」

プリエルはそんな冗談を言って、仲間達を笑わせている。

「緊張感のない奴だ、あれで女王の妹か、剣の腕はある程度いい線に達してるのだかな」
焚火を囲んで騒ぐプリエルを見て、ミラはテスタにだけ聞こえる様な声で言いながら舌打ちした。
しかし、テスタからは一切、反応が無い。
「テスタ？」
振り返ると、テスタは河を見つめて不敵な似合わない笑いを浮かべていた。
「来ましたよ……ミラさん、待っていたタイミングが！」
「……あっ！」
ミラは声を上げる、増水していたセリア大河がかなり水量を減らしていた、水流もかなり穏やかになっている。
上流で堰が完成し水流が調整されたのに違いなかった、リキュエールは仕事の第一段階を果たしたのだ。
「皆さん、いきますよ！」
テスタは大きな声で皆に告げた。

5隻の筏にそれぞれ乗り込んでセリア大河に漕ぎ出し始める。
多少、水流が穏やかになったとはいえ、激流に分類してもよいレベルで油断など出来ない。
ミラとテスタは同じ筏に乗る事になっていた、他に3人乗っている。
「ミラさん、さっきの話ですけど！」
木のオールで必死に安定を保ちながら、テスタがミラに話しかけて来た。
「さっきの話？　何の事だよ！」
ミラは怒鳴り返した、運動神経に優れた彼女にも余裕などある訳がない。

「プリエルさんの話です、ミラさん、さっきしたじゃないですか！」
激流の為、声も聞きづらいのでテスタも自然と怒鳴り声になる。
「ああ、あれでも女王の妹かと、いうやつか？　それがどうした？」
「わたしね、実はプリエルさんが女王でもよかったんじゃないかと思ってるんですよ！」
そう言って笑いかけたテスタに、
「プリエルが女王か……案外いいかもな」
ミラは言い返しオールで水面を叩いたのだった。

第５６話に続く

第五十六話「テスタとダイアナ」

1

「テスタの妥協」

多少、水位が低くなろうが、流れが緩くなろうが、依然として危険である事には変わりない渡河。

プリエルは泳ぎも達者であったが、筏を挟んで足元に流れる激流の中を無事に泳いで岸まで行けるかと言われたら、自信はない。

「バランスとっていこう、多少流されても、向こう岸に着けばいいよ！」

プリエルは同じ筏の女性兵士達を励ましながら、自らも必死にオールを操る。

体力には自信のあるが、川幅の半分もいかない内に腕が奮えだす。

その時に近くを進んでいた筏が横転し、全員が激流に流された。

「ああっ！」

プリエルは声を上げる、激流に投げ出された女性兵士達は必死に泳いでいる者もいるが、あっという間に波に呑まれていく。

「……」

助ける間などなかった。

ただプリエルには呆然と彼女達の消えた激流を見ている暇も無かった。

結局、２隻の筏が横転と大破し、流された１０人の女性兵士のう

ち、４人が自力で帝国側の河岸にたどり着いていた。
渡りきった２４名は仲間が消えた濁流を見ていたが、テスタがテクテクと、密偵と待ち合わせている場所に歩き始める。
「元シスターなら、お祈りぐらいしてもいいんじゃないの？」
プリエルが声をかけたが、
「あの……今は参謀ですし、流れた人だって、王国側の河岸やもっと下流に流れ着いている可能性はありますからね」
テスタはそう答え、再び歩き出したのだった。

＊＊＊

密偵と合流したプリエル達は雨に濡れながら、ダイアナとの待ち合わせ地点にやってくる。
小さな村で中でも大きめな家にダイアナは住んでいた。
「この家だけ石造りになってるよ」
土壁の家の中にきちんと加工を施した石造りの家が混じっているといやがおうでも目立つ。
プリエルは声を上げた。
ダイアナとの交渉を受け持っていた密偵がダイアナの家に入って行き、しばらくして帰ってくる。
「テスタ様、プリエル様、ダイアナが来ますのでしばしお待ちを！」
「うん、ご苦労様」
雨の地面だが、足元に伏して報告する密偵にプリエルがニッコリ笑いかけると、
「へぇ、かわいらしい娘さんじゃないのさ」
石造りの家からかなり肥満した４０歳ぐらいの女が姿をのそりと現した。
その女がダイアナに間違いなさそうだ。

ダイアナが家から出ると、すかさず現れたプリエルと年端の変わらない娘が傘をダイアナにさす。
雨に濡れきったプリエル達を見ながら、ダイアナは悠々と歩き近づいて、
「ダイアナだよ、あんたらが王国軍だね」
と、笑いを浮かべた。
「私はプリエル、王国の女王の妹だよ、こっちがテスタちゃんにミラちゃん」
プリエルは頷き、ダイアナを見ると、
「ほぉ、女王の妹なのかい、話が早くていいよ、少し事情が変わってさ」
笑いながらダイアナはプリエルを見下げたのだった。

「は……話が違うじゃないですかぁ！」
訴える様なテスタの声が石造りの家の中に響き渡る。
交渉役であった密偵の男も驚きの表情だ。
「お前にはもう十分な金は渡しただろう！」
密偵は叫んだが、
「あれじゃあ、長い事世話になった帝国軍の皆さんは裏切れないよ」
ダイアナは首を振った。
「お前は納得したじゃないか！」
「あの時はね、でもやっぱり裏切りだからね、あと少しは積んでもらわんと」
「この……！」

ダイアナの言葉に密偵が食ってかかるが、
「わかりました、こちらが条件を呑まなければ、あなたは武装鉄橋にこの事を知らせるでしょう？」
テスタは密偵を手で制した。

「まぁね」
ダイアナが不敵に笑うとテスタはうなだれながら、
「持ち合わせが無いので残りは成功報酬でお願いしますね」
と、困り切った表情を浮かべた。
しかし、ダイアナを首を振った。
「なぁに平気さ、欲しいのは金じゃない、武装鉄橋が落ちたら、王国の首都とそれを囲む支城の城下街で自由に仕事をしてもいい権利を私だけに頂戴、女王様の妹がいるなら、念書もかけるだろうさ」
そう言って笑うダイアナにプリエルはムッとした表情を浮かべたが、
「わかりました、あなたには勝てそうにないです」
テスタは答える。

「いいのかな？　お姉ちゃん、怒るよ……」
念書にサインしたプリエルは、同じくサインしたテスタの耳元で言った。
「仕方ないです、後は女王陛下にご理解して頂くしかないですよ、何よりも今はリキュエールさんを待たせられません」
「……そうだけど」
雨の中で作戦を遂行中のリキュエールの名前を出されるとプリエルも言い返す言葉がない。

「じゃあ、あ、あの……作戦について話し合いましょう」
テスタは満足げなダイアナに頭を下げて頼んだ。

雨音を聞きながら、石造りの家の中でプリエルとテスタ、ミラとダイアナと何人かの女性との打ち合わせを始める。
「この娘はライラって言うんだけど、あんたらはこの娘と１０人程のうちらの娘達と武装鉄橋にいく」
ダイアナは２０代半ばの女性を指差す。
「おばさん、行かないの？　平気なの」
プリエルが首を傾げると、ダイアナは太い首を竦める。
「もちろん行くよ、でもアタシはいつも女の子達が仕事を終えた頃を見計らってから武装鉄橋を訪ねるんだよ、もちろんお仕事の代金を貰いにね、それが今夜だけ初めから現れたら怪しまれるしね」
「後から来るんだね」
「そうさ、昔は先頭切って行ってたんだけど、今はこれじゃ指名はないからね、集金係さ」
プリエルが聞くと、ダイアナは笑った。

＊＊＊

「宜しくお願いします」
ダイアナに指名を受けたライラは大人しい女性の様で、プリエル達に頭を下げてくる。
「宜しくね！」
プリエルはライラを含め、一緒に行く娼婦の娘達に挨拶をする。
娘達もプリエルに歳の近い者もいて、軽い挨拶を交わしていた。

それから服を着替え、化粧を施されたプリエル達はライラと１０名の娘達と共に武装鉄橋に向かい、村を出た。

雨の降りしきる中を三十数名の娘達がランプを掲げて、進んでいく。

ダイアナもすぐ後に世話役の女の子に付き添われて進む、そこにはテスタも一緒だ。

「あんたは仲間達と武装鉄橋には入らないのかい？」

ダイアナに聞かれたテスタは、

「私はどうにも実戦は苦手ですので、武装鉄橋には入らずに外から伺ってますよ、他にも任務がありますからね」

と、控えめに笑った。

しばらく進むと、プリエル達は武装鉄橋に着く。

ライラが門番に話しかけると、顔見知りらしく、何言か言葉を交わすと門番は笑いながら、勝手口を開け放った。

「中に入ったら、私と一緒にいろ、客なんてとれないだろう？　まぁ、少しの間の我慢だが」

ミラに小声でそう言われたプリエルは、

「うん、うん、ミラちゃん宜しく」

眉をしかめてミラの手を取った。

王国側の河岸。

雨の中で望遠鏡を構えている２、３人の男達がいた、後ろには５０人程の集団。

「合図だ、どうやらプリエル様達が武装鉄橋に入った様だな、俺達も作戦を始めるか！」
対岸の帝国側の河岸からランプが振られているのを見つけると、1人の男が立ち上がる。
「そうだな、プリエル様に客をとらせる訳にはいかんからな、急ぐぞ！」
もう1人が控えている兵士達に告げると、皆が立ち上がった。

武装鉄橋の内部は城とは違い、あまり広くは無かった。
ミラから見れば何層作りの輸送船のようである。
プリエルとミラが歩いていると、
「お嬢さんみたいな、小さな娘さんも大変だねぇ、俺と一緒しようよ」
士官らしい男がわざとらしく、かなり高額の帝国紙幣の束を見せてくる。
「おじ様1人ですか？」
ミラは普段出さないような幼い声で話しかけた。
「そうだよ、俺は士官だから1人部屋でドサクサで他の奴が入ってくる事ないし、お礼も弾むよ」
30過ぎに見える士官は余程、ミラが気に入った様で熱心に誘ってくる。
「わかりました、その代わり私は今日入ったばかりだから、この今まで何百人も相手してきたベテランのお姉さんが一緒でないとダメだって言われてるの」
ミラはプリエルを指差した。
「……なっ！」
プリエルはミラを睨み付けたが、ミラは全く無視をしながら、子供らしいつぶらな瞳で帝国軍士官の青年にニッコリと笑っていた。

第５７話に続く

第五十七話「降りしきる雨の中、少女は笑いながら剣を構えた」

1

「セリア河岸夜戦」

帝国軍武装鉄橋司令官のアデレード少将は細身の初老の男で、元々は補給畑の人間であるが、定年前の最後の仕事として武装鉄橋司令官の仕事がまわって来ていた。

任命された時はさほど重要拠点とは思われていなかったのがわかる人事だが、ここにきて武装鉄橋は対ローゼンフェリアの最重要拠点になってしまったのである。

これについては帝国軍国家元帥のオダ・ミヤビがしかるべき者を武装鉄橋に送る様にと、フェンリルに書簡を送っていたが、その会議ではその案件は却下され、バティスタ上級大将によるローゼンフェリア王国討伐案に取って代わられた為、武装鉄橋の司令官交代は結局、実行されていなかった。

アデレード少将は高級士官達と酒を酌み交わしていた。

しかし、ダイアナのグループがやってくる日であった為、部屋にお気に入りのライラという娼婦をよこす様に告げ、自分の部屋に戻っていこうとする。

「将軍は定年どころかまだまだ現役ですな」

参謀の一人が笑う。

「馬鹿者、軍での定年を迎えたら、あちらも定年だよ、帝都の家には妻しかいないからな、若い娘は今のうちだ」

アデレードは笑い返した。

だが、アデレード少将の任地での楽しみは不意に奪われてしまう。
見張りから、約５０名の王国軍兵士が降伏してきたとの知らせが入ったのである。
それを知らせに来た兵士の後ろにライラはいた。
「お前は私の部屋で少し待っていろ」
アデレードはライラに告げる。
「わかりました」
頭を下げてライラはアデレードの部屋に入っていく。
「将軍、降伏してきた敵の隊長が緊急に報告したい事があるそうです」
兵士が報告をしてきたので、
「わかった」
多少、不機嫌になりながらも彼は頷いた。

武装鉄橋は要塞が橋の代わりにセリア大河に架かっていると考えてよい。
ならば当然、鉄橋としての機能をも有して無ければ意味はないので、鉄門に閉ざされた要塞をつき抜ける巨大な通路が存在する。
王国軍より降伏した５０人は武装解除され通路に並べられていた、もちろんそれの２倍の武装した帝国兵が彼らを警戒している。

「では、王国軍はこの武装鉄橋を一気に押し流そうとしているのか？」
アデレードが驚きの声を上げると、王国軍の兵士の隊長は首を縦

に振る。
「そうです、現在３０００の兵士が堰を築き上げつつあります、我々は偵察を命じられましたが、私の隊はこの近辺の出身の者が多く、セリア大河が氾濫すれば家族が被害を受けるので将軍に知らせたのです」
「そうか、ちょっと待て」
アデレードは告げ、少し離れた位置にいる参謀に呼ぶ。
「どう思う？」
意見を求められた４０代の参謀は、
「堰を造っている証拠がないと、偵察を上流に派遣しますか？」
そう答えたが、アデレードは首を振る。
「ダメだ、偵察が行って帰ってくる間に堰が完成したら手遅れだ」

その様子を見ていた王国軍の隊長は、
「証拠は水位です、普段の雨の日に比べて堰で水を止めている分、水位が下がっていると……」
と、話した。
「そうですな、すぐに確認させます」
参謀は近くの兵士に確認を促す。
敬礼して、走り去った兵士は、すぐに慌てて帰って来た。
「参謀、確かです、雨が降ってしばらく立ちますが、流れはともかく水位はそれほど上がって来てません」
「何人かで確認したか？」
参謀が質問すると、
「ハイ、見張りの兵士達も普段の雨の日と違うと、首を傾げていました」
兵士は答えた。
その言葉を聞いて、アデレードと参謀は顔を見合わせた。

「やぁん、おじ様……焦りすぎ」
ミラは後ろから胸元にまわった手を上から押さえて声を上げた。
流し目で顔を赤らめるミラに３０代半ばの帝国軍士官の男は、
「うわぁ、ミラちゃんの胸かわいらしいな」
猫撫で声でミラの耳元に囁きながら、衣服を脱がしていこうとする。
「焦っちゃいやぁ、あんまりムリムリなのはミラはいやぁ！」
ミラが高く泣きそうな幼い声を上げると、
「ゴメン、ゴメンよ、優しくするよ」
帝国軍士官はミラの頭を撫でた。

「……」
そのやり取りをプリエルは部屋の隅で見ていた。
帝国軍士官が全くプリエルを無視していた為、この場をミラに任せる事にしたのだが恥ずかしくて、見ていられない。
『早く、早く、早く』
プリエルが心の中で叫んでいると、廊下がバタバタと騒がしくなった。
「出撃だ！　全軍出撃、当番隊残して出撃だ！」
ベルの音を鳴らしながら叫ぶ兵士の声が聞こえてくる。
「ふぅ」
プリエルは息をつく、これでミラは窮地を脱した様だと視線を上げたが、帝国士官は気にせずミラを押し倒していた。

「おじ様？　外で全軍出撃とか言ってるけど！」

ミラが思わず声をあげると、
「えっ、俺は今日は当番隊だから出撃しなくていいんだよ！　さぁ、たっぷり楽しもうよ」
帝国士官は飢えた狼の様な顔でミラの服の胸元に手をかけた。
「ちょっ……」
流石にプリエルが飛び出しかかったが、ミラは手で帝国士官に見えないようにプリエルを制してから、
「じゃあ、おじ様、もう此処には邪魔者がはいらないの？」
と、胸をまさぐる男の手を押さえた。
「そうだよ！　誰も来ないよ、ミラちゃん、俺もう我慢ならないよ」
プリエルをまったく無視して叫んだ男にミラは微笑んだ。
「そりゃ、よかった、ゆっくり寝てな」
次の瞬間、ミラの脚が男の首と右肩に素早く絡まる。
脚を利用し、相手の肩で頸動脈を締め上げる三角締めである。
男はしばらくバタバタ動いていたが、やがて全身の力が抜けた様に動かなくなった。

アデレード少将はリキュエール率いる王国軍を３０００と聞いていた為、自らも３０００というほぼ全ての戦力を率いて、上流に進んでいた。
武装鉄橋に残るのは今日の見張り当番隊の約１００名足らずである。
アデレードは降伏してきた５０人の王国兵の半分を武装鉄橋に残し、暫定的な処置として独房に入れて、残る半分の兵士を道案内に連れ出していた。
王国側の河岸を急いで北上する帝国軍はやがて上流にさしかかる。

「あれか……」
河に無数の明かりが見えているのを見て、アデレードが呟くと、
「そうです、これだけの大河です、総出で作業しています、突撃ひとつで瓦解するでしょう」
降伏した王国軍の隊長が答えた。
「よし、気付いている様子はない！　叩き潰せ！」
アデレード少将は突撃の命令を下し、帝国軍３０００は一斉に雨の中の篝火目掛けて突撃した。
雨で足元をとられながらも帝国軍は堰を築く為に作業中の王国軍の背後をついた……筈であった。

「アデレード少将！　敵兵などいません、あるのは篝火だけです！」
兵士達がどよめき始めた時に河とは反対側からリキュエール率いる２５００の王国軍が逆に突撃を敢行してきたのである。
「何だ、どういう事だ？」
驚愕し、アデレードは降伏した王国軍の隊長を振り返ったが、時が遅かった。
隊長以下２５名の兵士の刃はアデレード少将や参謀達に振り下ろされていたのである。

帝国軍３０００は東から側面を突かれた上に、西には河があり挟まれる格好になってしまう。
その上、司令部は壊滅、指揮系統は混乱した所にリキュエールは半包囲態勢を敷き帝国軍を更に追い詰めていった。
やはり、その中でも帝国軍の士気を大きく減退させたのはリキュエールの群を抜いた武勇で、緑のサイドテールを振り乱し、大斧一撃で帝国兵を蹴散らすリキュエールに立ち向かえる者は誰もその戦

場には存在しなかった。

その頃、リキュエール部隊から別動隊として、迂回して武装鉄橋に直接攻撃を仕掛けた５００の王国軍は１００名の帝国軍守備兵の痛烈な反撃を受けていた。

名前の通り、大量の守備兵器を備え、鉄で造られた武装鉄橋である。

攻撃側は河がある為に包囲攻撃は船でも使わなければ不可能。

現在の雨とセリア大河の濁流では船を出す事は無謀であり、どうしても攻撃正面は入口の鉄門に限られてしまう。

たとえ、５倍の戦力で攻めようとも攻撃側は不利である。

しかし、王国軍は武装鉄橋内に約３０の女性兵士を潜入させていた。

当然、警戒態勢に入っていた帝国軍守備隊は鉄橋から退去するように女性兵士達に伝えてきたが、実際に退去したのはライラ達本物の娼婦だけである。

残るプリエル達王国軍女性兵士は手薄になった武装鉄橋内部にそれぞれ身を隠していた。

「そろそろだな！」

「うん！」

ランプを消し、締め上げた帝国士官をベットの下に隠した部屋で、ミラに促されたプリエルは大きく頷いた。

これで武装鉄橋攻防戦にはケリがついた。
ミラ達は内部で独房に閉じ込められていた兵士達も助けだし、内部からも攻撃を開始したのである。
いかな武装鉄橋といえども５００からの外からの攻撃を１００名で守るところに、５０名近い内部からの攻撃を受けては防ぎきれという方が無茶であった。
こうして、ローゼンフェリア王国の東大陸中央への進出を防いでいた拠点、武装鉄橋は陥落した。

ランプ片手に傘を差すテスタとダイアナそして彼女に傘を差す少女の３人は武装鉄橋を遠くから見つめている。
「どうやらケリがついたじゃないか？」
ダイアナが差された傘の下で笑う。
武装鉄橋から陥落を知らせる松明が振られている。
「ええ、これで王国軍も一安心です、ありがとうございました」
「ああ、あんたらもわたしらも安泰さ、首都のアティナに引っ越す準備をしないとね」
テスタの言葉にダイアナは大声で笑った時に、大粒の雨がダイアナの顔を濡らした。
「なんだい？　あんた、ちゃんと傘を差しなよ！」
ダイアナは傘を差していた少女に振り返ったが、途端に絶句する。

傘を持っていた少女は血を流して倒れていた。

「条件を反古にし、さらに敵対行為をする、と宣言した人を素直にアティナには入れられないですよ、少し欲が過ぎましたね、ダイア

ナさん」

倒れた少女の傍らに立つテスタはびしょ濡れになっていた。
それもその筈で傘とランプの代わりにテスタの両方の手には、プリエルが預けていった剣が握られていたからだ。
「な……なんだい？　あれはほ、ほんの、」
ダイアナの声は震えていた、思わず肥満した身体がふらついて、地面に尻餅をつく。
「ほんの？」
テスタにはダイアナが交渉した時のような印象は全くなかった。
「いや、もういいから、アティナとは言わない、この場所でやっていくから！」
懇願するダイアナに、
「国家を馬鹿にしちゃいけません」
雨でうたれながらテスタは、ニッコリ笑って剣を構えた。

第５８話に続く

第五十八話「凱旋の裏側」

1

「戦いの後で」

朝になったが、雨は相変わらず降り続いている。
「どういう事なの？」
プリエルは驚きの表情でテスタを見つめた。
「あ、あの……おそらく武装鉄橋から逃げた帝国軍の残党が偶然、ダイアナさんを見つけ、裏切られた腹いせに殺害したと考えられます、わ、私は武装鉄橋陥落の合図を受けて確認に行きましたから、その場にはいなかったんです」
怯えた表情で説明をするテスタ、
「そ、そんな……」
プリエルは呆然と担架に乗せられて運ばれていくダイアナと少女の遺体を見送った。
ライラや残された娘達も悲しみにくれる様に泣き崩れている、テスタは頭を深々と下げると朝焼けが照らす武装鉄橋に向かう。
「……」
プリエルはしばらく黙り込んでいたが、やがて顔を上げると、黙って担架を運んでいく兵士達の方向に歩き出した。

武装鉄橋陥落の知らせは早馬によって、3日後には首都アティナに届き、メリエルは女王の間でおこなわれた朝の会議で部隊の損害が少ない事を確認すると、
「よかったぁ」

そう息をついて、安心した顔を浮かべた。
「女王陛下、この度の戦勝おめでとうございます」
ヴィスパーが頭を下げると、ベルクタイやネシア、その他の大臣達も祝辞を述べる。

「ありがとう」
それらの言葉に答え、メリエルは王座より立ち上がる。
「私はこれからサラセナ、バルド、ミオクォーレの三国にたいして同盟交渉に赴く準備に入ります、皆はそのつもりで準備に入ってください」
今、東ブルーヴェルト大陸は極北にサラセナ、東にバルド、南にミオクォーレ、東南にローゼンフェリア王国が大きく中央部、西部を占領した帝国を包囲した形になっている。
それぞれの軍事力は帝国軍に見劣りするが、４ヵ国が協力して当たれば、西ブルーヴェルト大陸から帝国軍勢力を排除する事すら夢ではなくなると言うのが、メリエルの考えだ。

もちろん、この案はメリエル個人から出た訳ではなく、カナミやヴィスパー等から出た意見を統一して導き出した作戦であった。
一度は同盟打診をほぼ無視されたメリエルだが、それから上級大将率いる帝国軍の侵攻を完全に退け、武装鉄橋を陥落させたローゼンフェリア王国軍を無視出来る筈はない、何かしらの反応があるに違いない。
そうした確信からメリエルは外交交渉に自ら乗り出そうと決意していた。

＊＊＊

それから1週間が過ぎ、市民達からお祭り気分がようやく抜け去った頃、留守兵を残して、武装鉄橋攻略部隊が首都に帰還した。
それを迎えた首都市民はお祭り気分を復活させて、歓声で攻略部隊を迎える。
「お帰りなさい、ご苦労様でした」
メリエルは城の中庭で帰還部隊を出迎えると、部隊長であったリキュエールを労った。
「女王陛下、出迎えありがとうございます」
リキュエールはメリエルの足元に伏せる。
「まぁ、まぁ、リキュエールさん、後でお茶でも飲みませんか？」
メリエルがかかんでリキュエールの肩に手を置く。
「いいですね、メリエルさん、久しぶりにケーキも食べたいですね」
「いいですよ、一休みしたらいらして下さい、私のお手製ケーキをご馳走しますからね」
二人はニッコリと笑いあうのだった。

「プリエルさん！」
ローゼンフェリアを連れたヴィスパーがプリエルを見つけて声をかけると、プリエルは、
「ただいま」
少し笑みを浮かべる。
「お疲れ様、メリエルさんはあちらにいますよ」
「うん、わかった、あのねヴィスパー君……」
「はい？」
勝利の凱旋だと言うのにプリエルの顔が冴えない。
「どうしたの？　何かあったの」

傍らにローゼンフェリアがヴィスパーの口にしようとした言葉を先に言う。
プリエルは顎に手を当て少し俯き、
「ああ……うん、あのね、ローゼちゃんとヴィスパー君、後でお姉ちゃんを連れて私の部屋に来てくれるかな？」
それだけ告げると、中庭から足早に城内に入っていってしまう。
「どうしたんだろ？」
首を傾げるヴィスパーに、
「わからない……けど、早めにメリエルを連れて会った方がいいね」
ローゼンフェリアは答えた。

2
「テスタへの処分」

「すぐに顔を見せてくれなかったから、あんまり良くない知らせだとは思ったのだけど……」
プリエルの部屋でメリエルはため息をついて、双子の妹の隣にベットに座った。
メリエルは白いドレスに手袋をした凱旋を迎える正装のままだ、ヴィスパーがプリエルからの用件を伝えるとすぐにやって来たのである。
半袖シャツに長ズボンのプリエルとは顔は一緒でも恰好は天地の差で、本当に女王と一兵士だが、２人の間にはそれぞれの服装など関係が無いように、ヴィスパーからは見えた。
「話すかどうかは確証が無いから迷ったけど、お姉ちゃんやヴィス

パー君達には話さないといけないと思ったからね……」
　プリエルはベットの隣に座るメリエルと部屋の椅子に座るローゼンフェリア、ドアに背中をかけるヴィスパーの順に視線を向ける。
「じゃあ、プリエルさんとテスタさんが署名したダイアナさんとの約束状は無くなっていたんだ？」
　ヴィスパーが聞くと、
「うん、ライラさんっていう人の話だと大切な物はいつも肌身離さず持っている人らしくて、そういう物ならまず持っていただろうと言っていたのだけど……遺体をライラさんと一緒に見たのだけど、約束状は無かったんだ」
　プリエルは両手を膝の辺りで合わせた。

「お金は？　それくらいの人なら現金も持ち歩いていたのよね？」
「流石に全額は持ち歩いてなかったらしいよ、近くの街の帝国商人に軍人を間に入れて貸していたみたい、その借用書類も無かったよ……持っていた分の現金も無かった」
　メリエルの質問にプリエルは答える。
「じゃあ、テスタのいう通りかもね」
　ローゼンフェリアは座っていた椅子からぴょんと降りた。
「武装鉄橋から逃げ出した帝国兵士がたまたまダイアナの事をよく知っていれば、金を借りていた帝国商人に借用書類を売れるし、裏切り者は斬る事も出来るしと思ったんじゃないかな」
　例の抑揚のない様子のローゼンフェリア。

「わかるよ、私もこれが無ければ、そう済ましていたかもしれないんだけど」
　ローゼンフェリアにプリエルは部屋の片隅にあった剣を抜いて見せた。

「それは？」
ヴィスパーが声を上げる、プリエルの抜いた剣は別段、おかしな様子はない、村で反乱を起こした時にプリエルが倒した帝国軍将校の物だ。
かなり品質の良いのが、ヴィスパーにも見てわかった、刀身が部屋に差す午後の陽光に鈍く光る。
「何かおかしいの？　私には別段、変には見えないけど」
メリエルが首を傾げると、ローゼンフェリアも同意した様にうなづく、ヴィスパーも同じ印象だ。

「違うんだよ」
プリエルは首を振った。
「私はネシアさんに剣を習う様になってからだけど、毎日練習しては、剣の手入れをしてるんだ……だからね、自分が使ってないのに人が使ったらわかるんだよ、武装鉄橋に潜入した時は剣をテスタちゃんに預けたんだけど……あとで見てみたら」
「使われていた形跡があったと？」
「そうなんだ」
ヴィスパーの言葉にプリエルはそうため息をつく。

「でも、血がついていた訳じゃないよね？」
ローゼンフェリアが剣を手に取って見た。
流石にローゼンフェリアが手に取ると、剣は大きすぎる。
「そうだけど……でも、血は念入りに拭けばわからないし、雨で流れちゃうから」
「私やメリエルが見てわかるような証拠がないとテスタに罪は問え

ないよ、あくまでもプリエルの主観だしね、それに、いくら結局は協力したとはいえ、土壇場で敵対行為を盾に条件を吊り上げた事もあるから仕方ないかも」

ローゼンフェリアはプリエルに剣を手渡す。

「ローゼちゃん、何て事をいうのよ！」

剣を返されたプリエルが声を上げたが、

「違うかな？　話を聞けばあの作戦の実行直前にあんな事言われたら、聞かざる得ないのはわかりきっている事だし、脅迫に近いよね、軍や国を脅迫する人間にはそれなりの報いがあっていいと思うけど」

ローゼンフェリアは平然と答え、椅子にまた座り直した。

「じゃあ、テスタちゃんが処刑したと言いたいの？　一応は協力してくれたんだよっ！」

プリエルは収まらない。

「じゃあ、その条件を今、呑めるの？　ダイアナに王国内での莫大な利権と裏での力を帝国女王の妹が約束した事になるけど」

ローゼンフェリアの黒い瞳に見据えられたプリエルは思わず動きが止まった。

確かにあの状況ではダイアナが帝国への通報を盾に条件の吊り上げを要求してきており、武装鉄橋攻略の為に聞かない訳にはいかなかったし、テスタに勧められた事もあるが、結局署名をしたのは自分なのである。

「ダイアナが死ななければ、私達はかなり困った事になってた、プリエルにも署名した責任が重くのしかかってくる、帝国軍がやったのか、テスタがやったのかはわからないけど、何とか助かったと考

えるべきじゃないのかな？」
「そんな……」
ローゼンフェリアに見られたプリエルは呆然としてしまう。

「……プリエル」
メリエルはプリエルの肩に手を置く。
「私はプリエルが嘘をついたとは思わないけれど、確実な証拠なしにテスタちゃんを裁く事は出来ないよ……でも、テスタちゃんにはそれなりの罰は与えさせて貰うよ」
メリエルはベットから立ち上がった。

第５８話に続く

第五十九話「メリエルの涙」

1

「テスタの賞罰」

テスタがメリエルから正式な呼び出しを受けたのは凱旋から三日後の昼下がり。

女王の間にやってくるとそこには玉座に座ったメリエル、何段かの階段を降りた所にはプリエルとヴィスパー、カナミ、リキュエール達のいつもの面々が並んで立っている。

「……」

テスタは女王の間を見渡すとわずかに目つきを変えたが、居並ぶ者達にペコッと会釈をすると、階段の下で肩膝をついて、

「女王陛下、御呼び出しに参上致しました」

頭を深々と下げて礼をする。

「ご苦労様です、テスタちゃん」

メリエルの様子は仰々しさがある。

「あ、あのぉ、女王陛下、今日は此処に呼ばれた御用が私には少し……」

テスタは不安そうな顔を浮かべて、もう一度周囲を見渡した。

「テスタちゃん、この度の武装鉄橋攻略作戦の成功はあなたの作戦による所が大きいです、その戦功に対し感謝し褒美を与えます」

メリエルはそう言いながら、玉座を降り、褒美の金貨の入った袋を直接テスタに手渡す。

「あ、ありがとうございます、これからも頑張らせて頂きます」

テスタは恐縮して頭を下げた。
金貨の袋を握らせたテスタの右手を両手で優しく包む様にメリエルは取る。
「テスタちゃん、私はその事は褒めるし、感謝もする、でもね……テスタちゃんは一つ大きなミスをしているよね？」

「女王陛下？」
キョトンとした表情を見せるテスタ。
「武装鉄橋は少ない犠牲で攻略できたけど、味方をしてくれた人達をみすみす帝国軍に殺されてしまったのは、一緒にいたテスタちゃんに責任はないかな？」
メリエルの言葉に女王の間にいた者達は騒然とした、テスタの表情もサッと曇った。
「帝国内部から味方になってくれた人の身の安全を守れないと、これから私達の味方をする人達が躊躇してしまう恐れが出てくる、そういう意味ではこれは大きいの」
２人の視線が交わり、ほんの数秒の時が流れる。

するとテスタはバッとメリエルに平伏して、
「は……はい、わかります、申し訳ありませんでした、どうか私をご処分いたしてください！」
異議を唱える事も無く、罪を認める。
「女王陛下！　ならば、私にも責任があります、作戦の総司令官は私です」
皆とならんでいたリキュエールが声を上げた。

総司令官は作戦を認可しているのだから、リキュエールの発言は当然だが、正直に申し立てる所に彼女の実直な性格が伺える。

しかし、メリエルはその申し出に首を横に振った。

「私は作戦には文句は言っていませんし、優秀な作戦と評しています、しかし問題は協力者の護衛方法にあり、私はテスタちゃんが協力者から離れたと話を聞いています、私が問題にしたのはその点なのです」

「……しかし」

「あなたはその時はセリア大河を挟んだ対岸の上流で帝国軍と戦っていたのでしょう？　そこまで責任は問えません」

メリエルの毅然とした口調にリキュエールも次の言葉が出ない。

周囲を見渡し、立ち上がったメリエルはひれ伏したままのテスタに言った。

「テスタちゃん、あなたは今回の件で功績はありましたが、怠慢な部分は見逃せません、よって私が解除するまで謹慎処分にいたします！」

メリエルの言葉にテスタはそのままのポーズで、

「わ、わかりました、本当にすいませんでした、大人しく謹慎していますので、また必要な時に私を御呼び立て下さい」

と、少し怯えた震えた声で答えた。

謹慎処分を受けたテスタが退室した後でメリエルはバルド王国とミオクォーレ教主国、サラセナとの同盟交渉を再開する事を宣言し、次の作戦の為に各部隊の訓練や装備の補充等を充実させるように指示を出し会議は閉会となった。

「……メリエル、いや女王陛下！」
各人が部屋に引き上げる時にカナミがメリエルを呼び止めた。
「カナミちゃん、メリエルでいいよ」
振り返るメリエル。
「……ったく、聞いていなかったわよ、ああいう処分をするのなら、あらかじめ言っておいてくれないと困るわよ」
カナミは頭を掻きながら言うと、
「ごめんなさい、テスタちゃんを謹慎させれば、負担がカナミちゃんにかかってくるのはわかっていたんだけど……」
メリエルは申し訳なさそうに目線を床に落とす。
「私に負担？　別にテスタがいなくても作戦は私が考えるわ、あれの謹慎がとけた時には帝国は滅びているんじゃないの？　少し面倒臭いと思っただけ」
カナミは肩をすくめた。
「……でもね、メリエル、本当は何があったかは聞かないけど、あいつ臆病だから早く謹慎といてやんなさいよ」
「わかってるよ、テスタちゃんは必要な仲間だと思っているからね」
その言葉にメリエルはコクリと強く首を縦に振ったのだった。

「メリエルさん！」
部屋の前の廊下でメリエルはヴィスパーに呼び止められる。
「ヴィスパー君、どうしたのかな、話なら部屋で話そうか？」
メリエルに微笑みかけられると、
「あっ、そうですね、お願いします」
ヴィスパーは周囲を少し気にしながら答えた。

相変わらずメリエルの部屋は女王の部屋と呼ぶには質素だ、ベットに机、私服の衣装架けがあるだけで、その衣装も女王というよりはせいぜい街の中流階層の家の娘レベルだ。
「座って」
メリエルはベットに腰掛けると、隣をポンポンと叩く。
「あっ……はい」
金髪の美少年が白い肌を少し赤くして、ベットの隣に座ったので、メリエルも深い意味があって勧めた訳ではなかったのだが、頬が上気してしまう。

「あ、あのね、テスタちゃんの事でしょ？」
しばしの互いの沈黙の後、メリエルの方から切り出すと、
「あっ、そうです」
ヴィスパーはメリエルの方を向いて、
「僕もあれでいい、と思いますよ」
そう言って笑う。
「ありがとう……」
メリエルは大きく息をつく。
「本当なら、あんな約束をしたプリエルも罰を受けるべきだろうし、テスタちゃんも結局は斬るつもりで約束の上乗せをプリエルに承知するように勧めた罪は大きい、ダイナアって人も土壇場で敵対行為をちらつかせて報酬の上乗せを要求してきたのだから、見逃せないよ」
「……本当なら……ですよね」
メリエルの言葉に俯くヴィスパー。

「でもね」

メリエルは自分の膝の辺りで両手を組んだ。
「正直な事ばかりしていても駄目なんだと思う、嘘はつきたくないけど、今回の事は大きくしたくなかったから、テスタちゃんの真意やプリエルの責任までは問いたくなかった」
「ええ……上乗せの約束の事は無かった事にしたほうがいいですよ、そしてテスタさんの言う通りダイアナさんは帝国兵の生き残りに殺害された事にすればいい……それでいいと思います」
「そうだね、でもプリエルはきっと怒るよ、約束したのは自分だから……都合の悪い所を無視しておかしいって言うよ」
ヴィスパーは彼女を支持したが、顔を伏せるメリエル。
「僕からもプリエルさんには言います、上乗せの約束は無かった事にしようって説得します」
「どうかな……プリエルは純粋だからね」
そのメリエルの台詞にヴィスパーは目を見開いた。
「メリエルさん！」
不意にメリエルの両方の肩を掴んで、身体を向かせる。

「ヴィスパー君？！」
びっくりした表情のメリエルにヴィスパーは優しく言った。
「……メリエルさんも純粋ですよ、プリエルさんはとても正直で純粋な人だけど、僕の大好きなメリエルさんも正直で純粋な、優しい人ですよ」
「……ヴィスパー君」
「メリエルさん、女王としての選択をしないといけないのは辛いでしょうが、大丈夫です、メリエルさんにはみんながいて、役に立つかはわからないけど僕もいますから」
見つめ合う2人、メリエルの瞳に大粒の涙が浮かび始める。
「ヴィスパー君、ありがとう、ありがとう」
メリエルの頬を止まらない涙がつたいだす。

「メリエルさん、僕はあなたが好きです、だからもう泣かないで……」

ヴィスパーはメリエルを強く抱きしめ唇を重ねた。

ローゼンフェリア王国に向けて、バルド王国、ミオクォーレ教主国の連名で同盟交渉の打診があったのは、それから3日後の事であった。

第６０話に続く

第六十話「教皇代理アンフィニと女王メリエル」

1

「交渉開始」

バルド王国、ミオクォーレ教主国からの同盟交渉は各国の代表が最も歴史の古いバルド王国に集まり、行うことが使者からの提案であった。

この事からもわかるようにバルド王国とミオクォーレは表向きの同盟関係ではないが、水面下での連絡は密接に取られている事がわかる。

この申し出にサラセナが参加していないのは、やはり極北という地理的な問題が交流を難しくしているという事が原因と思われた。

メリエルは朝の会議でこの提案を受け入れ、リキュエール率いる護衛５００と共にヴィスパー、カナミ、ミラを連れてバルド王国に赴く旨を決め、使者に返事を返す。

同盟交渉の開始は約3週間後、かなりの早足での開始だが、帝国がいつ新たな作戦を繰り出してくるかの不安があり、メリエルにはむしろ有り難いくらいである。

7日後。

同盟交渉の為、バルド王国に向けて、メリエルと５００の護衛部隊が首都アティナを進発した。

メリエルの乗る馬車の中にメリエル、カナミ、ヴィスパーそして、ローゼンフェリアはいる。

「この同盟がなれば、東、東南、南から中央の帝国軍に反撃する、いまだに大兵力を持つ帝国軍だけども三方面の正面作戦は苦しくなるに違いないわ」
「それが狙いだね」
カナミが地図を指し示すと、メリエルは答える。
「流石の帝国軍も三方面の敵には対応が難しいって事だよね」
ヴィスパーがカナミに確認するが、
「苦しいし、難しいけれど対応出来ない訳じゃないわ、下手をうてば全ての方面で負けもあるわ、帝国軍はそれくらい強大なのよ」
そう呆れたような声を出すカナミ。
「ならば、四つになれば良いよね？」
ローゼンフェリアが口を開くと、カナミは口元に笑みを浮かべて見せた。
「はい、よく出来ました」

バルド王国への道程は途中で帝国領を横切る為に慎重な旅となったが、東のバルド王国と南のミオクォーレの中間にローゼンフェリア王国が建国された為に帝国領を通行する危険性は大幅に軽減され、三国は行き来が楽になっている。
ローゼンフェリア王国一行はバルド王国と帝国軍との交戦地を避け、８日目にバルド王国の首都クワンザリに着いた。
「すごいね」
クワンザリについたローゼンフェリア王国女王メリエルの第一声はこの言葉である。

バルド王国は建国３００年の歴史を誇る国で全盛期は東ブルーヴェルト大陸の７割まで勢力を拡げた。

しかし、現在は東方を帝国の侵攻から粘り強く守るのみとなっている。
国家体制は帝国により脅かされているが、首都の威厳はいまだに健在でその規模や人口はアティナとは数段上をいく。

「……たしかに歴史を感じるよね」
ヴィスパーも感心して周囲を見渡してしまう。
案内の騎兵達の装備もローゼンフェリア王国軍の騎兵より装備も立派だ。
「帝国の首都と比べたらどんなのだろうね？」
何気なく言ったメリエルに、
「あそこはつまらないよ、沢山の人の苦労を吸って裕福になった人達を守る城壁に囲まれた造られた世界」
ローゼンフェリアは抑揚のない声で答えた。

クワンザリ城の前には親衛隊の騎兵達が立ち並び、ローゼンフェリア王国女王メリエルを出迎える。
一度は同盟交渉を無視した事など無かったかのような歓迎であった。

「ローゼンフェリア王国メリエル女王陛下ですな、私はバルド王国の王ルドルフと申します」
謁見の間に通されたメリエル達を立派な白髪に顔を覆われた老王が玉座を降りて出迎える。
老人ではあるが、ルドルフはがっちりした体つきにしっかりとし

た足どりだ。
「メリエルです、ルドルフ王、お初にお目にかかります」
メリエルが床に片膝を付けて伏せると、リキュエール、ヴィスパー、ミラ、ローゼンフェリアもそれに倣う。

「話は聞いていたが、お若いですな、私にはうらやましい限りです」
ルドルフは気さくに笑いながら、
「あまり年端は変わりませんな」
そう謁見の間に立ち並ぶ将軍達から少し離れた位置に立っている白銀の鎧に身を包む金髪の少女に声をかけた。
「ルドルフ王、メリエル女王と私では立場が違います、女王陛下に失礼に当たってしまいます」
冷静な口調でそう答えた金髪の少女はメリエルに近づく。
長い金髪を首筋辺りで白い小さなリボンで結んで纏めている。
ぬけるような白い肌、ややきつめの瞳だが、高い鼻に薄い唇は童顔だが、将来は相当な美人になるであろう事を容易に予想させた。

「……えっと？」
メリエルは美しい少女に戸惑った。
何者かわからなかったからである、カナミにはバルド王国国王ルドルフには息子はいるが、娘がいるとは聞いていないし、ミオクォーレの教皇は５０代の男性と聞いていた。

「メリエル女王陛下、お立ち下さい、私はミオクォーレ教皇の娘、アンフィニといいます、体調が優れぬ父の代理として全権を委任さ

れてきました、宜しくお願いいたします」
アンフィニと名乗った美しい少女は案外と背が低かった、メリエルと変わらないか、もう少し低いかも知れない。
「そうですか、宜しくお願いいたします」
メリエルはアンフィニに微笑みを向けた。

同盟交渉が始まる。
メリエル、ルドルフ、アンフィニの3人が会議室の円卓につき、それぞれの交渉団が後ろに控える形だ。
かなり急ぎ足感は否めないが、誰からも文句が表立って出ないのはやはり帝国に対しての反撃態勢を一刻も早く構築しなければならないという恐怖感である事は確かである。
「現在、帝国はこの東ブルーヴェルト大陸大陸において猛威を振るっている、このバルド王国方面軍、ミオクォーレ方面軍、サラセナ方面軍とそれぞれに優勢な戦力を敷きつつ、中央軍がそれらを統括し、休養や補給をおこなっている」
ルドルフが円卓の中央に置かれた地図を指差した。
「我々が同盟し、軍事共同作戦をとれば、三国間で兵や物資の移動をおこない、東ブルーヴェルト大陸の東方面から南方面に跨がる強固な防衛線の構築が可能となり、帝国の疲弊を誘えると考えます」
アンフィニがそう提案すると、ルドルフも頷き、メリエルを見る。

「ははーん、なるほど」
メリエルの後ろのカナミは小声で言う。
「どうしたの？　カナミちゃん、何がなるほどなんだい？」
ヴィスパーがカナミの耳元に口を近づけて聞く。

「あの様子では早い段階からあのミオクォーレの姫様は此処に来て、私達が武装鉄橋を攻略した場合の同盟案をルドルフ王と考えていた様だわ」
「そうなの？」
カナミの言葉にヴィスパーは円卓の少女アンフィニを見つめる。
先程は白銀の鎧だったが、今は純白のローブに白い肌を包んでいた。
「ええ、武装鉄橋が落ちない限り、セリア大河と北の山脈に阻まれ他国との行き来の自由度が低いローゼンフェリア王国は逆に言えば、武装鉄橋さえ確保していれば堅牢な物資中継地点としての働きを両国との間で果たせるのよ」
解説したカナミは不敵な笑みを浮かべた。

「それじゃあ、一回目のこちらからの同盟交渉に無しのつぶてだったのは？」
「武装鉄橋を落とさない限りローゼンフェリア王国なんて閉ざされた国家に過ぎないからよ、セリア大河を利用した船による輸送手段も使えないし、陸送なんて山脈越えだしね」
眼鏡を右手の中指でツイと上げるカナミ。
「都合よく物資中継地点に利用しようなんて甘いわよ、防衛ラインだなんて後ろ向きな作戦なんか受けられる訳無いでしょうが！」
その言葉が聞こえたのか、視線に気付いたのかはわからないが、アンフィニとカナミの視線が一瞬、交差した。

アンフィニから三国間の防衛計画が説明される、メリエルはしばらくそれを聞いていたが、やがて口を開いた。
「お言葉ですが、アンフィニ様、私達が考えてきた作戦は防衛作戦

ではありません」
「ほう」
興味深げなルドルフ。
「防衛作戦ではない？　どういう事ですか、メリエル女王」
怪訝な表情を見せるアンフィニにメリエルは視線を向けた。
メリエルとアンフィニ。
２人共に同じ年端であり、ヴィスパーからみれば魅力的であるが、対極な２人である。
メリエルは色白だが肌は黄色系であるし、髪は栗色で碧い瞳は優しげな丸い。　アンフィニはぬけるような白い肌に金髪、瞳は碧いがやや切れ長い。
体型はメリエルの方が女性らしいふくよかさがあり、身長もやや高い、ハッキリ言えばアンフィニは背の低いせいもあり、体型は幼児体型とも言えなくない。

髪型にしたら、髪をお互いリボンで纏めているのは共通していて、メリエルは背中辺りで大きな赤いリボン、アンフィニは首筋の辺りで目立たない程の小さな白いリボンをしている。
そんな少女２人が今後の世界の行く末を決めるような重要な会議の場で見合っていた。

「ローゼンフェリア王国軍としては、同盟締結後、速やかな多方面反撃作戦を考えています」
「馬鹿な！」
メリエルの言葉に、アンフィニは強い口調の声を上げて、
「あなた方は帝国より独立を勝ち取り国を建てた、更に帝国の上級大将の侵攻をも撃滅した事も認めよう、しかし、なお帝国軍は我々

より強力な戦力を有しているのだ！　馬鹿にし過ぎてはいないか？」
強気に机を叩き、メリエルに詰め寄る。
しかし、メリエルも負けてはいない。
強い瞳でアンフィニを見返し、
「わかっています、だからこそ、現在の帝国軍を叩くのです、我々の独立を許し、遠征軍の敗れた僅かなヒビを拡げて打ち破るのです、こちらが防衛に徹すれば、帝国は圧倒的な国力で兵士を補充してヒビを埋めてしまいます、帝国軍の隙を逃してはいけません」
そう言って反論する。
「しかし……数が違う、帝国軍はミオクォーレ方面軍約６万、バルド王国方面軍約８万、中央軍が８万はいると報告を受けている、我々は各約６～７割程度の戦力だ、ローゼンフェリアは幾らの一体どれくらいの戦力が出せる？」
アンフィニは具体的な帝国軍の戦力を上げ、ローゼンフェリア王国軍の戦力を問い質す。
「動員をかけて、どうにか３万５０００ぐらいになると思います」
「３万５０００、敵の中央軍が８万だぞ、我々よりも不利な状態でよくも多方面反撃などと！」
アンフィニはメリエルを睨み付けたが、
「総参謀長から説明させます、お願いしますね、カナミちゃん」
メリエルは後ろに控えるカナミに振り返った。
「総参謀長？」
アンフィニの視線がカナミに突き刺さる。
元々、強気な性格の様だが自分の考えた策を新参者に否定されたのが、頭にきている様子である。
しかし、ヴィスパーはカナミがそのような事を気にする少女では無い事を十分に知っていた。

「防衛作戦は最悪の作戦です、王国軍総参謀長としては請け負い兼ねます」

その言葉を聞いたアンフィニの表情を見て、カナミの口元は明らかに笑っていた。

第６１話に続く

第六十一話「ローゼンフェリア九歳になる」

1

「三国同盟」

「私の防衛作戦が最悪だと？　口を慎んでもらわないと、作戦どころか同盟交渉自体にも影響をあたえるぞ！」

アンフィニがまさしく吠える様に叫ぶ。

「ええ、ええ、では先に同盟交渉自体を終わらせてくださいまし、交渉の前に作戦を説明するなど聞いた事がございません」

しかし、まるでカナミは意に介さず、

「それとも、作戦の主導はそちらにあるとのアピールでございますか？」

続けて言い返す。

「……」

アンフィニは舌打ちした。

実は図星だ。

同盟交渉締結以前にメリエルに基本作戦を了承させる腹積もりだったのだ。

「私達は絶対的不利な状況から、帝国から独立を勝ち取り、帝国軍の誇れる上級大将を討ち取って、武装鉄橋を陥落させました……ある一応の作戦指導力はあるつもりです、アンフィニ様、作戦の事は同盟交渉締結後に慎重に話し合いましょう」

見計らい、メリエルが温和な口調で言葉を挟むと、

「そうだな、そこが前提になるのではないかな？」

ルドルフがアンフィニに取り計らう。
「はい、そうでしたね、失礼しました」
それに大人しく頭を下げながらもアンフィニは内心は穏やかではなかった。

同盟交渉が始まったが、こちらはまるで停滞なく進んだ。
もとより対帝国という大前提がある為、交渉決裂は三国共倒れの危険の可能性を飛躍的に引き上げるのみで益がない。
諸条件にたいしても各国共に欲張る事なく、三国の代表がある程度ずつ納得して合致をみたのである。

バルド王国王城の中庭に舞台を移し、同盟交渉締結宣言が行われる事になり全員が中庭に移動する。
「我らバルド王国、ミオクォーレ教主国、ローゼンフェリア王国の三国はここに互いを助け合い、いかなる敵にも立ち向かう盟友になった」
国自体の歴史も古く、自身も年長者であるルドルフが高らかに同盟を宣言すると、中庭に集まった文武百官やローゼンフェリア、ミオクォーレの使節団達は一斉に歓声を上げる。

「とりあえず上手くいったでいいのかな？」
メリエルは使節団にいるヴィスパーに近づき笑顔でウインクしてみせる。
「ご苦労様です、メリエルさん」
笑顔を返すヴィスパーだが、

「何やってるの？」
ローゼンフェリアが2人の間に割り込む。
「ローゼンフェリア？」
突然のローゼンフェリアに行動にメリエルは少し驚いた。

確かに最近、ヴィスパーとメリエルの仲は恋人と言ってもいい状態であるかも知れないし、ローゼンフェリアがそれに嫉妬を覚えるのも、何となくであるが理解出来る。
しかし、ここまであからさまにヴィスパーとメリエルの間に割って入って来るのは珍しい。
「ローゼンフェリアちゃん、どうしたの？」
顔には出さないが、メリエルはわずかにローゼンフェリアの行動に腹を立てていた。
笑ったつもりが笑えていないかもしれない。
「まだだよ、メリエル！　1番偉い女王がこんな時にニコニコしてたらダメ」
ローゼンフェリアの目つきは厳しい。
そこでメリエルはローゼンフェリアが全くヴィスパーを気にしていない事に気が付く。

「……あっ！」
メリエルは思わず口に手を当てて、アンフィニのいる方に振り返る。
同盟交渉は順調に進んだが、帝国に対しての作戦は依然、ミオクォーレ教主国代表のアンフィニと真っ向対立しているのだ。
アンフィニは睨んではいなかったが、その瞳をメリエル達ローゼンフェリア王国使節団に向けていた。

「そうよ、ここまではまずは規定路線みたいなモノだから、こっちが余程の条件を突き付けなければ成り立つのよ、ローゼンフェリアの言うとおりで勝負はここからね」
アンフィニに向かい不敵な笑みを浮かべ、メリエルの腰に手を当てるカナミ。
「ごめんね、メリエルさん、まだまだ話し合う事はあるからね」
ヴィスパーが謝ると、
「ううん、私がいけないね、ちょっと緩んじゃったよね」
苦笑するメリエル。

「次は私もいくよ」
ローゼンフェリアは美しい黒い瞳をアンフィニの碧い瞳と交わらせた。
「ええっ？」
メリエルとヴィスパーは揃えて声を上げる。
「でもローゼンフェリア、君はまだ8歳……」
「もう9歳」
ヴィスパーの躊躇を遮り、ローゼンフェリアはいつもの抑揚のない言葉で切り返す。
もちろん、8歳も9歳も大差はないのだが、ローゼンフェリアに言われるとヴィスパーは思わず口ごもってしまう。

「別にいいんじゃない？　この娘は言い出したら梃子でも動かない所があるし、頭もいいから、そんなに馬鹿な事も言い出さないでしょう」
カナミが肩をすくめると、
「わかった、じゃあよろしくね、ローゼンフェリアちゃん」

メリエルも頭を撫でて、ローゼンフェリアを覗き込む。
「メリエル、耳かして」
「！？」
首を傾げながらも素直に従うメリエル。
ローゼンフェリアはメリエル以外に聞こえない様にボソッと告げた。
「ヴィスパーの事……勝ったなんて、思わないでよね」

＊＊＊

アンフィニは困惑していた、ローゼンフェリア王国使節団が積極策を打ち出してきたのは意外であったが、三国協同の防衛ラインを設定するのは、前以てバルド王ルドルフとも話が通っており説得は有利だろう、その辺りは油断はならないが心配してはいなかった。
しかし、同盟交渉を終えて協同作戦会議になった途端に別の意味での心配が鎌首をもたげてきた。

大丈夫なのか？

席に着きながらアンフィニは思わず、そう口に出してしまいそうになる。
ローゼンフェリア王国の面々は１７歳の女王を筆頭に、１６歳の首席補佐官、１４歳の参謀長、そして９歳の少女が随員として目の前に座っていたのである。

しかし、長く黒い髪を二岐に縛り、胸の前に垂らし、非常に珍しい黒い瞳を持つ少女は非常に落ち着いた様子であり、幼いながらも美しさがあった。

『何なんだ？　この娘は？　何者なんだ』

少女は黒い瞳をアンフィニに向けていただけであったが、アンフィニは何かただ者ではない事を感じた、しかし所詮は子供だと思い直し軽く咳ばらいをして少女からの視線を切った。

会議は始めから、大前提となる部分から激突必至な為に熱くなる。

多方面攻勢を主張するローゼンフェリア王国軍参謀長カナミと連携防御を主張するミオクォーレ教主国教皇代理のアンフィニの意見が真っ向に対立しているのだから当然であった。

「三国が合わせてもなお国力が数倍はあろうかという帝国に対して、防衛作戦を持って勝機を伺うというのがアンフィニ様の作戦でありますが、それはあまりにも消極的作戦です、相手の力が大きいのなら、こちらから積極的に急所を攻撃するようでないと帝国軍が崩れるとは考え難いです」

カナミの開口一番の意見に対してアンフィニも、

「国力の劣る側の無理な攻勢作戦など自殺行為です、今は帝国の攻勢作戦を乗り切り、相手の疲弊を誘うべきだと考えます」

と、即座に返した。

「帝国軍だけが疲弊する訳でもなし、長期持久戦は国力がモノを言います、短期決戦に出なければ、ジリジリと帝国軍に我々は押されていくのがオチです」

カナミが更に切り返すが、アンフィニは首を振る。

「じり貧が嫌だから、ドカ貧を選ぶのは国家の政策とは思えません」

「ならば、国力が数倍の相手に長期戦を挑み、あまつさえ、たいした策も無く、疲弊を待つなどという楽観的でその場のがれの政策が国家の政策と言われるのであれば、私の作戦は間違っている事になりますが？　それともミオクォーレ教主国の兵士は疲労しない戦いをしているとでも？」

カナミからの言葉は明らにアンフィニへの宣戦布告であった。

「貴公はこれまでの我々の戦いを侮辱するかっ！」

机を叩いて立ち上がるアンフィニ。

「これまでの戦い？　ああ、東大陸に侵攻してきた帝国軍にアンフィニ様の言われる防御作戦でジリジリと後退を余儀なくされ、今や東大陸の６割を帝国領とする事を感受してきた戦いですね、よくわかります」

冷ややかにカナミは笑う。

「……」

ヴィスパーは思わず頭を抱えそうになる。

確かにカナミは優秀な参謀であり、その天才的と言ってもいい軍事的な才能は１４歳という早熟さで開花をみている。

しかし、過去のいかなる分野においても、早熟の天才には何かしらの致命的になりうる欠点が付き物である場合もある。

それがひょっとしたら、カナミの

「自分の意見が理解出来ない人間は平気で侮辱してしまう」

という性格ではないだろうか。

確かにカナミの言う通り、ミオクォーレ教主国は帝国軍の猛攻を前に現在は小康を保つも自国領土を帝国軍侵攻前までより、かなり侵食されている。

防衛作戦が上手く機能していないのだ、現在の小康にしても帝国軍の休養や再編成、そして思わぬローゼンフェリア王国の登場がもたらした結果であり、ミオクォーレ教主国単独で帝国軍を食い止めている訳ではないとカナミは分析している。

バルド王国にしてもカナミの評価は大差はない。

それにしても、もう少し言い方があるだろう、とヴィスパーは考える。

確かにカナミの評価はあっているかも知れないが、両国は血を流して帝国と戦っているのだ。

カナミの言い方が到底、受け入れられるとは考えにくかった。

「よくもそこまで言ってくれたな！　今まで戦いで散った英霊に貴公達のような礼儀知らずの山奥の女王達と組んで戦ったなとどどうして報告出来ようか！　バルド王、失礼！」

アンフィニが怒りに任せて、ルドルフに頭を下げ席を立ち去ろうとする。

このままでは会議が決裂してしまう。

ヴィスパーは何とかしないとマズイと考えたが、よい考えなどいきなりは当然浮かばない。

早足でアンフィニは歩き出す。

その時である、

「……待って」

１人の少女に声にアンフィニは思わず足を止めた。

何を言われてもここは立ち去るつもりであったが、なぜか足が止まってしまったのだ。

「……姿も美しいが声も美しいな、そなたは！　よろしい、言いた

い事があれば聞こう！」
アンフィニは席に振り返えり、呼び止めた少女ローゼンフェリアを見つめた。

「……ありがとう」

そう答えて立ち上がったローゼンフェリアの口元は少し笑っている様にヴィスパーには見えた。

第６２話に続く

第六十二話「四方面攻勢作戦」

1

「攻勢作戦条件」

「……まず、始めにやらないといけない事があるからね」
口元の笑みをハッキリ見せるローゼンフェリア。
「始めにやること？」
声を上げたアンフィニや他の出席者はローゼンフェリアに釘付けになってしまう。
その容姿もあるのか、所詮は子供のする事と無視出来ない。
そういうローゼンフェリアの不可思議な部分をヴィスパー達は知っていたが、初対面のアンフィニやルドルフらにもそれは通用する様であった、皆がローゼンフェリアを注視していた。

「……カナミ」
ローゼンフェリアはカナミを見つめる。
「な、なによ？」
嫌な予感がしたのかカナミはわずかに引いたが、それよりも先にローゼンフェリアが動いていた。
次の瞬間、ローゼンフェリアの右の平手がカナミの左頬を強く叩いていたのである。

会議室に響く乾いた音。
その場の人間達にはまるで時間が止まった様であった。
「な……」

流石のカナミも呆然としている。
その場の人間達にはまるで時間が止まった様であった。

「カナミ……とりあえず、帝国軍と戦った人達を馬鹿にした事を謝って」
沈黙を作り出したのも、その沈黙を破ったのもローゼンフェリア自身だ。
「……で、」
カナミは反論しようとする、しかし……
「間違えた事を言うのは人間だから、仕方がない部分もあるけど、それを気がつき知りつつも謝りもしないのが1番良くない」
ローゼンフェリアはきっぱりと言い放ち、カナミの反論を許さない。
「……でもっ」
「謝って」
「……」
再び反論を試みるカナミだが、やはりローゼンフェリアはそれを遮る。
無視してわめき散らす事は出来なかった。
ハッキリ言えば、14歳のカナミが9歳のローゼンフェリアに気圧されている。

「カナミは自分が言い過ぎた事はわかるよね？」
ローゼンフェリアの黒い瞳に見つめられたカナミは大きくため息をつくと、起立してアンフィニに向き直り、
「先程は失言でした、アンフィニ様、どうか……お許しを」
諦めた様に頭を下げる。

「……」
素直に頭を下げられてはアンフィニもその場を立ち去る訳にはいかない。
しばしの沈黙の後で、
「了解した、わかってもらえて嬉しい」
そう答え、素直に席に戻るアンフィニ。

カナミも着席して、どうにか会議の決裂だけは避けられたと、出席者は安堵の息を漏らし、たいした子供だとローゼンフェリアに注目したが、当のローゼンフェリアはいまだ着席せずにいつの間にかアンフィニに歩み寄っていた。
そして、
「どうした？」
怪訝な表情を見せたアンフィニにも、
「あなたも謝れ、誰が山奥の女王か」
そう言いながら平手打ちを頬に喰らわせたのだ。

再び会議室がシーンとした沈黙に包まれ、数秒の後に騒然となった。
「貴様、アンフィニ様に何をするかっ！」
アンフィニの部下の青年騎士らしき1人がローゼンフェリアに腰の剣に手をかけて迫る。
「黙れっ、こっちは無礼を謝った！　ならば一国の女王を侮辱したそちらだけ何喰わぬ顔で着席なんて許すと思ったか？」
ローゼンフェリアが低い声で睨むと、青年騎士は思わず手が止まってしまう。
「……ぐううっ」

睨まれているだけだが青年騎士は顔を歪める。
教皇の娘であるアンフィニに手を上げる事など、騎士の立場として見逃せる筈もなく、剣を抜き放とうとするが、手が震えて剣が抜けないのだ。

武装した騎士が丸腰のローゼンフェリア相手に完全に呑まれてしまっている。
「よい、下がれっ、下がっていろっ！」
そんな青年騎士に助け船を出したのは他ならぬアンフィニだ。
騎士が下がると、アンフィニは立ち上がり、メリエルに向かって深々と頭を下げ、
「女王陛下、そしてローゼンフェリアの方々、どうか私の暴言をお許しください、この通りです」
神妙な様子で素直に謝罪したのである。

「あ、いや……こちらこそ、とりあえず落ち着いて話し合いをしましょう」
微笑みながらアンフィニに笑うメリエル。
傍らにいたルドルフも笑い声を上げ、
「血気盛んなのはいいが、我々は同盟の仲間だ、落ち着いて話し合いをしようではないか」
と、年長者らしくその場を収めた。

「そなたにも気を使わせた、女王陛下にあれだけ失礼な物言いをしては叩かれても文句は言えないな」

ローゼンフェリアの頭に軽く手を置いて、微笑みを見せるアンフィニ。
「……いいよ、謝ってくれたら」
アンフィニに微笑み返し、席に戻るローゼンフェリア。
「助かったわ、叩かれたのは癪だけど、ありがとう」
カナミは何も無かった様に済ます彼女に耳打ちをした。

こうして、どうにか会議が再開されたが、いまだに問題が解決した訳ではなかった。
なにせ作戦の根本の方針が定まっていないのだ。
ミオクォーレが主張している連携守備作戦か、ローゼンフェリアの同時攻勢作戦か、バルド王ルドルフは前もってアンフィニから連携守備作戦の説明を受けて大筋の方向で同意には至っていたが、露骨にミオクォーレの肩を持つような真似はしない。

第一に連携守備作戦ならその要はどうしてもミオクォーレ、バルドの中間に位置するローゼンフェリアになる。
そのローゼンフェリアが不服のままで作戦を始動しようとはルドルフは考えてもいなかったし、同意はするが、ローゼンフェリアの意向も聞く旨はアンフィニにも伝えていた。
聞こえによってはバルド王ルドルフは若者達の間で日和見な老人に見えるが、また一方によっては老獪に両国を調整している様にも見える。

会議再開冒頭にアンフィニがルドルフに一瞬、目配せをしたのを

カナミは見逃さなかった。
『……なるほど、すでにある程度の合意がすんでるな、それでいて露骨にミオクォーレの肩を持たないのは老獪なお爺様だこと』
口に出さず毒づき、笑みを浮かべて、メリエルを見る。
このままでは平行線であり、リスクの高さを理由にやんわりとルドルフに諭されかねない、その危惧はメリエルも感じていた様でカナミの目配せに強く頷く。

「提案があります！」
メリエルが意を決した様に立ち上がり、周囲を見渡す。
「メリエル女王？　何か策があるのかな」
顔を上げるルドルフ。
「……メリエル女王」
アンフィニもここまで大人しかったメリエルのいきなりの行動に少し驚きを隠せない。
メリエルは、
「私達の作戦には続きがあります、実は我々は四方面攻勢作戦を望んでいるのです」
と、切り出した。
「四方面作戦？　まさか女王はサラセナを同盟を申し出るつもりか？」
声を上げるアンフィニにメリエルは首を縦に振る。
「そうです、いかに帝国軍といえども北、東、南、そして東南から一斉に攻勢作戦なれば勝機は更に高いのではないでしょうか？」
しかし、ため息をつき、
「メリエル女王陛下……それは無理なのだ」
アンフィニは苦々しい表情で唸る様に答えた。

「アンフィニ様？」
メリエルは怪訝な表情を見せる。
「我々とて、サラセナを考えなかった訳ではないのだ、しかしかの国は同盟に対し拒否の意向を強く示している」
ルドルフが答え、
「かの国はこのブルーヴェルト大陸の危機にまるで関心が無いように振る舞うのだ！　極北に閉じこもっていれば自分達だけは安心だと考えているに違いない」
アンフィニはテーブルを強く叩いた。
「なるほど……」
腕を組むカナミ。
実際、ローゼンフェリア王国からも使者を出しているが、返事はなしのつぶてであったのだ。

サラセナは極北で厳しい寒さ、高度の高い山々が国土の８割以上を占め、攻撃側には非常に攻めにくい土地である。
帝国軍の方面軍司令官はモストウィー上級大将であるが、バルド王国方面、ミオクォーレ教主国方面に比べてかなりの苦戦を強いられていた。
しかし、守りが固いからとはいえこの状態での孤立主義は得策とは言えない。
新興のローゼンフェリアだけでなく、バルド王国、ミオクォーレ教主国からの同盟すらもサラセナは頑なに拒否していたのだ。
「奴隷国家め、帝国を駆逐した後でただで済むと思うなよ」
アンフィニはまるで呪詛でも吐くような口調でテーブルを再び叩く。

カナミはその言葉を聞いて何かを確信した様にメリエルを見つめる。

メリエルも小さく頷き返すと、

「アンフィニ様、では私が直接サラセナに行って同盟に加わる様に説得いたします、それが成功したら、四方面攻勢作戦に同意しては頂けないでしょうか」

そう提案したのである。

「馬鹿な！　無理だ、メリエル女王陛下、我々はこれまでも何度も同盟を締結し、我々と協力するように求めてきた、極寒の地に命懸けの使者を何人送ったか……寒さや帝国領を横断する為に何人も命を落としたのだ、しかし返事はいつも拒絶だ！」

アンフィニは大声でまくし立て、

「あいつらは穴蔵から出てこないネズミだ」

と、まで言い放つ始末。

「ならば、それを説得出来たら四方面作戦を承知していただけますか？」

メリエルは興奮気味のアンフィニに比べて冷静だ。

ルドルフにも視線を送り了承を求める。

「出来たのなら私は構わないと思うが……どうだね、アンフィニ皇女」

すんなりとルドルフはそれを受け入れ、アンフィニに話を振った。

「わかりました……サラセナを説得出来れば四方面作戦を認めましょう、しかし帝国領である中央部を横断し、極寒の地に赴くのは危険過ぎます、女王陛下自ら行かれるのはどうかと思いますが……」

アンフィニは答えたが、

「いえ大丈夫です、仲間になる人には直接会います、それに私達の国にはもう1人の私がいますから、しばらく空けても平気です」

メリエルは答えながら、微笑みを見せたのだった。

第63話に続く

第六十三話「ミラの賭け」

1

「プリエル女王代行」

ローゼンフェリア王国アティナ王城。

「なんなのさ、一体どうなっているのよ」

栗色の長髪を背中辺りで赤いリボンで縛った少女は、会議室の上座の椅子を見ながら大きな声を張り上げた。

「まぁ、簡単にはうまくいくとは思わんかったよ、しかし、こういう展開は読まなかった」

ニヤニヤしながら、腕を組み椅子に座るベルクタイ。

「ねぇ！　ベルクタイさんもそう思うよねぇ！」

栗色の髪の少女プリエルは頬を膨らませ、椅子ではなく直接、テーブルに座り出す。

「こら、プリエル！　ちゃんと椅子に座りなさい、女王専用の上座があるでしょうに」

ネシアがプリエルを睨む、第二次ヴァンフォーレ会戦での傷が癒えてようやく登城してきたばかりである。

「上座はいいよ、上座は、だいたい座る場所なんて関係無いって」

テーブルから適当な席に座るプリエル。

「……」

何かを言いかけたが、ネシアは止めた、メリエルの席である上座にプリエルは座るつもりは無いようだ。

メリエルから急使がアティナ王城に着いたのが昨日の事である、

その内容はプリエルにとっては衝撃的だった。
昨日の持ってきた手紙には同盟使節団は５００名の護衛のうち４７０名をローゼンフェリアに返し、残る３０名を連れて、そのままサラセナへの同盟交渉に赴くので、プリエルを女王代行に指名して、本国の護りを任せる旨が書いてあったのである。

「とりあえずは政策的な物はお姉ちゃんが帰ってくるまで保留、急を要する物だけ決めていくよ！」
プリエルは騒然とする朝の会議の冒頭で各大臣に告げる。
メリエルは政策的な事を相当勉強していたが、プリエルにはわからないので、下手な手出しをしない事に決めた、同盟交渉に旅立つ前に急を要する事や重要案件はメリエルやヴィスパー、カナミがあらかた片付けていたおかげで、大臣や担当の人間の意見をよく聞けば、何とかなるとプリエルは見ていた。

しかし、それは甘い期待だった、会議が開会した途端に各大臣から緊急を要すると判を押した様な枕言葉を付けた議案がプリエルに向かって続出してきたのである。
分からない議案には、担当者を呼び出し、意見を聞きながら自分の意見も忌憚なく言い、決定を下し始める。

「浄水池の整備？　やらないと水不足になるよ！」
「種籾が足りないなら、特別に配ろうよ、貰った人には来年の租税を配布した分量に応じて増やす！」
「軍の武装は大切だよ、新しい武器をポチョムキンさんを……いや、

1番安く納めてくれる武器商人に入札で納めさせて！　もちろん、粗悪品なんかはチェックする」
「ええっと、備蓄の古い食料は兵士の人達に分配するといいよ」

その様な調子でプリエルは上がってくる案件に対して様々な意見を出し、各担当者や大臣達と擦り合わせをして、どうにかこうにか処理を進めていく。
もちろん、現実は甘くなく、プリエルのアイディアの大半は予算や様々な現実の壁に軽く打ち破られて崩壊の浮き目を見ているのだが、いくつかは目を見張るような画期的なアイディアを出す所は姉ゆずりな面があった。
そうして、プリエル女王代行はへとへとになりながら、
「こんなんだったら、あたしがサラセナに行ってた方がよかったよぉ」
と、捨て台詞を残して会議を終え、会議室を逃げるように出て行ったのであった。

2

「メリエル商隊」

「行き先はヴァロンベルグです、積み荷は酒や乾物になります」
ヴィスパーは帝国兵に頭を下げながら告げた。
「……そうか」
馬車に詰まれた酒の樽を見ながら帝国兵は書類に何やら書き込んでいる。

帝国兵達は１０人程の集団で、占領地の治安を維持する憲兵だろう。
「随分と人数を連れているな、馬車も5台か」
合計４０人近い、商隊にしてはかなりの規模だ。
「はい、サラセナの帝国兵の皆様はかなりお酒をお求め下さるらしいと噂を聞きましたので、仲間達と商隊を組んだのです」
ヴィスパーは愛想笑いを見せ、隊長らしき男に一本の酒瓶を差し出す。
「なるほどな、ヴァロンベルグは寒いからな、いい商いをしろよ、よし行っていいぞ」
憲兵隊長はヴィスパーに通行証を渡しながら、酒瓶を見てニヤついた。

「フーッ、これでやっと次がヴァロンベルグかぁ」
馬車のスピードを上げ、ヴィスパーはため息をつく。
「随分早く来たね、やっぱり商人に化けるのが通りやすいね」
前方の幌を開けて、二頭の馬を操るヴィスパーの隣に乗り移るメリエル。
「メリエルさん、ここは狭いですよ」
ヴィスパーが慌てて注意するが、
「平気、平気」
メリエルはヴィスパーに身体を寄せて座った。

「でも、隠れていくよりも堂々と商隊を組んで移動する方が早く進めるね、カナミちゃんの言う通りだね」
微笑むメリエル。

「そうですね、下手に数人で商人に擬装しているより帝国兵のチェックが甘いのかも知れません、かえってこれだけの規模で擬装は有り得ない、と決めてかかっている部分を突いたカナミちゃんらしい賢い手段ですよね」

感心した様にヴィスパーは言った。

バルド、ローゼンフェリア、ミオクォーレのどの国からでも、極北のサラセナに行くには東ブルーヴェルト大陸中央部に拡がる帝国軍の勢力圏を通らねばならず、交渉に赴くにもそれが第一の問題点に上がった。

それに対してカナミの出した案が商人になりきって、かなりの規模の商隊を組んで堂々と通ろうという案である。

下手な擬装をしても帝国軍の哨戒網をくぐり抜ける事が難しいなら、いっその事、帝国軍の対サラセナ最前線拠点であるヴァロンベルグまで商売するつもりで行った方が相手をだませるのではないか、という発想でそれは見事に図に当たっていた。

「後はヴァロンベルグから上手くサラセナに入り込まないといけないね……きゃぁっ！」

心配そうに呟くメリエルだが突然に声をあげる、ただでさえ狭い2人の座る乗り手の座る椅子のヴィスパーとメリエルの間にローゼンフェリアが滑り込んできたのである。

「ちょ、ローゼンフェリア、狭いっ！　狭いよ」

慌てるヴィスパーだが、ローゼンフェリアは無理矢理に小さな身体を2人の間に埋めた。

「ちょっ、ちょっとローゼンフェリアちゃん、危ないから！」

叫ぶメリエルをローゼンフェリアは横目で見て、

「だったらメリエルが荷台に戻って……」

と、ボソリと言った。

「あいつら、何を遊んでやがるんだ」

メリエル達の馬車の様子を見ながら、別の馬車から見ていたミラは毒づく。

「まぁ、いいじゃないですか、案外ここまでは楽に来れたじゃないですか？」

そんなミラに苦笑しながら答えるリキュエール。

「ふんっ……あんな、連中なんかどうでもいいさ、カナミ、あんたはヴァロンベルグに着いた後にサラセナに入る方法は考えてあるんだろうね」

ミラはゴロリと横になると、傍らのカナミを見た。

「何でもかんでも私に振るのね？　たまには頭脳労働譲るわよ、ミラ」

酒樽に寄り掛かり、ため息を付くカナミ。

しかし、すまして首を振り、

「私は女王補佐官で、お前は参謀長だ、おのずと作戦をどっちが考えるかは決まってくるだろ？　それともカナミが前線で戦うか？私はバティスタの目の前に立った事もあるが、代わってもいいぞ」

ミラは口元に笑いを浮かべる。

「そんなの遠慮するわ、安心して、一応の手段は考えてあるわよ」

腕を組んで答えたカナミは、

「ああ、そうだ」

思い出した様に声を上げ、ミラに這うように近づいてジロジロと見た。

「な、なんだ？　何を人を見ている？」

突然のカナミの行動に焦って声を上げるミラ。
ニヤリと笑いながら、
「いやぁね……あなたはその恰好が戦い易いらしいけど、サラセナでそんな恰好してたら戦う前に凍え死ぬわよ」
そうカナミは告げた。

「う、うるさいっ！　わかっている、ヴァロンベルグに着いたら着替える」
黒の肌に密着する特殊素材の襟なしハイネック、同じ素材の腿までのパンツルックの戦闘服に身を包んだミラは顔を赤くして、カナミに怒鳴り付ける。
傍らで見ていたリキュエールは今までミラが露出の高い黒の戦闘服にこだわりがあるのは、何となく知っていたが、流石に極北極寒のサラセナでは無理があるとは感じていた。
しかし、仲間になった初日に戦闘服の露出に突っ込んだヴィスパーが痛い目にあっていたので、リキュエールはそれには触れないでいたのだ。

「そうよねぇ、寒いもんねぇ、やっとこさミラちゃんがお着替えしてくれるとなれば、我が兵の中に少なからずいるミラちゃんファンが喜ぶわぁ」
カナミがクックックッと笑うと、
「な、馬鹿にしやがって、わかった！　私は着替えないからな、サラセナにもこの恰好で行ってやるからな！」
赤面したミラはなって宣言する。
「無理よぉ、いくらミラちゃんでもサラセナにそんな恰好で行ったら凍え死にしちゃうわよぉ」

ニヤリと眼鏡を光らせるカナミ。
「無理なものか！」
「無理よ、賭けてもいいわよ、ミラちゃん～、その恰好でサラセナ王宮まで行けたら……欲しい物何かある？」
どうせ無理だ、と言いたげな瞳をわざと見せるカナミに、
「金だ、私のここまでの功績を評して功労金をはずんでもらう！」
ミラは即答した。

聞いていたリキュエールには、ミラはそこまで守銭奴的なイメージを持っていなかった為に意外だったが、そんな疑問は次のカナミの返事に吹き飛ばされる。

「わかったわ、その代わり、我慢できなかったら、本国に帰り次第、三日間ヴィスパーの専属メイドになってね、もちろん私との約束でやらされているなんて不粋な事はばらさず、自分の意思で志願するのよ」
「なっ！　メイド？」
思わず声を上げて、目を見張るミラ。
「そう、慎ましくヴィスパーにご奉仕するの」
既に企み笑いを隠さないカナミに、
「だ……誰がメイドなんかやるかっ！」
ミラは食ってかかるが、
「そうよ、やりたくなきゃ、サラセナにその恰好でいけば良いだけ、ミラちゃんなら平気よね？」
と、切り返され、
「わかった！　ボーナスはずんでもらうからな！」
そう条件の受け入れを高らかに宣言してしまっていたのだった。

「ここにいるリキュエールが証人になってくれるわ、聞いてたわね？」

カナミに話を振られたリキュエールは、

「わかりました、頑張って下さいね、ミラさん」

自分でもいささか意地悪な言い方になったと思いながらもミラに微笑んだ。

その時、北からの冷たい風が幌の間から馬車の中に吹き込んでくる。

アルザード帝国東ブルーヴェルト大陸遠征軍サラセナ方面軍の本拠地であるヴァロンベルグはもう近くであった。

第６４話に続く

第六十四話「吹きすさぶ寒風」

1

「ヴァロンベルグ」

ヴァロンベルグは対サラセナ戦線の帝国軍最前線拠点であり、トマス・モストウィー上級大将が約４万５０００の戦力を率いて駐屯をしている。

北上すると、そこからは標高の高い山岳地帯に変わり、サラセナ領だ。

モストウィー上級大将はサラセナ戦線開戦以降、激しい攻勢を仕掛けているが、気候と地形を完全に味方につけたサラセナ軍の前に奥地に進めば、補給線を断たれ、奇襲を受ける展開を繰り返され、多大な損害を受けて後退し、現在は攻勢開始点のヴァロンベルグまで後退していたのだ。

「かなりの大きな都市だね、クワンザリに負けない位だ」

声を上げるメリエル。

「そうね、ここにはサラセナ戦線開戦当時は６万近い帝国軍がいたらしいからね、住民は２０万を越えるらしいわよ」

カナミがメリエルに答えると、

「凄いね、こんなに寒いのにアティナの倍は居るんだね、負けない様にしなくちゃ！」

メリエルは国造りに燃える女王の顔を見せる。

「それは、それは……ここは帝国軍の進駐に合わせて、帝国軍相手に商売をする商人達が集まって来てるところもあるわよ」

「なるほどね、お金の流れがあれば、多少は環境が辛くても寂れな

いんだね」
カナミの説明にメリエルは納得した。

「カナミ様！」
部下の1人が街中から帰ってくる。
カナミがバルド王国を出る前に、あらかじめ先行して情報収集の為に放っておいた部下だ。
「ご苦労様、どう？　怪しまれずに商売出来そうな場所は見つかった？」
カナミが聞くと、
「平気です、酒場を出せそうな空いてる店舗が見つかりました、カナミ様達がサラセナに行っている間にここで情報を集めて待っています」
と、笑った。

「よし、私達は宿をとって夜を待ってから、サラセナに潜入しますか！」
防寒の為の厚手の服をカナミは羽織った。
ローゼンフェリアもヴィスパーに厚手の防寒服を着せてもらい、更に防寒帽、手袋をつけてもらう。
ヴァロンベルグでももう十分に寒さの強い寒冷地で、防寒装備は当たり前であった。
「ほら、ミラちゃんも防寒服を……」
ヴィスパーはミラに防寒服を差し出す、しかし殺気すら含んだ瞳で、
「お前のメイドなんて、ゴメンだ、冗談じゃない」

ミラに睨みつけてられてしまい、意味も分からず、近くにいたローゼンフェリアに困ったような視線を送る。
ローゼンフェリアは特に何を答える訳でもなく、横目をミラに向けただけであった。

３０人でまとまっているのも目立つので、とりあえず何組かに別れ、宿をとり、メリエル達のグループはその一室でサラセナ国境までのルートを先に潜入させていた密偵の青年と打ち合わせる事にした。
だが、ここで意外な答えが返ってきたのだ。

「カナミさん、サラセナには簡単に潜入出来ると思います、帝国軍の警戒はさほどではありません、私も二回程、夜をついて国境まで楽に行けましたよ」
「どういう事よ？」
カナミが怪訝な表情で聞くと、
「帝国軍の士気が落ちていると思われます、サラセナ侵攻で相当の被害を受けて撃退され、当初６万近い兵が４万半ばぐらいまで擦り減らされて後退を余儀なくされたのです、残った兵も負傷者が多く、強気で知られるらしいトマス・モストウィー上級大将も流石に今は戦力を回復する事に集中せざる得ない状況です」
密偵の青年は地図を広げながら説明した。
「なるほどね、各方面軍で１番苦戦しているとは知っていたけど、そこまでとはね、でも警戒網が薄いのはどうしてかしら？」
メリエルが疑問を口にして首を傾げると、
「そうですね、ここは方面軍の本拠地のヴァロンベルグなんだから、ここをサラセナ軍に攻撃されるのは痛手じゃないのかな？」

ヴィスパーもメリエルの疑問に同意する。

「攻撃は無い、サラセナ人は山から下りないよ」

ボソリとローゼンフェリアが呟いた。

それを聞いたカナミが腕を組み、

「なるほどね、徹底しているわね」

と、ため息をつく。

「意味がわからないな、説明してくれる？」

誰でも良いから、と言いたげに周囲を見渡すメリエルにリキュエールが口添えする。

「女王陛下、サラセナは元々はるか昔、ある国家の奴隷の強制労働地帯だったのです、そこが反乱を起こして独立し、更に各地から奴隷として虐げられた人々が集まり、国家として成り立っていったのです」

「それは何かの本で読んだよ、でも１００年近く昔の話だよね？」

メリエルは答える。

女王として、近隣諸国の勉強は十分に、とは言えないが一通りはしていた。

諸国とは言ってもいまや国家と呼べる組織はブルーヴェルト大陸を見渡してもアルザード帝国、バルド王国、ミオクォーレ教主国、ローゼンフェリア王国、そしてサラセナの５ヵ国しか存在しないのであるが……

「今では主権国家として認知され、宝石などの生産などで潤っているサラセナですが、独立を表明した当時は周辺国家はまるで認めずに何度も討伐軍を差し向けました」

リキュエールがそこまで説明すると、

「その中で粘り強い戦いをし、多大な犠牲をだしながらも、守り通した領土を保持するのがサラセナの第一義になったわけ、奴隷の立場から勝ち取った楽園があればいい、余計な領土には興味がないのよ」

カナミがため息をついて見せた。

「領土保全が至上命題なのか……これは難しい相手だね、メリエルさん」

メリエルに心配そうな視線を向けるヴィスパー。

しかし、周りが暗くなりがちな中でメリエルは口元に上機嫌な笑いを浮かべ、

「そういう事なら、さして問題は無いかな？　さぁ、みんな夜まで十分に休養しようね」

と、立ち上がったのだった。

＊＊＊

ヴィスパーはローゼンフェリアとメリエルが同室。

カナミとミラ、リキュエールが同室となる、男女混じっているが、夜には出発してしまうのだから、あまり気にする事は無かった。

「……メリエル」

しばらく部屋でくつろいでいると、ローゼンフェリアがメリエルを呼ぶ。

「どうしたの？」

メリエルがベッドに座るローゼンフェリアを覗き込むと、

「……根拠も無しに問題ないなんて、よく言うよ」

ローゼンフェリアはボソッと言った。

「バレた？　ローゼンフェリアちゃんには隠し事出来ないなぁ、これから交渉いくのに女王の私が不安がってもね」

舌を出すメリエル。

もちろん、それは同室のヴィスパーにも聞こえていた。
「そうだったんですか、何だか自信ありげだったから、秘策でもあるのかな？　とか思いました」
ヴィスパーは思わず苦笑する。
「無理だよぉ、だいたい人は会ってみないと分からないもの」
メリエルも苦笑をヴィスパーに返した。
「確かに、でもサラセナには昔からの護らないといけない物がある分だけ、交渉をまとめ上げるのはその辺りをいい条件で納得させないといけませんね」
ベッドに座りながら腕を組み悩むヴィスパーに、
「心配しないでヴィスパー、きっと上手くいく」
ローゼンフェリアはヴィスパーの隣に座った。

「え、ああ、ローゼンフェリアには何か考えがあるのかな？」
隣に座ったローゼンフェリアの頭をヴィスパーは軽く撫でると、
「フフッ、ヴィスパーは私を頼りにしてくれる？」
ローゼンフェリアはヴィスパーに近づいて、顔を覗き込む。

頭を撫でられたローゼンフェリアはいつもの抑揚のない声ではない、女の子らしい口調で、ヴィスパーに9歳とは思えない色気のある笑みを浮かべた。
「……えっ、もちろんだよ、僕はローゼンフェリアを信頼して、頼りにしているよ」

そう答ながらも、ヴィスパーはローゼンフェリアの滅多に見せない様子に、異性を意識して赤面してしまう。

「……任せて」

笑みを浮かべたまま、ローゼンフェリアは頷く。

視界の隅のメリエルの視線がわずかに鋭くなったのをヴィスパーは分かったのだが、とりあえずは見なかった事にしておいた。

そして数時間後、メリエル、カナミ、ミラ、ヴィスパー、リキュエール、ローゼンフェリアは案内役の密偵と数名の兵と共に、夜陰に紛れ、サラセナ国境を目指し、冷たい風が吹きおろす雪を被る山々に向けて、歩き出していく。

「クソッ」

案内役の密偵と先頭に立ち、周囲を警戒する役目のミラは舌打ちしながら歩いていた。

彼女は別に先頭に立つ警戒役が不満で舌打ちした訳ではない。

昼間に正面切って戦うのなら分からないが、闇夜での戦闘や潜入行動に関する事なら、リキュエールやネシアにも負ける気がしないし、おそらく帝国軍の哨戒兵がいても、いち早く感知出来る自分が先頭で警戒する事には異論はなかった。

ただ、ミラは山から吹きおろす寒風に耐えられずに、防寒服を着ている自分の情けなさが許せなかっただけなのである。

それくらいにサラセナからの風は冷たく、そして厳しかった。

第６５話に続く

第六十五話「白い世界」

1

「サラセナ領へ」

サラセナに入ったメリエル一行は寒風に晒されながらも夜の道を北に進む。

「まだ本格的に寒くなるには間があるらしいけど、今でこの寒さじゃあ帝国軍も戦力が回復しても、冬季攻勢は辛そうだね」

ヴィスパーは雲間から照らす月明かりに白い息を吹きかける。

「この寒さと険しい山々こそがサラセナの護り神だと言われてます」

リキュエールは周辺を警戒しながら答えた。

「それだけじゃないわ、サラセナの兵達は数は帝国に劣る、情報によれば総数3万弱らしいから私達ローゼンフェリアよりも少ないかもしれない……でも、よく鍛えられてるわよ」

声が寒さに僅かに震えているカナミ。

「まだ、地面に雪は無いけど山脈を一つ越えると、雪が残る地帯らしいです、おそらくそこからがサラセナの本格的な防衛ラインなんでしょう」

リキュエールが雪を被る山々を見上げる。

ヴィスパーは、

「そこからが本当のサラセナの寒さなんだね、これ以上を覚悟しないといけないとは……ローゼンフェリア、平気かい？」

ローゼンフェリアを気にして頭を撫でた。

ローゼンフェリアの出自はヴィスパー、メリエル、プリエルの3人しか知らないが、帝国首都は温暖な気候な場所らしいので、サラセナの寒さはローゼンフェリアには堪えるのではないかとヴィスパーは心配していたのだ。

今までローゼンフェリアが特に不安を覚えるような体調の不調を訴えてくる事はなかったが、慣れない気候が幼い身体に負担をかける恐れはある。

しかしながら、その心配は杞憂だった。

「心配してくれてありがとう、寒いけど平気だよ」

ローゼンフェリアはそう上機嫌に答える。

「そうか、ならいいけど……なんだか少し嬉しそうだね？」

ヴィスパーが聞くと、

「嬉しいのはヴィスパーが心配してくれたから……あとはこんなに寒い土地が初めてだからなのもあるかもね」

雲間から照らす月明かりに浮かぶローゼンフェリアの笑顔は歳相応の無邪気な物であった。

ローゼンフェリアだって大人びてはいるが、9歳の子供なのだ、今まで人生の大半を過ごしやすい場所で生活自体は豪華だが、檻にも似た場所で秘匿される様に育てられたのである。

知らない外の世界は予想を超えた寒さでさえ、好奇心を満たしてくれる事柄になっているのだ。

「どうやら、お寒いピクニックは終わりの様だ」

不意に先頭を歩いていたミラが立ち止まる。

「えっ？」
その言葉に反応して、背中に背負った大斧を構え、メリエルを伏せさせるリキュエール。
ヴィスパーは近くにいたローゼンフェリアを抱き抱え周囲を伺う、しかし先程と何も変わらない風景だ。
辺りは寒冷地帯によく見られる針葉樹が所々に生えている山の麓である。

「帝国？　サラセナ？」
メリエルはリキュエールに無理矢理、伏せさせられた体勢から顔を上げてミラに聞いたが、ミラは無言のまま直立している。
冷静に考えればメリエルの質問に答える事は無理に決まっているのだ、ミラだからこそ、気配を感じ取れたのであって、リキュエールですら気配のわからないような段階で相手の正体など掴めようがない。
しかしながら、メリエルの問いはその場の全員の知りたい事である、仮にサラセナ兵ならば素性を素直に明かし、自分達が交渉の使者である事を明白にしなければならないし、帝国兵ならば戦って先を急ぐか、振り切るかを選択する必要に迫られる。

既にサラセナ領に入って小一時間以上経つ為、サラセナ兵だと考えたいが、帝国軍の強行偵察部隊や撤退の遅れた部隊とも考える事も出来る、油断は禁物であった。
この辺りはサラセナ領ではあるが、いまだに競合地域なのだ、どちらが出てきても文句は言えない。

「右斜め前方だ……黙ってろ」
低い声で告げるミラ。
それを受け、リキュエールはその方向からメリエルを隠す様に立つ。
ヴィスパーも右斜め前方を注視するが、暗闇に針葉樹が並んでいる事しかわからないので、ローゼンフェリアを背中に回して、腰の剣に手をかける。
「3、4人ですね」
ボソッとリキュエールが言うと、
「なら帝国軍でも強行突破可能ですよね、いつまでも睨み合うのもなんですね」
メリエルはその場で立ち上がった。

「女王陛下っ！　矢などで射られたら」
「メリエルさん！　危ないですっ！」
リキュエールとヴィスパーがメリエルの突然の行動に同時に慌てる。
「平気、平気、あそこからなら夜だし、風も強いからどんな名人でも一回では当たらないよ」
ニッコリ笑うメリエル。
「確かにそうだが、いい度胸だ」
ミラは笑った。

「そこに隠れているのは何者ですか？　我々はローゼンフェリア王国よりのサラセナ国に対しての正式な使者です」
声を大きくして告げるメリエル。

相手からの返事はなかった……緊張と寒風だけ両者の間を駆け抜ける。

もしかしたら相手は帝国兵で数が少ない為に出るに事も出来ないのでは、とヴィスパーが考え始めた時に針葉樹の影から数人の軽装の青年兵士達が姿を現した。

どうやらサラセナ軍の様だ。

中の隊長らしい肌の白い男がメリエルに近寄って来て、

「我々はサラセナ軍の国境偵察隊だ、ローゼンフェリア王国？　確かバルドとミオクォーレの間に出来た国だな？　そこの使者か」

警戒した様子を見せながら覗き込む。

リキュエールが何か言いたげに一歩踏み出そうとしたが、メリエルはそれを右手で制して、

「はい、親書も携えております、何とぞ速やかに首都までの道程を急ぎたいのです」

と、頭を下げる。

「……なるほどな、ならば使者殿の名前を名乗っていただこうか」

すでにリキュエールやヴィスパーは武器を収めているが、その隊長は右手を腰の剣にかけたままで、メリエルに尋ねる。

それに対しメリエルはゆっくりと目線を上げ答える。

「私はローゼンフェリア王国女王メリエルです、どうかサラセナ国女王陛下におとりつぎ下さらないでしょうか？　この大陸の命運を左右する危急のお願いを申し上げに来たと……」

慣れた様子のサラセナ兵達に動揺が走った。

2
「凍土の王宮」

メリエル達が身分を明らかにすると、サラセナ側のそれからの対応は素早く、5日後にはメリエル達一行はサラセナの首都リッツオーに着いていた。

リッツオーまでの道程は雪がかなり残る場所の山越えや険しく危険な道などもあり、サラセナ側の適切な案内が無ければ無事に辿り着けたかも怪しかった程で、温暖な時期を狙ったにも関わらず、帝国軍が苦労したのも納得だ。

「普通に来てたら、半分くらい死んでた可能性もあるわね」

カナミがそう言ったのもあながち大袈裟にも聞こえない。

リッツオーは流石に経済的に豊かなサラセナの首都だけあって、区画や建物も整備されている。

寒さは相変わらずどころか、国境よりも確実に厳しい寒さだが、店や市場はなりの活況を見せていた。

皆がある程度の厚着をしているが、メリエル達程の防寒服まで着込んでいる者は少ない。

「慣れれば人間どこでも生きていける物ですね、国境でサラセナ兵が軽装だったのも驚きましたが」

リキュエールは驚きの声を上げ、
「そうですよね」
ヴィスパーは相槌を打つ。

「あれが女王陛下の居城ですか？」
案内の兵士にメリエルがリッツオーを見下ろす山にそびえる城に目を向けながら聞くと、
「そうです、メリエル女王、リッツオー城は永久凍土を先人達が掘り進み、建てた城なのです」
そう答えてメリエルに頭を下げた。
「凍土を、なぜですか？　なぜ、街に城を築かなかったのですか？」
不思議がるヴィスパー。
リッツオー城は例えればローゼンフェリア王国領内にあるザレマ要塞に似ている、自然の山を掘り抜いて城として利用し、足りない部分を人工に用意した材料で造るのである。

この方法は手間はかかるが材料費用を抑える事が可能であるし、岩肌が多い峡谷にあるザレマ要塞のような場所には向いているが、リッツオー城には向いている様にはヴィスパーには思えなかった。
何よりも寒さが築城作業の負担になり、それによる犠牲も覚悟しなければならない割りの合わない作業になるからだ。
結局は麓にアティナ城のような平城を造った方が築城に伴う犠牲や統治や登城の面を考えれば有効だったのでは、とヴィスパーは考えたのだ。

だが、それに対する案内の壮年のサラセナ兵の答えは単純で簡単だった。

「城はまだサラセナがある国家の奴隷強制労働地区だった頃に宝石類の採掘作業の合間に駆り出されて作らされた物が土台です、作業する人間の命を考えなければ安く上がるでしょう」

「……」

思わず黙る一行に、

「我々は先人の努力を無駄にせずに、そして受けた報いを忘れない為にリッツオー城に王が住み続けるのだと教えられました」

案内役の兵はそう説明を付け加える。

その時にヴィスパーはサラセナという国家の意識に刷り込まれた暗い何かを垣間見た言いようのない感覚にとらわれた。

第６６話に続く

第六十六話「サラセナ女王ユージィ」

1

「外食に出る」

メリエルは登城には兵士を伴わず、ローゼンフェリア、ヴィスパー、リキュエール、カナミを連れていく事になった。

ミラにはヴィスパーから声をかけたのだが交渉事の席に私は要らないだろう、と断られてしまったのである。

補佐官なのだから、とヴィスパーは説得するつもりだったが、

「仕方ないよ、ミラちゃんには帰りも警戒役の役目があるからね、滞在中はゆっくり休んでもらおうよ」

メリエルがそれを許したので、結局は連れていかない事になった。

そして当然、メリエルは一刻も早い登城とサラセナ女王との面会を望んだが、交渉となればいきなりとはいかないという理由でそれから二日間もの間、山にそびえるリッツオー城を城下の宿の窓から見上げるしかなかったのである。

＊＊＊

「……全く」

カナミはベッドに横になりながらぼやいた。

「これで丸二日間か」

テーブルに座っていた同室のメリエルも交渉用の資料に目を通しながら、頬杖をつく。
「フッ、やはりサラセナはまともに交渉するつもりがないのかも知れないわね、前に出した使者にも返事は無しのつぶてだったし」
カナミは鼻で笑う。
「カナミちゃん、何とかならないかしら？　一刻も早く交渉をまとめて帰らないと、カナミちゃんの反対している三ヶ国防衛作戦が採用されちゃうのよ、それだと勝ち目が薄いって言っていたでしょ？」
困った声を出したメリエルだが、
「交渉が始まらないとなると何もやりようがないわよ、相手があの山城に閉じこもってるんだから……メリエルとそう歳が変わらないらしいけどね、かなりの陰険な奴かもね」
カナミは両手を頭の後ろで組み、ため息をついた。

同じ頃、ヴィスパー、ローゼンフェリア、リキュエールの3人は外に出て食事をとる事になり、リッツオーの街を歩いていた。
サラセナに用意された宿は立派で食堂もあったのだが、ローゼンフェリアが突然に外で食べたいと言い出した為、外の食堂を捜していたのである。
「ねぇ、ローゼンフェリア、宿に閉じこもりっぱなしが嫌だったのはわかるけど、こんなに寒い思いしてまで外に出ても、宿よりいい物は食べられないと思うけど」
「そうですよ、もう夕方ですよ、ますます寒くなってきます、宿に戻った方が良いですよ」
何度かヴィスパーとリキュエールがそう言っているのだが、
「……ヤダ、別に2人は帰ってもいい」
ローゼンフェリアはマフラーと帽子から覗かせた黒い瞳を横目にしながら、抑揚のない言葉を返してきた。

「……ったく、いいよ、僕はローゼンフェリアに付き合うから、リキュエールさんは帰ってもいいよね？　メリエルさんの近くにいないと親衛隊隊長としての面目も立たないだろ？」
　そう言いながら、後ろに着いて来ていたリキュエールに振り返るヴィスパー。
　話を振られたリキュエールは手を振りながら、
「いえっ、平気ですよ、宿には兵達もミラちゃんもいますから大丈夫です、それよりもヴィスパーさんこそ交渉が始まったら補佐官としてやる事が多いんじゃないですか？　私が見てますからヴィスパーさんこそ宿で陛下と打ち合わせをしてきてください」
　と、答える。

「いえ、僕こそカナミさんがいれば大丈夫です、リキュエールさんこそ」
「いやぁ、ヴィスパーさんこそ」
「何を言ってるんですかリキュエールさん、親衛隊隊長じゃないですか」
「ヴィスパーさんこそ、補佐官なんですから」
「……」
「……」
　2人で見合った後、
「やっぱり、このまま3人で行きましょうか？」
　ヴィスパーが提案すると、リキュエールも、
「そうですよね、何だか変な言い合いをしましたね」
　そう苦笑いしあいながら、振り返った2人は同時に全く同じ言葉を声に出していた。

「いない！？」

2

「美しき女王」

サラセナ王国女王ユージィ・エリィキュネルは湯浴みから戻ると、やり残した執務を自室で処理する為に軍からの報告書を持ち廊下を歩いていた。

軍が帝国北方軍を攻勢出発点であるヴァロンベルグまで押し返したという大筋の報告は受けていたので、後は詳細な報告を読むだけで多少は楽な気分で自室のベッドに座る。

「フゥー」

寝間着に着替えて、リラックスした様に息を吐くユージィ。

その容姿は可憐で美しい。

肩ほどまでの長さの銀髪、１６０センチの身長に女性らしいふくよかな体つきは１７歳の年齢よりも十分な成長を感じさせる。

顔つきは全体的に優しげな印象を与え、高貴な美しさの中に純粋な可愛いらしさも微妙なバランスで含んでいた。

サラセナ王国の人間は大方は肌がぬける様に白く、ユージィもそうである。

銀髪が思ったより濡れていたので、ベッドから立ち上がり、暖炉のそばの安楽椅子に腰掛けて報告書に目を通し、
「前線部隊の損害は予想の範囲内……これなら、新規に徴兵はしなくても済みそうですね」
独り言を言う。

帝国軍の攻勢は苛烈であった、帝国軍北方司令官のトマス・モストウィー上級大将率いる帝国軍は十分な兵力に経験と物資、そして司令官の旺盛な攻撃意志により、序盤はサラセナ軍を押しまくり、サラセナ領深くまで侵攻を果たしたが、そこまでだった。
あくまでも優勢な帝国軍との直接対決を避け、ゲリラ戦を展開し、主力を温存したユージィの作戦により、徐々に勢いの鈍った帝国北方軍はサラセナの首都であるリッツオーにたどり着く前に短い夏季攻勢のチャンスの時間を使い果たしてしまったのである。

それでもモストウィー上級大将は諦めずに今だに状況有利と判断、秋季攻勢を企画したが、これが落とし穴であった。
元々、温暖である西大陸の出身である帝国兵にとって、サラセナの秋がまるで自国の真冬の様な物であったのだ。
その上、モストウィー上級大将に不運だったのは、サラセナの秋の寒さが例年より厳しかったのと帝国が夏季攻勢でサラセナを屈服させる予定だった為、兵達にサラセナの寒さに耐えうる寒冷装備を軍が準備していなかった事だった。
結果、帝国軍はサラセナの各地で苦戦し、退却を余儀なくされたのである。
投入戦力６万のうち約１万５０００を失い、また１万以上の凍傷

等による重傷者を出し、夏季攻勢で得た地域を放棄して、ヴァロンベルグに撤退したのであった。

「親衛騎士団の投入は要らないですね、しばらく帝国はヴァロンベルグから出てはこれない、後はローゼンフェリア女王……」

ユージィは報告書をテーブルに置いて、安楽椅子に深く身体を沈める、髪の毛はすでに乾いているが、まだベッドに入って寝てしまう気にはならない。

「……サラセナの国是は自ら地獄より勝ち取った楽園と仲間を護る事、それが建国以来の教え」

自分が生まれてから、ずっと聞かされてきた国是である、奴隷という立場からはい上がってきたサラセナの歴史が造らせた国是をユージィは口にした。

「昔の事だね」

少女の声。

すでに入口のドアは開いており、振り返ったユージィの頬を廊下の寒気が通り抜け銀髪を揺らした。

そこには1人の少女が立つ。

黒髪を首の後ろで紐で縛り二股に分け、胸の前に長く垂らしている10歳前後の少女。

口元に微かな笑いを浮かべながら、黒い瞳がユージィの瞳を捉えている。

そして、少女は眩しい程に美しかった。

「あなたは……どなたですか？　ここまで誰にも会いませんでしたか？」

ユージィの声は震えていた、少女が何処から来たのかはわからないが、リッツオー城は山城で街からの登城は面倒だが、逆に侵入者は潜入しにくい城だ。

そのうえ、特に警戒中ではないにせよ、衛兵は何人もいる、どうやってここに少女は現れたのか？

「あなたにだけ会いに来たんだよ、他の人には用事はないね」

少女は抑揚のない声で言うと、ドアを閉め、ユージィに歩み寄った。

「……」

声を出そうと思いはしたが、ユージィは思いとどまる、目の前の少女には自分を害するつもりはなく何か別の意図があって来たに違いないと感じたのである。

「私に用事が？　でも、まずは名前を教えてくれませんか？」

ユージィは自分は安楽椅子ではなくベッドに座り、ローゼンフェリアには机の椅子を勧めた。

だが、その黒髪の少女は勧められた椅子を素通りして、ユージィの隣に座ってズイッと顔を近づける。

「私はローゼンフェリア、あなたがユージィ女王だよね」
ユージィの瞳にローゼンフェリアの黒い瞳が相対した。

ローゼンフェリアと名乗った娘は色気すら垣間見せる美貌を持ってはいるが、どうみても5歳以上は年下に見える。
ユージィも立場上、様々な年上の高官や大臣とも丁寧な態度ではあるが、論戦し、それなりの政争をしたつもりであり、簡単に相手には呑まれない自信があるつもりだ。
しかし、ローゼンフェリアと名乗った娘は、何とも言えない特別な雰囲気で脅迫するでもなく、懐柔するでもなく自分を呑み込もうとしている様であった。

「……ローゼンフェリアさんですね、そうですよ、私はサラセナ王女のユージィです」
頷くユージィ。
「間違えなくてよかった、私達はあなた達の友達になれる、だから友達になりにきたよ」
ローゼンフェリアは口元に笑みを浮かべたのだった。

第67話に続く

第六十七話「ユージィとローゼンフェリア」

1
「友人」

「あなたはローゼンフェリア王国の使いですね？　王女様は確かメリエルさんというお名前でしたから、貴女はどういう立場になるのでしょうか？」

ローゼンフェリアと名乗った事から、ローゼンフェリア王国と無関係ではないとみたユージィはそうローゼンフェリアに聞く。

「私はローゼンフェリア王国の女王のメリエルの友達だよ」

ローゼンフェリアは抑揚のない口調で答える。

「なるほど、貴女は私と友達になってどうするおつもりですか？」

ユージィは瞳をわずかに細めた、目の前の少女はローゼンフェリア王国とサラセナの交渉の為に此処にやって来た、と推測をつけている。

「友達になるのに、後にどうするかを考えるんだ？　ユージィ王女」

ローゼンフェリアは再びユージィに顔を近づけた。

今度の口調は少し大人びた様子だ。

「いえ、私は違いますよ、それなら貴女は私がローゼンフェリア王国との交渉に応じる気はない、と断言しても友達になってくれますか？」

ユージィが聞くとローゼンフェリアは笑う。

「いいよ、なってあげるよ、ユージィは悩んでいるから悩み事も聞くよ」

「悩み事？　私の悩みがローゼンフェリアさんにはお分かりなので？」
「わかるよ」
ユージィの問いにローゼンフェリアは即答し、
「ユージィはサラセナの未来を心配しているんだよね、そうだよ、このまま黙っていたらサラセナは滅びるんだよ」
と、告げたのだ。
「滅びるですか？　サラセナが？　我々は帝国北方軍を完膚なきまでに撃退したばかりなんですよ、滅びると言われても……」
「そんな事は意味ないね」
滅びると言われて、反論したユージィに冷たく言い放つローゼンフェリア。
「どういう事ですか？」
「わかっているくせに……子供にはわからないとでも思った？　帝国軍を一回追い返したくらいで調子に乗らない方がいいよ」
「……」
ユージィは沈黙するしかなかった。
「春になれば帝国軍は再び戦力を回復して攻勢してくるよ、たとえ秋まで戦っても今度は帝国軍も冬季用の装備万全でくるだろうね、そこで勝てても……」
ローゼンフェリアはユージィを黒い瞳で見据える。
ユージィは言い返す事が出来なかった、帝国とサラセナの国力は比較するのが馬鹿らしい程の差があるのだ、サラセナは地下資源等で潤ってはいるが、帝国からみれば小金持ちに過ぎなく、人口が少

ない為に兵力は補充はきかない。

今回の一連の戦いで帝国軍に約１万５０００の損害を与えたサラセナだが次に、もしその半数の７０００でもサラセナ軍に被害が出たら、総勢３万程度のサラセナ軍には大損害になり、戦力の回復は年単位かかってしまうだろう。

公称１２０万実態８０万と言われる帝国軍にとっては１万５０００はそう痛手にはならない、国力からいえば早い時期に補充可能であろう。

「もしサラセナがこのまま守っているだけなら、次にサラセナに帝国軍が攻めてきた時には、もしかしたらバルド王国、ミオクォーレと私達はいないかもしれないよ……そうなれば」

「……」

再び沈黙するユージィ。

そうなればブルーヴェルト大陸に残る国家勢力はアルザード帝国とサラセナのみとなる。

もちろん、そのような状態でのサラセナの存在をアルザード帝国が許す筈も無く、どのような犠牲を払っても、帝国の持てる力を結集しサラセナを攻略、アルザード帝国のブルーヴェルト大陸統一を成し遂げるに違いないのだ。

「貴女の言いたい事は理屈ではわかります、しかし我々は国を打ち立てた理念があります、サラセナはいくつかの国で奴隷として虐げ

られた人達が集まり、建国された国です、私達の先達を散々虐げておいて、今更同盟しようなど……」

ローゼンフェリアから顔を背けながら、ユージィは言う。

サラセナの建国時にはすでに存在していたバルド王国やミオクォーレからも少なからず奴隷がサラセナに逃げ込んで来ており、それが遥か昔で当事者でないのにも関わらず、国民感情として記憶に残っている。

それならば、ローゼンフェリア王国は関係ないかといえば、そういう訳でも無い、極北のサラセナは成り立ちからの閉鎖性から中央のいかなる国々とも今まで、通商条約以上の関係を持った事がないのだ。

「恨みや妬みが深いのはわかるよ、ローゼンフェリア王国が出来た理由もそれなんだから……」

背けたユージィの顔を両手で触りながら、正面を向けさせるローゼンフェリア。

「……ローゼンフェリアさん？」

少し驚いた表情をユージィは見せた。

確かにローゼンフェリア王国は帝国に虐げられた人民が自らの生命と誇りをかけて、立ち上がり建国した国家であり、サラセナに通じる部分もあるにはある。

「でも恨みや妬みで国が良くなるかな？　いつかは許す心を持たなければ、サラセナは人々から恨まれてしまう国になってしまわない？　それは歴史の皮肉とはいえ悲しすぎるよ」

ローゼンフェリアはユージィに黒い目を合わせた。

「……恨まれてしまう？　人々を助ける為に建国されたサラセナが？」

「うん、帝国を倒すには残る四カ国が協力しないと不可能だよ、どの国が抜けても負けるんだよ、そうなればブルーヴェルト大陸は帝国に統一されて、多くの人間が一部の人間の富の為に存在する世界が到来してしまうんだ……」

「……」

「私達が協力して戦う、私達が手を取り合って戦う、私達が一緒に戦わないと、次に訪れる世界に対して全てを尽くしたと言い切れないんだよ」

ローゼンフェリアの言葉使いはあくまでも抑揚のない口調だが、黒い瞳の視線をユージィから外さない。

「それは我々が同盟せずに帝国の統一を見た場合の責任が我が国にあるという意味ですか？」

理屈はわかっているが、帝国を倒す為に昔の罪を忘れよというのか。

ユージィは黒い瞳にそう訴える様に睨み返した。

それに対して目を逸らさないままでゆっくり、

「違うよ、私はユージィの友達になりたいとしか言ってないよ、同盟の事は私のサラセナに良いと思った事を答えただけ」

答えるローゼンフェリア。

「友達に？　たとえ私が同盟を望まなくても？」

ユージィが聞くと、

「一回答えたよ、もう私は友達のつもりでユージィの悩みに答えていたのだけどね……」

そう黒い瞳は優しく笑っている。

「さてと、あんまりお邪魔したら悪いね、また何か相談事があれば呼んで、メリエル達を泊まらせている宿屋は知ってるよね」
ローゼンフェリアはベッドからぴょんと降りた。
「ローゼンフェリアさん」
そう声をかけておいてユージィは自分でハッとなってしまう。
自分は今、ローゼンフェリアを呼び止める為に声をかけたのか？
もしかしたら自分は彼女の話をもっと聞きたいと思っているのでは？
「またね」
そんなユージィの自問自答を見透かす様にローゼンフェリアは優しい笑いを浮かべると、テクテクと歩いて部屋を出ていった。

「あ……」

再び部屋に夜の静寂が訪れる。
あまりにもあっさりとローゼンフェリアが出ていってしまった為に、もしかしたら、あの少女の存在は幻であったかも知れない……とは、ユージィにはとても思えない。
「……フーッ」
息を吐いてユージィは安楽椅子に深く座って、天井を見上げた。

2

「王城で昼食を」

「ローゼンフェリア！」
無表情で寒風の吹きすさぶ夜の街を歩いて来たローゼンフェリアを見つけたヴィスパーは声を上げて、駆け寄った。
ヴィスパーの背後にはホッとした顔を浮かべるリキュエールがいる。
「何処に行ってたんだよ、ローゼンフェリア、心配したんだよ」
ヴィスパーはローゼンフェリアを強く抱きしめる。
すでにヴィスパーと別れてから数時間が経ち、夜中と言っていい時間だが、ヴィスパーとリキュエールはずっとローゼンフェリアを探していた様子だ。
ローゼンフェリアを抱きしめたヴィスパーの眉は寒さで白くなっている。

「心配かけてごめんね、ヴィスパー、結局は夕食は食べられなかったよ」
ローゼンフェリアが言うと、
「じゃあ、帰って宿の厨房を借りて僕が作ってあげるよ」
ヴィスパーは優しく笑った。
「ヴィスパー料理が出来たっけ？」
ローゼンフェリアも優しく笑顔を返す。
「僕も一人暮らししていたんだよ、ローゼンフェリアが舌鼓を打てるかは保証出来ないけど、どうにか暖かい料理を作るよ」
ヴィスパーはポンとローゼンフェリアの頭に手を乗せる。

「ヴィスパーの手料理ならきっと美味しいよ、早く帰ろう」

ローゼンフェリアは歩き出すと、ヴィスパーとリキュエールは互いに改めて安心した様に微笑み合って、それに続く。

「でも……明日の昼食はもしかしたら、王城で食べられるかも知れない、豪華だろうからお腹はすかしておいた方が良いかもね」

少し歩いてから、振り返って言ったローゼンフェリアの言葉にヴィスパーとリキュエールは意味が分からず首を傾げた。

第６８話に続く

第六十八話「王城への道」

1

「葛藤と前進」

ユージィは明かりを消してベッドに入った後になってもローゼンフェリアの事が頭から離れなかった。

サラセナの国力、帝国の軍事力、国民感情、ローゼンフェリア王国を始めとするバルド王国、ミオクォーレの状況が17歳の少女の頭の中を駆け巡り、最後には黒い髪、黒い瞳の美しい少女が浮かんでは消える。

停滞していれば、最後には破滅が待っている、何をすれば、サラセナという国家を納得できる形で前進させる事ができるのか？

何がやらねばならない事を出来なくしているのか、ユージィは理解していない訳ではない。

しがらみだとは十分にわかっている、しかしそれを振りほどいた時に、サラセナという国家は何かを失ってしまうのではないのだろうか……

サラセナ建国百年の国是の是非とブルーヴェルト大陸の帰趨が自分の決断に委ねられたのかも知れない。

ユージィは毛布の中で1人、膝を抱えた。

＊＊＊

ヴィスパーは起きると目を何度か擦った、おそらく寝不足なのだろう。
ローゼンフェリアをリキュエールと探して連れ帰った後で厨房を借り、遅い夕食を作って3人で食べ、就寝したのですっかり睡眠時間が少なくなってしまったのだ。
「おはよう、ヴィスパー君、少し寝不足かな？」
食堂に降りると、メリエルが挨拶をしてくる。
傍らにはリキュエールがいるが、あまりヴィスパーと状態は変わらない様子で目の下にクマが見えた。
「おはようございますメリエルさん、昨日はすいませんでした」
ヴィスパーは頭を下げながらメリエルの正面の席に座る。

実はメリエルはいつまでも帰ってこないヴィスパー達を心配して、帰ってくるまで待っていたのである。
「大丈夫だよ、それよりローゼンフェリアちゃんに何も無くてよかったわね、結局はどこに行ってたんだろうね？」
メリエルはヴィスパーに笑いかける。
「さぁ、夕食を食べる場所を探していたら迷ったらしいですね」
首を傾げ答えるヴィスパー。
「でも、あの娘らしくないですよね？」
リキュエールは少し肩をすくめた。

「そうだね、でも慣れない土地で夜だから、流石のローゼンフェリアちゃんも迷っちゃうよね」
「そういえば……ローゼンフェリアちゃんは何処の生まれなんでしょうね、聞いた事ないですよね？」

メリエルの答えに、リキュエールがそんな疑問を口にしたので、メリエルとヴィスパーは揃って慌ててしまう。
「ねぇ、ヴィスパー君は知らないよねぇ？」
「いやぁ、こういう事は当人が言い出すまでは聞かないのが、いいんじゃないかなぁ？　そう思うよね、リキュエールさん」
何とかリキュエールがローゼンフェリアの素性に変な興味を抱かない様に話を持っていくと、
「ですよね」
リキュエールが素直に納得したので、ひとまず2人は安心した。

「朝食をお持ちします」
食堂にきちんとした制服を着た給仕がやってきて頭を下げてくる。
流石に一国の女王を迎える事だけあって宿はかなりグレードの高い宿だ。
極北のこの地に高級宿が必要か疑問が起こるが、高級な宝石や装飾品を扱う商人がディアラスティアには頻繁にやってくるので、需要があるらしい。
出てきたのは、パンにバター、目玉焼きにベーコン、そしてサラダ、牛乳と一品一品はオーソドックスだが、普通の宿ではここまで、しっかりと種類は出てはこないだろう。
3人が食べていると、カナミやミラ、そしてローゼンフェリアや他の兵達もやってきて食堂も慌ただしくなり始めた。

「おはようローゼンフェリア、今日は眠いんじゃないのかな」
隣に座ってきたローゼンフェリアにヴィスパーが挨拶すると、
「……まぁね」

欠伸を噛み殺すローゼンフェリア。
「昨日は遅く帰ったらしいわね、私は寝ていたから知らなかったけど」
歩いてきたカナミがローゼンフェリアの頭に軽くポンと手を置いてから席に着く。
「……まぁね」
目を擦りながら、ローゼンフェリアは先程と同じ様に答える。
「ネムネムなら寝てりゃ、いいものを……無理して起きてこなくても、別に今日も待ちぼうけをくわされるだけなんだから昼まで寝てりゃいいのに……」
カナミは肩をすくめたが、
「今日はお出かけだから、早く起きておかないとね」
ローゼンフェリアは黒い瞳を横目にして答える。
「なに、それ？　お出かけ？」
カナミは眉をひそめたが、その約３０分後にサラセナの城から、ローゼンフェリア王国使節団に王城に登城を願う使者がやってきたのである。

2
「2人の女王」

待ちぼうけをくわされた後の突然の呼び出し、メリエル達は多少驚きはしたが、決して慌てる事はなかった。
もとより観光ではなく、交渉にやってきているのである、かえって待ちぼうけの間に交渉資料や条件の整理をつけられたくらいである。
皆で準備をして、メリエルは宿に頼んで失礼の無いように入浴を

済ます。
そして、頃合いを見て王城への道をメリエルはローゼンフェリア、カナミ、ヴィスパー、リキュエールと数名の兵士を連れて、登城する事になったのだ。

「歩くんですか？　向こうからの出迎えの馬車とかはなかったんですか？」
ヴィスパーが不思議そうにメリエルに聞くと、
「朝に使者さんが来た時に断ったよ、歩いても1時間ぐらいで着くだろうし、いくら寒くても昼間なんだから凍える事はないよ、それに私は外出をしないようにサラセナ側から言われていたしね、街をちょっと見てみたいの」
メリエルは防寒靴を履いて、パンパンと足元を叩きながら答える。
「わかりました、でも気をつけて行きましょうね、メリエルさんは女王なんですから、市民の人も興味があるに違いありませんし、それにメリエルさんに悪い感情を抱いている人だっているかも知れません」
心配そうな顔を浮かべるヴィスパー。

ヴィスパーの心配はもっともと言える物であった。
かりにも一国の女王のメリエルが城までの道程を歩いて行くのである。
この登城が一般市民に公表されている訳は無いが、この宿にローゼンフェリア王国女王メリエルが泊まっている事は噂などでリッツオー市民達は知っているだろうし、下手をすれば朝に登城を願う使者が訪れた事すら知っている者がいるかも知れない。

そんなメリエルが供を引き連れて、城への道程を歩き出すのである、リッツオーの街はローゼンフェリア首都のアティナと規模的には変わらず、それほど大都市では無いが、メリエルがテクテク歩いているのを見逃しはしないだろう。

メリエルはこれまで遣された外交官や密使とは格が遥かに違うのである、大臣や配下武将の更に上をいく女王なのである。

この情勢の中で自国の首都に入ったメリエルに無関心な程、サラセナの国民は呑気である筈がない事はヴィスパーにも十分に承知している事であった。

これくらいの事が理解できないメリエルではないだろうが、元々がメリエルは山間の村娘であり、軍の遠征ならともかく、アティナ市内などでは馬車で移動するのを嫌う傾向がある。

「わかりました、メリエルさん、でも少しだけ待っていてくださいね」

ヴィスパーはそうメリエルに告げると、玄関ホールから2階に駆け上がった。

「何の用だ？　私は王城にはいかないぞ、言っておいただろうが！」

何回かのノックでミラは不満げな表情どドアを開けてきた。

どうやら寝ていた様子である、サラセナ女王からの使いの事はミラが知らないとは思えない、やっぱり行くつもりがなかったのである。

「あのさ、ミラちゃんも王城にきてほしいんだ」
そうヴィスパーが切り出すと、
「だから私はああいう場所に行くのは嫌なんだ、何度、言わせたら、気が済むんだ？」
ミラは怒鳴りながら、ドアを閉めようとするが、
「ちょ、ちょっと待ってよ、ミラちゃん、別に交渉に出てくれなくてもいいんだ、無事にメリエルさんが王城に行ける様に護って欲しいんだ！」
そう叫び、ヴィスパーがあまり必死になってドアを押さえるので、
「全く……一体、どういう事だ？　説明しろ！」
ミラはドアを自ら開けて廊下に出た。

「あれ？　ミラちゃんも来てくれる事にしたんだ？　歩いていくから護衛の方、ミラちゃんもよろしくお願いね、そのつもりで来てくれたんだよね？」
リキュエールがカナミと防寒服を着ながら、階段を降りてきたミラに声をかける。
「まぁな、誰かさんが歩いて行くなんて言わなければ部屋で休んでいようと思ったんだかな」
ふてくされた様に言いながら、ミラは防寒服をヴィスパーから受け取る。

「ありがとうね、ヴィスパー君、ミラちゃんを呼んできてくれたんだね」
メリエルはヴィスパーに笑いかけてから、
「さぁ、みんな、サラセナ王女に会いに行こうか」

と、スキップでも踏み出しそうな足取りで歩き出したのだった。

第６９話に続く

第六十九話「サラセナの意志」

1

「王城への道」

ミラとリキュエールを先頭に宿を出発し、街のメインストリートに出た使節団はすぐに足を止めた。
「まさかね、これほどとはねぇ」
白いため息をつき、防寒服のフードごしに頭をかくカナミ。
「いや、もしかしたら、これくらいはいるんじゃないかなとは、私は思っていたよ」

メリエルはそう答え、フードを取ってメインストリートに集まって来たリッツオーの市民達を見た。
「思ったって……あんた、まさか」
周りに聞こえない様にカナミがメリエルに顔を近づけると、
「そうだよ、朝に使者の人が帰った後に何人かの兵士の人に頼んで、私が歩いて行くって噂を流してもらったんだ」
メリエルは悪戯っぽくニッコリと笑った。

メリエル達がメインストリートを歩き出すと、途端に何十人かの団体が道に立ち塞がった。
老若男女入り交じった集団である。

「道を開けてください！　メリエル王女はユージィ王女の正式な招きを受けて、王城へ登城するのです、それを邪魔するのですか？」
リキュエールが怒鳴るが、団体は道を開ける様子はない。
そして、道を開けるどころか、
「あんたらはサラセナを戦いに巻き込む為に同盟を結びに来たんだろう！」
「中央の争いなど、俺達には関係ない！」
「早く帰って、帝国に滅ぼされちまえ！」
口々に激しい口調でメリエル達を罵り始めたのだ。

「……メ、メリエル様」
戦場では何十人もの帝国兵を蹴散らすリキュエールも、一般人相手には何をしたらいいか迷っている様子である。
もちろん、相手は武器など持っていない。
「リキュエールさん、任せてください」
メリエルが自ら団体の前に出ようとする。
「メリエルさん！」
慌ててメリエルの手を掴むヴィスパー。
しかし、メリエルは反対の手で掴んだヴィスパーの腕を離しながら、
「……平気だから」
と、笑った。

「……メリエルさん」
心配そうな表情を隠さないヴィスパーに、
「ありがとうヴィスパー君、私はサラセナを仲間にする為にやらな

きゃいけないと思う事は全てやりたいんだよ」
メリエルは離したヴィスパーの手を自身の両手で優しく包む様に握る。
「……でも、危ないですよ、住民のふりをした帝国スパイが入り込んでいたら、メリエルさんに危害を加えるかも……」
「……だね、だからヴィスパー君やリキュエールさん、そしてヴィスパー君が連れて来てくれたミラちゃんがいてくれるんだからね、頼りにしてるよ」
眉をしかめるヴィスパーにメリエルはウインクをして見せた。

「いいよ、リキュエールさん、周りは気をつけておいてね」
メリエルは罵声を浴びせてくる住民に困るリキュエールを自分の後ろに下げて、
「サラセナの皆さん、こんにちわ、私がローゼンフェリア王国の女王のメリエルです」
と、頭を下げる。
「……なっ！」
「あんたが？」
メリエルが名乗ると、住民達は少なからず動揺を見せる、まさかメリエル本人がいきなり目の前に現れるとは思ってはいなかった様である。
「皆さんの言いたい事はわかりますが、私はサラセナを戦争に巻き込みたいが為に同盟交渉をしているつもりはありません」
メリエルは声高に言った。
その声は目の前の団体だけでなく、周りで様子を伺うだけの者達へも聞こえるような声で、冷たい空気の街中に響く。

「そんな言葉が信用できるか、お前達が帝国に勝てないからって、サラセナを上手く巻き込んで、利用するつもりだ！」

1人の青年が叫んで反論すると、メリエルはその青年の方を見る。

「ローゼンフェリア王国だけでは帝国に勝てないのは事実です、しかし私達がサラセナを帝国との戦いに巻き込んで利用しようと言う事は間違っています、意志は関係なくサラセナはすでに戦いに巻き込まれているのです、サラセナに対する帝国の苛烈な侵攻を忘れたのですか？」

「忘れちゃいないが、サラセナは鉄壁だ！　現に帝国を追い返してるぞ、お前達とは違うんだ」

メリエルの言葉に別の青年が言い返すが、

「それはローゼンフェリアも同じ事、私達は旗を挙げてから、帝国軍から四つの城を奪い返し、二つの要塞を陥落させ、上級大将と大将を打ち倒し、首をとった将官は多数です、決して貴国の奮闘ぶりに劣る物ではないと自負しています」

逆にメリエルはぴしゃりと答える。

事実である、極北のサラセナにも山間の村娘が帝国に反旗を翻し、圧倒的な不利な状況を跳ね返して自らの王国を樹立して、更に帝国の誇る上級大将バティスタの討伐軍を撃破、戦死させている事は当然、伝わっていた。

「……」

返答出来ないでいる青年達に、

「しかしながら、帝国は強大で今だ何十万の戦力を有しています、私達は協力しなければ近い将来に互いが結局は帝国に滅ぼされてしまうのです」

白い息でやや大袈裟で高らかに言うメリエル。

すると周囲が騒がしくなり、メリエルに対する罵声が再び聞こえてきた。
その罵声は更に激しく、中にはメリエル達に近くの朝市で買ってきたらしい果物や野菜が飛んでくる。
「ヴィスパーさん、や……やっぱり引き返して馬車で向かいましょう！」
リキュエールがヴィスパーに焦った声で言いながら、メリエルを守る為に前に出ていく。
「わかりました！　さぁ、ローゼンフェリアも宿に下がるよ」
ヴィスパーもそれに答えて、ローゼンフェリアに何かが当たっては大変だと手を引いた。
しかし、ローゼンフェリアは動かない。

「！？　ローゼンフェリア、危ないよ！」
ヴィスパーは声をかけたが、ローゼンフェリアはその場を動かずに不敵な笑みを浮かべ呟く。
「まさか、こういう事をするとはね、ヴィスパー、平気だから周りをよく見てみて……」
「どういう事だい……あ、あれ？」
周囲を見渡して声を上げるヴィスパー。
激しい罵声と共に物を投げつけてくる者を必死になって止めている者がいたのだ。
よく聞けば、罵声の中にはわずかだが歓声も混じっている。

「メ、メリエルさん？」
ヴィスパーと同じ様に異変に気がついたリキュエールも声を上げた。
「リキュエールさん、この国の人達も今まで様々な事を考えて、疑問を持ちながら生活してきたんだよ、もっと他の国と仲良くしたいと考える人だって、沢山いるに違いないよ、ほらミラちゃんも周りを睨んじゃダメだよ」
そう微笑みながら、メリエルは横で警戒するミラの肩を掴んだ。
その時、飛んできたトマトがメリエルの胸に当たって、まるで鮮血の様に胸元を汚す。
「メリエルさん！」
もちろん、鮮血と見間違えた訳ではないが、ヴィスパーとリキュエールは思わず声を揃えて叫び、ミラは素早い動きでトマトが飛んできた方向に駆け出す。

ミラはトマトを投げた人物を見ていたらしく、1人の少年めがけて突進し、あっという間に冷たい石畳に少年を組み伏せ、首もとにナイフを突き付けた。
いかに投げたのがトマトといえども、流石に一国の女王に危害を加えたのである、ミラのとった行動は至極当然である。

辺りが一瞬、静まる。

物を投げていた者も、それを止めていた者、罵声を上げていた者も歓声を上げていた者、全てが息を呑んで少年を組み伏した少女を

見つめた。

メリエルはゆっくりと組み伏せられた少年に歩み寄る。

「どうする？」

鋭い眼光のミラ、周りの人間が少しでも少年を助けるような動きを見せたら一気に首筋を斬らんばかりの迫力に誰も動けない中で皆がメリエルを注視した。

「ミラちゃん、離してあげて、その子、ミラちゃんとあんまり歳かわりなさそうだよ」

メリエルは少年を立たせ、

「君はなんで私にトマトを投げたのかな？」

中腰になって少年に聞く。

「……だって、中央の国はみんなサラセナを馬鹿にしているだ、奴隷が作った国だって言ってやがる、うまい事言って騙すつもりなんだ！」

半分、泣きべそを見せながら答える少年。

「……そっか」

メリエルは相槌を打ち、少年の頭を撫でて、

「確かにサラセナを馬鹿にしている人はいる、でもね、サラセナを必要としている人もいるんだ、みんなを無視していたらサラセナはいつまでも一人ぼっちの国になってしまうよ、ローゼンフェリア王国はサラセナと友達になりたいの」

と、笑いかけた。

「……」

少年は何も答える事が出来ないでいる。

「あのね、あなたには友達いるでしょ？」
「……いる」
問いに少年はボソッと口を開く。
「だよね？　私にもいるよ、いないとつまらないし、色々と困るよね！　ローゼンフェリア王国はサラセナと友達になれる、色々助け合える友達にね！　帰っていいよ！」
メリエルは近くで少年を心配そうに見つめる歳の近い子供達の方を見て、背中を軽く叩くのだった。

メリエルは集まってきた市民達に大きく息を吸い込んで、
「皆さん、私達はサラセナと盟友になる為に来ました、確かに今は帝国という敵を打ち砕く為の必要に迫られた真の盟友とは言えないかもしれません！」
大声で叫ぶ。
その言葉に歓声と罵声が浴びせられる。
メリエルは、
「しかし、友人というものの価値は皆様も知る通り、どういう過程でなったかではなく、なってからどういう関係で過ごしたかで決まる物だど私は思います、私はこれからユージィ女王にその事を話にいきます、極北も中央もない同じブルーヴェルト大陸に生まれた者として！」
と、周囲見渡しながら、精一杯の声を出した。

メリエルに歓声が浴びせられる。
今度の歓声は今までの罵声に押されていたような物ではない、大きな歓声であったのだ。

「……歓声が大きくなっている、なんで？」
リキュエールが周囲を見渡して、驚きの表情を浮かべた。
「簡単だよ……誰だって、強い敵がいる時には味方が欲しい、寂しい時には友達がほしいに決まっているよ、相手が正直ならもっといい」
ローゼンフェリアはボソッと答える。
「なるほど……メリエルに友好的か中立的で意見を決め兼ねていた辺りは今までほとんど黙っていた、騒いでいたのは反対派だけだったって訳か」
カナミは苦笑した。

更にメリエルに歓声が浴びせられて、すでに物は投げ込まれなくなっている。
罵声はすっかり鳴りを潜め、道を塞いでいた団体も歓声を上げる者達に恨まれてはと、いつの間にか道を空けていた。

サラセナ国民は長い過去からの恨みや妬みも確かにあるが、それ以上に今の孤独の寂しさを味わっていたのではないだろうか？　とヴィスパーは感じていた。
そしてメリエルはそんなサラセナ国民達から、信頼に足る人間に見えたからこそ今の歓声を受けているに違いないのだろう。

「皆さん、行きましょう、一緒に王城へ！」
ローゼンフェリア王国女王メリエルは大きく手を挙げ、王城への道を踏み出し始めた。

第７０話に続く

第七十話「二人の女王」

1

「女王の行進」

「ここでローゼンフェリア王国を信用しなければ、この後、サラセナが他国と同盟を結ぶと事は望めませんぞ、女王陛下！」
「いや、ローゼンフェリアとてバルドやミオクォーレと変わりません、我々の先祖達が中央の国々に受けた屈辱を忘れた訳ではありませんな！」
「感情だけでは駄目だ、実益を見なければ、サラセナが滅んでしまう！」
「この国を他の国と同列にするな！　奴らは都合の良い様に我々を利用するだけで、帝国の驚異が去れば元に戻るだけだ」
「同盟なしで勝てると言うのなら、お前が前線に出て次の帝国の侵攻を止めて見せたらどうだ？」

サラセナ王城。
ユージィの目の前で繰り広げられる大臣同士の醜い言い争いはエスカレートするばかりであった。
ユージィがローゼンフェリア王国女王メリエルを王城に招いた事が同盟反対派の大臣達に更に火を点けてしまっている。
「交渉に来た相手をいつまでも、待たせるのは失礼です、どのような内容であるにしろ、一度交渉をしないといけないでしょう」
ユージィはそう説明したが、反対派は通達も無しに自ら女王が勝手に来ておいて交渉もない、と反対派は強硬に言い放つ始末だ。

大臣や重臣達の意見は割れており、それが余計に事態をややこしくしている。
帝国の侵攻を完全に撃退した為に、今は同盟反対派が僅かに優勢ではあるが、現実を見れば帝国の再侵攻は必至でそれに対しては打開策を持たない。

同盟賛成派と同盟反対派、いずれかも決定的な決め手を欠く。

ならば、それを判断し決める責任は当然、サラセナ女王のユージィにかかってくるのである。

「女王陛下、そろそろローゼンフェリア王国女王が王城にお付きになる頃ではないでしょうか？」
お付きの少女がそう伝えてきたので、
「皆さん、そろそろメリエル女王陛下が見えます、静かにしてください、サラセナは礼儀を知らぬと笑われますよ」
ユージィがそう言うと、流石に議論は収まる。
「城門で出迎えは？」
「……いいです、やめておいた方がいいでしょう、反対する人もいるでしょうから」
お付の確認にユージィは周りに聞こえないような小さな声で答えた。

暫く時間が経つが、門兵や見張りからローゼンフェリア王国使節団が到着したという報せはない。
大臣や重臣は賛成派も反対派も焦れてきている。
おそらく反対派の人間は時間に遅れるとは失礼だ、とでも騒ぎ立てて、交渉の不成立を狙いたいのだろうが、女王のユージィが目を閉じて泰然としているので、黙っているしかない。

そして、交渉開始時間ギリギリになった時、見張り長が慌てて、謁見の間に駆け込んで来る。
「何事ですか！」
お付きの少女が慌ただしい登場の見張り長を叱り付ける様に問いただす。
「し、失礼しました、ローゼンフェリア王国メリエル女王陛下が到着しましたが……それが」
何か言いにくそうな態度を見せる見張り長。
「それが、どうしたのだ？　言ってみないか！」
焦れている大臣が怒鳴ると、見張り長は、
「ちょ……直接、バルコニーから城門をご覧ください！」
と、土下座した。

「……なっ！」
「何なんだ、これは！」
「どういう事だ？」
バルコニーに出た重臣や大臣達は思わず、声をあげて驚きの表情を隠せない。
ユージィも予想しない目の前の光景に目を見張り、無言で息を呑

む。

城門の前に数百……いや、数千に達しようかという群集達が殺到していたのである。

「あの様子、まさか暴動ではあるまいな？」

大臣の1人が狼狽を見せたが、サラセナでは考えにくい。

サラセナは気候的に厳しい上、山間部が多い為に農業等が発展していないが、地下資源が豊かで宝石や鉄などを産出し経済的にはかなり豊かである。

最近は帝国によって経済的に封鎖されているが、様々なルートで物資は出回り、国民生活はまだ余裕が多少あった。

少なくとも数千人単位の暴動が起こるような政治はサラセナはしていない。

「あれはメリエル女王陛下と一緒に歩いてきたリッツオーの市民達です！　あの群集の先頭にはローゼンフェリア王国女王がいられる様子です！」

ユージィの足元に伏して報告する見張り長。

「そう……ですか」

ユージィは肩まで伸びた銀髪を指先に絡めながら頷き、

「城門まで行きますよ！」

と、強い口調で言い、周りの返事も聞かずに早足で歩き出した。

2

「女王対面」

「……おっとり女王陛下だと思っていたけど、やってくれるわね」

カナミは周囲を見渡して口元を緩める。

辺りには同盟交渉に賛成する市民達が列をなしていた、ざっと見ても２０００人はいそうだ。

メリエルはここに来るまでに様々な市民と話しながら歩いて来た。

戦いの中で親しい人を亡くした者、帝国に今まで住んでいた場所を蹂躙された恐怖感から、今だ家に帰れないでいる者。

その者達には、自らも帝国に虐げられた者として同情を示し、さらにはローゼンフェリア王国女王として帝国打倒を約束した。

逆にメリエルに反対の意見を持つ者にはローゼンフェリア王国とサラセナの同盟こそが帝国打倒を成し遂げる為に必須である事、そしてローゼンフェリアとサラセナが盟友となりえる事を丁寧に説いたのだ。

そうしながら、歩いて行く内にいつの間にか、リッツオー市民達が集まって、メリエルを中心に大行進になったのである。

「リッツオー市民だけでもサラセナの孤立主義を改めようとする人達がこれだけいるんだからね、これを見せられたら少しは効くかしら」

カナミが腕を組んで閉まったままの城門を見上げると、

「……お出ましだね」

傍らにいたローゼンフェリアがボソリと呟く。
それと同時に重い城門が音を立て、ゆっくりと開き始めた。

開いた城門の先には、数十人にもなる臣下を従えたサラセナ女王ユージィが立っていた。

美しき肩までの銀髪、優しげな緑色の瞳。
通った鼻筋に薄い唇。
１６０ｃｍ程の身長に、魅力的な成長を見せるプロポーションの身体を包むのは白を基調とした正装のドレス。

周りの群集からも思わず吐息が漏れる程にユージィは可憐で美しかった。

「き、綺麗な人ですね」
ヴィスパーの傍らにいたリキュエールが目を見張りながら言うと、
「……えっ、ええ」
ヴィスパー間抜けな声を出して相槌を打った、見とれてしまっていたのだ。

年端も上背、身体つきもユージィはメリエルとよく似ていた。
違いは色白だが黄色系の肌のメリエルに対して、ユージィはまさにぬけるような白人の白い肌なのと互いの髪の色だ。

しかし、優しげな顔立ち、同じ年齢、よく似た体格であるにも関わらず、メリエルとユージィは互いに漂わせる雰囲気がまるで違っている。

例えるならば、ユージィは腕の良い職人が丹精技術を込めてなお、一生に何本かしか育て上げられない様な高貴な美しさの花、メリエルは野性の中、自然に咲いた健気な可愛いらしい花と言えば、適当なのであろうか。

どちらがより多くの異性をひきつけ、同性をも魅了するかと言えば、好みはあるが、やはりユージィの持つような稀有な種類の美しさでだろう。

「ローゼンフェリア王国女王陛下メリエル様、私はサラセナ女王ユージィ・エリィキュネルでございます、どうか宜しくお願いいたします」

「お会いできて光栄です、女王陛下、ローゼンフェリア王国女王メリエルでございます、私の方こそ宜しくお願いします」

先に頭を下げたユージィにメリエルも答える。

頭を下げた後、自分が防寒服を着ていたままである事に気付き、

「あっ、このような姿で失礼します」

慌てて脱ごうとしたメリエルだが、ユージィは、

「構いませんよ、私がいきなり出迎えをしたのですから、メリエル女王、気にしないで下さい」

と、優しく微笑んでメリエルの防寒服の胸元に視線を向けた。

「これですか？　これはサラセナを思う人達の現れの一つですよ」

ユージィの視線に気付いたメリエルは胸元のトマトのシミを見て苦笑する。

「代表して、無礼をお詫びいたします」

申し訳なさそうに謝るユージィに、

「いえ、いえ、このトマトを投げた少年も私の言葉を後で聞いてくれました、女王陛下が気に病む事はありませんよ」

メリエルは優しい表情で首を振った。

「そう言って頂ければ、私も助かります、ところでメリエル女王陛下、私がここまで出迎えたのは他でもありません」

ユージィはわずかに瞳を細める。

「……他でもない？」

メリエルが碧い瞳をユージィの緑の瞳に交差させると、

「私はこのサラセナに生まれて、サラセナに育ちましたので私の装いは気になさらず、どうぞメリエル女王陛下はそのままで、もし胸元の汚れが気になるのでしたら、新しい防寒服を用意させますから」

雪国の女王は寒空の下で白のドレスのまま、意味ありげに笑う。

互いの数秒の間……

「いえ、いえ、それならば私も山間の娘なりの準備は恥ずかしながらしてきました、このままの恰好ではいれません」

そう答えてメリエルは防寒服を脱ぎ始めたのである。

周りの群集から、どよめきが起きる。
「ど、どうするつもりなんですか？　ユージィ女王もメリエルさんも！」
驚くヴィスパー。
そばにいたカナミは、
「やってくれるわね」
と、鼻で笑う。
「カナミちゃん、どういう事だい？」
振り返るヴィスパーにカナミは、
「あいつら、城に入らずに、ここで交渉始めるつもりよ」
メリエルに呼ばれ、慌てて衣装鞄を持って走るリキュエールを見ながら、不敵に笑うのだった。

第７１話に続く

第七十一話「メリエル叫ぶ、フェンリル笑う」（前書き）

お詫び

これから更新速度が少しゆったりとなります。

第七十一話「メリエル叫ぶ、フェンリル笑う」

1

「寒風の叫び」

「お待たせしました」
リキュエールと数人の兵に隠されて、着替えを終えたメリエルが藍色の着物に身を包み、寒風吹きすさぶサラセナ王城城門に立つメリエル。

「いいえ、私こそ無理を言ってすいません」
ユージィは優しげな微笑みを浮かべる。
白を基調にしたドレスのユージィ、藍色の着物のメリエルが正面から向かい合い、互いの美しさ、可憐さに思わず周りの群集からため息がもれた。

「ユージィ女王陛下、ここでの交渉はいくらなんでも無いのでは？さぁ、既に暖をとった部屋が用意してあります、城内に行きましょう」
サラセナの外務大臣が意見するが、ユージィとメリエルが申し合わせた様に無言で視線を向けると、
「いや……その」
困った表情を見せてに後ろに下がるしかなくなる。

「僕ら、どうすれば？」

ヴィスパーがカナミに聞くと、腕を組んだカナミは諦めた様に首を振り、
「ここは2人に任せましょう、口を挟まない方が話がいい方向にいきそうだしね、まぁメリエルを信じましょうよ」
そうウインクを見せた。

「今回のご来訪のむき、正式に私がお受け賜りしましょう、メリエル女王陛下」
ユージィがゆっくりと口を開く、するとメリエルは苦笑して、
「私はユージィ女王陛下と違い、最近まで野山で山菜を採り、畑を耕し生活の一日を終えていた身分で、学がなく、また物事もよく知らない女ですので……単純に、そして短めに要件を伝えます」
メリエルはニッコリ笑って、すぅ～、と息を大きく吸い込んで……

「ローゼンフェリア王国はサラセナと良い友人になりたいです！条件なんて何もありません！」

城に響かんばかりの大声を上げたのである。

メリエルの叫びに近い言葉に群集達が一斉にざわめき始める、歓声と怒号が入り混じり、城壁に響く。
「あいつ、もしかしたらプリエルじゃないの？」
冷や汗を浮かべるカナミに、
「ああ、まぁ、双子ですからね、多分……違うと思うよ」

と、だけヴィスパーは答えた。
「あああ……何なんですか、あれじゃ交渉になんかなりませんよ」
リキュエールはいきなりのメリエルの言葉に交渉用の資料を持って、情けない声をあげたが、
「いいじゃないか、なかなか笑える」
ミラは城壁に背中をかけ、クックックと笑っている。
ミラと同じ様にローゼンフェリアも城壁に背中をかけて様子を見ていたが、不意にユージィと視線があった。

「……」
メリエルに群集の視線が集まる中、ローゼンフェリアとユージィの視線が交錯し、数秒の時が過ぎ去る。
「あなたは……」
呟くユージィだが、もちろん群集の騒ぎでローゼンフェリアには聞こえない。
「フフッ」
ローゼンフェリアは胸元で軽く手を振って笑った。

「メリエル女王陛下、宿に長く待たせて申し訳ありませんでした」
ユージィは笑いながら、メリエルに歩み寄る。
「……ユージィ女王？」
キョトンとしているメリエルの右手をユージィは両手で包み込む様に握った。
「メリエル……さん、って呼んでもいいですか？　同じ女王同士だからいいですよね？」
微笑みを浮かべるユージィ。

「はい！　もちろんですよ、ユージィさん」
メリエルはパアッと表情を明るくした。

2
「元帥復帰」

ほどよくウェーブのかかった長い黒髪、切れ長の黒い瞳。
恐ろしい程に美しいと称賛されるアルザード帝国の絶対皇帝フェンリルは自らの美しさの維持にも気を使っていた。
今日は数人の専用マッサージ係が全裸の彼女にマッサージを施している。

一般の暮らしから見れば、裕福な帝国本国国民からみても贅沢だが、アルザード帝国の皇帝という立場からみれば、そうは贅沢とは言えないだろう。

「皇帝陛下、ランク報告官が後で報告したい事があるとの事です」
女官が全裸で仰向けにマッサージを受けるフェンリルに頭を下げながらつげると、
「そうか、わかった、ランクは報告が大切な仕事だ、報告に来る様に言え」
目をつぶったままで、フェンリルは言った。

「……今すぐ、此処にランク報告官をお呼びして宜しいのですね？」
数瞬の沈黙の後に確認をする女官。
「かまわんよ、私は情報は早く聞かなければいけない立場なのだから、当然であろうに」
そうフェンリルは目を開けずに答えた。

ランク報告官は当然の事ながら、部屋に通されて仰天した、と言うよりもア然としてしまう。
部屋にはリラックス効果を生むのだろうか、香が焚かれてベッドにはマッサージを受け、胸元と腰周りにはタオルが敷かれているが、裸に近い状態でフェンリルが仰向けに寝ていたのである。

「し、失礼を！」
ランクが身を翻そうとするが、
「良い、私が許可したものだ、報告を聞きたい、職務を全うせよ」
フェンリルに声をかけられたので、ランクはそこで報告をしない訳にはいかなかった。

しかしフェンリルの身体は均整がとれ、十分な若々しさを保ち、なおかつ大人の華の魅力をランクに感じさせて止まない。
報告書を持つ手が震えてしまい、報告内容も声が震えてしまっている。
全裸が見える訳ではないのに、ランクは緊張が禁じ得なかった。
彼に十分な女性経験があるかと言われたら、そうではないが、そんな事はおそらく関係なく、どんな男も今の状態のフェンリルを見

たら、ランクと大差のない反応になるに違いない。
その姿は男を迷わせる程であったのである。

様子を見かねたのか、
「こんな姿で職務をどうの言うのは流石に説得力を欠いたな、許せよランク、お前を馬鹿にするつもりは無かったんだ、8分で執務室に行くから待っていろ」
フェンリルは少し口元を緩めて告げた。

フェンリルはちょうど8分後に執務室の椅子に腰掛けて、先に待っていたランクに、
「報告頼む」
そう命令すると、椅子に深く身体を沈めて目をつぶる。
いつもの報告を受ける状態であった。
「……では、皇帝陛下、報告いたします」
ランクは先程の光景を思い出すまいと、努力しながら報告を始める。

「先ずは、東ブルーヴェルト大陸遠征軍ですが、サラセナ方面軍が陛下のご命令通りヴァロンベルグに退却を完了し、戦力の回復と補充を始めました」
「ああ、そうか……モストウィーも実力に運がついてこないな、全く可哀相な奴だ、サラセナの冬の到来が例年より遥かに早かったとはな……」
ラングの報告にフェンリルは笑う。

「他の方面は相変わらずか？　戦線に動きは？」
フェンリルの質問に、
「どうやらローゼンフェリア、バルド王国、ミオクォーレの三国は同盟交渉をまとめ協同作戦を行う様ですね、バルド、ミオクォーレの戦線は有利ですが、やや膠着している様子です」
ランクは報告書を見ながら答える。
「……そんな物だろう、弱い奴らの集団だ、好きにさしてやれ」
フェンリルは同盟交渉成立を歯牙にもかけない。

ローゼンフェリアが武装鉄橋を陥落させた時点でバルド王国、ミオクォーレとの同盟はあると、帝国上層部は読んでいる。
武装鉄橋が陥落すれば、予定調和でみたいな物と見ていた。

「最後にオダ・ミヤビ国家元帥が怪我から復帰されました、副官のレイチェン・ワルツ大尉によれば、近いうちに戦場復帰も可能だという事です」
「そうか……長かったな、アティナ王国の将軍に負わせられた傷だったな、確かシェレミィ准将だった、私も嫌な報告をいくつか受けて覚えたよ」
その報告にはフェンリルも口元を緩める。

オダ・ミヤビ国家元帥は帝国軍唯一の元帥でブルーヴェルト大陸随一の戦略の大家として、帝国の覇権樹立に大きな役割を果たしていた。

一昨年のアティナ王国侵攻作戦時に散々に帝国軍を苦しめた敵将シェレミィ・ウェスティン准将を破った際に重傷を負って、復帰が遅れていたのだ。

「しばらく、まだ前線には無理か……ならば」

フェンリルはしばらく思案の後にゆっくりと目を開けて、

「ラグナログ要塞に直轄軍を引き連れて行く様に命令をだすのだ、要塞司令官も兼務させる」

と、帝国軍最大の要塞の名前を上げて、不敵な笑みを浮かべた。

第７２話に続く

第七十二話「ミヤビとレイチェン」

1

「帝国国家元帥」

「いえ、いえ、わたくしも皆様に余計な心配をかけて申し訳ないばかりでございますわ」

華やかなパーティーであったが、帝国国家元帥オダ・ミヤビには心労のたまる席であった。

何故かといえば、このパーティーは重傷から復帰した自分の祝いのパーティーだったからである。

黒い髪を後頭部の少し高い部分に結び、長く腰辺りまでポニーテールに流す髪型はいつも戦場に出る時と変わらないが、今日は白の軍礼服だ。

瞳は憂いを帯びたような優しい緑色の瞳に、整った顔立ち。

美人である事は確かだが、ミヤビの第一印象は優しげなお姉さんである。

更に数人の軍の高官や役人達と挨拶すると、流石のミヤビも少しながら疲れ始めていた。

戦勝パーティーならいざしらず、戦場で傷を負った人間の復帰くらいは静かにさせてほしい、というのが性根である。

しかし、ミヤビにはその辺りをきちんと理解してくれる副官がいた。

レイチェン・ワルツ大尉、まだ２１歳の青黒いショートカットにパッチリした瞳に眼鏡をした童顔の女性将校。

彼女は従軍した時から、ミヤビの副官を務めており、アティナ王国攻略戦でミヤビが長く戦列を離れる怪我を負った時には、人事部に自分の給料は返上するから、ミヤビの副官としてリハビリなどを手伝わせて欲しいと頼み込んだくらいにミヤビに心酔していた。

「ミヤビ様、コールウェル儀礼少将には元帥の体調はいまだ全快でないので、途中退席も許して貰って来ましたよ、どうぞ好きな時に……」

笑顔を浮かべながら、レイチェンが耳打ちしてきたので、

「ご苦労様、助かります」

ミヤビは微笑む。

＊＊＊

「大丈夫ですか？」

パーティー会場を去る馬車で、ミヤビの顔を心配そうに覗き込むレイチェン。

「ああ、平気ですよ、ああいう場所は本当に久し振りなので少し人に酔ったのかも知れませんね」

ミヤビは答えた。

「そうですか、まだしばらくは無理は出来ない、前線は無理だと参謀本部にも伝えておきました」

レイチェンがミヤビにそう告げると、
「前線で構わなかったのですよ、今の情勢はとても帝国にとって危険なんですから……」
顔を上げ、ミヤビはレイチェンを見据える。

「ミヤビ様……」
うつむくレイチェン。
「今や、東ブルーヴェルト大陸大陸では新興のローゼンフェリア王国がバティスタ上級大将を破り、三国同盟を成立、更に極北での苦戦が伝えられます、私はこの現状をどうにかする為に復帰したのですよ、それを何であなたは……」
滅多にないミヤビの叱責、馬車の中に沈黙が流れる……その間もミヤビはレイチェンを見続ける。

「嫌です……もう、ミヤビ様があんなに怪我を負うのは嫌なんです」
帝国国家元帥として、ミヤビは現在はローゼンフェリア王国となっている地域を治めていたアティナ王国の勇将シェレミィ・ウェスティン准将と闘い、深手を負っていた。
そこまで完治に時間はかからないつもりだったが、実は傷は想像以上で、一時は現役を退いた方が良いと言う医者もいた程だ。

「……レイチェン」
「ミヤビ様のお美しい肌にあのような傷がついてしまうのは、レイチェンは嫌なんです」

涙を溜めるレイチェン。
怪我の痛みは無くなったが、いまだに痛々しい刀傷がミヤビの右肩から、胸にかけて斜めに走っている。
これは一生、消えない傷であろう。
「私があのような者をミヤビ様に近づけたから」
レイチェンは泣きながら手を伸ばし、礼装の上からミヤビの右肩から右胸に傷をなぞる様に触れた。

「ごめんなさい、あなたは私の為に参謀本部に言ってくれたのに……変な事を言ってしまって」
ミヤビは表情を緩めて、ニッコリ笑いながら自分の傷の部分に触れていたレイチェンの右手にそっと自らの左手を重ねた。
「ミヤビ様」
泣き顔を上げるレイチェンに、
「あなたの言う通り、あと少しの勘が戻るまでは前線は止めておきますよ」
ミヤビが告げるとレイチェンは勢いよく、抱きつきそのまま激しく唇を重ねたのだった。

2

「女王達の微笑み」

メリエルとユージィの握手に数千の群集が一斉に湧き上がる。
「女王陛下、交渉はどうなるのですかっ！　まさかこれで同盟交渉の成立ではございませんな？」

その中でも必至に職務を見失わないサラセナの外務大臣が2人に詰め寄る。

「まさか、これは我がサラセナに初めての友人が出来たという話ですよ」

ニッコリ笑うユージィ。

「そうですよ」

メリエルもクスクスと笑いながら答えた。

「ならば同盟交渉はいかほどにすれば……？」

眉をしかめたサラセナ外務大臣にメリエルは、

「それはこれから暖かい部屋で話し合いをしないと、みんな風邪を引いてしまいますよ」

と、肩をすくめた。

「……！」

外務大臣は絶句して、目を大きく見開き、ユージィを見つめる。

ユージィは外務大臣に首をわずかに傾げて微笑みを浮かべてきた。

『まさか、ユージィ女王とこの娘はこの群集の圧力を沸騰させて反対派を……だから群集を見てユージィ女王は門まで出たのではあるまいな！』

しかし、外務大臣はそんな事を口には出そうとは思っていない。

彼はローゼンフェリア王国との同盟には賛成で、この流れを実は歓迎していたのである。

歓声に見送られ、王城に入ったメリエルはまずユージィと1時間ほど、応接室で熱い紅茶を飲みながら、外務大臣、カナミをそれぞれにつけ、同盟締結に向け基本的な内容を話し合う。

話し合いは実にスムーズであった。

サラセナ女王のユージィが中央の国々への外交的な開放さえ決断したなら、反帝国の下に集う一員になる事に、越えるのに不可能な壁はないのである。

障害は孤立主義の大臣や政府高官、そして国民達だが、カナミは、

「その意見の支持が5割あれば、あとは為政者のセンスよ、成功させなくても、いい経過を見せるだけで2割はすぐについてくるわ、7割に支持されたら胸を張っていいわね」

そう言い放つ。

そして、同盟の基本的な合意を取り付けると、

「すいませんが、あとは外務の担当者を残していきますので……私達は早く祖国に帰らせて下さい」

メリエルはユージィに許可を得て、急ぎ足で帰国の途についてしまったのである。

帰り道は慣れたサラセナの者の案内もあり、一行は駆け足でヴァロンベルグに着き、そこに残した部下達の経営する酒場に寄ってから、また行きと同じ様にバルド王国への道程を馬車で急いだ。

実に性急な行動だが、実はこれはカナミの提案であり、この行動の正しさはすぐに証明される事になる。

メリエル達がヴァロンベルグからバルド王国へ商品輸送の商隊に

偽装して発った、2日後にヴァロンベルグ周辺に厳重な哨戒網が敷かれたのだ。

これは帝国軍サラセナ方面軍司令官トマス・モストウィー上級大将が命令した物で、サラセナでメリエルの姿が確認されたとの情報を受け、この帰路を捕捉しあわよくばメリエルを生け捕りにしようと空振りに終わった。

しかし、それはモストウィー上級大将が緩慢であった訳ではない、サラセナは防諜機関がその閉鎖性から発達しており、情報が伝わってくるのが遅かっただけである。

バルド王国に入ると馬車のスピードはこれまでから、大分落ちていた。

「いやぁ、急がしてごめんね、カナミちゃん」

「まったくよ、いくらサラセナ国内でもあんなに目立ったら、報告がいくってば！　帝国だって帰り道を狙うに決まってるでしょ？　それで帰りの事を考えてなかったなんて、自殺行為よ」

手を合わせて謝るメリエルにカナミは呆れ顔をする。

言う通りである、メリエルは、サラセナをどうやって盟友にするかに意識を集中していて、帰り道の安全などは考えてもいなかったのだ、考えていれば、群集に堂々と姿を現したりは出来ない。

素人と言えば素人だが、それが無ければ、サラセナとの交渉がこうもたやすく進んだかはカナミにも見当がつかなかった。

「さてと……あとは四方面同時作戦の準備をしないといけないわね」
今だ帝国の驚異は衰えず、例え四方面作戦が発動しても、相対する帝国軍の戦力は方面軍だけで３０万にせまり、４ヵ国同盟は全ての戦力を集めても１５万をやっと越える程度である。

確かに不利だ。
だが、その性格からだろうか、迫る大会戦にカナミは思わず、吹き出す笑いを堪え切れなかった。

第７３話に続く

第七十三話「サラセナ方面軍司令官トマス・モストウィー上級大将」

1

「上級大将の憂鬱」

彼女は戦上手で軍部内で通っていおり、それを自分も自負している。

アルザード帝国の建国当初から最前線で戦い、不利な状況も得意の素早い戦術機動作戦で敵陣を切り裂き、打ち破ってきた。

西ブルーヴェルト大陸の諸国は彼女の武勇を恐れ、いつしかアルザード帝国軍の中でバティスタ大将と並ぶ双璧と称されるにいたり、将来はどちらかが帝国初の元帥になるに違いないともっぱらの噂だった。

しかし、その彼女の栄光の道筋をまるで封鎖する様に現れた女がいた。

その女の名はオダ・ミヤビ。

ミヤビはその頃、すでに西ブルーヴェルト大陸の半分を制圧していたアルザード帝国にとっては通過路に等しい、と思われていたような小国に武将として召し抱えられていた。

もちろん、ミヤビの事など帝国軍の将官達は名前も知らなかった。

だが、数ヶ月後に帝国軍全軍は嫌がおうにも、オダ・ミヤビの名前を知る事になる。

数ヶ月の間に帝国軍の誇る少将、中将クラスの有望な司令官が軒並みミヤビに惨敗させられたのだ。
いずれも戦力的に勝っていたにもかかわらず、いいように打ち負かされる。
知将であろうが、猛将であろうが全くミヤビには及ばなかった。
ちなみに、打ち負かされた将官には、彼女が上官としても女としても、様々に目をかけるスティングも含まれていた。

これ以上、小国に帝国の戦線を引っかき回されたら、手に納めかけた西ブルーヴェルト大陸の覇権に亀裂が生じかねないと、当時すでに皇帝を名乗っていたフェンリルは切り札として、彼女、トマス・モストウィーにミヤビを打ち破る様に命令を下す。

モストウィーは美しく決断力、カリスマ性に申し分ない皇帝フェンリルに憧れに近い気持ちを持ち、厚い忠誠心で仕えていた、バティスタでなく自分を帝国の難敵を駆逐する為に選んでくれた事に感激し、必ずミヤビの首を取ると誓い、戦いに臨んだ。

しかし、現実は冷たかった、モストウィーもミヤビの前に惨敗を喫する。
高速機動作戦を読み切ったミヤビは、待ち伏せと地形を利用した重装兵の固い守りで高速部隊の脚を鈍らせ、そこを株を奪う軽装騎兵による高速機動作戦の切り返しでモストウィーを敗走させたので

あった。

帝国軍はミヤビに打ち勝つ事は出来なかった、帝国軍がミヤビの軍事的才能の圧力から解き放たれたのはその小国の王が急死し、後を継いだ息子が、見計らった様に出された帝国の好待遇の降伏勧告に応じた為である。

その際に帝国皇帝フェンリルは、一つの条件を特に念入りに押した。

それはオダ・ミヤビを帝国軍の将軍として仕えさせる事、という珍しい物であったのである。

そして、帝国軍に帰順したミヤビにフェンリルはいきなり大将という階級を与えた。

思えば、それからであるトマス・モストウィーが帝国軍将星の中で二番手扱いを受ける様になったのは。

帝国が西ブルーヴェルト大陸大陸を全て制圧し、東大陸とを繋ぐ細い唯一の陸路であるラグナログを突破し、東大陸になだれ込んだ時にはオダ・ミヤビは国家元帥というアルザード帝国初の地位にまで昇りつめていた。

アルザード帝国軍サラセナ方面軍司令官トマス・モストウィー上級大将にとって、オダ・ミヤビとは口には出せないが、いまだに変わらぬ敵であった。

ヴァロンベルグの街に駐屯するアルザード帝国軍サラセナ方面軍。元は貴族の使っていた４階建ての洋館を接収し、方面軍司令部としている。

その執務室に、司令官トマス・モストウィー上級大将は座っていた。

年齢は３４歳。

赤茶色の髪の毛は腿の辺りまで長く編んで下ろしている。

白い肌、青く鋭い瞳、赤い唇。

１６５ｃｍ程の身長に細くしまった身体の美しい女性であった。

しかし、彼女は何か刺々しく、安心感みたいな物を周りには与えない雰囲気を自ら発している。

「モストウィー上級大将、やはりメリエル女王達はバルド王国方面に逃げ去った様子です」

初老の副官の言葉に、執務室の机に座っていたモストウィー上級大将は、

「おのれメリエル、女王などと名乗る、うす汚く狡猾な山鼠が！」

と、手に持った報告書類を床に投げ付ける。

「どうします、今ならバルド王国方面軍のヘーデル大将に早馬を出せば、向こうで捕捉する可能性もあるのでは？」

副官はモストウィーの投げた報告書を拾ってから尋ねたが、モストウィーは執務机を強く叩き、

「馬鹿がっ！　サラセナにローゼンフェリア女王に入られて、更に帰りも通り抜けられたなんて言える訳無いでしょう！　この事は一切機密よっ！」

そう高い声で喚き散らした。

「いやっ、それでは……サラセナとローゼンフェリアとの間に戦時同盟が結ばれている可能性もスパイは示唆しており、メリエル女王の一件は隠しておき、同盟の恐れがあると言うだけでも……何卒、何卒お願いします」

初老の副官は慌てて、モストウィーを必死に宥める様に意見した。

……暫くの沈黙

「まぁ、それもそうね」

モストウィーは息を顎に手を当てる。

いかにサラセナとローゼンフェリアとの間に友好条約が結ばれたとはいっても、それが即座に軍事同盟に結び付くとは限らない。

しかし、その恐れは増したと言うのは事実であり、何かしらの前触れとして、周囲の方面軍には警戒を促す通達を出しておいた方が得策であろう。

「仕方がない……」

モストウィーが言いかけた時、

「失礼いたします！」

若い参謀の1人が頭を下げて、少し緊張気味に執務室に入室してくる。
「どうした？」
副官が聞くと、参謀は敬礼しながら、
「はっ、皇帝陛下より通達です！　来月月初よりオダ・ミヤビ国家元帥が怪我より復帰され、ラグナログ要塞臨時司令官に着任されますので、各司令官は祝報などを届ける様に、との事であります！」
と、報告してきたのである。

『なんて事だ！』
副官は思わず、唇を噛み締めた、が……時すでに遅かった。

モストウィーの表情は豹変していた。

おそらく何度も方面軍司令官と話した事もない緊張する新米参謀にニッコリ微笑んで、
「ご苦労様、さっそく国家元帥閣下に祝報を書きましょう、下がっていいわ」
と、告げたのである。

敬礼をして、去っていく新米参謀を見送った後で、モストウィーは副官に冷たい目線で、
「適当に祝報作っておいて、あとね、やっぱりサラセナの件は機密にしておくわ、確定した訳じゃないし、アイツの耳に入ったら、おそらくメリエルの事まで調べ上げて、私を叩く材料にされかねないわ」

そう言って、後は何も聞かない、と言わんばかりに席を立った。

2

「到　着」

「ミヤビ様、見えました！　ラグナログです、ラグナログ要塞です」
レイチェンが声を上げて指を指す。
「着きましたね」
馬に跨がったミヤビはニッコリと笑う。

ラグナログ要塞。
今や、帝国が全域を制圧した西ブルーヴェルト大陸と戦いの続く東ブルーヴェルト大陸を繋ぐ細い陸路に築かれた要塞である。
図形的に見れば、逆三角形の西大陸の右隅と菱型の東大陸の左隅がわずかにくっついている部分、そこにラグナログ要塞はあった。

ラグナログ要塞は三つのは山に築かれた保塁陣地により成り立つ。
南から南山保塁、中央要塞、北山保塁。
それぞれがが硬い岩盤質の山を莫大な費用と人海戦術によって、掘られて造られている。

標高は北山保塁２１４メートル、中央要塞１６４メートル、南山保塁１２０メートルの順に高くなっているが、お互いの距離は連山

なので指呼の距離で、援護が可能であり、中央要塞からは両保塁への地下通路が設けられ、物資の受け渡しから増援まで自由に出来る様に設計されていた。

こうなると、山を包囲されての兵糧攻めが懸念されるが、実は南山要塞は地下通路で海に抜ける糧道があり、更には北山要塞には生活用水用の巨大な人工湖までが用意されているのである。

ラグナログ要塞はフェンリルが、まさに西大陸を自らの聖域とする為に2年の歳月と国家的な人員、物資、資金を投じられた大陸一の要塞であった。

「オダ・ミヤビです、長い間、休んでいて申し訳ありませんでした、本日より本要塞臨時総司令官を皇帝陛下より仰せつかりました、皆さん、どうぞ宜しくお願いしますね」

中央要塞の麓で出迎えた要塞の約５０名近い高級将校達に微笑みながら敬礼をするミヤビ。

「国家元帥に敬礼！」

一列に並んだラグナログの高級将校達が、中央要塞防衛司令官のかけ声に一斉にミヤビ、レイチェンと約５万の国家元帥直轄軍に敬礼する。

レイチェンは岩肌の露出した三つの保塁からなる壮大なラグナログ要塞と約５万の国家元帥直轄軍を交互に見て、

『例え三ヵ国同盟軍が何かの間違えで、此処に攻めて来るような事があっても負ける訳がない、この要塞とミヤビ様を打ち倒すなんて誰も出来る訳がない』

そう確信し口元を緩めたのだった。

第７４話に続く

第七十四話「反攻作戦」

1

「反撃作戦」

バルド王国首都クワンザリに帰って来たメリエルは、その日のうちに王城にてバルド国王ルドルフとミオクォーレ教皇代理のアンフィニとの会談に臨む。

「まさか、あのサラセナを味方に引き入れるとは」

参ったと言わんばかりに息をつくアンフィニ。

「全くだ、それもこれだけの短期間に……」

ルドルフも同感する。

「ありがとうございます、ローゼンフェリアとサラセナは同盟関係です、これによりサラセナは三ヵ国同盟の攻勢作戦に参加してくれます、四方面攻勢作戦、お二人は承諾していただけますよね？」

同盟締結の文書をルドルフとアンフィニに見せ、メリエルは二人を交互に見た。

「ちょっと待て！」

アンフィニの上げた声は鋭い。

「この同盟はあくまでもローゼンフェリアとサラセナの同盟か？サラセナは我々、三国全てと同盟関係になる訳ではないのか？」

文書もメリエルの言い方もサラセナが三国同盟に加わったのでは

なく、あくまでもローゼンフェリアの同盟関係になり、その同盟関係を以って四方面作戦に参加するという物だ。

その両方は似ているが、意味は違う。

彼女はメリエルがサラセナを三国同盟に引き入れる為に交渉に行った、と思っていたのだ。

「それは今回の私達だけが赴いた交渉では難しいでしょう、国同士には国同士の色々な事情があります……でも、きっとご両国から今一度、真心を持って交渉にあたれば、サラセナも考えてくれますよ、その時はローゼンフェリア王国が間に入りますから」

だが、メリエルは悪びれない。

『……コイツ、もしかしたら始めから我々を含めた三国同盟とではなく、ローゼンフェリア単独でサラセナと同盟を結ぶつもりで行ったのではないだろうな？　そうする事によって、過去に我々に遺恨があるサラセナの参戦を容易にして、さらに同盟で最も新参で国力の劣るローゼンフェリアの地位を……』

そんな考えにかられ、教皇国代表代行のメリエルに対する視線が厳しくなる。

『ええい、考え過ぎだ、今はとにかくどのような形であれ味方が増えたんだ、帝国打倒に邁進せねば！』

頭を振って、自分に言い聞かせるアンフィニ。

首筋で白く小さなリボンで縛られた金髪が背中辺りでパタパタ揺れた。

「アンフィニさん？　どうされました」

メリエルが覗き込んでくるが、

「いや……何でもない、確かにメリエル女王の言われる通りだろう、私達はまた私達で、またサラセナとは交流を深めていかないといけないな……その時は宜しく頼みます」

アンフィニが頭を深々と下げる。

「我々もその時は宜しく頼みたい、メリエル女王」

「ええ、もちろんですよ、では四方面作戦の詳しい内容を話し合いましょう」

ルドルフもそれに続くと、メリエルは素直な表情で微笑んだのだった。

数時間後。

すっかり人気が無くなり、夕日が差し込んだ円卓の間にアンフィニは1人で座っていた。

四方面作戦の会議は今日は30分程前にとりあえず終わっている。

これだけの大作戦だ、会議だけで数日かかるだろう、今日はローゼンフェリア王国の若き参謀長、カナミからの概要説明といくつかの質疑応答で終了した。

リボンで縛った後ろ髪を胸の前に回し、指先で弄りながら考える。

「……山間の女王か」

サラセナに向かう前にアンフィニがメリエルをそう呼んで、ローゼンフェリアに頬を張られた呼び名だ。

蔑称である。

少なくともあの時、アンフィニはメリエルをたまたま運よく時局に乗り、ローゼンフェリア王国の女王となれた人間だ、そう思っていた。

東ブルーヴェルト大陸大陸の強国の一つ、ミオクォーレの教皇の娘に生まれた彼女にとっては、血統ですら素姓のわからないような山間の娘のクセに女王などと名乗るメリエルを運のいい成り上がり者としか見なしていなかったのだ。

だが、今はメリエルはそんな運だけの成り上がり者などではないと、アンフィニも思い始めている。

考えて見れば、そんな者がわずか数十人から起こした反乱で、数万の帝国軍をアティナ領から殲滅、帝国の誉れ高い上級大将の率いる討伐軍を撃退し、武装鉄橋を落として、今回は帝国領内を自ら突破、サラセナを味方に引き入れる、などという将来に歴史で語られるであろう事を成功させられる訳がない。

現に今や、三国同盟の主導権はアンフィニの立案した三国共同防衛作戦を押しのけ、四方面同時攻勢作戦をすすめるメリエルの物になっている。

それに対して業績もなく、ミオクォーレ教皇の娘というだけでこ

の場に居合わせている自分こそが、ただの血統を頼りにする舞い上がり者ではないのか？
そんな思いにかられるアンフィニ。

「ええい、くそっ！」

彼女は指先に絡めていた自分の金髪を放り出す様に背中に回した。

その時だ、
「アンフィニさん、いいですか？」
背後から突然、肩に手をかけられる。
「……！」
アンフィニは思わず息を飲んでしまった。

2
「2人だけの宴」

アンフィニが素早く振り返ったのは、びっくりしたのを隠す為だ。
「驚かせてごめんなさい、そういうつもりはなかったんですけど」
そこに立っていたのはメリエルである、右手には瓶を持っている。
「メリエル女王？」
まさかメリエルがいるとは思わなかったアンフィニは少し間の抜けた声を上げてしまう。

「アンフィニさん、どうされたんですか？」
「いや……別になんでもありません」
アンフィニは俯く。
「もう、すっかり暗くなりましたね」
円卓の間から、バルコニーに出る窓際に立つメリエル。

アンフィニがいくつかの考え事をしているうちに、夕日は沈み、すっかり外は暗くなっていた。

「アンフィニさん」
メリエルは笑いながらアンフィニに振り返る。
「……何か？」
苦手意識がある訳ではない、しかし、何か警戒心が働いているようでアンフィニはメリエルの顔が見れない。
「アンフィニさん」
もう一度、名前を呼ばれてようやく顔を上げると、メリエルが瓶を持ち上げながら、
「バルコニーに出て少し飲みませんか？　アティナ産の物で中々に美味しいんですよ」
と、笑いかけてきたのである。

＊＊＊

バルコニーに出て、しばしの時間が経つ。

メリエルとアンフィニはその間に打ち解けた会話をした訳でも無く、かといって、無言でいた訳でもなかった。

そのうち話はメリエルの決起の話に及ぶ。

「ではなんだ？　女王は偶然、村に帝国軍が駐屯して来なければ、今のような立場には無かったと？」

「はい、そうです、私達は苦しかったけれど、今もきっと山に分け入り生きていたと思います」

メリエルはすっかり空になった瓶を手で軽く振りながら、バルコニーの手摺りに背中をかけている。

「帝国軍が聞けば、さぞかし悔しがるでしょうに……まさに偶然という歴史のアヤなのか」

アンフィニは鼻で笑う。

しかし、メリエルは首を振って見せ、

「いえ、おそらく、それは必然だったのではないでしょうか？　私がもし起たなくても誰か他の人がきっと帝国打倒に立ち上がったと思うんです、それくらい帝国のやり方は酷い物でしたから……」

と、答える。

それに対して、

「ああ、それはいつかは誰かは立ち上がった事は確かでしょう」

アンフィニは頷いた後、

「……でも、あなたでなければ帝国に対して、ここまでの戦いは出来なかったでしょうね」

そう付け加えて、メリエルに笑いかけた。

「ありがとうございます、でもわからないですよ、私より上手く出来る人がいたのかも知れません」

「……まさか、あなたでなくでは、とても」

謙遜するメリエルだが、アンフィニは首を振った、本気でそう思ったからである。

「未来なんて、わかりませんよ……」

メリエルは大きく息をついて、夜空を見上げた。

「四方面同時攻勢作戦だって大失敗するかもしれません、終わってみれば、アンフィニさんの言われていた作戦が正しかったのかもしれません……」

「メリエル女王……」

眉をひそめるアンフィニを見てメリエルは、

「でも、私達は少しでも正しいと決めた事を一生懸命やっていくだけ、二つの選択を両方を選べないですからね、頑張りましょう」

そう言いながら、右手を伸ばす。

「……」

アンフィニは数瞬、メリエルの手を見つめた後で、

「そうですね、私達は手探りで少しでもより良い方に生きていく、それだけなんでしょうね」

自らも手を伸ばし握手をした。

一週間後。
四方面同時攻勢作戦は確定を見て、メリエル一行は本国への帰還を開始する事となった。

作戦開始は一ヶ月半後。

作戦名は、
『アタラクシア』
東ブルーヴェルト大陸ほぼ全域を巻き込む対帝国反攻作戦がついに始まろうとしていた。

第７５話に続く

第七十五話「徴兵準備」

1

「早朝会議」

冬の早朝の底冷えはアティナ王城の女王の間でも厳しかった。
ベリーは亜麻色のセミロングの髪を揺らしながら、床を掃いて女王の座を綺麗に磨く。
「これでよし！」
ピカピカに磨きあげると流石に身体も暖まる。

普段からメリエルの身の回りを世話するベリーだが、今回のメリエルのバルド王国からサラセナへの外交にはついていく事が出来なかった。
実は出発直前に風邪を引いてしまったのである、特に高熱ではなかった為にベリーは随行する事を強く希望したが、メリエルに無理はダメ！　と、強めに言われて諦めたのだ。

仕方ないと待っていたベリーはしばらくして、メリエル達がバルド王国から更に予定に無かったサラセナにまで行く事になったと聞いて、ハッとなった。
もしかして、メリエルは始めからサラセナまで行くつもりだったのではないだろうか？
極寒極北の地に病人がいけば、誰だって体調は悪化するに違いない。
それを考慮して、メリエルはベリーを残していったのかも知れな

い、と考えていた。

長い外交交渉からメリエルがアティナ王城に帰って来たのは、昨日の夜中であった。

もちろん、まだ12歳のベリーは夜中は就寝していたのだが、王城内がわずかに慌ただしくなり、ベリーは目を覚ましてしまったのである。

その際に、ベリーはメリエルには合わなかったが、護衛の兵から、明けた朝に重要な会議があると聞いていたので、女王の間の掃除をしていたのであった。

「ベリー、ご苦労様」

最後の仕上げと玉座をから拭きしていると、不意に声をかけられて、ベリーはびっくりして背中をビクッと震わせた。

「あ……」

振り返った先にはメリエルが寝間着の着物姿で微笑んでいる。

「女王陛……メリエルさん」

「ごめんなさい、昨日は夜中に帰って来たからね、ベリーには言わなかったの」

驚くベリーにメリエルはまず謝ってきたので、

「いえっ、そんな事は気にしてません！」

慌てて、首を振りながらベリーは答えた。

「ふふっ、ありがとうね、ベリーは会議があるのを聞いて、綺麗にしてくれてたんだね」
メリエルはベリーの頭に手を伸ばしかけたが、
「……あっ」
声を上げ、慌てて引っ込める。
「そうですよ、お言葉だけで十分です」
ベリーは小首を傾げて笑うのだった。

数時間後。
女王の間に集まった主だった面々はカナミから、四方面同時反攻作戦の説明を受ける。

「サラセナ軍、バルド王国軍、ミオクォーレ軍はそれぞれの帝国方面軍、私達ローゼンフェリア軍は帝国中央軍の約８万を一斉に攻撃して、一気に東ブルーヴェルト大陸の軍事的均衡を逆転するわ！もちろん、攻勢の中心は私達だと思っていい、私達が勝てれば他の同盟軍が多少の不利を受けていてもそれは覆る」
カナミのきびきびした声が女王の間に響く。
「帝国中央軍は約８万か、ならば、こちらも限界まで戦力を動員しなきゃ、ならんだろうな」
ベルクタイは難しい顔だ。
「そうなると、民間から徴兵してもおよそ3万か、３万５０００がやっとの数字になりますね、後が苦しくなるのを覚悟しないといけませんけど……」
ヴィスパーも顎に手を当てる。

現在のローゼンフェリア軍はおよそ2万。
それを徴兵によって3万5000にするには、民間から1万500もの人間を軍に入れなければいけないのである。
農民から徴兵すれば、当然に国の農業生産力に影響が出るし、その他の国民からでもそれは同じで、必ず皺寄せがくるのだ。

「女王陛下……」
女王の間にいる者達の視線が玉座に注がれる。
動員規模はメリエルの判断一つであった。

「出来る限りの事をしましょう、徴兵令により戦力を新規動員します！　緊急にお願いします」
そう宣言して立ち上がり、メリエルは決断した。
居並ぶ者達は様々な反応を見せる、軍関係者は動員は当然かけてもらわなければ、帝国軍との戦いは非常に苦しい物になる事は確実であった為に比較的、安堵の表情を見せ、商務や農政の関係者は一様に渋い顔を隠せなかった。

メリエルはそれらの反応を見た後で、
「追加事項があります、今までの戦いの帝国軍の捕虜に王国軍に帰順の意がある者を集めての師団編成を試みます！」
という命令を下したのである。

この命令に女王の間の皆が色めき立つ。

確かに帝国軍からの捕虜は相当数に達している、バティスタとの戦いでおよそ1万以上、武装鉄橋で１０００以上、合わせて1万２０００という数だ。

これらの兵達は、バティスタ上級大将が率いてきただけに訓練が行き届いており、王国軍に組み込めば、最強の戦力になる事は間違いないだろう。

しかし、いかに帰順を申し出てきた者だけを集めたとしても、元は帝国軍の兵士なのだ。

常に裏切りのリスクが出てきてしまう。

普段はともかく、負け戦などは特に危険度が増してくる、敗走中に裏切り者が出て、率いる将軍が討ち取られるのは戦争では頻繁に起こりうる事柄である。

だが、今は経験豊富な兵士は喉から手が出る程に欲しい。

一体、どれくらいの帰順者が出るかは分からないが、この危険な潜在戦力を使う機会は今しかなかった。

「一体、そんな危険な師団を誰が率いるんだ？」

「そうだ、帝国兵に囲まれて戦うような物だ」

「いつ寝首をかかれて帝国軍に走られるかわからんのだぞ！」

各大臣が口々に騒ぎ出している。

だが、その騒ぎは1人の少女の一喝によって止められた。

「その師団、私が率いらせていただきますわ！」

その声の主は金髪の後ろ髪をたくさんの縦ロール、白い肌、強気そうな少し吊り上がった瞳、メリエルの挙兵から帝国軍を恐怖に陥れ、ローゼンフェリア軍内で金色の戦乙女と呼ばれる勇将。

ネシア・ウェスティンだったのである。

2

「プリエルの癖」

会議は終了し。、

「待って、プリエル」

皆が退出していく中、メリエルは妹を呼び止める。

「お姉ちゃん」

声を上げ、メリエルに駆け寄るプリエル。

「ごめんね、帰ってきたのが夜中で、そのまま会議になっちゃったから、プリエルに会えなかったの」

バツの悪そうな顔をするメリエルに、

「いいって！　とにかく無事に帰って来てくれて嬉しいよ、お帰りなさい、お姉ちゃん」

プリエルは太陽のような笑顔を浮かべて見せた。

「ただいまプリエル」

久しぶりのプリエルの笑顔にメリエルも思わず笑顔がこぼれる。
同じ顔なのだが、メリエルはこの笑顔は自分には真似が出来ないと思う。
「とにかく留守番ありがとうね、今日は私がいなかった間のプリエルが代理として、実施した政策とかを詳しく聞きたいの、上手くいった？」
「え～っ、自信ないなぁ、結構行き当たりばったりで決めてたからなぁ」
メリエルが訊くとプリエルは頭をかいて苦笑する。

「大丈夫よ、きちんと大臣や担当者の意見を聞いたんでしょう？後で話を聞かせてね？」
「わかった、でもねぇ……まぁ、私が提案した事はたくさん却下されてたからなぁ、だからこそ多分平気だとは思うんだけど」
メリエルの問いに、プリエルは指を頬に当てながら考え込む。
「なら、後でね」
メリエルが歩き出そうとすると、
「ちょっと、お姉ちゃん」
何かを思い出した様にプリエルに呼び止められる。

「どうしたの？」
「あのね……実はさっきの徴兵の件なんだけど」
「何か？　まさか反対とか、だったら会議の時に言っていれば……」
「違うの……反対じゃない、今は」
プリエルはうつむきながら言った。

「今は？」

メリエルは違和感を覚え、眉をしかめる。
考えて見れば、プリエルなら徴兵を限界まで実施するなら、先ず反対してきそうである。
徴兵は家庭から家族を義務的に奪うと言ってもよい行為だからだ。

「実はお姉ちゃんの留守中に徴兵実施の調査や武器の調達、訓練とかの準備は済ましてあるんだ……」
「えっ、な、何で？」
あまりにも予想外のプリエルの言葉にメリエルは声を上げてしまった。
「後は帝国軍の捕虜についても、帰順勧告は少し前から出してあるんだよ」
「そんな事まで？」
目を見開くメリエル。
「いや、いや、あくまでも徴兵なんかは調査や準備を終わっているだけで、勝手にやった訳じゃないよ」
プリエルは慌てて手を振って見せた。

「いえ、それがあらかじめやってあるのは凄く助かるのだけど……でも」
メリエルはプリエルの肩に手を置く。
「……お姉ちゃん」
「あなたの考えた事じゃないわよね」
そう言われると、プリエルは唇を噛む。

それがプリエルの言いたくない事がばれた時の幼い頃からの癖であった。

第７６話に続く

第七十六話「アティナ発進」

1

「王国軍出撃」

「いよいよ、明日ですね」　深く息をついてヴィスパーはメリエルの部屋の椅子に座っていた。
「うん、明日の昼には総軍に演説をして、出陣になるんだよね」
ベッドに座るメリエルも何か一仕事終わった様子で息をつく。
「軍の士気を上げる為です、頑張ってくださいね、みんなメリエルさんの声を聞きたがってます」
「もう、おだてたって何も出ないからね」
「そんなんじゃないですよ、メリエルさん」
ふくれて見せたメリエルにヴィスパーは苦笑した。

「ヴィスパー君」
メリエルは微笑みながら、ベッドの自分の隣をポンポンと叩いた。
「……メリエルさん」
ヴィスパーも微笑み返し、椅子からベッドのメリエルの隣に座る。
「ヴィスパー君、ここまで本当にありがとう、ヴィスパー君がいなければ私はきっと……」
「いえ、僕たちは色々な人に助けられて、ここまで来ました、プリエルさん、ローゼンフェリア、みんながいたからですよ」
「そうだね、私達は互いに助け合ってここまで来たんだね」
メリエルはうなづくと、ヴィスパーを見つめた。

その後にかわしたキスは、互いにまだどこかぎこちがなかった。

翌日、ローゼンフェリア対帝国遠征軍は首都アティナ郊外の草原にその全容を見せる。
周りには遠征軍を見守ろうかと、近隣の街や村から沢山の民衆が集まって来ていた。

メリエルがこの日の為に造られた演説台に立つと、軍人は顔を引き締め、民衆は笑顔や拍手で若き女王の登場を歓迎する。
そうして、女王メリエルのアルザード帝国討伐軍と民衆に向かっての演説が始まった。

「ヴィスパー」
居並ぶ将官達の一番最後ぬ自ら並んでいたヴィスパーにローゼンフェリアが寄ってくる。
「あっ、ローゼンフェリア、どうしたんだい？」
ヴィスパーは中腰になってローゼンフェリアに耳を向けた。
演説中で気を使ったが、末席なのでそうは目立たなそうだ。

「昨日は帰るのが遅かったね、だいぶ待ったよ」
「えっ？」
ローゼンフェリアの言葉にヴィスパーは思わず赤面して、
「バ、バカッ、あれからすぐに帰ったよ！　メリエルさんだって演説があるんだから！」
慌てて耳打ちする。

「……ふむふむ」
なぜか棒読みのローゼンフェリア。

「何!?　その聞き方は、本当だよ、ちょっと今日の打ち合わせをしていただけだよ!」
「ほう」
ローゼンフェリアは声を上げただけ。
「信じてなさそうだけど、本当だからね!」
ヴィスパーが念を押すとローゼンフェリアは、
「馬鹿なヴィスパー」
微笑みを浮かべながら頬にキスをして、さっきまでいたベリー達の並ぶ列に戻っていった。

「ヴィスパー君」
すぐ前に並んでいたプリエルがニヤリと笑いながら、振り返る。
「な、なんですか?　プリエルさん、無駄話はしないで演説を聞きましょう」
汗をかきながら、苦笑いを浮かべるヴィスパー。
「自分からお姉ちゃんの所に行っていた、なんて白状するとは……」
「……い?!」

プリエルの言葉に思わずヴィスパーは声を上げてしまった。
何も聞いていない振りをして、すべて聞いていたようだ。
「いやぁ……ヴィスパーくん」
プリエルは少しいやらしい笑いを浮かべる。
「君は絶対に上手く浮気はできないね」
急にまるで姉のような表情と声色。

ヴィスパーは背筋が震えた。

そして、ローゼンフェリア軍が建国から初の外征に当たる動き出す。

国内に残る部隊は一部の訓練隊と警備部隊のみ。

まさにローゼンフェリア全軍総出撃であった。

総大将
ローゼンフェリア王国女王メリエル

総参謀長
カナミ

女王補佐官兼補助部隊
ウィル・ヴィスパー
ミラ・コンティネント

女王親衛軍
リキュエール・ダンセル

第一軍
ベルクタイ

第二軍
ネシア・ウェスティン

第三軍
プリエル

総数４万２９００。
以上が、ローゼンフェリア王国対帝国遠征軍の編成である。

2
「嫉　妬」

「カナミちゃんは？」
行軍が始まって、すぐにメリエルの馬車に訪ねて来たプリエルはメリエルに聞いた。
「カナミちゃん？」
ゆっくりとした速度に揺られる馬車の窓から顔を出すメリエル。

「……うん」
プリエルがうなづくと、
「ああ、カナミちゃんは武装鉄橋までには追い付くわよ、予備兵の最後の取り纏めをするから……って、言ってたわよ」
メリエルは答えてから、
「プリエル、あなたは第三軍の司令官なんだから、ちゃんと第三軍の先頭にいないとみんなが困るわよ」
そう言い、目を細める。
「いやぁ、まだ領内だし武装鉄橋まではいいんじゃないかなぁ」

プリエルは頭をかきながら苦笑し、
「そうか……まだ、カナミちゃんはアティナの街にいるんだね、早く追い付いて来るといいな」
と、すっかり見えなくなったアティナの街の方向を振り返った。

別に予備兵の最後の取り纏めなど、カナミが自らしなければいけないとは感じてはいなかった。
どにしろローゼンフェリア王国はその国力に見合った限界近くまでの動員を終えており、今から何をかき集めても１０００程度がやっとであるからだ。
しかし、カナミがアティナに残ったのはある理由があったからである。

「入るわよ」
アティナの街の郊外にある小さな家を訪ねると、カナミはおもむろにドアに合い鍵を差し込み、いきなり無造作に開け放つ。

「あっ、い、いきなりどうしたんですか？　カナミさん、久しぶりですね」
その家にいた少女は昼だというのに寝ていたのか、びっくりした様子でベッドから顔を出す。

赤茶色のセミロング。
童顔のドングリ目の黄色系の肌を持つ少女はシーツで肌を隠す。

「テスタ、あんたね、元シスターの癖に裸で寝てるのかしら？」
カナミが呆れた様に肩をすくめると、
「ウウッ、鍵を合い鍵でいきなり開けて来てそれはないですよぉ」
テスタは泣き言を言いながら、シーツに丸まった。

テスタ・サトー。
元見習いシスターのローゼンフェリア王国軍次席参謀。
ザレマ会戦から参謀を務め、カナミと作戦を立てバティスタを倒し、難攻不落の武装鉄橋を巧妙な作戦で陥落させた優秀な戦術眼の持ち主である。

しかし、今は武装鉄橋攻略作戦時に協力をしてくれた民間人を帝国兵に殺されるというミスをしたとして謹慎中だ。

「ねぇ、テスタ！」
カナミはベッドに座ってテスタに顔を近づける。
「な……な、何ですか？　カナミさん？」
シーツで胸元を隠しながらうろたえるテスタ。
「私がいない間にプリエルに色々とご教授してくれたじゃないの、お陰で徴兵がスムーズにいったわよ」
カナミは不敵に笑った。

「……あ、あのぅ、あれはプリエルさんが来て、どういう事を皆さんがいない間に準備しておけばいいのか、相談されたので」
アワアワするテスタ。
対するカナミは余裕である、とてもお互い１５歳同士に思えない。

「中々に見事だったわ、あんたには四方面攻勢作戦は謹慎もあって、話さなかったんだけどねぇ、同盟があれば、すぐに動員がかかるって読めてたのよね？」

カナミの顔はテスタに更に近づく。

「ああ、スイマセン、余計な事してごめんなさい」

謝るテスタ。

「別に気にしてないわよ、助かったってさ、言ったじゃないのよ」

一度は笑ったカナミだが、急にグイッとテスタの顔を捕まえ、

「あんた、まさか私の作戦くらい読めるつもりでいないでしょうね？」

そう言って、鼻と鼻をくっつけながら睨みつける。

「ああ～ん、無理です、無理です、私にカナミさんの作戦を読み切れなんて不可能ですぅ、本当に謹慎中にごめんなさい～！」

もはやテスタは泣きっ面だ。

「だから、怒ってないって！　プリエルに助言したなら、したって、きちんと報告しなかったから、ちょっと注意しただけよ、泣くんじゃないわよ」

カナミは呆れ声を出し、ベッドから降りて、眼鏡をかけ直す。

「とにかくテスタ、私達は行くから、大人しくしてなさいよね」

カナミはテスタに告げると、踵を返してドアに向かって歩き出した。

「ご武運お祈りしています、このくらいの状況、カナミさんなら大丈夫だと信じています！」

「ありがと」

テスタの言葉にカナミはうなづくと、テスタの謹慎用の仮住まいを出た。

近くの木に留めておいた馬に跨がると、カナミは一路、遠征軍に合流する為、鞭を打つ。

甲高くいななき、勢い良く走り出した馬上で、

「このくらいの状況なら……か、じゃあ、まだあんたは出なくてもいい、とでも言いたいのかしら？」

と呟くと、強くもう一発、鞭を入れた。

「……嫉妬かしら？　馬に当たるようじゃ駄目ね、ごめんなさいね」

そう反省したカナミは馬に素直に謝った。

第７７話に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5335u/

黒い瞳のローゼンフェリア　改訂版

2011年10月19日08時02分発行